SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL
1994. 6. 11. No 61
JOURNAL

★ 目 次 ★

■ 佐久の遺跡と遺物 …… 小山岳夫……1
■ 男女倉の細石刃・細石刃核 …… 白田 明……2
■ 北相木村考古博物館にようこそ …… 平山明美……6
■ 佐久市長土呂の軒丸瓦 …… 宇賀神誠司……8
■ 再確認！ 北西の久保遺跡 …… 小山岳夫……10
■ 1994年佐久考古学会総会報告 …… 事務局……11
■ 土偶のつぶやき …… 各会員……12

佐久の遺跡と遺物
パート11
― 矢出川で発見／佐久平唯一の前期弥生土器 ―

細石器文化の里、南牧村矢出川遺跡にも弥生～古墳時代の遺物が点々と分布している。特に大きな社会変革に伴い土器の交流が活発化した縄文末～弥生初頭、弥生末～古墳初頭にかけての土器が目立ち、磨製石鏃も多々表面採集することができる。これらの遺物点在箇所は属する遺構が未発見のため性格を特定できないが、少なくとも腰を据えてムラ造りを行った痕跡とは思えない。当時、社会変革の中に生きた人々が、何か必要があってこの地に足跡を残したのであろう。

写真は矢出川採集の条痕文（じょうこんもん）土器の深鉢である。佐久平唯一の前期弥生土器でもある。

条痕文土器は表面に特有な引っ掻き傷をもつためこの名がつけられた。狩猟採集縄文社会から農耕弥生社会の転換期に伊勢湾地方で製作され、その後、東日本各地の黎明期の弥生遺跡に流布した。このため、東国の稲作受容に当たっては露払い的な役割を果たした土器と言われている。東海地方伊勢湾周辺の条痕文土器の表面は貝殻で引っ掻くことが多いが、矢出川採集のそれは板状工具で右回りに引っ掻いている。

なお、この土器の発見者は由井茂也である。発見の経緯はかなりの遠回りがあったので、ここに紹介しておこう。

約40余年前の昭和28年頃、山井は矢出川べりの道端のちょっとした穴から土器数片を見いだし、家に持ち帰って保管していた。その3年後、この地からカマドの粘土を採掘した人の家から再び同じ土器を発見したのである。これを当時明治大学学生であった向坂鋼二が復原し、写真のような形ができ上がった訳である。

ここに佐久平唯一の前期弥生土器が誕生したが、由井によれば当時、縄文の研究者は縄文土器ではない、弥生の研究者からは弥生土器ではないと言われてしまい、どちらに位置付けて良いのかわからない土器であったという。位置付けをめぐって混迷したこの土器も研究の進化によって、今では前期弥生土器の評価が定着した。（小山岳夫）

矢出川発見の前期弥生土器、口の幅20cm高さ25cm

男女倉の細石刃・細石刃核

―男女倉からの報告(2)―

白田　明

1．はじめに

ここ数年、野辺山を舞台にいくつかの重要な会が開かれた。長野県考古学会・佐久考古学会・八ケ岳旧石器グループのメンバーが企画したものである。

①尖頭器シンポジウム（平1．10／21・22愛岳荘）
②細石刃シンポジウム（平5．10/30・31帝産ロッジ）
③野辺山の二万年を知るつどい（平6．2/13野辺山・村基幹集落センター）

今年は矢出川遺跡発見から40年、③のつどいは、村に国史跡の指定申請をうながすべく企画されたものであるが、その直前に村が指定申請を決定し、記念すべき集会となった。その前日の2月12日は佐久でもめずらしい大雪となり、東京では20年ぶりの大雪、交通麻痺、空の便の欠航が盛んに報道された。この朝佐久平でも吹雪となり、吹き寄せられた雪で小川や用水が干上がる水枯れが起きた。これも何十年ぶりのことであった。

当日、野辺山へと向かう小海線川上駅を過ぎると列車の車窓から何も見えないほど強い地吹雪であった。昔よく通った野辺山原の雪原を思い出した。島田幹事の「会場には誰もいないよ」・講師の岡村さんは本当に到着するだろうか、聴衆は集まるだろうか・何となく心配になる。15分遅れの開演、みるみる人が集まりはじめ、会場はぎっしりになったのである。

2．後期旧石器時代の大遺跡　男女倉

さて、ここで本題の男女倉に話を移そう。

男女倉（男女倉谷）は、その全域が旧石器～縄文弥生時代に至る黒曜石の原産地・供給地で、男女倉ナイフ形石器、男女倉ポイント、男女倉掻器、彫刻器等の名称が与えられる程の量の多さと質の高さを誇る。しかし野辺山や、近くは柳又の細石器と一群の石器組成[2]に比べ、大供給地で、最も集中的計画的に研究の進んだ地でありながら、こと細石器についての報告はあまり聞かない。J、第III、第IV、Hと和田峠頂上遺跡の表採資料2点等を合わせても十数点であり、堤は「極めて貧弱だ」と報告している。[3]

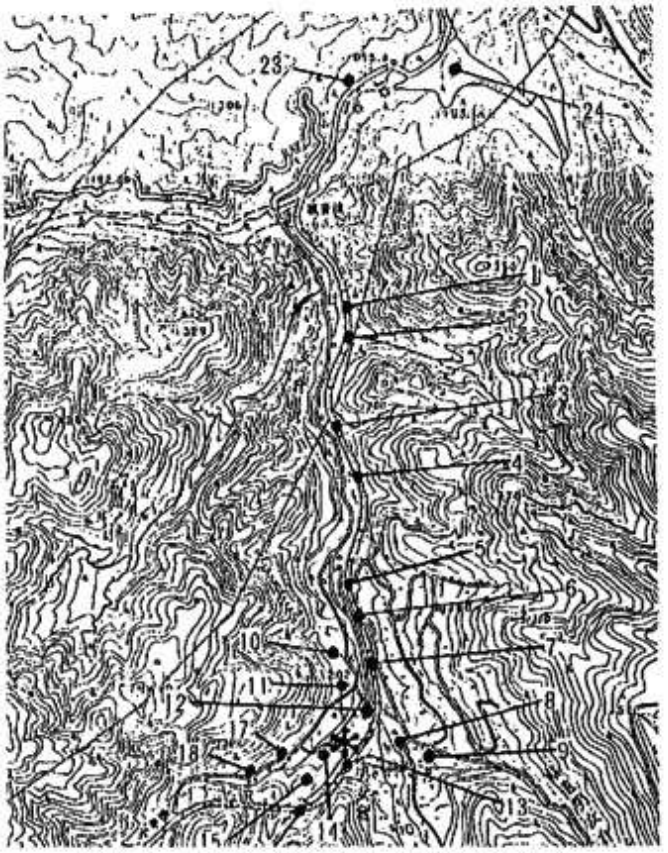
筆者は平成2年8月、表採で細石刃核1個を得たが、同一地点において関連資料約30点を得たので、ここに報告したい。

3．地形、出土の状況

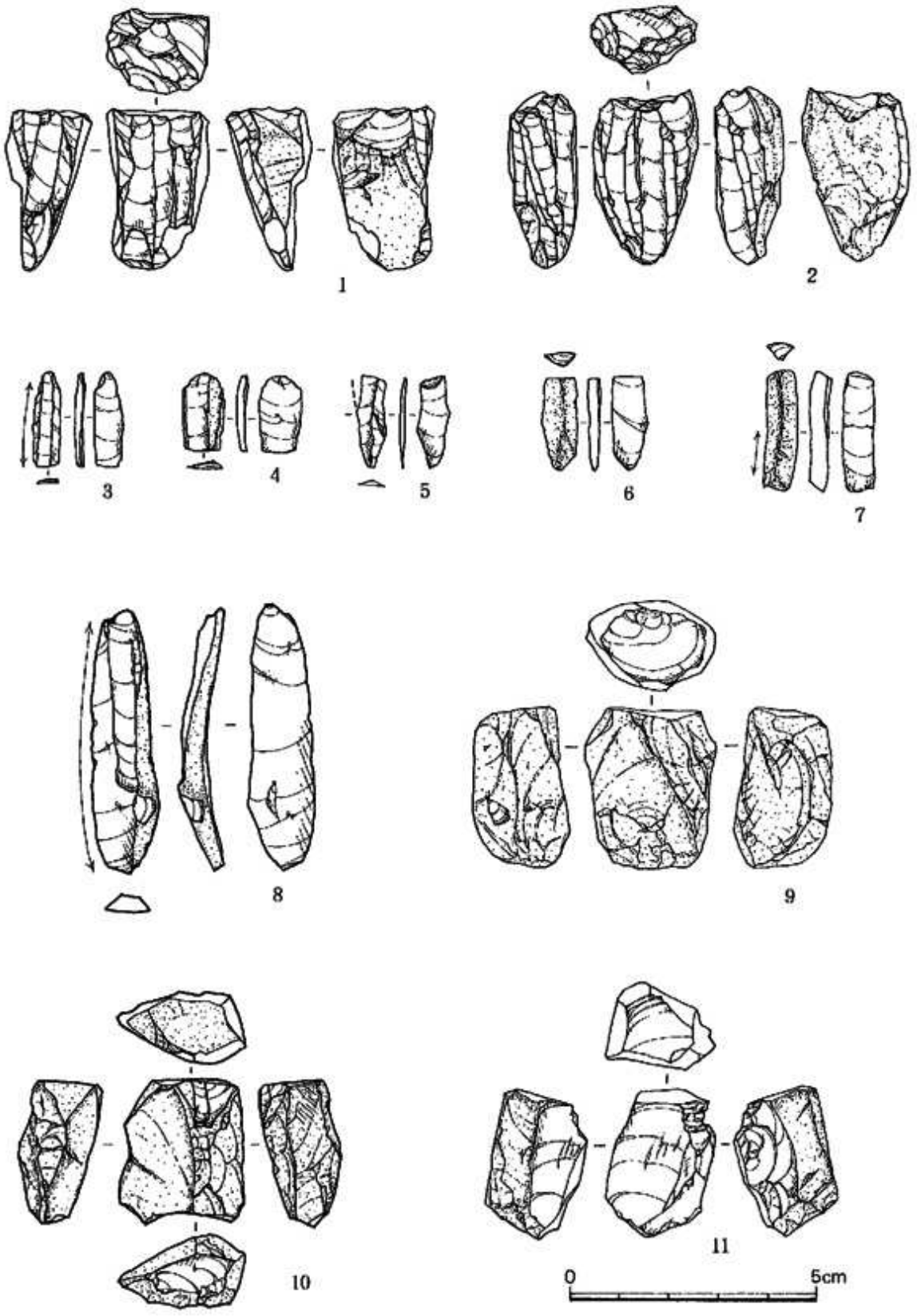
採集地は本沢とツチヤ沢、国道254号バイパスに囲まれたB$_1$段丘面である。この段丘は旧石器～縄文期の遺跡の密集地帯である。バイパス有料道路の下になってしまったH地点、採集地の道路をはさんでK地点が記されており[4]、これらの一帯の中にあることは間違いない。採集地点では細石刃、細石刃核、細石刃核原形等が集中していたことから一括資料として注目したい。他に同じ地域からナイフ、ポイント、石刃、土器なども出ているが、それらが同一期のものなのか、重複していたのか明確でない。土地の削平が、今日も続いているからである（図1）。

4．資　料

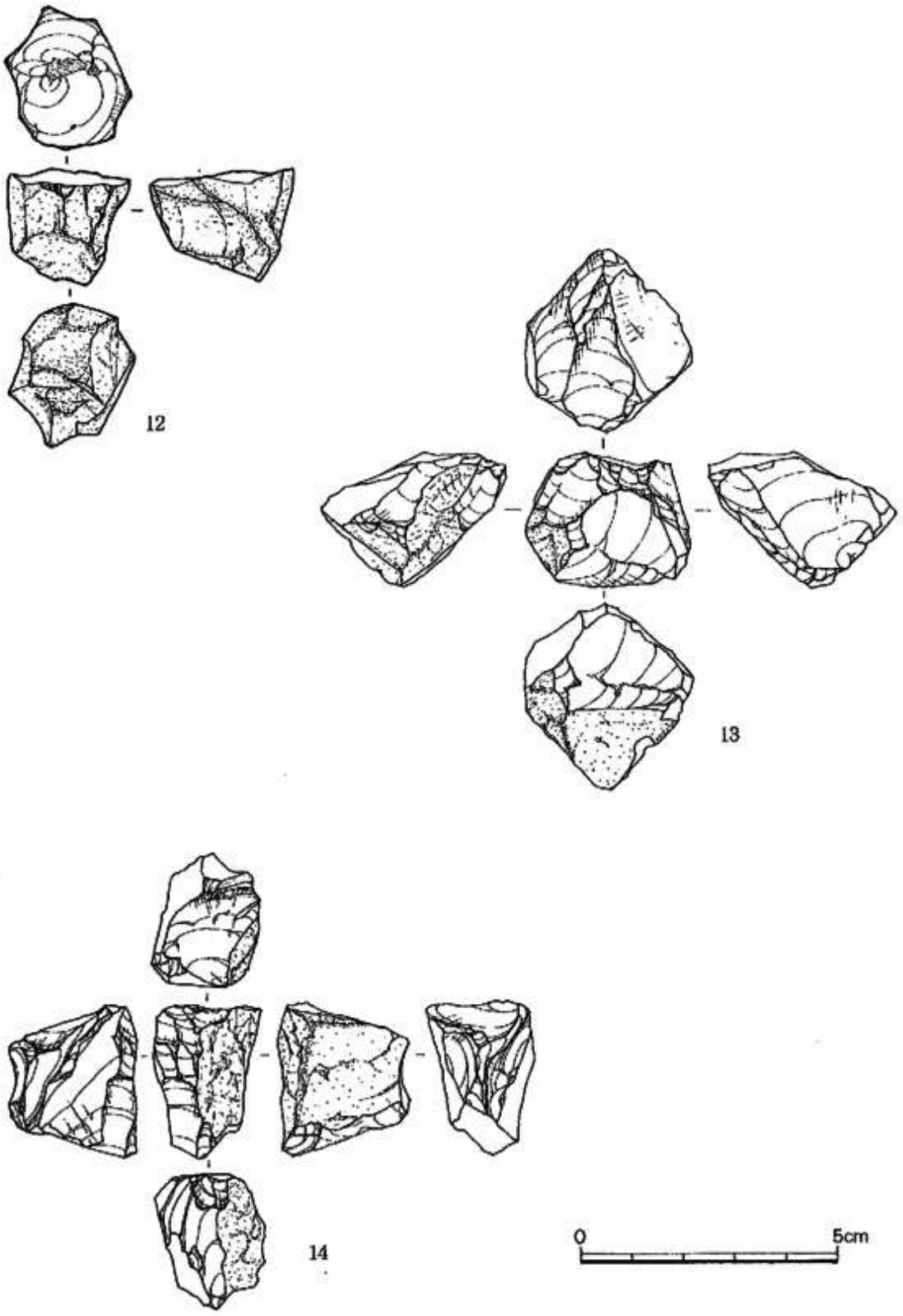
関連資料は細石刃核3個、細石刃、細石刃核原形20個等で、多数の原型は製作の過程をよく示すものと考



第1図　男女倉の遺跡（●）と採集地点（＊）



第2図　男女倉遺跡採集石器（4：5）



第3図　男女倉遺跡採集石器（4：5）

えられる。

(1) 細石刃核　(図3、1・2)

1　長さ3.24cm、巾2.0cm、厚さ1.68cm、重さ11.0g良質半透明黒曜石。由井会長が「うーん雄大なものだ」と感心された逸品。剥離角は正面図左から86、89、80°左側75、86、78°で平均値は82度。吉沢によればおよそ12枚の石刃をとったとみられる。末端に農機による欠損が入っている。表面は原礫面を残している。

2　長さ3.45cm、巾2.1cm、厚さ1.40cm、重さ9.7g漆黒良質黒曜石。上部作業面にギザギザの打撃痕が明瞭で、更に5～10枚程の剥離が可能である。この段階で放棄されていて「極めてわがままな取り方で石核を捨てている」という代物。調整面を下げれば、まだ何枚も剥離が可能と吉沢はいう。しかしこの様な柱稜形石核は剥離面が90度に近づく程石刃は取りにくくなる。この点の方が鋭角であることが図からも読みとれる。こちらも裏面に自然面を残している。

(2) 細石刃　(図3、3～7)

3　頭部　長さ1.92cm巾0.61cm厚さ0.14cm黒曜石。

4　頭部　長さ1.55cm巾0.83cm厚さ0.20cmハリ質安山岩。男女倉に、このような異質の石材が持ち込まれていることは興味のあることだと思う。

5　末端部　1.86cm、0.64cm、0.14cmの透明黒曜石。

6　末端部　1.82cm、0.72cm、0.31cmのファーストスポール。

7　中間部　2.41cm、0.70cm、0.38cmのファーストスポール。

8　石刃　長さ5.5cmを計る、微細使用痕がある。

(3) 細石刃核原形　(図3、4、9～14)

いずれも良質な漆黒の黒曜石製である。

9　高さ3.2cm重さ22.0g。一打で上部作業面をつくりだしている（工程Ⅰ）。

10・11　底面や側面に調整を加え、およそ柱稜形をつくり出している（工程Ⅱ）。13.4g・10.2g.

12　打面をつくり出した際高さが2.2cmと短くなったため放棄したと思われる。13.4g

13　正面及び右下から調整を加えている。作業面から最初のスポールを剥いでいる。24.0g

14　ほぼ原型として出来上がったもの。既にスポールを剥ぎはじめているが、気に入ったスポールが取れないなど何かの理由で放棄されたと考えられる。14.6g。

以上のような過程をみて参くと、それらは、

○長さ（高さ）をほぼ一定に揃えていること、

○柱稜形の原形をつくり出そうとしている。

○明瞭な作業面をつくり出している。

○小角礫を利用するものと、それよりやや大型の母岩を調整する二通りの方法がある。

第4図　料金所東側の丘からみた採集地点（↓）

5．あとがき

我々はともすれば模式的な細石刃や細石刃核のみを想像しがちである。またそのようなものに目が向きやすい。しかし、チップや未成品、ファーストスポール、打面調整剥片などにも、細石刃の製作過程を知る手掛りがあることも注意しておくべきである。

今回は、従来あまり確認されたことのない男女倉の細石刃文化について、貴重な資料提示ができたものと考える。なお、本稿執筆にあたって実測図作成やご教示をいただいた吉沢靖氏に、末筆ながら深く感謝の意を表する次第である。（1994、4、15 脱稿）

註

1）つどいでは、「日本人の起源をさぐる」と題した岡村道雄文化庁主任文化財調査官のお話し、「40年前の野辺山原」と題した戸沢充則明治大学教授のお話しがあった。

2）『柳又遺跡C地点』1993.1　木曽郡開田村教育委員会

3）『男女倉』1975　長野県道路公社。和田村教育委員会。及び『シンポジウム1993.10　『細石刃文化研究の新たなる展開』Ⅰページ274。

4）『長野県黒曜石原産地遺跡分布調査報告書（男女倉谷）』1991.3.　和田村教育委員会。

5）筆者は平成2年度にこれらについて　由井茂也氏に見ていただいたことがあった。野辺山出土のものと比較し多くの教示を得た。

北相木村考古博物館へようこそ！

学芸員　平山明美

北相木村考古博物館は栃原岩陰遺跡の出土品を中心に、縄文時代早期の人々の暮らしをテーマに展示がされています。

栃原岩陰遺跡からは12体の人骨が出土しました。生活の場としての岩陰が、やがては埋葬の場へと変わっていったようです。その生活の際に生じた灰により、時が経てば失われてしまいがちな骨角器や貝殻など、たくさんの遺物が守られたのです。そのため、栃原から出土した縄文人（北相木人）の頭骨も保存状態が良く、北相木人の顔も復元することができたのです。博物館内には復顔された北相木人の顔や生活の様子のジオラマなどがあり、古代のロマンを醸し出しています。

☆：ちっちっ、そんなかたくるしい説明じゃ誰も行こっかナ？って気になってくんないヨ。

♡：そーよぉ、ここからは代わってあたしたちが説明するわね。

…そう…じゃ、お願いします…。（学芸員退場）

☆：さて、では博物館内の順路に沿って見て行こう。

♡：エントランスの所には板碑と化石が置かれてます。

☆：この板碑には阿弥陀如来を示す梵字が刻まれています。緑泥片岩で出来ているため、梵字をはっきりと読みとることができます。

♡：この板碑も化石も北相木で見つかったもの？

☆：そうだよ、化石は北相木には第三紀層の植物化石層が北相木川河岩などに分布しているんだ。

♡：じゃあ、河原に行ったらまた見つかるかもしれないね。散歩がてら探してみよう。

—人類の進化—

♡：ホールに入ってまず目にするのはこのコーナーです。類人猿から人へ移っていく過程を等身の絵と、頭骨、使用していた道具といっしょに順に並べられています。

☆：これから見ていく北相木人は、この後の人類になる訳です。

—岩陰（ノッチ）の形成—

☆：どのようにして岩陰が形成されたのかをパネルによって説明しています。八ケ岳の噴火が深く関わっているのがこれによって分かります。

♡：岩陰遺跡がどうしてあんなに高い所にあるのか、よく分かったわ。八ヶ岳の泥流が川によってけずられたからなのね。

☆：そう、高い所にある岩陰の方が古くなるんだ。

—北相木人のくらし—

☆：北相木人たちがどんな風に暮らしていたのかを再現したジオラマです。この後見ていく出土物が、どのように使われていたのかよく分かります。一通り見てきた後、もう一度これを見るのもいいよね。

—栃原岩陰遺跡の出土物—

♡：このコーナーは、遺跡から出土した遺物が展示されています。北相木人の復顔もここにあります。

☆：眉間が高く、鼻根は深くくぼみ、立体的な顔立ちが縄文人の特徴だそうだけど、この復顔もその特徴がよくあらわれてます。

♡：装身具も動物の骨や貝からいろいろつくってる上、ベンガラ（紅）で染めたものもあって、結構オシャレだったみたいね。

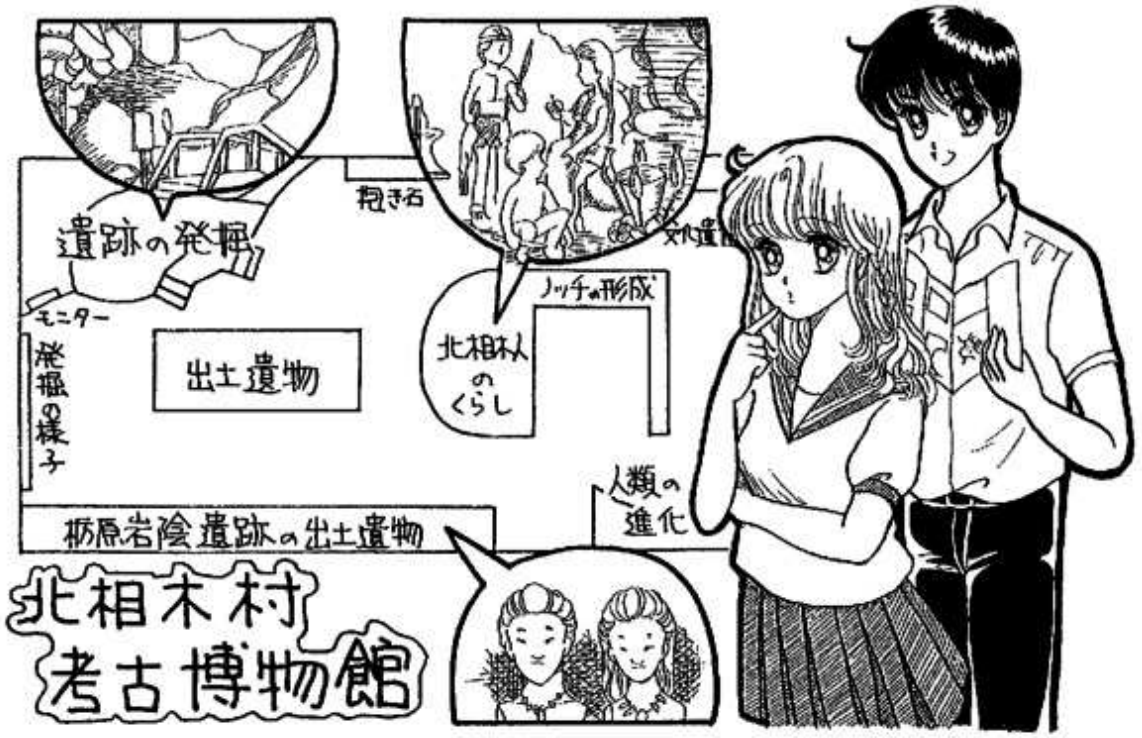
☆：土器もいろいろな模様のものが出土したんだ。

♡：この口が四角で、下が丸い土器も変わってるね。

☆：北相木式土器っていうんだ。上部と下部の模様が違うんだよ。

♡：本当だ…。

ジオラマ　北相木人のくらし



☆：それに山間の遺跡では珍しく貝殻腹縁土器も一点出土してるんだ。

♡：石器もたくさんの種類があるのね。スクレーパーなんか、ほとんど黒曜石製だけど、水晶製のものもある。キレイね。

☆：矢じりにも水晶のものがあるよ。この矢じりは出土層の順に並べてあるんだけど、層によって形が違っているのが面白いね。

♡：骨角器の釣針や針なんかすごい！今使われているのと形が変わらない。

☆：釣針は作りかけのものもあるから、どんな風にして作っていったのか、その行程がよく分かるよ。

♡：食べ物もモグラとかカエル、ヘビなどいろんな物を食べてたのね。

☆：今みたいに食料が豊富な訳じゃないだろうし、食べられる時に食べられる物を何でも食べて栄養にしてたんだろうね。

—岩陰の発掘—

♡：この大きなジオラマは発掘の時の様子を再現したものなんだって。人骨や抱き石、炉跡ってこんな風に発掘されたんだ。

☆：発掘の様子は隣に設置されているモニターでも見ることができるよ。大変そうだけど楽しそうだね。

—北相木村の歴史と文化遺産—

♡：このコーナーは栃原遺跡以外の北相木の遺跡から出土した遺物を展示しています。

☆：また、村の見どころや行事などのパネルも飾ってあるので、観光の目安にして下さい。

♡：来たことのない人は是非一度、来たことのある人は再度足を運んでみて下さい。

♡☆：お待ちしていまーす。

佐久市長土呂出土の軒丸瓦

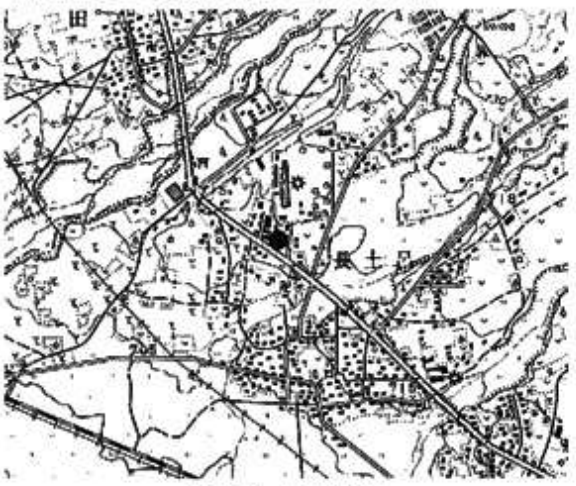
―佐久地方における寺院の草創―

宇賀神誠司

今年のゴールデンウィークに突入する直前のことである。作業員さんを発掘現場まで送られてきた方が、昔、庭先で拾った瓦を是非見て欲しいと言ってきた。各地を転々としながら発掘調査をしていると、こうした「埋もれた資料」によく出くわすが、それが佐久地方では滅多にお目に掛かることのない「瓦」と聞いて、やや落胆した趣で拝見に臨んだ。それほど古くないものだろうと、初めから決めつけていたのである。

その瓦は、古臭い新聞紙で無造作にくるまれていた。所有者の根津達夫氏（佐久市根々井在住）は、おもむろにそれを手渡す。疑念を抱きながら手にしたが、中を開いた途端、思わず息を呑まざるをえなかった。瓦には疎い私であったが、それはどうみても古代の軒丸瓦であったのである。

しかも、「場所は？」と尋ねると、「長野吉田工業の旧敷地内」と聞いてまた仰天した。長野吉田工業は、かつて佐久市長土呂で操業していた工場であるが、実は、かなり古くから古瓦が頻繁に出土する場所として注目されていたのである。しかしながら、これまで年代を推し量れるものには恵まれておらず、手をこまねいているうちに、次第に話題から遠ざかってしまっていた。突如目の前にした一片の瓦は、まさに年代を知る第一級の資料であり、また、佐久の古代史研究を一挙に躍進させる資料でもあったのである。



第1図　出土地点

発見のいわく　昭和36年のことらしい。長野吉田工業の敷地拡張に伴い、造成工事が行われた。恐らく、切・盛土されたことだろうが、これによって必要のない残土が生まれた。折しも、根々井地籍に個人宅地を造成しようとしていた根津氏は、この残土の一部を譲り受け、２ｔ車10台分程度を運び込んだ。これを敷きならす最中に、この古瓦が目に止まり、運良く採集されることとなった。聞けば、これ以外には、瓦らしきものは見当たらなかったようで、ただ１片が拾われたに過ぎない。

瓦のスタイル　瓦当表面の約1/2を欠いているものの、ほぼ全容を窺い知ることができる。

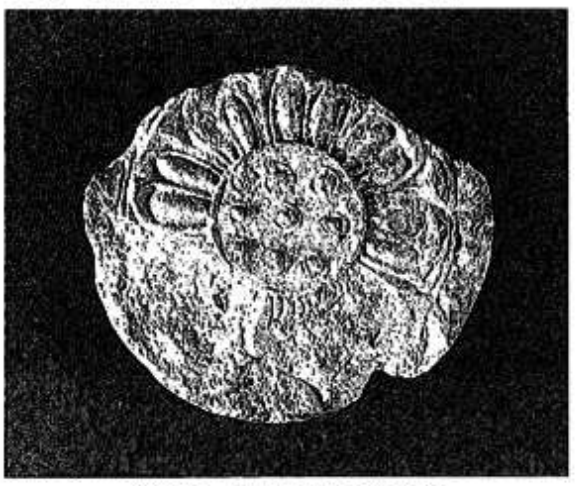
瓦当文様は、「推定初唐様式」に連なる、いわゆる「川原寺式」と同系で、内区を複弁八弁蓮華文、外区を面違い鋸歯文で飾ったものである。淡黄色を呈し、胎土は緻密で、焼成も堅緻である。瓦当径15.5cm・中房径5.7cm・内区径12.3cm・瓦当厚2.5cmをはかる。

陽刻界圏を巡らした中房内には、周環を巡らした蓮子を、中心に１顆・界圏傍に８顆の計９顆を配している。蓮子の配置は等間隔でなく、また界圏傍のものについては方形配列に近い。

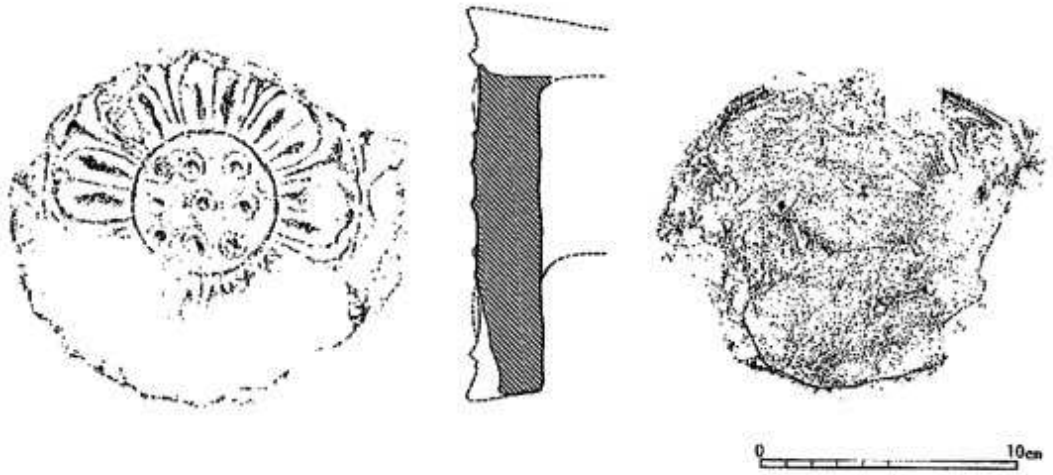
花弁は、全体に彫りが深く、縦に２面分割された中に断面三角形の小葉を高彫りしている。小葉間、および間弁は高い段面をつくり出しており、躍動感を覚えるほど立体的に表現されている。全体にシャープなつくりだが、各花弁長・幅には若干ばらつきが目立つ。

蓮華文との境に細い陽刻圏線を入れた外区は、高く内向傾斜し、外行面違いの鋸歯文を陽刻している。１歯を残すのみだが、その形は正三角形に近い。

側面は、ヘラケズリの直立縁であり、瓦当裏面は指で撫でたあとが残っている。瓦当に接合した丸瓦を欠損しているものの、剥離した面には、緯糸・経糸とも14本／１cmと細かい布目圧痕が認められる。



第2図　長土呂出土の軒丸瓦



第3図　軒丸瓦拓影（1：3）

瓦の年代　「川原寺式」の初現は、言わずと知れた大和川原寺の創建期である。660年代には建立を開始したらしい。これを機に、同系瓦が東国を中心にして流布しはじめるが、一瓦様式の中ではもっとも変化に富むもので、また、地方色を色濃く表す瓦としても有名である。したがって、造瓦年代の特定は困難なものの、瓦当文様型式からこれが白鳳時代の産物であることは間違いない。

では、本瓦当文様にみられる細かな属性を観察すると、小連子を欠く点、および鋸歯文の角度が鈍いことなどから、これが川原寺創建瓦より後出のものであることは疑いない。だが、モチーフの割付が雑ながらも立体感ある作風と蓮子に写実的な周環が巡ること、並びに鋸歯文外に外縁帯を設けないことなど、「川原寺式」の範疇においても、その初現期に程遠からぬ時期の生産であると考えたほうがいいだろう。7世紀末葉という年代を与えることが適当である。

長野市善光寺・須坂市小河原左願寺・明科町明科廃寺瓦に匹敵する、県下最古のグループに属する。

長土呂出土瓦の意味　出土地点付近は、平坦面が広範に広がる台地部分である。瓦の焼成場所としては不適であり、したがって、古代寺院の建立跡地と認定してまず間違いない。また、礎石とも取れる河原石が一部露出していたという紹介もある（米山1978）。

佐久地方において、文献に現れるもっとも古い寺院は、貞観8（886）年に定額寺となった妙楽寺である。氏寺の再編を意図した定額寺制度が施行されたとき、これにあずかった寺として名高い。年代が確定していないながらも、自ら、それまでの長土呂瓦を妙楽寺ゆかりのものとする声が高まったが、新たに発見された軒丸瓦との年代差はあまりに大きく、皮肉にもこれを決定することにはならなかった。ただし、故米山一政氏は、奈良時代から平安時代初期の叩き文瓦を抽出していることから（米山1978）、約200年もの間存続し、さらに定額寺となって息を永らえた可能性も否定できない。いずれにせよ、妙楽寺論を再燃させることになるだろう。

ところで、7世紀後半ともなると、律令制度の確立とともに地方豪族が競って寺院を建立しはじめることはよく知られている。当然、これを成しえたのは、中央政府と密接な関係をもつ在地の強力な支配者である。目下のところ、佐久地方唯一の当該期寺院跡であるから、律令下の「佐久郡」において、その支配者とは郡司以外に考えられない。郡司の氏寺として創建されたものだろう。

また、この頃の郡司の氏寺は、郡衙と隣接し、傍に大規模な集落を従え、さらに官道に沿っているのが一般であり、駅家も近くにあったと考えられている。まさに政治・経済・文化・軍事の中核地に建立されたのである。当地にかかわる東山道・佐久郡衙・長倉駅などは未だ発見されていないが、付近に展開する、鋳師屋遺跡群を初めとする律令期大集落群がわずかな証左となっている。佐久郡の中枢域・そして東山道ルートがおぼろげながら見えてきた。

以上のように、この1枚の瓦には、計り知れないほどの情報が凝縮されている。今後、佐久地方に限らず、周辺域をも含めた古代史研究に大きな影響を及ぼすことになるだろう。末筆ながら、本資料の公表を御快諾下さった根津達夫氏には、深く感謝申し上げる次第である。

引用参考文献

米山　一政　1978「信濃の古瓦再論」『中部高地の考古学』長野県考古学会

再確認ノ北西の久保遺跡

—後期弥生土器の再分類—

小山岳夫

1　はじめに

待望久しかった佐久平の中期後半～後期の拠点的弥生集落跡北西の久保遺跡の台地北部の発掘調査報告書が、昨年日の目を見た。これで先に刊行されていた台地南部の報告と合わせ総合的な土器群等出土遺物の検討、集落の分析が可能になった。

7年前、台地南部の報告を受け持った私は、弥生中期後半・栗林式土器の分析に力を使い果たし、後期弥生土器については十分な検討を加えないまま北西の久保III期と単一時期に一括して報告してしまった。その後分析で、当遺跡の後期弥生土器も大枠で2時期に分離できることを『赤い土器を追う』をはじめ幾つかの拙文で公表してきたが、すべての資料が出揃ったところで改めて後期弥生土器の分離案を示しておこう。

2　分　類

北西の久保III期とした土器群を新旧2大別する。新に分類された土器群をIV期とし、旧は従来通りIII期とする。紙面の都合上、細かく説明できないので、各器種毎にその特徴と型式変化を述べる。

壺の変化　「箱清水式土器」に特徴的なIV期に顕在化する胴部下半の痩けはIII期では基本的にない。文様は頸部に集中、III期では櫛描文とヘラ描文の併用例が多いのに対し、IV期は櫛描文の比率が圧倒的に高い。また、IV期に所謂T字文よりも斜走文を多様するのは佐久平の地域的特徴であろうか。

甕の変化　III期では受口状の口縁部を持つもの、胴部中位が大きく張るもの、口縁部が弓状に外反するものなど3種類あるが、IV期では弓状外反1種類に統一される。施文方法もIII期では頸部に簾状文施文後、波状文を上下に振り分けるが、IV期では口～胴部まで一挙に波状文施文後、簾状文を刻む傾向が顕著となる。

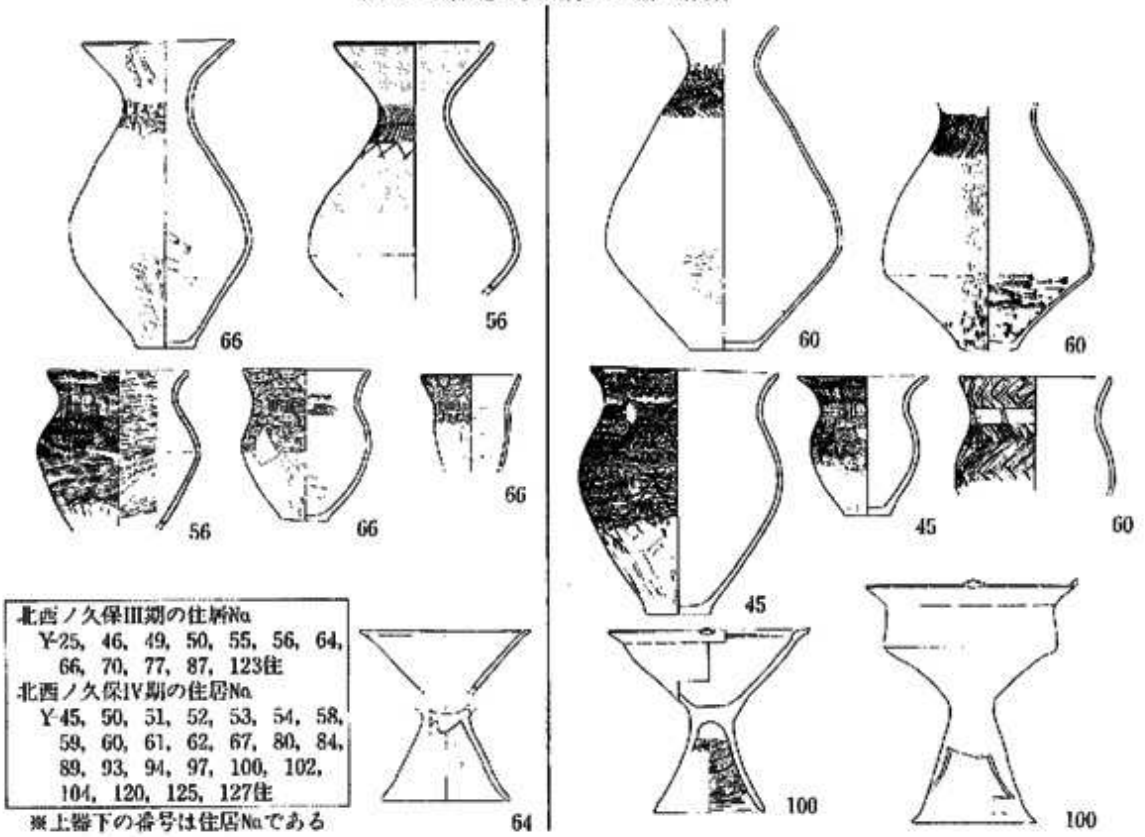
高坏　変化に乏しい。IV期で坏部が立ち上がりつつ稜をもつもの出現するか。

3　まとめ

以上の土器分類案を根拠に北西の久保遺跡の弥生後期竪穴住居36軒をIII期12軒、IV期24軒に分離する（該当する住居Noについては下図参照）。

なお、北西の久保III期は佐久地方編年（『赤い土器を追う』1991所収）で言う後期前半中相、IV期は後期後半古相に相当する。

北西ノ久保遺跡後期弥生土器の分類



北西ノ久保III期の住居No
Y-25, 46, 49, 50, 55, 56, 64, 66, 70, 77, 87, 123住
北西ノ久保IV期の住居No
Y-45, 50, 51, 52, 53, 54, 58, 59, 60, 61, 62, 67, 80, 84, 89, 93, 94, 97, 100, 102, 104, 120, 125, 127住

※土器下の番号は住居Noである

1994年度

佐久考古学会総会報告

6月11日佐久市中込会館にて例年通り、佐久考古学会総会が開催された。梅雨入りしたとは思えないほど良く晴れた日であったが、参加者は少なく、22名であった。

総会は由井明役員の発生を皮切りにスタート、由井茂也会長あいさつに引き続き、昨年6月亡くなられた黒岩忠男副会長、本年1月亡くなられた森川宗治役員に対し、黙とうが捧げられた。

その後、議長に羽毛田伸博役員が選出され、議事に入った。

第1号議案の1993年度会務・決算報告は臼田武正事務局長、高村博文会計幹事によって行われ、井上行雄会計監事が監査結果を報告した後、満場一致で承認された。

第2号議案の役員改選では、黒岩副会長逝去により井出正義副会長お一人の状態が続いていた副会長ポストに、藤沢平治会員が新たな副会長として選任された。ほかの新役員については、下に記した通りであるので参照されたい。

第3号議案は1994年度の活動計画案と予算案について審議され、これまた満場一致で承認された。

なお、本年の例会は4回、特に10月頃予定される野辺山の矢出川遺跡の国史跡指定に寄せての記念行事、12月の佐久地方遺跡発掘調査報告会と合わせて行う古人骨のオーソリティー茂原信生先生の講演会は本年度の活動の中核となるものである。会員諸氏の一層のご協力をお願いしたい。また、総会資料にあるように本年も会費据置で予算を組ませていただいた。講演会講師謝礼、印刷費、通信費などの経常経費を差し引くとほとんど資金が残らない状況である。非常に苦しい財政下でやりくりしていることもご理解いただきたい。

総会終了後、多少時間が空いたので、身近な話題を持ち寄り、情報交換が行われた。佐久市、御代田町、長野県埋蔵文化財センターなど遺跡発掘の多い行政に携わる常連組はもとより、突然の指名で気の毒でもあったが、初参加の北相木村歴史民俗博物館に本年4月から勤務されている紅一点平山明美さんの館紹介や印刷屋さんの臼田俊保会員の長野県広域にわたる情報など盛り沢山の話題が提供され好評であった。案外肩の張らない気軽な会の運営を模索しても良いのかも知れない。

午後3時からは恒例の懇親会が行われた。飲むことが目的で来ている人もいるが、親交が深まれば、これもまた良い。翌日は、各自仕事を控えているというのに、メートルは上がるばかりであった。酒豪でならした白倉・黒岩両副会長がご存命であったら、どんなに喜んだことだろうか。

新役員の紹介

総会で新役員として下記のかたがたが選出されました。任期は1994・1995年度の2か年です。

それぞれに忙しい仕事を抱えている皆さんですが、会発展のため、ご尽力いただきます。本当にご苦労様です。

会　　長　　山井　茂也

副 会 長　　井出　正義、藤沢　平治

地区役員

I 地区	(軽井沢・御代田・小諸)	高地　正雄
II 地区	(北御牧・浅科・立科・望月)	倉見　渡
III 地区	(佐久市)	木内　旌
		羽毛田伸博
IV 地区	(臼田・佐久町・八千穂・小海)	佐々木庸雄
V 地区	(北相木・南相木・南牧・川上)	中島　芳栄
VI 地区	(佐久地区以外)	寺島　俊郎

会計監査　　井上　行雄、由井　明

事 務 局

事務局長	臼田　武正
幹　　事	小山　岳大、桜井　秀雄（以上総務）
	三石　宗一（書記）
	羽毛田卓也（会計）
	堤　隆　（佐久考古通信）
	森泉かよ子（保護活動）
	佐々木宗昭、林　幸彦、小林眞寿、
	星野保彦（以上企画）

■ 高地正雄

現在、佐久市の聖原遺跡で、上原学さんの班に入って、奈良・平安の住居を発掘しています。

その前には平尾山のスキー場部分にあたる遺跡を掘りましたが、ここでは住居が1軒だけしかでませんでしたが、炭化したドングリが出た場所がありました。

思い出すのは、御代田町下弥堂遺跡の14号住居を調査したときのことです。この住居は土層の変化から周堤があったのではないかと考えています。

■ 臼田俊保

六年前に佐久市前田遺跡の調査に参加しましたが、その後、教材の会社に勤め、今縁あってほおずき書籍に入りました。今、野沢温泉村の縄文後期の土壙墓に興味をもっています。いろいろとご教示ください。

■ 冨沢一明

佐久市岸野の榛名平（はるなひら）遺跡では、中世の墓が見つかりましたが、それには三種類がみられるようです。

ひとつは火葬墓、もうひとつは素掘りの土壙墓、みっつめは火葬した骨をいれた集石墓です。

また、中世には火葬したあとの参り墓があったのではないかと考えています。

■ 福島邦男

一連の構造改善・道路などに伴う調査がすべて終了し、今後発掘の予定はありません。よそはまだまだ調査が忙しそうですね。

現在、町誌編纂を進めている最中です。さきごろ出版した自然編につづき、今年の末には原始・古代編が刊行の予定です。どうぞごらんください。

■ 井上行雄

今の長野県考古学会には、北西ノ久保遺跡がみつかったとき佐藤敏さんに進められて入りました。

当時は長野県考古学会員という名刺までつくって、いろいろな集まりにも参加しましたが、現在は少しごぶさたしております。

今度県考古学会の事務局が佐久に来たそうですが、いろいろ大変になりそうですね。

✹新入会員紹介✹

以下のお二人が新入会員として私たちの仲間になりました。どうぞよろしく。

平山明美	〒384-12	北相木村北相木考古博物館	TEL (0267) 77-2111㈹
相田裕二	〒384-13	南佐久郡南牧村野辺山412-1	TEL (0267) 98-5173

♪ 編集後記 ♪

報告書が本棚からあふれだしている。毎年増えるばかり、さりとて限られた家のスペースの中では、処分しない限り収納の方法はない気がする。

もらった本の中にも一度も開かない報告書というのも多い。だが戴いたもの、処分してしまう訳にもいかない。学生の頃は協会で10万円近く報告書を買ったり、どんな本でももらうとうれしかった。しかし今聞くとみなさん一様に本の収納に苦しんでいるという。

だから私も、例えば縄文屋さんに、使わないだろう中世の報告書をあげるようなことは、お世話になった御礼にせよ慎もうとおもっている。　（つつみ）

佐久考古通信　No.61

発行所　佐久考古学会
〒384-01　長野県佐久市桜井879
臼田武正　方
郵便振替　(旧)長野 7-2842
(新)00570-9-2842
☎0267 (62) 8133

発行者　由井茂也
編集者　堀　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL
1994. 8. 20. No 62
JOURNAL

★ 目 次 ★

■ 佐久の遺跡と遺物―まぼろしの岩村田式土器（弥生時代）― …… 小山岳夫……1
■ 殺牛馬信仰を再び考える …… 桜井秀雄……2
■ 八千穂村大石出土の尖頭器をめぐって …… 臼田 明……6
■ 下聖端遺跡から検出された弥生～平安時代の炭化種子 …… 羽毛田卓也……9
■ 浅間の黒曜石 …… 堤 隆……11
■ おめでとうございます！渡辺重義さん、佐久文化賞受賞 ……12

佐久の遺跡と遺物
パート12
―まぼろしの岩村田（いわむらだ）式土器―

今をさかのぼること58年前の1936年、長野県考古学の父藤森栄一によって体系化された長野県の弥生式土器のなかにはいまなお長野県千曲川流域における後期弥生文化の象徴的な存在とされる『箱清水式土器』に先行する型式として佐久平発見の『岩村田式土器』が文章で紹介されている。藤森はこの前後関係について詳しく述べていないが、桐原健の証言に寄れば、『箱清水』の中に土師器が混入していたことで、『岩村田』を先に位置付けることになったらしい。1966年神村透は岩村田式を箱清水式と同一視し、型式名の一本化をはかった。これにより、岩村田式の名は研究史のなかに埋没することになる。しかし、昨今佐久平出土の後期弥生土器が多数発掘され、『箱清水式』とはやや趣の異なることが明らかになってきたことを契機に消滅した『岩村田式』を再評価する必要性が生じてきた。

岩村田式土器の発見者は信濃考古学会の創設者神津猛。最初の発見は大正2年、昭和5年に発掘され、雑誌『信濃』に発表したのは昭和11年である。発掘地点は岩村田駅の西側、現在では弥生時代の大集落跡を内包する円正坊遺跡群として周知されている。残念なことに神津の報告文には挿図がない。編集者の都合で割愛されたのだ。従って、紹介されたのがどんな土器だったのか文章から判断するしかない。神津の報文には土器の色合いで度々朱が登場するので弥生土器の壺が存在していたことは間違いない。この頸部文様については「篦均シ」と書かれたものが多い。筆者はてっきり現在言う篦描文のことと思いこみ、佐久の地域性を象徴する矢羽状篦描文を連想して喜んでいたのだが、念の為「篦」を漢和辞典で調べてみると細かい櫛の意味と竹ベラの二つの意味があることがわかってしまった。神津がどちらの意味で「篦均シ」と書いたのかは今となってはわからない。『岩村田式土器』はいまだ幻のようにその実態を見せてくれない。誰か当時の土器を見た人がいたら私に教えて欲しい。（小山岳夫）

参考文献 神津猛 1936「岩村田の弥生式遺跡」『信濃5－8』 藤森栄一 1936「信濃の弥生式土器と弥生式石器『考古学7－7』

周防畑B・後沢遺跡など、佐久を代表する弥生遺跡から出土した土器群。岩村田式もこのような姿だったのだろうか。

殺牛馬信仰を再び考える

―上田正昭博士に異議あり!―

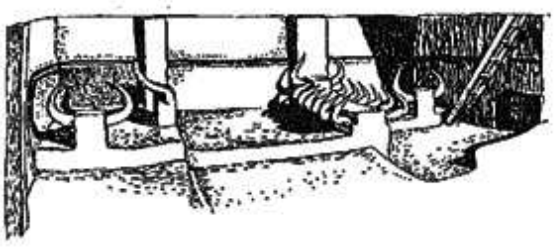
桜井秀雄

1　はじめに

私は、日本古代における祭祀習俗（神祭りのこと、広くいえば「信仰」のことと言ってもよいだろう。）について自分なりの視点からなんとかまとめてみたいものだと、常日頃より考えているところである。最近は、動物を「いけにえ」として供する祭儀、つまり動物犠牲が古代日本においてはどのようなありかたをしていたのか、という問題に関心をもっている。なぜならばこの祭祀が中国大陸や朝鮮半島をはじめとする世界各地でひろく認められるものであり、したがってそのありかたを探ることによって、古代日本における祭祀習俗の特性を見いだすことができるのではないかと考えるからである。その中でも牛と馬の場合については、「佐久考古通信No.55」にも「殺牛馬信仰の世界」と題した小文を発表したことがある。

この小文で私は文献史料を再検討することにより、古代日本においては殺牛馬信仰はその存在は確かに認められるものの、あくまでも例外的な存在であり、したがって広くいきわたった一般的な習俗であったとは認めがたいことを論じたのである。

ところで近頃、京都大学名誉教授である上田正昭博士の「殺牛馬信仰の考察」という論文を目にした。[註1] なかなか興味深い論文ではあるが殺牛馬信仰のありかたについての上田氏の解釈には納得のいかない点がいくつかあるため、[註2] 再度この問題について考察してみたいと考えた次第である。



第1図　トルコにあるチャタル・ヒュユク遺跡のウシの祠
（原書房『図説動物文化史事典』より）

2　上田氏の見解

上田氏の論文は以下のような構成となっている。

1　古代日本の犠牲のありよう
2　祈雨と殺牛馬
3　遺跡と民俗と

1章において上田氏はまず、『「神祇令」に動物供犠をめぐるさだめがほとんどないことはたしかだが、その故に民間の習俗あるいは民間の信仰のなかに、動物供犠が皆無であったとみなすわけにはいかない。日本の「神祇令」では意識的な動物供犠が排除されているのであって、後述するように民間の習俗や信仰のなかには明確に動物供犠の習俗は存在した。』と述べて、動物犠牲が民間レベルにおいては極めて一般的な習俗であったと論じていくのである。その論拠として上田氏は、1章では主に文献史料にみるところの「漢神信仰における殺牛馬をとりあげ、次いで2章では雨乞い儀礼における殺牛馬について言及し、そして3章では考古学的資料と民俗例にみる殺牛馬の事例をとりあげて、それぞれ論じている。そして、『アジアには広く殺牛馬の信仰があったし、それは日本の民俗のなかにもうけつがれてきたのである。古代の日本に、殺牛馬や犠牲はなかったと速断したり、あったとしてもそれは「帰化人」のみの習俗であり、「例外」とする通説にはしたがえない。』と結論づけているわけである。

このような上田氏の論に対して私が異議をとなえたい点はいくつかあるのだが、今回はその中でも看過できない2つの点をとりあげて検討していきたいと考えている。

3　漢神信仰としての殺牛馬信仰

殺牛馬信仰に関する文献史料はそれほど多くはない。代表的なものとして「日本書紀」皇極天皇元年七月戊寅条、「古語拾遺」御歳神条、「日本霊異記」中巻第五、「続日本紀」延暦10年9月条、「日本紀略」延暦10年7月10日条、などの史料があげられる程度である。

殺牛馬信仰には佐伯有清氏がかつて指摘した通り、[註3] ①「漢神」信仰としてのもの、②農耕儀礼としてのもの、の2つのパターンが存在している。このうち前回私は、①の「漢神」信仰としての殺牛馬は言うまでもなく、②の農耕儀礼としての殺牛馬もさきにあげたような文献史料から考察するに、あくまでも外来の信仰

第2図　神殿におけるアッシリア人の原牛犠牲の儀式図
（加茂儀一「家畜文化史」より）

としてうけとめられており、したがって民衆の間にはそれほどひろまっていた祭祀習俗とは理解できず、あくまでも例外的なものであったという結論に達したわけである。

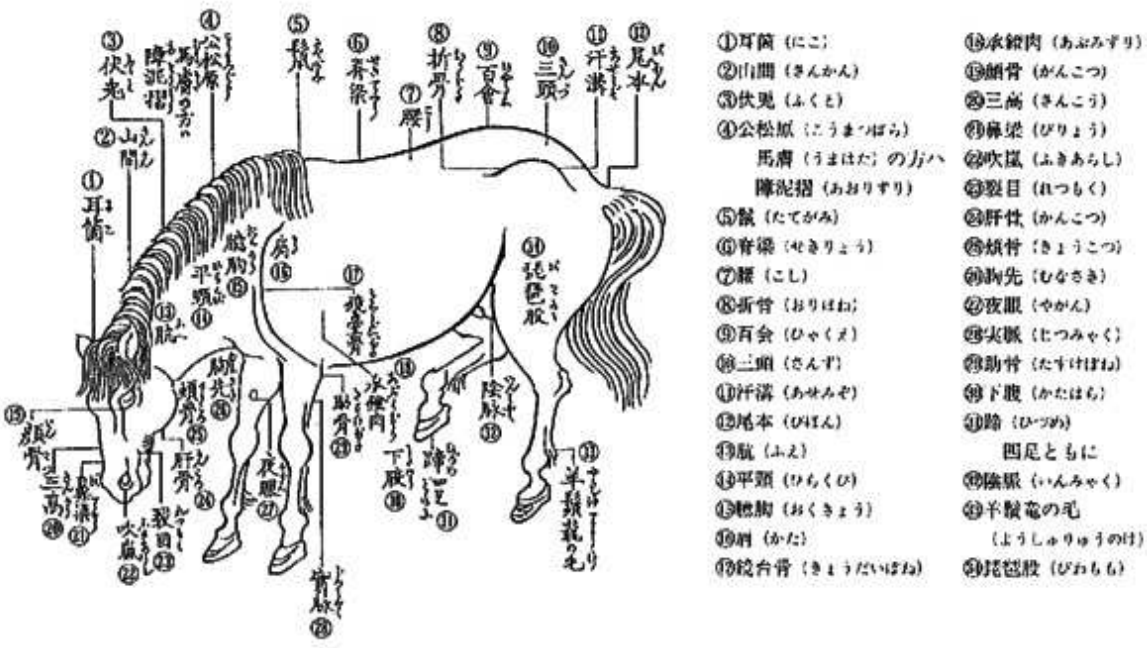
一方、上田氏は農耕儀礼としての殺牛馬はもちろんのこと、「漢神信仰」としての殺牛馬についても、渡来系集団のみの信仰ではなく、民衆層にまでひろまっていたものと主張する。そのひとつの論拠として「続日本紀」延暦10年9月16日条の「伊勢・尾張・近江・美濃・若狭・越前・紀伊らの国の百姓、牛を殺して漢神を祭るに用いるを断つ」という殺牛信仰の禁止令が出されていること、またこれより10年後の「類聚国史」延暦20年4月8日条でも、越前国で再び殺牛馬信仰の禁止令が出されていること、「類聚三代格」の延暦10年9月16日の太政官符にも「諸国百姓致牛用祭。宜厳加禁制莫令為然。若有違犯科故殺馬牛罪」という禁止令が収載されていること、などの史料を手掛かりに、つまりこれらは「「漢神」の祭りにかんするものだが、その祭りが北陸の地域ばかりでなく、「続日本紀」が「伊勢・尾張・近江・美濃・紀伊」らの「百姓」とことわり、「類聚三代格」所引の太政官符に「諸国百姓」とするように、東海・東山・南海などの諸地域にも波及していた。そして渡来系集団のみの信仰というよりも「諸国百姓」におよんでの「漢神」信仰にもとづくものであったことをみのがせない」と論ずるものである。なるほど一見するとたしかに「諸国百姓」とあり、民衆の間では全国的なひろがりをもっていた一般的な祭祀習俗であったかのように思われる。

しかしながら、これらの史料についてはもう少し深く追及する必要がある。その理由のひとつはこれらの史料が桓武天皇治世下の延暦年間、西暦でいえば8世紀後半から9世紀にかけての時期に集中しているということである。私もこの時期には「漢神」にもとづく殺牛馬信仰がかなりのひろがりをみせていたことは認められると考えている。しかしながらそれはあくまでも一時的でありかつ表層的なものであったのではないだろうか。

8世紀後半から9世紀初頭にかけては8世紀代の律令政治を支配していた在地の共同体秩序が動揺しはじめ、民衆の間にも階層分化が進むなど、社会構造がゆれうごく不安定な状況が続いていた時期なのであった。このような状況の下では人々は不安な気持ちでいっぱいであったであろう。そのため心の支えともなる信仰への関心は当然強まっていたものと考えられる。

なるほどこの時期、人々の間では今までの律令的神祇信仰よりも御利益があると思われた様々な新奇な信仰が出現してくるのである。神仏習合や御霊信仰（怨みをのんで死んだ人たちの霊をなぐさめる）などが行われるようになったのもこの頃からであり、またあやしげな巫覡（ふげき）に従う淫祀やまじないなどが各地で頻繁におこなわれはじめていたようである。祭祀の面でも混乱を極めていた時期なのである。

殺牛馬信仰もこのような社会情勢を踏まえた上で考えていかなくてはならないのではあるまいか。森田悌氏は殺牛馬信仰に関して「八、九世紀の交以降の淫祀・巫覡の蠢動に通ずるものがあり、神祇信仰に満たされ



第3図　馬の名称〈「都会節用百家通」による〉（角川書店「平安時代史事典」より）

ない不安な人たちが外来の漢神信仰におもむいたのである」と述べている。この時期に殺牛馬信仰がかなりのひろがりをみせたのには以上のような社会背景があったからなのではあるまいか。

しかし神仏習合や御霊信仰などが最終的には認知されるものとなったのに対し、殺牛馬信仰はあくまでも政府の禁制されるものであった。そしてこれ以降にはほとんどその史料がみられないことなどからすれば、殺牛馬信仰はこうした不安定な社会情勢のなかで流行したものではあるが、あくまでも一時的な流行にすぎなかったとは考えられないだろうか。つまりそれは単に一時的な流行であり、結局は日本古代社会には根づかなかった祭祀習俗であったのだろう。したがって上田氏が論拠としてあげた史料についてはこれをもって殺牛馬信仰の一般性を論ずることはできないと私は考えるのである。それではなぜに古代日本社会には殺牛馬信仰が根づかなかったのか、それを理解するためにはまずなによりも古代日本において牛と馬がいかなる存在のありかたをしていたのかを正しく理解する必要があるだろう。そこで次に、古代日本における牛と馬のありかたについて考えてみたい。

4　古代日本における牛と馬のありかた

上田氏は『殺牛馬の信仰は、古代日本独自のものではない』といい、『馬の奉献ないし供犠は主として内陸アジアの遊牧民―アルタイ系語族に（なかには「生き馬」もある）、牛の供犠は主として東南アジアの諸地域にかなり存在する』と指摘する。この指摘については私も同感であるが、しかしながら上田氏が、この論拠として朝鮮半島における殺牛馬信仰の存在をあげて、『こうした朝鮮半島における「牛馬」の供犠が、古代日本の殺牛馬の信仰や習俗の直接的なルーツとみても、さしてあやまりではない』と論じていることは果たしていかがなものであろうか。

この問題について言及するためには地域的に近いから、などということよりも先にまず日本古代における牛と馬の存在のありかたについて考えなければならないのではないだろうか。上田氏は古代日本において殺牛馬信仰が盛んであったひとつの論拠として民俗例には『牛馬以外にも祭りのおりに、猪や鹿などの首を供える例もある』ことをあげているが、これは論拠としては認められないだろう。なぜなら牛と馬に関しては、猪や鹿などとは同一なレベルでは論じることはできないからである。私は古代日本において動物犠牲が全く存在していなかったとは考えてはいない。とりわけ猪や鹿などが犠牲として供されていることは「播磨国風土記」や今昔物語などからも理解できる。そしてこれは古来からの一般的な祭祀習俗であったろうことは諏訪大社の御頭祭の存在などからもうなづけることである。こうした猪や鹿などの野生動物による犠牲祭儀は狩猟に関する動物犠牲として理解すべきであろう。

私があえて牛と馬に関してのみ「殺牛馬信仰」という名称をつけて他の動物犠牲とは別個に論じようとしているのは、猪や鹿による犠牲祭儀とは同じ範疇では語れないからである。ここで古代日本において牛と馬が他の動物（とりわけ犠牲として供されることのある猪と鹿）と大きく異なるところをまとめてみると、次の2点になろう。

①牛と馬は縄文時代にはいなかった。

かつては牛や馬も縄文時代には日本に生息していたと考えられていたが、現在では縄文時代における牛と馬の存在は否定的である。江楽善通氏によれば、「今のところ、確実な資料で古く遡れる骨は、牛の場合、東京都港区の伊皿子貝塚の弥生時代後期とされているものであり、馬の場合は少し遅れて、4世紀末～5世紀」頃の遺跡からの出土であるという。つまり、牛と馬は弥生時代後期から古墳時代という比較的新しい時期に渡来してきたものなのである。このことは牛と馬が狩猟の対象となる野生動物ではなく、当初から「家畜」として移入されてきたことを示している。

②牛と馬の肉は禁食であった。

「日本書紀」天武天皇4年4月17日条には『牛・馬・犬・猿・鶏の宍を食ふこと莫』という禁止令が出されているが、ここには鹿や猪ははいっていない。鹿や猪に関してはその肉を食べることは禁止の対象にはなっていないのである。しかるに牛と馬に関してはその食肉を禁止している。牛と馬はもっぱら軍事用、農耕用、駄用として利用されていたのである。

この2つの特徴は、牛と馬が猪や鹿などの狩猟動物

第4図　祖先にいけにえを捧げ礼拝する〈中国・清時代〉
（「騎馬民族は来なかった」より）

とは異なって当初から「非食用家畜」として導入されたものであることが理解できるだろう。

いやそもそも、古代日本には「食用家畜」はほとんど存在していなかったのである。佐原真氏によると『世界的に見ると、現代にいたるまで食用家畜を持っていない農業は、明治に先立つ日本本土とヨーロッパ人の出現に先立つアメリカの大部分』ぐらいであり、『これらは世界的にはむしろ例外』な存在なのであって、農耕をやっている一方では食用家畜を飼っているところのほうがごく一般的[註7]』なのだという。これは非常に重要な観点である。なぜならば同じく佐原真氏は、『食用家畜をもつ文化においては、帝王の即位、天神・地神をまつる祭祀、祖先をまつる祭祀、収穫祭、雨乞い等々の重要な祭祀に際して祭壇の前で家畜を屠殺して犠牲をささげることが広くおこなわれた。国家的規模の祭祀から村や家での祭祀にいたるまで犠牲がつきものであった[註8]』ことを指摘しているからである。中国や朝鮮半島、および東南アジアなどとは異なり、古代日本においては牛と馬に限らず、食用家畜はほとんどみられなかった。したがって『食用家畜をもたなかった例外的な存在であった古代日本における殺牛馬信仰については安易に他地域での事例から類推することは謹まなければなるまい。

なによりも古代日本では食用家畜がほとんど認められないこと、そして牛と馬は弥生時代後期から古墳時代という比較的新しい時期に、農耕や駄用等に用いる「非食用家畜」として移入されてきたこと、をもっと重要視すべきなのではなかろうか。たしかにたとえば牛などの犠牲は世界的にみてもごく一般的にみられるものではある。しかしそれは食用家畜としての牛が存在しているところの事象なのであって古代日本の場合には安直に比較はできないのである。

上田氏の論考にはこうした観点が欠如しているようにみうけられるのである。したがって『このようにアジアには広く殺牛馬の信仰があったし、それは日本の民俗のなかにもうけつがれてきたのである』とする上田氏の見解はあまりにも表面的な考察にすぎず、失当というべきものではないかと私は考えるのである。

以上、上田氏論文をめぐって古代日本における殺牛馬信仰のありかたについて論じてきた。上田氏論文を詳細に検討することはまたの機会に譲るが、今回は『「殺牛馬」の習俗には明らかに渡来の要素はあるが、民間の習俗としてかなりのひろがりをもっていたことは認められよう』という上田氏の解釈は否定せざるをえないことが指摘でき、そしてやはり殺牛馬信仰はあくまでも例外的であり、一般的な祭祀習俗とはなりえなかったことが認められたと思われる。

こうした殺牛馬信仰のありかたは中国や朝鮮半島、東南アジアとは大きく異なるものであり、ここに祭祀習俗における古代日本の特質のひとつが浮かび上がってくると私は考えている。

註

註1　上田正昭「殺牛馬信仰の考察」
上田正昭編『神々の祭祀と伝承』所収、同朋舎出版、1993。以下、上田氏の論はすべてこれによる。

註2　たとえば、聞乞い儀礼との関係、絵馬や土馬の理解、馬歯・馬骨を出土する遺跡のとりあげかた、などが納得いかない点としてあげられるがこれらについての批判は別の機会に行いたいと考えている。

註3　佐伯有清『牛と古代人の生活』　至文堂、1967

註4　森田悌『王朝国家』　教育社　1979

註5　諏訪大社（上社）の御頭祭では鹿75頭が猪や兎、海産物などとともに用意されたという。(宮坂光昭『諏訪大社の御柱と年中行事』　郷土出版社、1992

註6　工楽善通『水田の考古学』　東京大学出版会　1991

註7　佐原真『騎馬民族は来なかった』　日本放送出版会、1993

註8　佐原真『総論―原始・古代の衣食住と習俗』『岩波講座　日本考古学4』所収、1986

新刊紹介・写真が語る佐久の年中行事・渡辺重義著

本書は、本学会員渡辺重義さんが長年にわたって記録した佐久の年中行事が、五百枚にもおよぶ写真の中から厳選された百枚の写真と解説で分かりやすく構成されたものです。

現代的風景のいまでは見ることができない、貴重な映像が数多く収められた図説で、まつりについての方言的表現を生かしながら親しみやすく構成されています。

ぜひご一読下さい。

B５版　100頁　定価1,500円　　申込みは　☎0267(45)8654　渡辺さんまで

八千穂村大石出土の尖頭器をめぐって

岡田　明

1　はじめに

「先生あれ、見つかったよ、あした忘れなかったら持ってくるよ」ここ数年職場でも時々話題に登りながら、なかなか所在のわからなかったという尖頭器、（第1図）を島崎和夫氏[1]より親しく見せていただくことができました。ここに八千穂村の様子や、様々なエピソードを混えながら紹介させていただきます。

2

「発見したのは1985年4月、新築の住宅が完成し駐車場をつくっていた時です。家の地下を駐車場にし、国道から直接出入りしたいと考えたからです。私の所の標高は900m、自宅は903m、池ノ平までは直線距離で15km車で約20分程離れています。毎日横穴を掘り進みました。カシャン！と音がして黒い石がジョレンに当たり転がり落ちました。アレッどうしてこんなところに…と思ったのがこの石器との出会いでした。既に宅地造成の段階で畑の表土は30～50cmも削りとられ、その下の黄色い火山灰層には石ころの類はまったく含まれていなかったからです。」

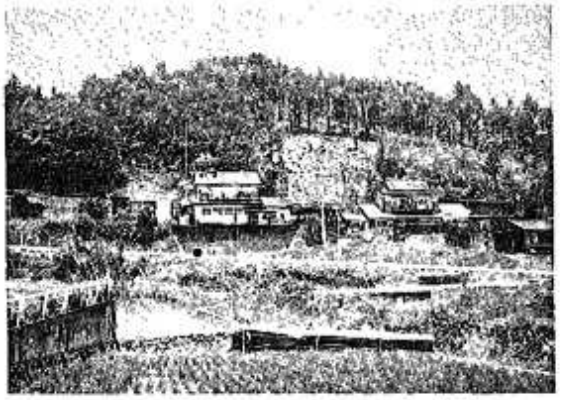


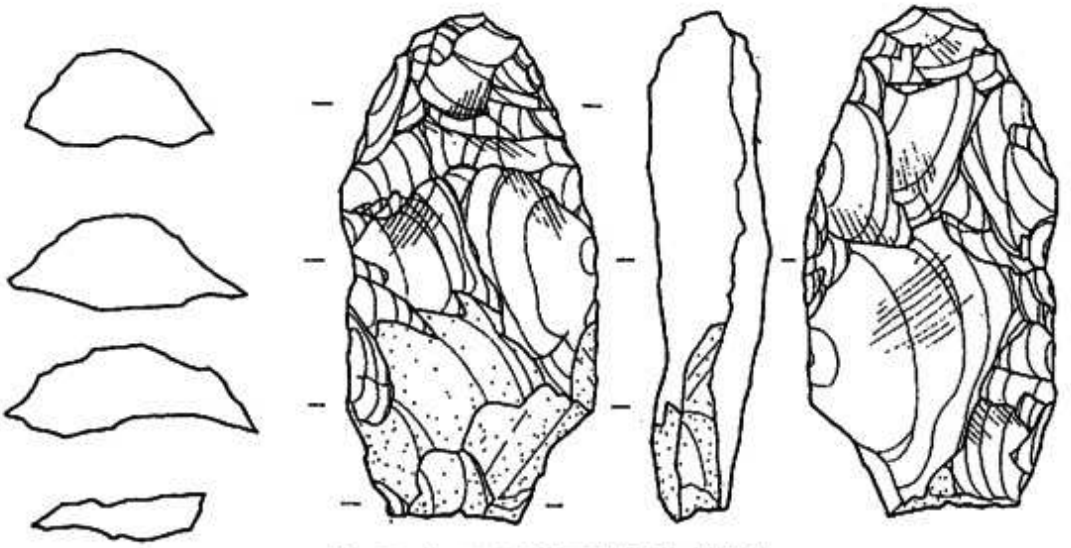
写真1　島崎邸と石器の出土地点（●）

3　石器について

本資料は長さ6.7cm、最大巾3.3cm重さ31.0g、黒曜石製でレンズ状からカマボコ型に近いゴロッとした感じの尖頭器である。全体にやや粗い感じの剥離がなされ、先端（又は尾部）に自然面が残り、作業の早い段階で折れている。未成品かもしれない。黒曜石は八千穂（池ノ平）で発見された石器類の大部分が、針で突いた様な小さな気泡を多数含む[2]のに対し極めて良質である。しかしかなり粘りがあり、くせのある黒曜石のようにも見える。「リタッチがあるので掻器として利用した可能性がある」と吉沢靖は教示している。

このタイプは一見、古い型の尖頭器かなと思う。速に自然面が残り、ゴロッとした粗い剥離は縄文期の石槍の中にも現れることがあり、その未成品かとも思う。島崎氏宅より数百メートル西側の南向斜面は、現在は削平され、水田となっているが、かつては上の平[3]（うえんだ）と呼んだ縄文期の遺跡地帯であった。

この状況を熟知していた中村[4]は尖頭器未成品又は掻器とし、「尖頭器の調整によりつくられたが完成しな



第1図　出土した黒曜石製尖頭器（実物大）

かったので刃部をつくり出しスクレイパーとして利用した石器、その期は1万5000～縄文早期の8000年前」と教示している。

池の平遺跡を中心とした尖頭器の遺跡は標高1300－1700mの高原に広がっていて(第3図)、その年代はおよそ三期に分けられるという[2]。古い順に下部からA（デバカミBII上下部)、B（デカバミ黄モヤI、II、III)、C（ソフトローム）の名が与えられ、およそ1万3000～1万年前であるとされている。

その特色は①黒曜石原産地直下の遺跡地帯であること。②尖頭器中心の極めて特殊な遺跡であること。③その資料は自然面を残すやや疎いつくりの尖頭器から次第に精巧な、木葉型尖頭器に移る過程を見事に示していること（第2図)、が挙げられる。

池の平とは、かつての池の平牧場一帯の総称で、現

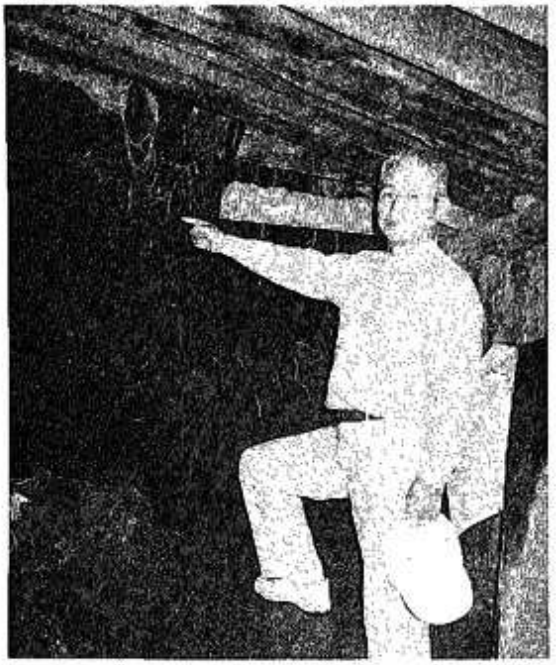
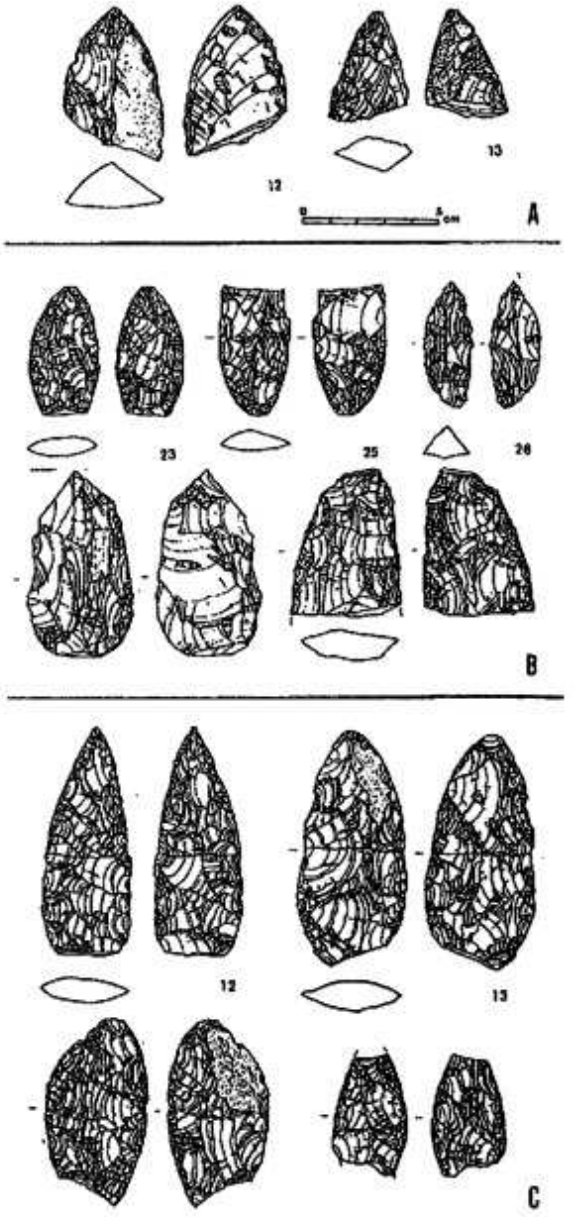
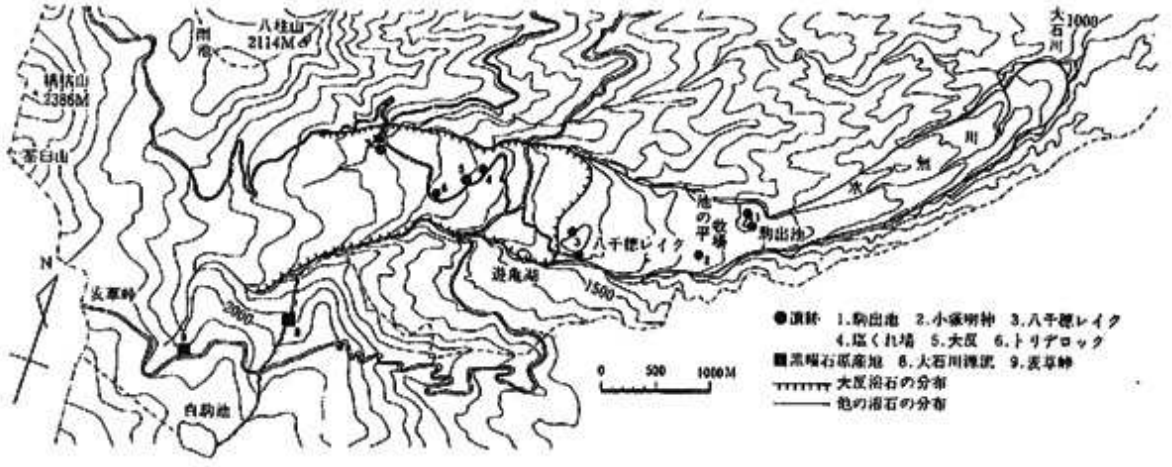


写真2　出土地点をさす島崎さん



第2図　池の平の尖頭器（A・B・C）



第3図　池の平遺跡群の遺跡と原石産地

在は二次林のシラカバ、植林されたカラマツに覆われ、このシラカバ林は八千穂高原を代表する明媚な一帯となっている。この北八ケ岳の麦草峠一帯から池の平、あるいは大石川の台地添いにキャンプ地や工房、生活の跡が連続的に残されているはずである。

4　大石村と大星村

「ひえ～、おれの村は大星村かい、お星さまかい」

島崎さんの驚きの声に我々は思わず氏の回りに集まったものです。八千穂村でも念願の村誌編纂事業の第一歩がはじまり、東大出の小林さんに入ってもらい、その準備がはじまったばかりの頃です。偶然小林さんが机の上に広げておいた豪華本の一ページ、「信濃国絵図」[5]の一部が、佐久地方図だったのです。

朱、青、緑をつかって集落、街道、山や川が特徴的に描かれ筆岩村、崎田村、上畑村、大石村から峠をこえて茅野の芦沢村へ通じている。現在の上畑、中畑、下畑が連続的に連なり、馬越村も描かれている。絵図のめずらしさを見ながら瞬間的に星ケ塔（和田村和田峠）、星糞峠（長門町鹿山）を思い出す…星は黒曜石を意味するのではないだろうか。「大石川に潜った時、小さな黒曜石がいくらでも見えた、水量は今の数倍もあった」現在は道路も川もコンクリートで固められているが、その昔、大雨の後の地すべりか、沢流れの後、道路に「丸い黒曜石がぎっしり押し流されていて、不思議な光景だったことを子供心に記憶している」等々、次々に話題となったのである。

現在は大石村は80軒をこえる村であるが、一般的には八郡村の枝村、又は分村として江戸時代に開拓されたという位の知識しか持ち合わせていなかった。佐々木家文書[6]でも本村、分村の関係を極めて良く示している。

ところが織田信長の頃の永禄７年(1564)の絵地図では、ここは大星村、武田氏滅亡の天正10(1586)は「大志之郷」、前掲の「信濃国絵図（正保４年1647）」でも大星村である。しかし元禄の1695年(209年前)の絵地図では「大石村」である。もちろん元禄15年(1700)からの佐々木家文書もすべて大石村である。いずれにしても江戸時代初期(1603～1695)は大星村と記されている。

このことから大石村は古くは大星村で、石は星の転字ではないかということが考えられる。しかもその間に「おおし」という呼び方も現れている。我々は源流の村、山間の村だと思うと昔から大石村で疑うことさえないのだが、大石村は大星村であり、大石川も大星川ではなかったか、それはまさに黒曜石の原産地そのものの、地名ではなかったのではないだろうか。

5

1983年、1988年、八千穂村では教育委員会、役場を中心に福祉センターを開放して池の平、大反、塩くれば等の大発掘が行われた。この中心は野尻湖発掘調査団であった。それから10年、考古学は長足の進歩を示していた。点から面へ、出土品から生活面へ、食生活や交通、思想信仰までも立体的にとらえようとしている。発掘法も人手に加え大型重機も活躍する時代だ。

そして今、この大石出土の一点に極めて大きな関心が寄せられる。それは

①旧石器時代の遺跡は高原や標高の高い所にあると思われていたが高原から平地にも及んでいる可能性があること、②池の平という遺跡群からはるかに広い範囲に及ぶ人間の足跡を確実に追える一点、尾根筋・沢筋・関東一円・北陸に抜ける道筋・キャンプ地・中継地としての価値と可能性、数万年も前から人間は同じ生活の場を選ぶものだということ、人間の生活が連綿として続いて来たのだということを証明できる一点。がそれである。

6　付

４月27日、名古屋空港で起きた中華航空A300エアバスの墜落事故は死者225人を出し、昭和60年の日航ジャンボ機墜落の520人に次ぐ大惨事となった。両事故とも長野県と極めて深いかかわりを持ち、ここ２週間は原因究明の報道が盛んだ。それが着陸時の人為的な操作ミスによる失速であることが確実となってきた。失速の原因やその感じを本気になって説明する島崎さん、「飛んでみた者じゃなきゃあわからねえよ。」…氏は八千穂村で唯一のパラグライダーのライセンス保持者、昨年失速、着陸に失敗して左足首を骨折、一年間を棒にふっていた…どこまでも翔んでいるおじさんなのである。

おわりに当原稿作成に関しては、島崎氏はむろんのこと中村山克、吉沢靖、高見沢太郎（八千穂村教育長）、小林範昭（同教委村史編纂）、島田恵子、林幸彦の諸氏には多くの教示協力を受けました。記してお礼申し上げます。

（1994、5、15八千穂村社会教育主事）

註

1）島崎氏は昭和13年生まれ。八千穂村大石3043番地。現八千穂村教育委員会勤務

2）『池の平遺跡群』八千穂村大反遺跡・塩くれ場の尖頭器文化1986年３月。八千穂村池の平遺跡発掘調査団。

3）島崎氏より数百メートル西に離れた河岸段丘上の南向斜面。湧水２カ所もあった。

4）中村由克氏の私信（平成6年7月15日付）
野尻湖博物館の学芸員で池の平遺跡の発掘の当初からかかわった人物。当時島崎氏は石器を鑑定しており、早くからこの一点に注目していた。このことはいずれの機に紹介したい。

5）『定本信州の街道』定本信州の街道刊行会編 1991.7月 郷土出版 ページ6

6）佐々木嘉幸家文書、佐々木信順家文書、江戸時代の足許の様子を知る資料

7）更に筆者の調査によれば例えば千曲川東側の水系、佐久町余地峠や内山の谷、内山峠に川上村各山系では至るところに巨岩・巨石がみられる。これに対し大石水系には見られず単独の大石に当たるものもないのが実情である。石骨（いしこつ）の地籍もあるがこれ程石の少ない沢も少ないと筆者は思っている。

下聖端遺跡から検出された弥生～平安の炭化種子

羽毛田卓也

長土呂遺跡群下聖端遺跡は、佐久市の北部長土呂地籍の標高720mから730mを測る帯状台地に展開する。この帯状台地は、帯状低地（湯川と下蟹沢）に挟まれたいわゆる浅間山南麓東端に展開する「皿切り地形」の高地部分である。この台地は蓼科製作所付近より北陸新幹線佐久駅予定地付近まで約3.3kmに渡り細長く続き、先年調査された上聖端遺跡や現在調査中の聖原遺跡等の大遺跡が存在する。

下聖端遺跡は国道141号線改良工事に伴い、昭和63年と平成元年に調査され、弥生時代後期後葉の住居址4軒、古墳時代中期後葉の住居址13軒、古墳時代後期前葉の住居址5軒、古墳時代後期中葉の住居址18軒、古墳時代後期の住居址2軒、奈良時代の住居址1軒、平安時代中期の住居址15軒が検出されている。

焼失住居址　下聖端遺跡で検出された古墳時代の住居址の内、火災後に破棄されたものは34軒で、全体の89%に当たる。炭化材の残存状況は、床面に数本の炭化材が炭化層と共に残っているものから、数十本の建築材が重なって残っているものまで様々であった。この焼失住居址の多さが炭化種子を検出する要因のひとつであった。さらに弥生時代・古墳時代・奈良時代の住居址は、奈良時代以降に起こったと考えられる洪水の土砂に5～20cmの厚さで覆われており、覆土の状態が極めて良かったことも要因であった。

炭化種子の検出　炭化種子の検出は以下の手順に従って作業を行った。

①層の把握をするため、サブトレンチを設定し、床直上まで掘り下げる。

②焼失住居と確認できた住居について、炭化層・焼土層・炭化材を含む層・床面直上層を土嚢袋に入れて持ち帰る。

③土砂をビニールシートに広げ乾燥させる。

④乾燥後、土砂をふるい分ける。

⑤ふるい分けた土砂を机上に広げ、土砂と遺物、植物遺体とに分ける。

⑥植物遺体は、さらに炭化材と炭化種子とに区別する。種子も明確に区別できるものは分ける。

本遺跡においてこの炭化種子を検出するために覆土のふるい分け作業を行なった住居は、弥生時代後期3軒、古墳時代中期11軒、古墳時代後期6軒、平安時代中期4軒である。

ふるい分け作業の結果検出された炭化種子は、コメ1469粒・コムギ2746粒・オオムギ87粒・小雑穀類（ヒエ・アワ・キビなど）6960粒・マメ類400粒・タデ類13粒・ソバ9粒・エゴマ8粒・ヤマブドウ581粒・モモ28粒・その他31粒・不明3283粒で、信州大学農学部教授の氏原暉男氏に鑑定していただいた。この中で意外だったのはムギとソバである。ムギがコメよりも多く検出されるとは考えていなかったし、ソバがこんなに少ないとは思わなかった。つまり⑥の作業において、ムギをコメと分類し、小雑穀をソバと勘違いしてしまっていたのである。

炭化種子と時代　次のページに時代ごとの炭化種子の出土数とグラフがあるので参照していただきたい。時代別に見ると、弥生時代は小麦が圧倒的に多く、古墳時代は小雑穀類が主体を占めるが、米と小麦はほぼ半々である。そして平安時代は小麦が米に比べてやや多いのがわかる。また弥生時代では小雑穀類がまったく出土していないのも興味深い。

弥生時代の住居址はいずれも後期後半であり、稲作が佐久平に導入されたと考えられる中期よりかなり時間が経っている。それにもかかわらず小麦を主とした畑作に食を依存していたことが窺えよう。出土数より極論を引き出せば、1カ月に3日しか米を口にしていない計算になる。つまりこれは弥生水田の生産性の低

さを表している。畑作依存の傾向は、古墳・平安時代に至っても変わらず、小麦と米の比率は半々のままである。平安時代には租（年貢）といった政治的要員も考えられないわけではないが、地方において米が主で畑作が副という机上の考えは余儀なくされよう。

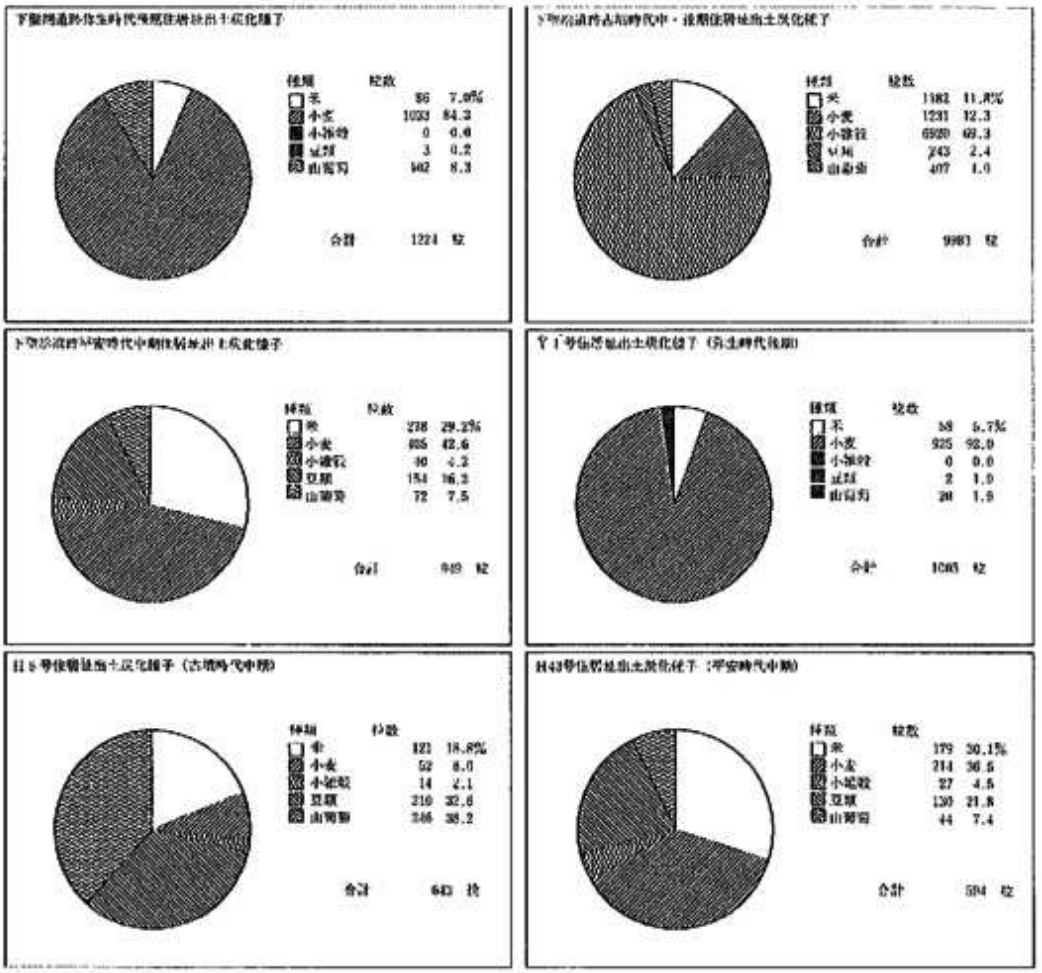
ふるい分け作業は特別な作業でも時間のかかる作業でもない。少々手間がかかる程度で、土砂を土嚢に入れて持ち帰る前に現場でふるい分けを行い土砂量を少なくすることもできれば、現場で炭化種子分類まで十分行なえる作業である。土器ばかりに目を捉われないで炭化種子にも目を向けるべきである。また、水による選別方法も試みたが、種子の破損が著しいため、乾燥による選別を採用したことを付け加えて置く。

ちなみに、本遺跡で出土した臼玉やガラス小玉といった玉類500点の8割以上がこの作業によって検出されるという思ってもみない成果があった。さらに古墳時代の住居址3軒のカマド焼土をふるった結果イノシシ・ニホンシカ・ニホンカモシカの骨が検出された。

なお本遺跡の報告書は、1991年度に刊行された。さらに詳しく知りたい方は参照されたい。

文献

佐久市教育委員会　1992『国道141号線関係遺跡』



下聖端遺跡炭化種子時代別出土数

	米	小麦	大麦	小雑穀類	豆類	ダテ類	ソバ	エゴマ	ヤマブドウ	モモ	その他	不明	計
弥生時代後期	86	1033	12	0	3	0	0	4	102	0	4	238	1482
古墳時代中・後期	1182	1231	58	6920	243	10	2	4	407	27	22	2202	12308
平安時代中期	278	405	17	40	154	3	7	0	72	1	5	84	1825
合　計	1469	2746	87	6960	400	13	9	8	581	28	31	3283	15615

浅間の黒曜石

堤　隆

1

和田峠周辺（ぶどう沢・男女倉・和田峠・星ヶ塔・鷲ヶ峰・星クソ峠）および麦草峠周辺（麦草峠・冷山）は、本州の代表的な黒曜石原産地として名高い。

旧石器時代、信州の黒曜石は、百km以上もの距離を隔てた南関東でも、多用されたことが知られている。

1993年の静岡県沼津市二ツ洞遺跡の報告によると、その出土石器の黒曜石原産地推定報告の中で、黒色土中の石器1点と、休場層中の旧石器2点が、浅間大窪沢の黒曜石であるとされた（沼津市教育委員会1992）。従来、浅間の黒曜石の遺跡での出土事例は知られていなかっただけに、私は驚きを禁じ得なかった。浅間山麓から沼津までは直線で140kmの距離がある。

私自身、浅間で黒曜石が産出することは知っていたのだが、実際に現地を確かめたことがなかったので、この8月2日に現地踏査を行ない、その産状を確かめてみることにした。何分一人では心許ないので、地元軽井沢で長年自然保護にかかわり、一帯を熟知している大林博美さんに案内をお願いした。

場所は軽井沢町石尊山東の大窪沢である。

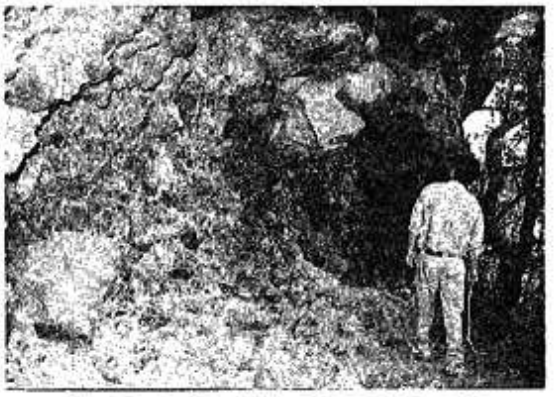
第1図　黒曜石産出地点（大窪沢）1:100000

2

8月2日快晴。大林さんと9時に軽井沢スケートセンター上セゾン現代美術館前で待ち合わせ、別荘地へ向かう。国有林のゲートをくぐり、1300mの追分林道のカーブに車を止めて大窪沢に分け入った。

周囲はミズナラの木立、盛夏とはいえひんやりと涼しい。セミやカッコウが鳴き、しばし俗世間から離れた感じだ。ヤブ蚊さえいなければ最高なのだが。

斜面を上る途中大林さんが指差したのは、カモシカの足跡だった。つづいてクマの足跡。昨年秋ぐらいのものとおもわれるクマの糞もあった。露頭の軒先には枯葉がたくさん積もっており、クマの格好なベッドだ。



第2図　大窪沢左岸の黒曜石を含む露頭

第3図　黒曜石原石の産状

第4図　黒曜石原石

以前、定点カメラを設置してツキノワグマの生態を観察した場所でもあるという。大林さんはさきに帰るといってクマよけのスプレーガンを手渡してくれた。

林道からいくらもしないうちに黒曜石を含む大きな露頭が、大窪沢の東斜面に目に入った。最高10mぐらいの高さの溶岩の露頭が何十mかにわたってつらなっており、その中に黒い石が嵌入しているのがわかる。この露頭は仏岩溶岩流とよばれるもので、およそ1.5万年前に噴出した浅間の溶岩流である。つまりこの黒曜石の生成年代も1.5万年前というきわめて若い年代になる。ということになると、旧石器時代でも、1.5万年前以前ではこの黒曜石は必然的に使用されていないということになる。ちなみに鈴木正男によれば和田峠の黒曜石の生成のフィッショントラック年代は、およそ16万年前～4万5千年前とされている。

露頭からこぼれ落ちた石屑を何気なく見ると、白い夾雑物の混じった黒曜石がたくさん含まれている。歩くと踏まれてジャミジャミと音がする。また、露頭中に含まれている黒曜石は、人頭大あるいはその倍以上、拳大のものと様々で、やはり白い夾雑物が一面に入っている。産出量は豊富である。問題は質だ。

見た限りではあまり質のよさそうなものはない。それらの黒曜石をはじから割ってみたのだが、いずれも緻密さがなく、すが入ったようにグシャグシャに割れてしまう。これでは石器の素材の剥片となるような、貝殻状の剥片をはがすことができない。

残念ながら石器の素材に出来るような良質なものはついには探しだすことができなかった。

3

1.5万年前以降、はたして浅間の黒曜石が使用されることがあったのだろうか。

静岡沼津の例は別として、付近の遺跡の出土例をみる限りでも外見上浅間とおぼしき黒曜石をほとんどみつけることができない。

私自身、同じ浅間山麓の隣接する御代田町で縄文時代の遺跡を数多く調査しているが、ヤジリや石匙の素材となっているのは分析上でも外見上でも和田峠系の黒曜石がほとんどである。ただ、たまたまいくつかは外見上浅間とおぼしき黒曜石が原石の状態で縄文住居に持ち込まれている例があった。だが、それはかなり質が悪そうなので、あるいは使い物にならないのでそのまま放棄されたものなのかもしれない。

今後の課題は、理化学的分析による消費地遺跡と原産地の黒曜石の成分対比であり、そのなかで浅間の黒曜石の利用の実態が浮き彫りにされることだろう。

なお、千ケ滝地区においても黒曜石は産出するという。おって調査する予定である。

おめでとうございます！　渡辺重義さん。『佐久文化賞受賞』

本学会員渡辺重義さんが第十二回『佐久文化賞』を受賞されました。佐久の年中行事など民俗についての長年の研究が受賞理由です。

今夏、渡辺さんは『写真が語る佐久の年中行事』を自費出版され、また以前には生まれ故郷望月大谷地の民俗を綴った『つちはやし』を出版されています。

ことに『つちはやし』は今賞の選者の山室静先生が絶賛されたという名作です。

渡辺さんは少し照れながら「今回の受賞は皆さんのおかげ」と控え目に受賞の喜びを語ってくれました。

表彰式は9月3日千曲パークホテルで行なわれる予定です。

♪　編集後記　♪

今夏、ふたたびロシアを訪れた。なんでも8月15日は全ロシアの考古学者の記念日なんだそうである。理由はわからなかったが、まずはウオッカで乾杯。日本で考古学の記念日を設けるとしたら仮にいつだろう。

ナホトカという地名をご存知だろうか。ナホトカとは本来「発見」という意味で、考古学用語では遺物のことをナホトカという。

また、驚いたことに緊急発掘はこの国にもあった。

ロシアにも考古学エレジー風の考古学者の歌がある。もの悲しげにその歌は発掘のキャンプに響いていた。

私の短い夏はそんな風に遠い地で過ぎた。（つつみ）

佐久考古通信　No.62

発行所　佐久考古学会
〒384-01　長野県佐久市桜井879
臼田武正方
郵便振替　(旧)長野　7-2842
(新)00570-9-2842
☎0267 (62) 8133

発行者　由井茂也
編集者　堤　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL
1994. 12. 2. No 63
JOURNAL

★ 目 次 ★

■ 佐久の遺跡と遺物 佐久地方最古の遺跡の発見！立科F …… 1
■ 細石刃の使用痕分析 群馬県宮城村前田遺跡細石刃の顕微鏡観察 …… 堤 隆 …… 2
■ 宮平遺跡の中期縄文土器 …… 大井源舟 …… 7
■ 浅間産黒曜石と生産遺跡 …… 土屋長久 …… 9
■ 佐原先生熱っぽくご講演 …… 10
■ 八ヶ岳西南麓の縄文遺跡を未来に！ …… 10
■ 御代田町戸場遺跡の「氷式土器」について …… 中沢道彦 …… 11
■ インフォメーション …… 12

佐久の遺跡と遺物
パート13

— 佐久地方最古の遺跡の発見！立科（たてしな）F —

1

従来、佐久地方最古の遺跡として知られていたのは、八ケ岳西麓の野辺山高原にある矢出川・馬場平・柏垂などの旧石器遺跡で、ナイフ形石器や尖頭器・細石刃などを組成にもつ2万年前をさかのぼらない遺跡であった。

1990年、蓼科山麓の別荘分譲により佐久市美笹地区の立科F遺跡の調査が始まると、一万年以上前に堆積した赤土の中から黒曜石製の石器が発見され始めた。

2

石器は、ローム層と呼ばれる赤土の中に含まれる姶良（あい）丹沢（たんざわ）火山灰層よりさらに下層から出土した。ATと呼ばれるこの火山灰は、今から21000年前に鹿児島湾の姶良カルデラが大噴火を起こした際に、全国に降り積もった広域火山灰で、石器がおよそ2万年前より新しいか古いかをきめる重要な鍵層となっている。したがってそれより下層から出た立科Fの石器は必然的に2万年前より古くなる。

一方、黒曜石そのものの水分の浸透層の厚さを測って年代を決める水和層年代測定法では、立科Fの石器5点は31200±900年前という年代が出された。

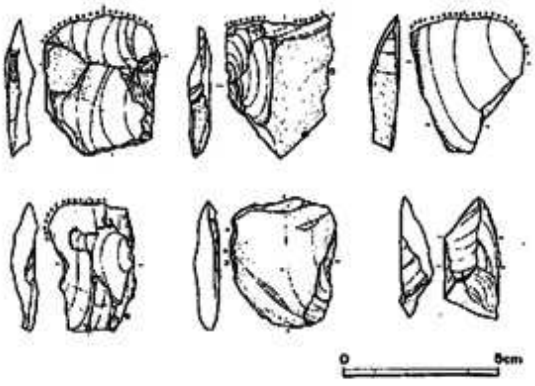
発見された石器は、一部をごくわずかに加工しただけのナイフ形石器の初源的な形をみせていた。石器の形からいっても、およそ3万年前の後期旧石器時代の始めのものと考えて、まず差し支えあるまい。

3

ところで後期旧石器時代の前半には、中央広場をもち住居が環状に立ちならぶ環状集落が国内各地でみられている。

立科Fの集落も、その石器分布から、住居数軒という小規模ではあるが環状を呈したムラがまえであったことがうかがえた。

こうした3万年前のムラは、まだ佐久地方のどこかに人知れず眠っているに違いあるまい。



第1図 佐久地方最古の立科Fの石器

細石刃の使用痕分析

―群馬県宮城村前田遺跡細石刃の顕微鏡観察―

堤　隆

1　はじめに

本稿は、今からおよそ1万4千年前頃の旧石器時代末に盛んに用いられた幅1センチに満たない石の刃＝細石刃についての使用痕分析のレポートである。

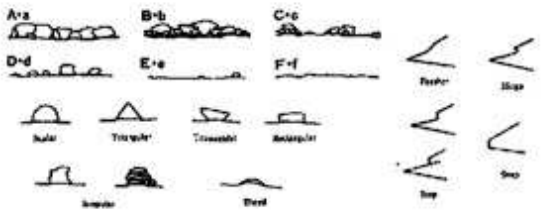
分析の対象は、赤城山麓の群馬県勢多郡宮城村に存在し1988年に発掘調査が実施された前田遺跡の細石刃である(宮城村教育委員会1991)。前田遺跡では、細石刃文化期の石器集中箇所2箇所が検出されており、出土遺物は、細石刃284点・細石刃石核5点・細石刃石核原形1点・ナイフ形石器1点・スクレイパー20点・楔形石器3点・礫器14点・加工痕を有する剥片5点・微小剥離痕を有する剥片15点・敲石17点・剥片および砕片744点・石核8点の総数1117点である。

今回、分析の対象としたのは、全284点のうち278点の黒曜石製細石刃で、落射照明付き金属顕微鏡オリンパスBHMJで100～200倍で検鏡した。

結果、以下に報告する9点の細石刃に、使用痕と考えられる線状痕を同定した。

2　使用痕のある細石刃

27は、右側縁において側縁と平行する線状痕が認められた(写真1)。線状痕の性状は荒れた底面をもつbタイプである。石器の頭部方向から尾部方向に向けての線状痕を「正」、その逆を「負」の線状痕とするなら、27の線状痕は「正」方向のものであった。また、線状痕に伴って認められた微小剥離痕はタイプeである。



第1図　微小剥離痕の分類　※以外は（御堂島1982より）

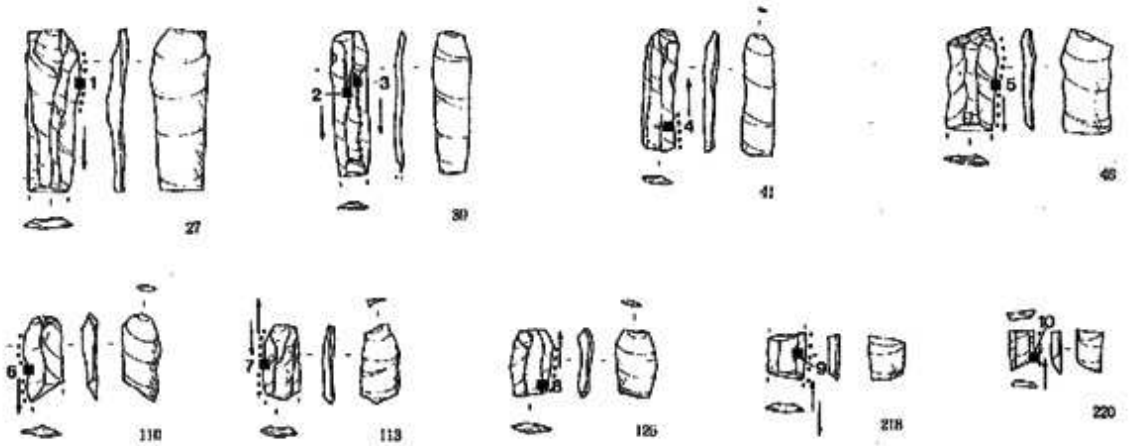
39は、中央の二条の稜上において側縁と平行する線状痕が認められた（写真2・3）。線状痕の性状は荒れた底面をもつbタイプである。双方の稜の線状痕はともに「正」方向のものであった。なお、線状痕が認められたのは稜上のみで、両側縁には認められなかった。

41は、右側縁において側縁と平行する密度の高い線状痕が認められた(写真4)。線状痕の性状は荒れた底面をもつbタイプで、「負」の方向であった。また、線状痕に伴って認められた微小剥離痕はタイプcである。

46は、右側縁において側縁と平行する高密度の線状痕が認められた(写真5)。線状痕の性状は荒れた底面をもつbタイプで、「正」方向のものであった。線状痕に伴って認められた微小剥離痕はタイプeである。

110は、左側縁において側縁と平行する線状痕が認められた(写真6)。線状痕の性状は荒れた底面をもつbタイプで、「正」方向のものであった。また、線状痕に伴って認められた微小剥離痕は、剥離痕が連続するタイプbである。

113は、左側縁において側縁と平行する線状痕が認め



第2図　線状痕の観察された細石刃（1：1、矢印は線状痕の方向、●は線状痕範囲）

写真1　細石刃27

写真2　細石刃39

写真3　細石刃39

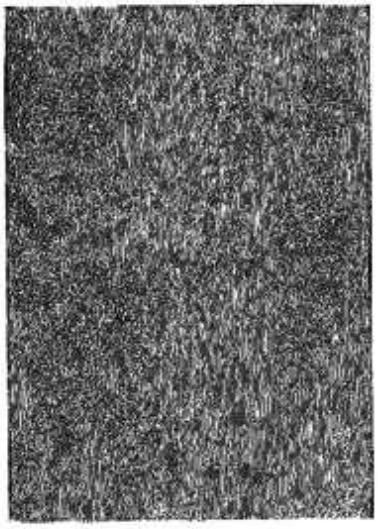


写真4　細石刃41

写真5　細石刃46

写真6　細石刃110

写真7　細石刃113

写真8　細石刃125

写真9　細石刃220

第3図　細石刃使用痕の顕微鏡写真（写真6、写真9ともスケールは0.5mm、写真1～5、7～9がいずれも同一の倍率、写真6のみ異なる倍率）

られた(写真7)。線状痕の性状はなめらかな底面をもつaタイプと荒れた底面をもつbタイプの双方で、「正」「負」両方向のものであった。また、線状痕に伴って微小剥離痕は認められなかった。一方その裏面には微小剥離痕タイプcが認められた。

125は、右側縁稜上において側縁と平行する密度の高い線状痕が認められた(写真8)。線状痕の性状は荒れた底面をもつbタイプで、「負」の方向であった。また、線状痕に伴って微小剥離痕は認められなかった。

218は、右側縁稜上において側縁と平行する密度の高い線状痕が認められた(写真9)。線状痕の性状は荒れた底面をもつbタイプで、「正」「負」両方向であった。また、線状痕に伴って微小剥離痕は認められなかった。

220は、右側縁から稜上にかけて側縁と平行する線状痕が認められた。線状痕の性状は荒れた底面をもつbタイプで、「負」の方向であった。また、線状痕に伴って微小剥離痕は認められなかった。

3　使用痕の性状

以上、個々の線状痕の性状について述べた。

このうち、39で中央の二条の稜上において認められたようなタイプの線状痕は、シャフトと細石刃との摩擦によって生じた可能性が強いものと考えられる。一方これに対し片側側縁のみにみられる線状痕(27・41・46・110・113・220など)は、作業対象物との摩擦によって生じたものと考えられる。

つぎに、いずれの線状痕も器体の長軸と平行する方向のものであることから、これらの細石刃は器体の長軸と平行するような方向で対象物に機能したことが考えられる。また、そのように機能するには、シャフトに平行して埋め込まれていたことが当然予測される。一方、線状痕の方向として「正」「負」「正＋負」の場合があった。まず「正」「負」双方があることは、細石刃の装着方向として、頭部が使用方向に向けられる場合と尾部が向けられる場合との双方があったことを示していよう。つまるところその前後の向きの意識はあまりなかったということになるのかもしれない。他方、「正＋負」の場合から前後双方に運動するような使用法も一部でなされたことが予測される。いずれにせよその総体的な使用法は、「カット」と考えられる。

今回前田遺跡において、使用痕が観察された細石刃は黒曜石製の278点のうち9点の細石刃であり、全体のおよそ3％ほどと低調であった。ところで、かつて筆者が行なった神奈川県大和市(相模野台地)の7つの細石刃石器群のおよそ900点の細石刃においても、線状痕はいずれも全体の5％未満にみられたにすぎず、低調な検出率であった(堤1994)。加えて、光沢(Polish)が検出されることはきわめて稀である。

チェルノゼリエⅡ遺跡の植刃器で、両側に細石刃が埋め込まれている。基部には2つの穴があり、短剣タイプの植刃器といわれる。長さ約40cm。(小畑1993より)

第4図　シベリアの細石刃植刃器

このことは、①替刃が容易なゆえの細石刃の使用頻度の低さや、②仮に細石刃が狩猟用刺突具の刃であった場合その移動性の高さから使用されたものがキャンプサイトに残りにくいこと、などに起因するものと想定できようか。そうした意味では今回の線状痕の検出率の低さもうなづけるところがあろう。

4　おわりに

「細石刃はどのようにつかわれたか」という筆者の研究テーマの一環として、群馬県前出遺跡の細石刃の使用痕分析をおこなった。

今回線状痕のあり方からは、細石刃の使用法として「カット」が想定された。およそ細石刃を埋め込んだ植刃器の基本的な機能としては、「狩猟用刺突具」と「加工用切断具」の二者に由来する「カット」が考えられよう。なお、その作業対象物については、細石刃から光沢を検出し難いことから、なかなか同定しにくいという難点が残る。

ところで、細石刃に限らず他の旧石器もシャフトに装着されて出土した例は日本ではない。シベリアでも細石刃の装着された骨製植刃器の出土例は、10例にも満たない数の少なさである。したがって、使用痕のあり方から細石刃の装着状態を復元することもより重要な研究課題といえるだろう。

なお、末筆になったが、今回の分析を快くお許しいただいた宮城村教育委員会細野高伯氏には厚く御礼申し上げる次第である。

※　本研究は、文部省より筆者に交付された平成6年度科学研究費補助金「中部日本における細石刃文化の研究」＝課題番号06904044の研究成果の一部である。

引用参考文献

堤　隆　1994　「細石刃はどのようにつかわれたか？」　『大和市史研究』20

御堂島正　1982　「エッヂダメージの形成に関する実験的研究」　『中部高地の考古学』Ⅰ

宮城村教育委員会　1991　『市之関前田遺跡Ⅰ』

宮平遺跡の中期縄文土器

大井源寿

1　宮平遺跡

宮平遺跡は、御代田町豊昇の湯川左岸の台地上に位置し、湯川との比高50m標高800mを測る。

本遺跡は明治12年の伍賀村誌にも記載がみられるように、古くからその豊富な遺物で注目されていた。昭和5年には軽井沢にいた医師でもありNGマンローもこの遺跡を訪れている。翌昭和6年には八幡一郎氏により考古学的調査が行なわれ、敷石遺構と多数の耳飾りが出土している。

昭和56年には、農道整備に伴った緊急発掘調査が行なわれ、縄文中期後期の竪穴住居20軒・敷石住居7軒・土坑46基・石棺4基が見つかっている（御代田町教育委員会1985）。宮平遺跡の湯川上流には、同じく著名な茂沢南石堂遺跡がある。

2　発見の経過

今回報告する資料が発見されたのは、宮平遺跡でも宮平城の東にあたる字宮平1717番地の畑で、筆者の所有地にあたる。この畑は、かつては桑畑であったが、昭和37年に野菜畑となった。野菜畑となってからは、大型トラクターによる耕作により、土の流出が目立つようになった。またトラクターの刃に敷石らしきものが感じられることもままあった。

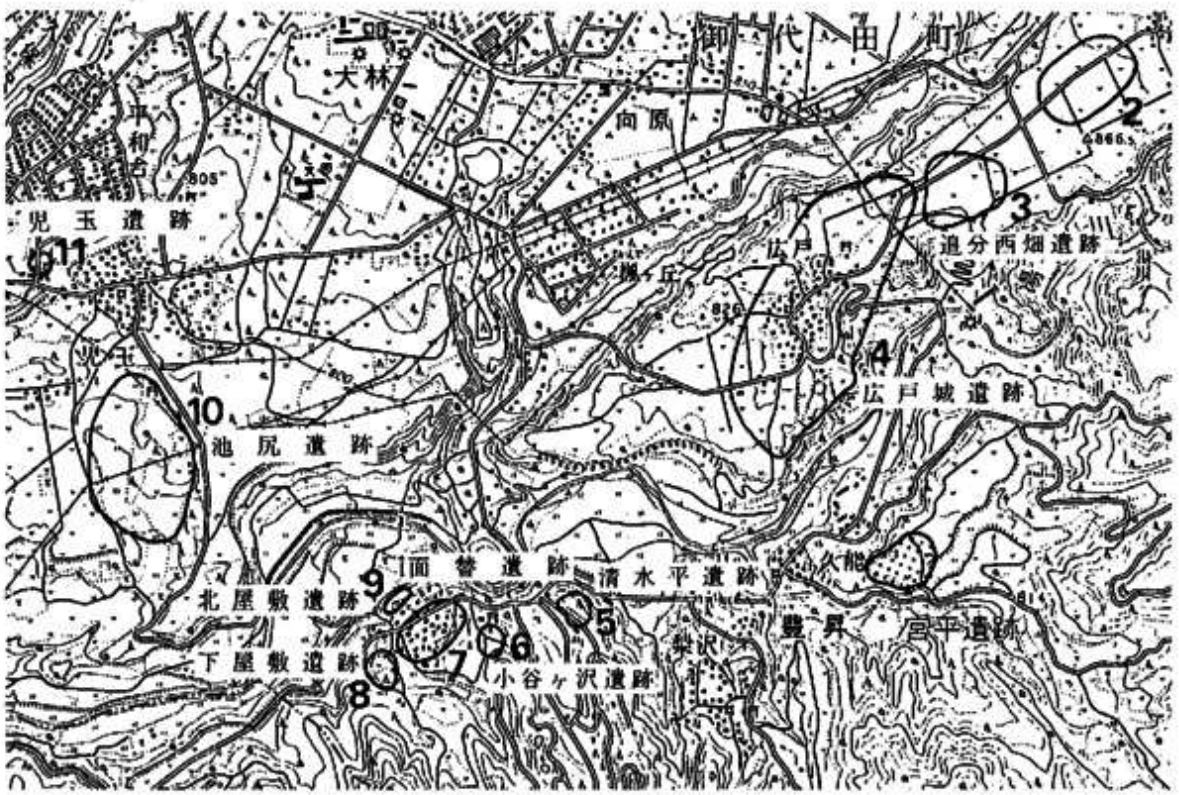
平成5年11月、たまたまこの畑でニンジンやゴボウを掘っていると、石が表土から30cmくらいのところに顔を出しているのに気付いた。さらにその脇には大型の礫らしきものが二つ並んで確認できた。

できればそのまま埋め戻したかったが、大型トラクターによる破壊の可能性が大きいと考えられたので、掘り出し、保管することとした。

以下、御代田町教育委員会小山岳夫氏・長野県埋蔵文化財センター綿田弘美氏のご教示に基づき、発見遺物について説明する。

3　No.1の資料

1は、口径41.9cm、器高64cm、底径14cmの規模を持つ大型の深鉢形土器である。無文帯の頸部から有文の口縁部までは内湾気味にゆるく開き、口唇部内面は唐草文系土器群に特徴的な突出がみられる。胴部は中位



第1図　宮平と周辺の遺跡

上方で軽く張り、平底の底部へと収縮する。

文様は無文の頸部を介して口縁部と胴部にくまなく施される。口縁部は先端が渦巻状になる2本一対の貼り付け隆帯を連弧状に8等分間隔でめぐらし、その上に沈線による楕円文を区画する。楕円文内には密な擬位沈線が充塡されている。

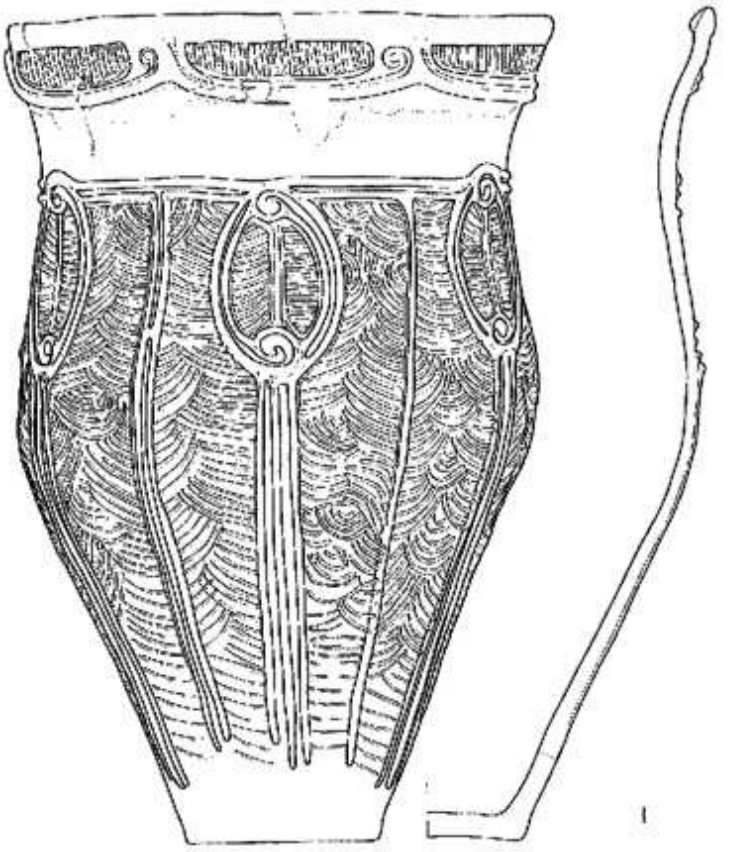
胴部は頸部との境に2本一対の隆線をめぐらし、そこから10等分間隔で擬位の隆帯を底部近くまで垂下させて文様帯を区画している。垂下隆帯は楕円区画を持つ部分と直線的に垂下させる部分を交互に組み合わせている。口縁部の連弧文の中央部には唐草文系的な2本一対の渦巻隆帯を組み合わせて楕円状に仕上げた区画を上位に配し、以下は3本一対の隆帯を直線的に垂下させている。一方、連弧文の両端に配される直線的に垂下する隆帯は2本一対である。

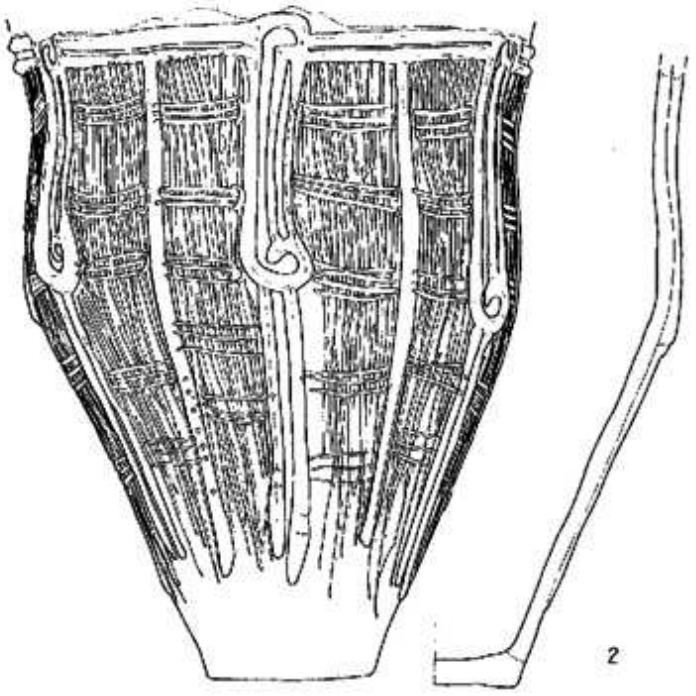
垂下隆帯の区画内には佐久地方の特徴的文様と言われる「うろこ」状の沈線文が充塡され、さらに垂下隆帯の上位は隆帯を浮き立たせるためであろうか、直下を沈線でなぞっている。

土器の器面は褐色（7.5YR4/3）、断面はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土は白色粒子を多く含み角閃石を若干含む。焼成は良好である。

4　No.2の資料

2は頸部以上を欠損するが、1とほぼ同様なプロポーションと文様構成を有すると考えられる。残存高は52cm、胴部最大径38cm、底径12.2cmを測り、1よりも胴部最大径が若干下位にある。頸部との境には太い2本一対の隆帯をめぐらし、そこから10等分間隔で擬位の隆帯を底部近くまで垂下させて文様帯を区画している。垂下隆帯は両端が屈曲する唐草文系土器に特徴的な腕骨状隆帯を持つ部分と直線的に垂下させる部分を交互に組み合わせることを基本とするが、一か所だけ腕骨状隆帯を3本





第2図　宮平遺跡出土土器（1：6）

連ねる部分もある。正面観を意識した箇所なのかも知れない。また、垂下隆帯は腕骨状隆帯を持つ部分は2本、それ以外は1本を基本とする。隆帯の区画内には縦位の沈線を密に充塡し、さらに3本一対の横位沈線を5か所に配し区画している。

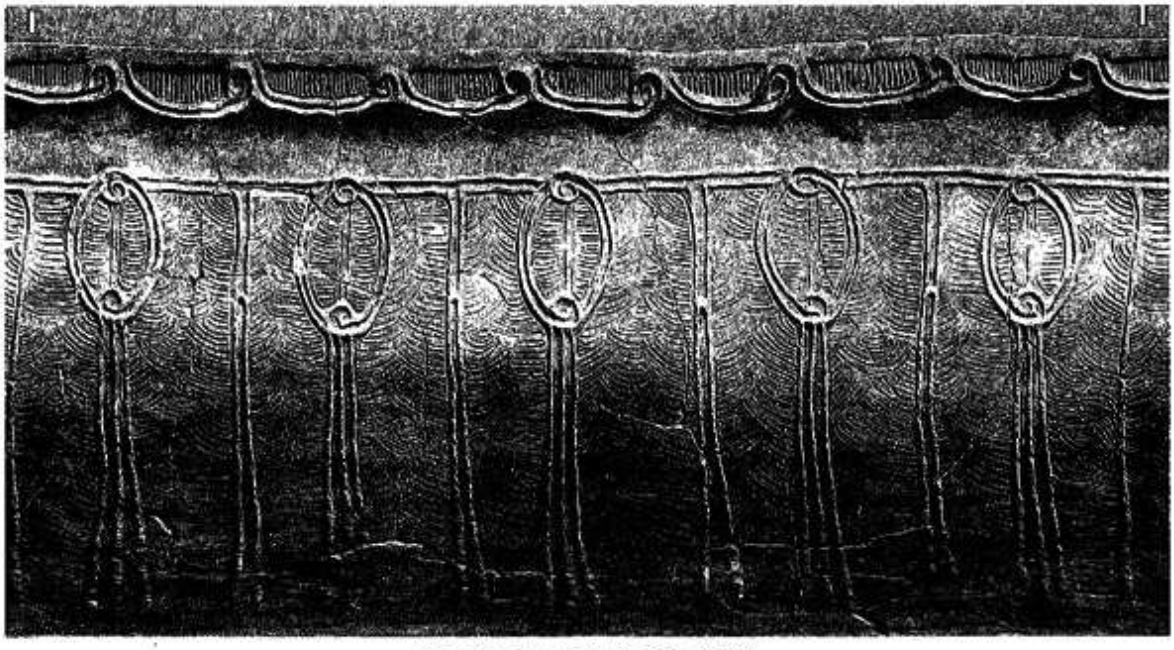
土器の器面は褐色（7.5YR4/3）、断面はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土は白色粒子を多く含み角閃石を若干含む。焼成は良好である。

5　まとめ

以上の観察のように1・2の構成文様は各部に渡り、主として松本・伊那・諏訪地方に分布する縄文時代中期後半の唐草文系土器II段階（三上編年）に類似する要素を多く持つものの、隆帯による直線基本の胴部文様区画は関東に分布の主体を持つ、加曽利E2式的な要素も取り込んでいる。

また、区画内を埋める「うろこ」状の沈線文は、後続する加曽利E3式並行段階の土器群に佐久地方では爆発的に多様されるため、佐久固有の文様と言われ、特に『佐久系土器』と仮称されている（百瀬忠幸1991）。今のところ、佐久地方では資料不足のため、出現段階の『佐久系土器』の実態

第3図　No.1の土器（1/6）



第4図　No.1の土器の展開写真

が把握されていない。したがって、本資料により少なくとも加曽利Ｅ２式並行の段階で、「うろこ」状の沈線文が多用されている事実が確認されたことは重要といえる。

なお、本資料２点は現在筆者宅に保管してある。

謝　辞

本稿をなすにあたって御代田町教育委員会小山岳夫氏・長野県埋蔵文化財センター綿田弘実氏には貴重なご教示をいただいた。本稿掲載の遺物写真および展開写真は写真家小川忠博氏の撮影によるものである。また、鳥居永氏には土器実測の作成をお願いをし、復元には御代田町文化財資料室の高瀬武男・伴野有希子・田村朗子のみなさんのお手を煩わせた。

各位に深甚なる謝意を表する次第である。

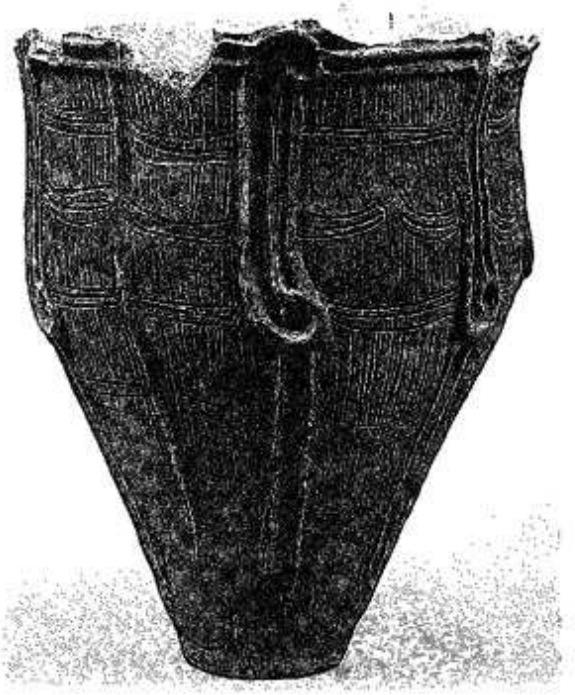
引用参考文献

御代田町教育委員会　1985　『宮平遺跡』

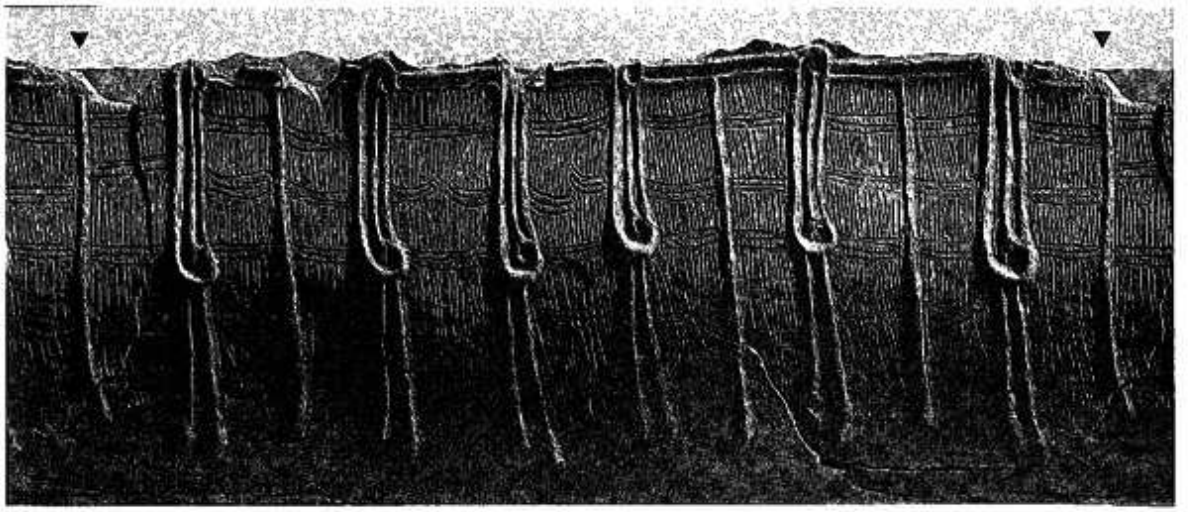
百瀬忠幸　1991　「第２節　吹付遺跡」　『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』２

第５図　発見状況

第６図　復元の様子



第７図　№２の土器（1/6）



第８図　№２の土器の展開写真

浅間山産黒曜石と生産遺跡

土屋長久

1

軽井沢町資料館常設展示室に、大窪沢産のきわめて良質の黒曜石が展示されている。

これは、昭和50年代岩村田営林署で1,300m林道拡張工事に伴い、1,350mの地層から多量の良質黒曜石が出土した折の標本である。

浅間山の黒曜石については、『信濃奇勝録』（明治20年編集、昭和17年復刻。町資料館蔵）に次のように記されている。

「星鏑石（黒曜石）

立科山と八ヶ岳の間に星鏑谷あり、此地残らず星鏑石なり、雑石の中に夾ば出でたるもあり。大なるもの四・五寸。小なるもの多し。又浅間山東、小浅間の麓、草津街道より少し左へ入りて、千ヶ滝という滝あり、此地に星鏑石多し、色は深黒にして欠肌光彩潤沢いふべくもあらず、小なるはなし、総て三・五尺の石なり、又、和田嶺に星鏑の小石多し、中にたまたま算盤の珠の如くにあり、是を星石と云う…」

従って明治初年より、黒曜石は、星鏑石と呼称され、産地のひとつとして周知されてきた。

黒曜石の昌子形態については、江坂輝也氏が、『上野遺跡』に顕微鏡写真で収録し、小田静夫氏が『縄文文化の研究』8で産地として、全国40ヶ所の産地のひとつとし、噴出年代（$\times 10^6$．0．02±0．005）、ウラン濃度1.1と扱っている。

2

前号で、堤隆氏による、1993年静岡県沼津市二ツ洞遺跡報告の紹介に、浅間山大窪沢の黒曜石による、石器3点が扱われている。

これより先の昭和58年5月29日に、群馬県博の外山和夫氏の紹介で、沼津市歴史民俗資料館学芸員、瀬川裕市郎氏、同研究員、高橋豊氏、沼津市教育委員会学芸員、鈴木裕篤氏の3名が、浅間山産の黒曜石、産地（千ヶ滝、大窪沢）の現地調査に来町している。

この調査に同行し、調査にあたった3氏の所見は次のとおりであった。

・大窪沢の黒曜石の岩脈はきわめて規模が大きいものである。露出している部分では、良質のものは、顕著に観察されないが、資料館に展示されている黒曜石のようなものは、地下に埋没していると考えられる。黒曜石は板状に形成されている。

・群馬県の地質関係の文献では、浅間山産として、千ヶ滝があげられており、きわめて良質のものが産出していると記載されている。

・千ヶ滝の西側では、昨夏の台風により、黒曜石の岩脈が大きく露出し、太陽光線を反射し、キラキラ光っているのが観察された。

・黒曜石の昌子形態の分析は、サンプルを群大へ分析を依頼する。

以上が、当時の記録である。同年、県教委の生産関係遺跡分布調査には、浅間山産黒曜石の産地として報告した。

千ヶ滝産は、滝より少しくだった洞穴の中より出土し、質はあまり良くない。大窪沢産は、標高1,350mの地層から良質のものが多量に出土している。

従って、国有林内、大字長倉字長倉山に、産地が2ヶ所見られるのが現状である。

第1図　黒曜石の岩脈

第2図　含まれる黒曜石

3

浅間山の黒曜石が、約1万2千年前相当に扱われるか定かではないが、ひとつは、浅間火山の鎌倉期の2度の噴火(天仁元年、1108年)の火砕流＝追分火砕流＝に被われていないこととなる。

この噴火の火砕流は、浅間山南麓の軽井沢を流下し、軽井沢町の中央を南下する湯川に達し、その西端は、御代田町に達している。その為、文化、遺跡、古代史、東山道等、埋没により、全く空白となり、解明できなくなっている。

昭和55年11月、茂沢南石堂遺跡の調査でも、浅間山産の黒曜石が話題となったが、この地の黒曜石が採集され、加工されたか、全く不詳であった。

今回、浅間山大窪沢産の黒曜石が、静岡県沼津市まで流通している事実から、茂沢南石堂遺跡出土の黒曜石の再調査等が課題となる。

黒曜石産地に近い、大字長倉字小谷ヶ沢から、縄文前期、中期の土器が単独出土し、あるいは、これに関連するのであろうというのが当時の見解であった。

黒曜石採掘場跡も、当然あるであろうし、今後、沼津市教育委員会から詳細の資料の提供を受け、黒曜石の流通範囲を把握する必要が生ずる。

ここに、浅間山産黒曜石の調査状況を述べた。今後共、御教示いただければ、幸甚である。

参考文献

町田洋・新井房夫　『火山灰アトラス』東京大学出版会、1992。

新井房夫編　『火山灰考古学』古今書院、1993。

高橋豊他　『尾上イラウネ遺跡発掘調査報告書』その2　1992

高橋豊　『沼津市二ツ洞遺跡出土黒曜石石器の原産地の推定』『二ツ洞遺跡(b・c区)発掘調査報告書』1993、沼津市文化財調査報告書 第54集

佐原先生、熱っぽくご講演

去る10月19日佐久市勤労者福祉センターにおいて、佐久地区の労働組合主催の「いのちとくらしを守る学習会」がひらかれ、国立歴史民俗博物館副館長佐原眞先生の講演会「大昔と現代」が開催された。

自ら「背広を着た縄文人」と称される先生は、大昔の暮しを現代の暮しと比較されながらご講演された。日頃からやさしい考古学を掲げられる先生の話はわかりやすくておもしろく、百名をこす聴衆は熱心に「佐原節」に耳をかたむけた。

眉が太くゴツ顔の縄文人、タマゴ形でキツネ顔の弥生人、先生は自分の顔が縄文人の典型だというが、あなたの顔はどちら似だろうか。

一方、考古学的にみると人類が戦争というものを始めたのは、農耕をおこない余剰がでてからだという。それまでの狩猟採集の時代はきわめて平和な時代だった。「人類は未来を見据え戦争はやめよう」というのが先生がいちばんいいたかったことのようだ。

八ヶ岳西南麓の縄文遺跡を未来に！

11月19・20日諏訪市文化センターにおいて、長野県考古学会秋季大会「八ヶ岳西南麓の縄文時代」がひらかれた。大規模な圃場整備事業により破壊が懸念される八ヶ岳西南麓の縄文遺跡について、理解を深め、その保存の可能性を探ろうとする目的から、一般にも公開された大会となった。

大会では、勅使河原彰＝「八ヶ岳西南麓の縄文時代のムラと集団」・長野県教育委員会文化課＝「駒形遺跡試掘調査報告」・鷹山遺跡群調査団＝「黒曜石の採掘－鷹山遺跡群の縄文鉱山」・堤隆＝「縄文時代の黒曜石利用を考える」・小平恭＝「尖石遺跡の発見と学史的な調査」・宮坂光昭＝「縄文遺跡を未来に！」と題する発表がなされ、明治大学戸沢充則教授によって「縄文王国の崩壊」と題する講演がおこなわれた。

参加者は百名を超え、ひとりひとりが八ヶ岳西南麓の縄文遺跡の重要性と保護について認識を新たにした。大会の最後には「八ヶ岳西南麓縄文時代遺跡群の保護と活用に向けて」という大会宣言がなされた。よりよいかたちでの保存にむけて、われわれ佐久考古学会も積極的に保存運動にかかわる時がきた。

御代田町戻場遺跡の「氷式土器」について

中沢道彦

1

本稿で紹介する資料は北佐久郡御代田町戻場遺跡柳沢嘉兼氏所有の畑地において、長芋の耕作中に発見された資料の一部である。発見された資料は他に縄文時代早期細久保式、田戸下層式、田戸上層式、早期末の絡条体圧痕文土器などがあり総数80点以上を数える。

特に早期末の資料については、縄文地文に絡条体が押圧された完形となる資料も含み、今後の該期の土器編年研究の基準となり得るものである。それらの報告については後日、長野県埋蔵文化財センター調査研究員の鵜田明氏らが行うものとし、今回はその資料中で1点ながらも確認しえた「氷式土器」の紹介を行う。

2

第1図1は細密条痕が施された土器である。原体はササラ状工具か木口。おそらく木口の可能性が高い。施文方向は縦方向で、一部上から下への方向性が確認されるが、全体の方向性は判然としない。内面は横方向にナデ調整が確認される。断面器厚は7㎜前後、色調はにぶい褐色を呈し、胎土には白色鉱物、雲母、砂粒、赤色粒子などを含む。土器片の重量は16gである。断面の上下割れ口は粘土紐の接合痕となる。上下幅が2.8cmで、これが土器製作時における粘土紐の単位であったのであろうか。焼成は良好である。器種は甕、おそらく胴部破片となろう。

本資料は細密条痕などの特徴から縄文時代晩期末の氷式土器に比定される。氷式土器は小諸市氷遺跡出土資料を標式とし、永峯光一氏により「氷Ⅰ式」「氷Ⅱ式」に細分され設定された土器型式である。小諸市に接する御代田町では、これまで報告を見るかぎり「氷式土器」は確認されておらず今回のものが初となる。

3

氷式土器とその前後型式による中部高地の縄文時代晩期後半から弥生時代前期にかけての土器編年研究は、1980年代以降、石川日出志・設楽博己・百瀬長秀氏らを中心にその再編成が進められてきた。報告者も氏らの業績を基礎として、報告書・シンポジウム要旨等の形でその変遷の見通しについて述べたことがある。中部高地の該期土器群については「女鳥羽川式」「離山段階」「氷Ⅰ式」「氷Ⅱ式／刈谷原段階」とする変遷過程において、「佐野Ⅱ式」の伝統をベースに「大洞A式」「烏屋1式」「五貫森式」などからの影響で「女鳥羽川式」が成立、それ以降東北・北越・東海からの刺激を受け、かつ器種間交渉等内在的な要因でも型式変遷することを簡単に触れた。

第1図　戻場遺跡の土器(1：2)

また「氷Ⅱ式」の存否については、数年前に報告者が氷遺跡出土資料を実見した結果、百瀬長秀・鈴木正博氏らの論稿の妥当性を確認し、「氷Ⅰ式」に伴う「氷Ⅱ式」に分類された資料にしかるべき概念を与えた後ならば、「氷Ⅱ式」とする型式も実存しうるとする考えに至った。

さて、これらの型式群の変遷のなかで、甕の胴部の細密条痕については「女鳥羽川式」では確認されない。「離山段階」において細密条痕は戸倉町円光房遺跡(12号配石)などで確認されるが、ナデ・ミガキ調整の方が卓越している。中部高地において細密条痕が卓越するのは「氷Ⅰ式」以降である。「氷Ⅰ式」の細密条痕は木口による条の整ったものが主であるが、「氷Ⅱ式／刈谷原段階」ではササラ状工具や植物束・竹管を束ねたものなどによりあまり整ったとはいえない条痕が卓越している。ただし「氷Ⅰ式末」もしくは「氷Ⅱ式」に比定される篠ノ井遺跡群塩崎体育館地点出土資料では、条痕の整ったものが主であり、「氷Ⅰ式」以降も条の整った細密条痕がある程度残存する点は想定されよう。このように細密条痕の位置付けに問題を残すものの、いずれにしても本資料は「氷Ⅰ式」となる可能性が高い。

なお、中南信地方に比べると当地方の該期資料は少なく今後の資料増加がまたれる。

1点の本資料から思いつくままに述べてきた。本資料の紹介にあたっては、その資料を所有された嘉兼氏ご子息の柳沢賢次氏、資料の存在を報告者にご教示くださった大塚達朗氏、毒島正明氏にお礼申し上げたい。

註

1）ただし「氷Ⅰ式」でもいわゆる浮線文浅鉢で頸部無文帯が未発達のものについては、「離山段階」と近似した時間のものであり、扱いが微妙である。

INFORMATION インフォメーション

矢出川遺跡の史跡指定答申なる！

11月18日、国の文化財保護審議会が開かれ南牧村矢出川遺跡の国史跡指定が答申されました。手続き的には文部大臣が指定し、追って官報告示されることになります。史跡指定が確実となり、今年度事業として計画されている指定行事もその内容について具体的に検討する段階となりました。長年にわたり県考古学会とともに保存運動を推進してきた佐久考古学会としてもこれまでの運動を総括し、今後を展望して新たな活動をどう生み出すかが求められることになります。

森嶋会員、長野県教育功労者表彰受賞！

本学会会員で、長野県考古学会会長でもある森嶋稔さんが、去る11月16日長野県教育功労者表彰を受賞されました。

会員一同、心よりお喜び申し上げますとともに、今後ますますのご活躍をご期待申し上げます。

中部横断自動車道の分布調査始まる

すでに基本計画路線として決定している佐久・八千穂間の遺跡詳細分布調査が県教育委員会文化課によって12月に実施されます。調査区域は佐久市・臼田町・佐久町・八千穂町の4市町村ですが、ルートが未発表のため広範囲にわたる調査となり、当該区域の遺跡に詳しい地元佐久考古学会員にも調査協力が要請されることと思われます。今回の分布調査では、特に山林部分において新発見遺跡候補地の数多い選定を期待したいところです。南佐久においても近い将来、高速道がらみで遺跡の保護が論議される日が来ることでしょう。

おめでとう！ ウェディングベル

11月26日、祝福の拍手に包まれて、小山岳夫会員が甘利さやか嬢とご結婚されました。

聞くところによると、さやか嬢は小山さんとひとまわりも違うとか…(にくいねー)。また、さやか嬢は書道九段の才女。今は二人三脚で書道に励んでいるそうです。

小山さん、どうぞ筆の使いすぎにご注意を！

✹新入会員紹介✹

柳沢さんが新入会員として私たちの仲間になりました。どうぞよろしく。

柳沢宏幸　〒384　小諸市大字滋野甲3710　TEL (0267) 22−8107

♪ 編集後記 ♪

この冬、佐久市平尾山にスキー場「パラダ」がオープンする。なんでもパラダイス（楽園）という意味をもたせたネーミングだそうだ。

一方、この頃、動物たちの交通事故が佐久平北部で多発している。開発で山を追われたニホンジカやタヌキなどが道路ではねられるケースである。従来浅間山にはいなかったニホンジカが、最近確認され始めた。道路を渡り、浅間まで逃げ込んできているらしい。生態系の破壊について十分な開発アセスはなされたのか。

ヒトにとってのパラダイスも、どうやら動物たちにとっては楽園とはいかないようだ。　（つつみ）

佐久考古通信　No.63

発行所　佐久考古学会
〒384-01　長野県佐久市桜井879
臼田武正方
郵便振替　(旧)長野 7-2842
(新)00570-9-2842
☎0267 (62) 8133

発行者　由井茂也
編集者　堤　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL
1995. 4. 1. No 64
JOURNAL

★ 目 次 ★

■ 佐久平における古墳時代後期の土器編年試案 …… 冨沢一明……1
■ 矢出川遺跡、国指定史跡に！ ……4
■ 浅間山産黒曜石と生産遺跡II …… 土屋長久・原田政信……5
■ 東荒神遺跡の縄文草創期土器について …… 中沢道彦……7
■ 麦草峠(1) —麦草を調べる— …… 臼田 明……9
■ インフォメーション ……12

佐久平における古墳時代後期の土器編年試案

冨沢一明

1 はじめに

今回発表する編年試案は、昨年7月と11月に行われた東国土器研究会に参加したおり、堤 隆氏と伴に、発表資料「佐久平における古墳時代中・後期の土器様相」としてまとめたものを、後期の部分のみ筆者なりに再考したものである。

現在迄に、佐久平の該期の土器研究としては、笹沢浩氏・花岡 弘氏の業績が大きい。しかし、近年の高速道開発等によって年々資料の蓄積もされてきている。そこで、現段階での成果として陶邑の須恵器編年をもとに在地土器様相の変化を追いながら、佐久平の古墳時代後期の編年試案を示してみたい。

以下、各期ごとに器種ごとの型式変化の概略を述べる。

第Ⅰ期（5世紀末～6世紀前葉）

・須恵器TK47段階の時期にあたる。

・土師器坏は、須恵器坏蓋模倣坏である坏Aタイプが出現する。出現段階の坏Aは口縁部は直立気味に立ち上がり、底部は丸底を呈する。調整は丁寧なヘラミガキを行う。次に須恵器坏身模倣坏の坏Bタイプは良好な資料に恵まれないが、受部が明瞭に模倣され立ち上がり部が長く立ち上がる。和泉期より系譜を引く坏Kタイプは、この段階まで引き継がれる。口縁部が外斜するタイプと、そのまま立ち上がるタイプとがあるが、和泉期に見られた内湾するタイプは見られなくなる。坏Kは前段階よりも器厚があり、器面のミガキも荒く、口縁部の外斜もシャープさが失われる。

・高坏は、和泉期から系譜を引く坏部に稜を明瞭に有するタイプと、坏Aを坏部とし脚部が短いタイプとがある。

・壺は球形胴のタイプで最大径が胴部中央にあり、ハケとミガキがやや荒く残る。

・甕は下膨れ形のタイプで、内外面へラケズリを施している。

Ⅰ期は和泉期より系譜を引く器種と、須恵期模倣坏をはじめとする、いわゆる鬼高期の土器とが混在する期であるが、土器様相からすると今後の整理研究によっては細分の可能性がある。

第Ⅱ期（6世紀中葉）

・須恵器のMT15からTK10（MT85）の時期にあたる。

・坏Aは坏類の中で主体を占めるようになり、須恵器坏の大型化に伴いⅠ期に比べやや大型化する。口縁部がやや外反し、底部の丸味が減少する。また体部の稜もやや底部よりになる。坏Bもやや大型化するが立ち上がり部は、やや短小化する。坏C・D・Eタイプが、この頃より出現してくる。坏Cの形態は、坏Aを大型化し口縁部のみを大きく外反させた様な形で、体部から底部にかけては稜を有する。また、内面黒色処理されたものが目立つ。坏Dは和泉期よりの器種系譜を引くようにも考えられるが今のところ不明である。坏E

は平底で、体部に稜をもたず、内面黒色処理を施したものが多い。坏Kは数がごく少量となる。また、関東に分布域をもつ有段口縁部坏と呼ばれる坏も客体的ではあるが存在する。

・高坏はⅠ期と同じく和泉期からの系譜を残すが、脚端部の開きが少なくなる。

・壺は球形胴の径が小さくなり、最大径が胴部下半にうつる。

・甕は胴部下半から中位にかけて最大径を持ち、頸部の立ち上がりが緩やかになる。

当期は良好な須恵器資料が少ない。

第Ⅲ期（6世紀後葉）

・須恵期TK43からTK209の時期にあたる。

・坏Aは、径が小型化し、調整も底部ヘラケズリで口縁部ヨコナデの多用が目立ち始める。坏Bは立ち上がり部が短くなり、受部が明瞭でなくなる。坏Aよりもミガキをするものが残っている。坏Cは、Ⅱ期よりも小型化し、底部の丸味もなくなり平底化する傾向になる。また体部の稜も不明瞭となる。坏DとEは器高が低くなり、平底化してくる。この坏C・D・EはⅡ期・Ⅲ期の間、坏類の中では主体性を占めⅢ期に関していえば坏Aよりも出土例は多いように感じられるが、Ⅲ期をピークに、次のⅣ期にはほとんどみられなくなる。前段階のⅡ期で和泉型の坏Kが消滅し、Ⅴ期になると坏F・Gといった椀タイプの坏が出現してくる。その間をうめる器種として、使用時期の短さやその自出や使用方法について今後の整理研究が望まれる坏である。

・高坏は良好な資料が見あたらない。

・甕は長胴化が始まり、内外面ヘラケズリで全体に寸胴型のものが目立つ。Ⅱ期に比べ底部が厚く、口縁部はやや大きく外反し始める。

第Ⅳ期（7世紀前葉）

・須恵器TK217（古）段階、飛鳥Ⅰ期の時期にあたる。

・坏AはⅢ期と同じく小型で、体部の稜が不明瞭となる。坏Bは立ち上がり部の短小化と伴にヘラケズリの多用が目立つ。また、他の期に比べ有段口縁部坏がやや多くなる傾向にある。

・高坏は坏部の稜をやや残すが、口縁部の外反が大きくなり、脚部は長脚化の傾向を示す。また、脚端部はヨコナデを施し、「八」の字状に広がるようになる。

・甕は大型と小型の2種類があり、大型の甕は胴部上半に最大型をもつようになり、ヘラケズリも縦方向に施されるようになる。小型のものは口縁部の外反が小さく、底部がボタン状に突出するものが目立つ。

第Ⅴ期（7世紀中葉）

・須恵器TK217（新）・TK46段階、飛鳥Ⅱ・Ⅲ期段階の時期にあたる。須恵器坏では、かえりと宝珠つまみの附いた蓋が出現する。また、石附窯跡において須恵器生産が行われる。

・坏Aは体部の稜がほとんど消失し、前段階に比べ器厚が厚くなり、調整も粗雑化する。坏Bは良好な資料が見あたらず、この時期で消滅か？。坏F・Gがこの期より出現し、坏Fは口縁端部を内椀させたもので、底は球形を呈する。坏Gは半球形状の底を呈し、底部から胴部をヘラケズリ口縁端部ヨコナデを施す。内面黒色処理をされたものが多い。また大・中・小の3つの法量がある。

・高坏は坏部がほぼ稜がなくなり、直線状に外反する。脚は低くなり、脚内部も前段階に比して、粘土の詰まった柱状となる。

・甕は器厚が厚いものと、薄いものがある。厚い甕はケズリが縦方向に大きく施されるのに対し、薄い甕は頸部から口縁部が大きく外反し、ケズリの方向も斜め方向を指向するようになる。

第Ⅵ期（7世紀後葉～8世紀初頭）

・須恵器TK48、MT21段階、飛鳥Ⅲ・Ⅳ期段階の時期にあたる。石附窯跡において引き続き須恵器生産が行われる。

・坏A・Bはごく少量となる。坏Fは口縁部がやや内椀するものと、そのまま立ち上がる2種類がある。内面黒色処理されたものは見あたらず、坏Gとの位置づけの違いを感じさせる。坏Gは数が増し、坏類の主体を占める。前段階に比べつくりの荒いものがあり、口縁部のヨコナデの幅も若干狭くなる。

・高坏は形態的にⅤ期に似るが、器厚が低く小形化を示す。

・甕は、器厚が薄く、斜め方向のケズリを多用する。「武蔵甕」的な甕が現れ始める。

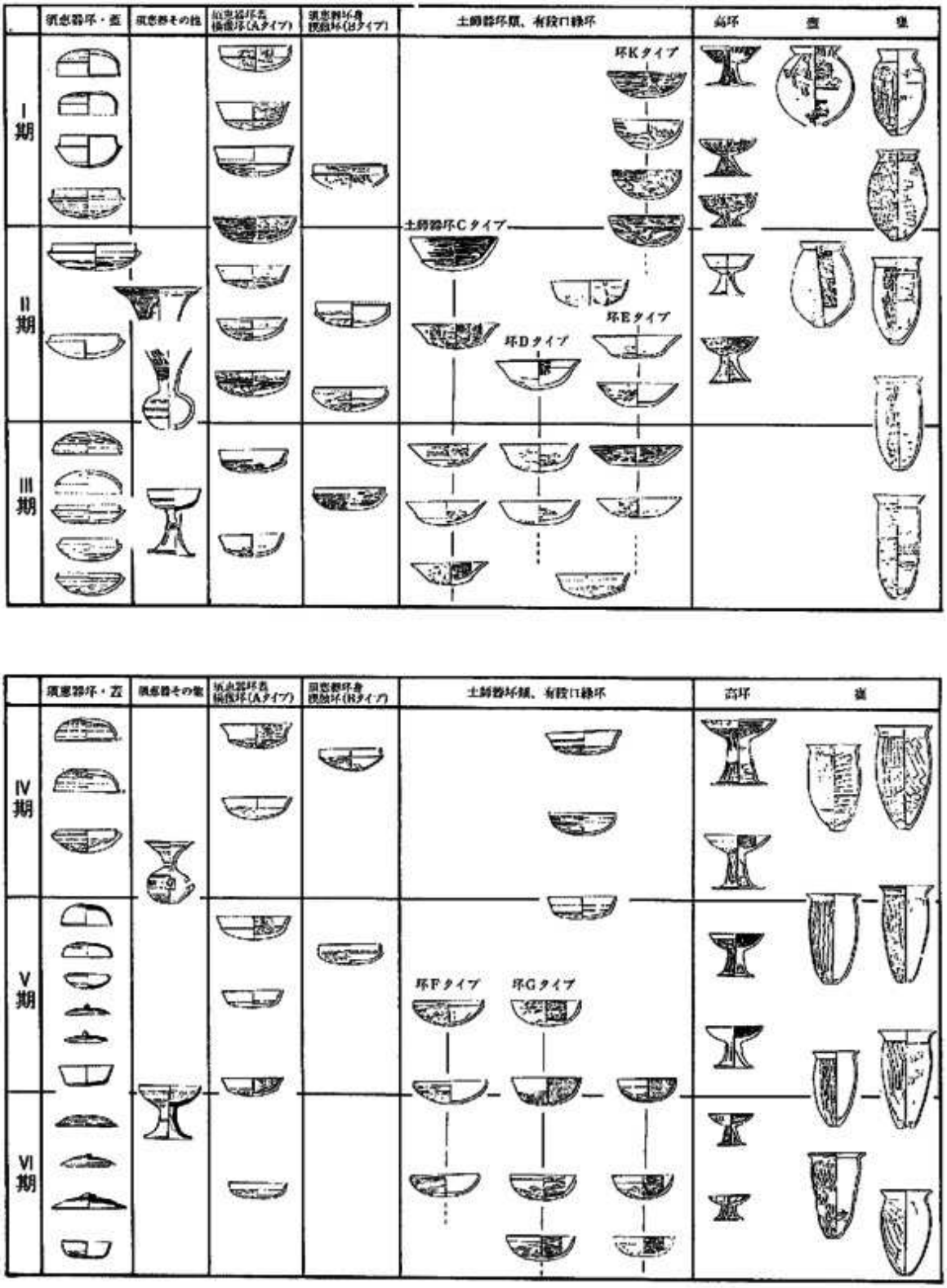
このⅥ期とⅤ期は様相的にはよく似ており、また他地域からの搬入品と考えられる土器が、時間幅をもって混在するなど不透明な感じがある。今後の細分の可能性を感じる。

次の8世紀段階に入ると坏類のほとんどが、須恵器となり、坏Gなども急激に姿を消すようになる。

2　まとめ

以上、おおまかに、佐久平の古墳時代後期（6世紀～7世紀）迄の集落出土の土器型式及び様相の変化を概観した。ここでは、今回の編年試案を組むにあたり気づいた事を記し、まとめと今後の課題としたい。

まず1点目として、須恵器編年でいうMT15、TK10



第1図　佐久平における古墳時代後期の土器編年試案

段階の出土資料の少なさである。遠隔の消費地ということもあろうが、5世紀段階のいわゆる初期須恵器と呼ばれる、TK216・208・23といった出土資料の充実度から考えるとそればかりとは考えにくく、II期において生産地との結びつきの変化なども、考えに入れなければならないような気がする。

次に、他地域から搬入されたと考えられる土器の位置づけである。今回の資料収集にあたり、在地の主体的な土器に混じって、客体的ではあるが関東に分布する有段口縁坏、駿東型と呼ばれる東海系の刷毛目球胴甕などの存在が確認できた。これら資料とのクロスチェックが、今後の在地編年の確立にあたって重要と考えられる。

そして、3点目として佐久平において千曲川の右岸と左岸地域の古墳時代後期の土器様相が異なるのではないかと言うことである。今回編年使用の資料は、主に千曲川右岸の浅間山火山泥流に覆われた台地上の遺跡出土のものが多い。しかし資料作成中、千曲川の沖積地、特に野沢付近の遺跡出土の土器が坏Aなどを中心に若干様相の違いが感じられた。いずれこの点に関しても紙面を改めて論究したいと考えるが、予測としてここに記しておく。

今後の課題としては、今回器種として鉢・甑・小型甕などの変遷までは触れることができなかった。また、中期（5世紀代）との接点、奈良時代（8世紀代）との接点において、期の設定に不明瞭さが残ってしまったように考える。期の細分や統合も含め、再考の必要性を感じた。先に述べた気づいた点も含め今後の課題とした。

筆者の浅学ゆえ、誤解や曲解も数多くあり、先学諸氏のご指導を頂ければ幸いである。今回の試みが今後の研究の一里塚となれば幸いである。

最後になりましたが、今回の試案を発表するにあたり勉強会の折りの、服部敬史氏、福田健司氏、田中広明氏をはじめ、多くのご教示を頂いた花岡　弘氏、西山克己氏、竹原　学氏、堤　隆氏、柳沢宏幸氏、林　幸彦氏、羽毛田卓也氏に深く感謝致します。

編年参考遺跡

I期

大井城H2・H9、市道H4、竹花H14・H77、清水田H2、下聖端H22（参考）

II期

大井城H5・H11、市道H7、下芝宮H5・H6、中原H3・H4、上聖端H11、下聖端H32、原H2、跡部町田H1

III期

和田原H2、上聖端H2・H7・H9・H16・H31、下聖端H36・H37、竹花H80・H81、前田H104

IV期

前田H7・H31・H33・H90・H108・H112、栗毛坂H7

V期

関口H17・H21・H27・H30・H34、栗毛坂H112・H117、前田H103、若宮H9、石附窯跡

VI期

前田H58・H103・H118・H119、竹花H38・H43、関口H43、若宮H12、石附窯跡

参考文献

笹沢　浩　1988年「4古代の土器(2)古墳時代の土器」長野県史考古資料編

1991年「須恵器の編年　6中部高地」古墳時代の研究6　土師器と須恵器　雄山閣

花岡　弘　1991年「土師器の編年　6中部高地」古墳時代の研究6　土師器と須恵器　雄山閣

西山克己　1994年　信州・善光寺平の6・7世紀の土器様相　東国土器研究会発表資料

田辺昭三　1981年　須恵器大成　角川書店

1992年　古代の土器1　都城の土器集成　古代の土器研究会編

1992年　古代仏教東へ―寺と窯―2窯編　東海埋蔵文化財研究会

1994年「東三河の横穴式石室資料編」三河考古　6号　三河考古談話会

なお、各遺跡報告書は紙面の関係上省略させていただいた。お許し願いたい。

矢出川遺跡、国指定史跡に！

2月13日付官報の文部省告示により、矢出川遺跡が国指定史跡になりました。

矢出川の史跡指定・保存運動が発足してから13年、ようやくひとつの結論が得られたことになり、喜ばしい限りです。

とはいえ、まだ村有地以外の史跡指定問題・周囲の自然環境保護の問題・他の遺跡の保護問題など解決しなければならない問題は山積しています。

さらなる第一歩を踏み出すよう、考古学会員一同今後の取組を強化しましょう。

浅間山産黒曜石と生産遺跡

II

土屋長久・原田政信

第1図　昭和58年5月、大窪沢の調査

（静岡県沼津市教委学芸員）

1

この件について、前号で軽井沢の調査状況を述べた。

沼津市歴史民俗資料館学芸員、瀬川裕市郎氏からの浅間山産黒曜石の分析結果は、次のとおりである。（第1図）

「1992年に報告された『尾上イラウネ遺跡報告書』の一部に、清水柳北遺跡の黒曜石分析結果が報告されており、清水柳北遺跡の石器の一部に、浅間山産黒曜石の石材が使われているとの結果が報告されました。その分析者の高橋　豊先生に「浅間山の黒曜石に間違いありませんか」とお尋ねしたところ、先生から「実は、あまり自信がない」という返事で、その後、先生のところには、別の分析者から、「浅間は間違いではないか」との意見も出されたようです。

今春、再び浅間山大窪沢を訪れ、浅間山の黒曜石を採取し、望月先生（国立沼津工業高等専門学校）の所で、蛍光X線分析を試みました。

いまのところ、浅間山産黒曜石、とりわけ旧石器には、使用された形跡は確認できません。もっとも信頼度が高いとされる、原子力による方法と、望月先生の方法とでは結果がまったく一致しました。このことは、原子炉という複雑なシステムでも、蛍光X線分析というどちらかといえば、安易にできる方法とで、差がないということを意味しています。

浅間山産黒曜石、少しづつ分析を進め、当地に黒曜石が流入されたメカニズムを早く解明したい。」との結果、報告である。はたして旧石器時代に使用されたかどうかである。

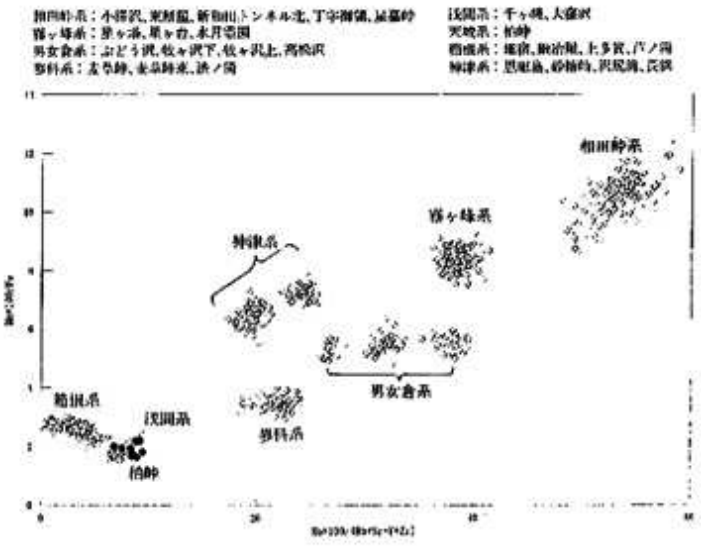
参考のため、望月先生自身のコメントを紹介したい。貴重なデータであるので全文をそのままのせたい。

2

蛍光X線分析という方法で分析しています。この方法は試料を非破壊のまま測定可能です。

試料に1次X線を照射しますと試料中に含まれる元素ごとに異った波長のX線が2次X線として放射されます。ですからどんな波長の2次X線があるか検出すると、その波長から含まれている元素にどんなものが

第2図　浅間山大窪沢の黒曜石



第3図

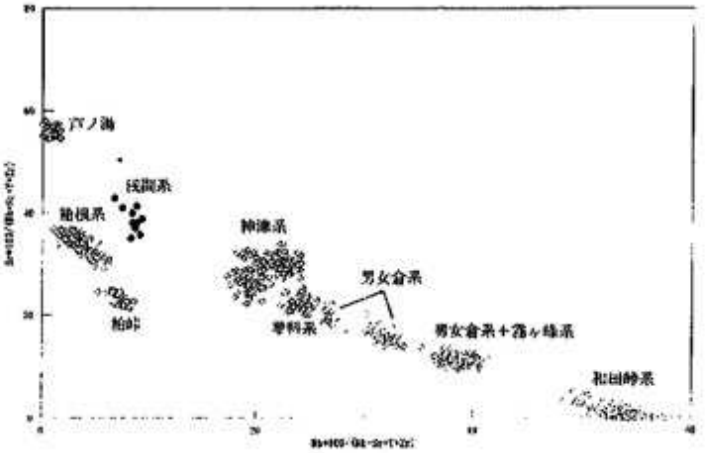
あるかわかります。又そのX線の強度から各元素の含まれている量がわかります。図を作るには2次X線の強度データをもとにしてあります。(Fe；鉄、Mn：マンガン、K；カリウム、Sr；ストロンチウム、Rb；ルビジウム、Y；イットリウム、Zr；ジンコニウム)

$$Rb\times100/(Rb+Sr+Y+Zr=\frac{Rbの強度\times100}{Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度}$$

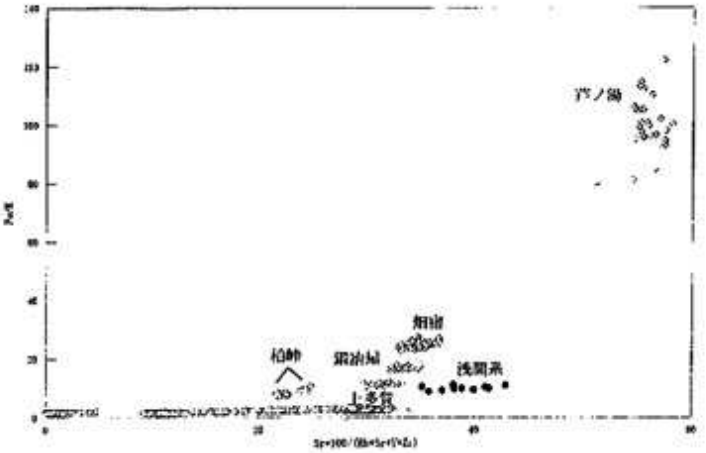
のように元素記号はすべてその元素のX線強度で示してあります。

第3図からほとんどの系の判別がつきます。浅間系と天城系（柏峠）が重なってしまいますが、第4図からこれらの区別が可能です。又、第5図は、第3、第4図では判別できない箱根系の細かい区別ができます。

高橋先生の方法では、主成分である、アルミニウム、ケイ素、カリウム、カルシウム、チタン、鉄しか分析していません。この範囲ですと浅間系は柏峠と似通って区別しにくいと思います。私見ですが、高橋先生が浅間山系とされているものは、柏峠のものであろうと思っています。(同じ試料を分析していませんのであくまでも私見です。)



第4図



第5図

この方法での結果（沼津市土手上遺跡の黒曜石の産地推定）に用いた試料をそのまま、立教の方に放射化分析（現在一番信頼度が高い方法とされている。）で分析していただいて、この方法と全く同じ推定結果を得ています。

追伸：我々が採集(高橋先生とは別に)した試料は黒曜石としては非常に質が悪く、石器としては、不適当のものです。浅間には石器として使用可能な黒曜石はあるものでしょうか？(沼津高専物質工学科、望月)

3

これ等のデータから、前号で扱った、旧石器時代に、浅間山大窪沢の黒曜石が、静岡県沼津市まで、流通していると述べたが、現在のところでは、使用された形跡は確認できないので訂正しておきたい。

浅間山の黒曜石産地の大窪沢と千ケ滝には、岩村田営林署軽井沢担当区のお話では、かなり、大学及び大学生の入山者があるという。黒曜石採取かは定かではないが、大学のリストを作成し、照会してみたい。

旧石器時代はさておき、縄文時代の一番近い、茂沢南石堂遺跡で、浅間山産の黒曜石が使用されたか、出土、黒曜石を再調査し、計画を立てたい。

沼津高専の望月先生のコメントでは、疑問とされているが、大窪沢の1,350mの地層からは、きわめて、良質の黒曜石が出土している。(第2図)

今後、浅間山産黒曜石研究会として、広く研究調査を進め、情報交換にあたりたい。

末文となりましたが、沼津市歴史民俗資料館学芸員瀬川裕市郎氏等、資料の提供をいただき、厚く御礼申し上げます。

参考文献

堤　隆「浅間の黒曜石」『佐久考古通信』No.62.1994。
土屋長久「浅間山産黒曜石と生産遺跡」『佐久考古通信』No.63.1994。
大沢眞澄『黒曜石の化学組成－遺跡出土黒曜石器の原産地推定の基礎として－』1992。

東荒神遺跡の縄文草創期土器について

中沢道彦

1

本稿で紹介する資料は北佐久郡御代田町東荒神遺跡の調査において、平安時代のH－1号住居址覆土中から出土した縄文時代草創期の微隆起線文土器である。御代田町内では縄文時代草創期の資料は根岸遺跡表採の爪形文土器があるが、微隆起線文土器は初の出土となる。佐久地方では南佐久郡川上村立石B遺跡の微隆起線文土器などがあるが、その資料不足の観は否めないでいた。

近年、縄文時代草創期の研究が極めて活況を呈している。その中で佐久市下茂内遺跡では浅間板鼻黄色軽石層（AS－YP）、浅間・大窪沢第2層（AS－OP2）の下部から土器らしき遺物も検出され、「最古級の土器」と注目を集めているが、下茂内遺跡出土の資料はまず土器と認識すべきか、否かという根本的問題も解決していない。まずは佐久地方、そして中部高地における草創期における土器編年研究を進展させ、その土器様相を明確にする作業が第一であろう。その意味では平安時代の住居での混在、かつ2点のみの資料であるが、貴重な資料蓄積となろう。その点を鑑み、本稿ではその資料報告を行う。

2

第1図1、2が本遺跡出土の草創期の土器。口縁部破片である。1は口端部に1条の波状の微細な隆線が貼付され、口端部直下には1条の波状の微細な隆線、その下部には平行する微細な隆線が数条めぐる。隆線は器面上の剥落が著しく、条数は3条まで数えられるが、3条目以下不明。2も口端部直下には1条の波状の微細な隆線、その下部には7条の平行する微細な隆線がめぐる。口端部にもおそらく波状の隆線が貼付されるのだろう。1、2とも隆線は断面三角、先が尖る。微細な粘土紐を貼付した後に篦状工具で調整されたものであろう。隆線の太さは一定しない。隆線と隆線の間隔も一定しないが、平均すれば5㎜前後となろう。隆線と隆線の間にも篦状工具による調整の痕が観察されるが、砂粒の動きから左から右へと逆時計回りの調整方向が確認される。胎土には雲母を多く、また石英をも含み、色調は褐灰色を呈する。断面形では1はやや外反気味、2はやや直口気味だが、隆線の形状、作出手法、その文様構成、胎土、色調などから、1、2はおそらく同一個体となろう。

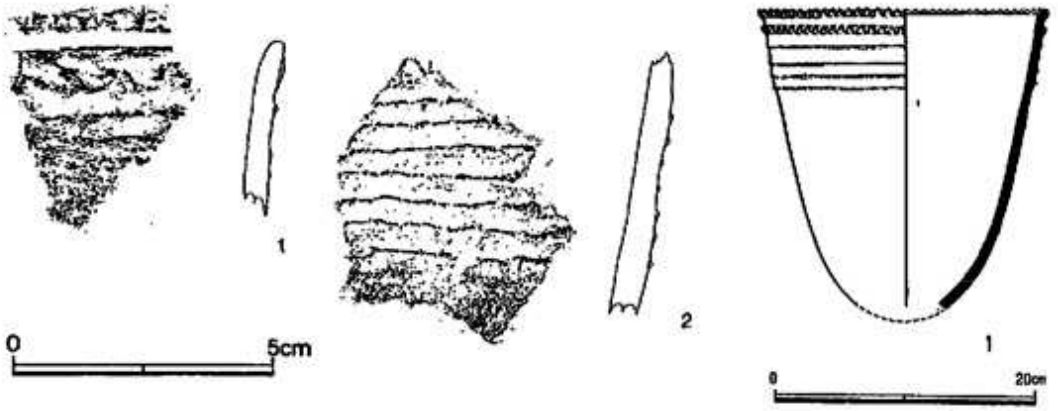
3

所謂隆起線文土器型式群の細別については、学史的に長崎県福井洞穴第2層～3層の調査成果、山形県火箱岩洞穴第Ⅴ層～Ⅶ層の調査成果ともあいまって、隆線の太さとその作出手法の変遷が重要な論点の1つとなってきた経緯がある。隆線の太さと作出手法の分析で最も有効な研究成果は、佐々木洋治氏による東北地方日本海側、特に山形県洞穴遺跡の調査に基づく日向Ⅰa式、日向Ⅰb式、日向Ⅰc式の設定である。佐々木氏は「隆起線文土器」＝日向Ⅰa式、「細隆起線文土器」＝日向Ⅰb式、「微隆起線文土器」＝日向Ⅰc式と型式区分の視点を提示され、特に「細隆起線文」と「微隆起線文」の定義では、「粘土紐の細両側辺をヘラ状工具にて横位、斜位、縦位に押引きして作出したもの」と「複数のヘラ状工具にて、土器表面をヘラとヘラとの間をあけ横位に押引きして作出したもの」とした。これにより東北地方日本海側で日向Ⅰb式、日向Ⅰc式の識別ではかなりの有効性を示すに至り、また佐々木氏の編年研究は東北地方日本海側のみならず、東北地方太平洋側や関東、中部地方の該期の編年研究に大きな影響を与えた。

しかしここで問題とすべきは、中部高地で所謂隆起線文土器型式群が東北地方日本海側と同様の変遷を一律にする保証がない点であり、中部高地の微細な隆線をもつ「微隆起線文土器」とされる土器の内、幾つかは微細な粘土紐を貼付の後に篦状工具で調整され作出されており、研究者間で「微隆起線文土器」の概念規定、編年的位置付けに若干の齟齬を生じている。本遺跡出土資料や川上村立石B遺跡出土資料は作出手法をも限定する狭義の概念では「細隆起線文土器」となる。しかし「細隆起線文土器」「微隆起線文土器」の概念が隆線の形状、太さ、作出手法のみならず、一方では時期を示す意味合いをもつことも考慮した場合、今後、中部高地で所謂隆起線文土器の型式設定を行い、広域編年網の完成を志向して該期の各地諸型式と隆線の形状、太さなどを比較する際に用語で不便を生ずる。よって本稿では手法ではなく、隆線の太さ、細さにより「微隆起線文土器」とする概念を用いる。

4

さて本遺跡出土資料の編年的位置づけを考える際、同時期もしくは型式学的にみて系統的に連続性が想定



第１図　縄文草創期の土器（左２点＝東荒神、右＝石小屋）

され、比較検討すべき資料が第２図の長野県須坂市石小屋洞穴出土の著名な完形土器である。石小屋洞穴例は口径22cm、器高24.0cmの丸底の土器で口端外縁とその直下に２条の波状の隆線、その下部には４条の平行する直線的な４条の隆線がめぐる。隆線は粘土紐を貼付の後に調整されたものである。

石小屋洞穴例と本遺跡例の隆線を比較した場合、平行する直線的隆線は同じ程度の微細さであるが、波状する隆線では前者のほうが僅かながらも太く、突出する。両遺跡が距離的に比較的近く、作出手法が同じならば、周辺地域の従来の研究成果を重視すれば、これは時間差の可能性もある。そして隆線のなす文様については、石小屋洞穴例の口端外縁とその直下の２条の波状隆線が本遺跡例の口端部とその直下の２条の波状隆線が相同、そして波状隆線下部の４条の直線的隆線が７条の直線的隆線と相同の関係となろう。石小屋洞穴例の口端外縁の波状隆線が本遺跡例の口端部の波状隆線へと隆線装飾の部位の変化に型式学的連続性を認めることも可能である。

本遺跡例と石小屋遺跡例の最大の差異は直線的隆線の条数である。石小屋洞穴例の直線的隆線の条数が４条であるのに対し、本遺跡例は７条と多条である。ただし仮に直線的隆線の部分を文様帯と呼称するならば、本遺跡例と石小屋遺跡例の文様帯の幅は隆線の条数にかかわらず３cm前後と同じ程度、ただ法量差を考慮すれば相対的には本遺跡例のほうが文様帯の幅が僅かながらに広いとすべきであろうか。いずれにせよ大差はない。

所謂隆起線文土器型式群を文様帯のあり方から「一帯型」「多帯型」「多条型」などとする分類概念を考案し、４期に細別する変遷案を提示、広域編年を意図したのは大塚達朗氏である。大塚氏によれば石小屋洞穴出土資料は「一帯型」に相当し、千葉県新東京国際空港No.12遺跡例（関東第Ⅰ期新）→神奈川県生田広福寺境内遺跡例（第Ⅱ期）→石小屋洞穴例（第Ⅲ期）と系統的に変遷の結果成立し、関東北部の栃木県大谷寺洞穴遺跡例、東北地方太平洋側の福島県高山遺跡例、東北地方日本海側の日向Ⅰb式に併行するという。本遺跡例も石小屋洞穴例と同時期もしくは系統的に連続し、大塚氏の概念を借用すれば「一帯型」に相当する。大塚氏はまた埼玉県橋立岩陰例の成立を石小屋洞穴例からの変化と考え、その変遷に「文様帯の下降」「文様帯内の条数の変化」などの傾向を見出した。しかし本遺跡例が仮に石小屋洞穴例に後続するとするならば、橋立岩陰例とは異なった変化を示すようである。橋立岩陰遺跡例は口端部からやや下がった部位に隆線が配されるのに対し、本遺跡例は口端部直下以下に隆線がめぐる。本遺跡例と石小屋洞穴例の隆線の配される部位には大きな変化はない。

本遺跡例が橋立岩陰例と共通する点は隆線の条数が多い点である。石小屋洞穴例の直線的隆線の条数が４条であるのに対し、本遺跡例は７条、橋立岩陰例は６条と条数が多条である。前述の日向Ⅰb式、高山遺跡、大谷寺洞穴例など、東北地方、関東北部では隆線が多条のものが多いようである。とすれば、本遺跡例が石小屋洞穴例と同時期であろうと、それに後続するものであろうと、７条の隆線の成立について東北地方や関東北部からの影響で成立したとする仮説も考えられるが、中部高地でも川上村立石Ｂ遺跡、岡谷市中島Ｂ遺跡、山梨県神取遺跡などで多条の隆線の資料がある。現状では中部高地における所謂隆起線文土器型式群の変遷過程をまずは明確にし、その中で多条な隆線のものが地域独自の系統で成立しうるか、他地域からの影響関係で成立するのかをも検討課題としたい。

なお本稿作成においての参考引用文献、ご教示いただいた方のご芳名は東荒神遺跡の本報告で記載させていただく。

麦草峠(1)

―麦草を調べる―

白田　明

1　はじめに

「何だ…、こりゃあー。全部ごちゃまぜじゃねえか完全標本にして持ってこなきゃあ、だめじゃねえか」、開口一番中山氏[1]のロをついて出た言葉であった。

3カ月も車に積み放し、乾燥して大部分の実は落ちてしまった。‥どうしても捨てきれず、中山氏を訪ねたのである。

やや不鮮明ではあったが控えに撮った写真が話の上で役立った。‥君の言うムギクサなんていうものはイネ科の総称だよ、麦草峠にムギクサなんて生えていないよ。あそこにはドジョウツナギなんか一本も生えていないよ‥既に麦草峠については熟知しておられる様子であった。「できるだけ調べてみるから3H4H借しておけや」10月1日、当日のあらましである。

○八千穂村に赴任して3年がたつ。しかし麦草の響きの良さ、麦草峠に興味を持ったのは、ほんの一年に満たない。平成6年7月31日、村民ハイキングに同行した筆者は、麦草峠周辺にムギクサの大群落のあることを発表した[2]。

しかし、この間4月より「歴史の道調査委員」となった私は、川上村を中心に更に多くのムギクサの仲間を採集した。その中には小麦(俗名パンコムギ)の何代も放置されたものや飼料用につくられた燕麦もあった(後述)。

ムギクサとは一体何なのか、存在しているものなのか、麦草から植物、民俗、考古学的見地から何がわかるのか、地域とかのかかわりは、その広がりや発展はどうなるのか、再度稿を改め報告してみたい。

2　麦草を追って

それらを携えては井出浩二氏、八千穂小教頭の鷹野裕山氏をたずね分類同定に当たった。アズマガヤ、イネムギ、チャヒキ、ソモソモ、トボガシラ、カラスムギ‥同じ様にしか見えなかったものが次々にわかって来る。このわずかな期間にも次々と別の種類が成長してくることも。

学校は時間通りチャイムが鳴る。職員室にとびこんで来る子ども、先生方も忙しく立ち寄る。教頭は重要事項を担任教師に要領よく伝達、その間に電話が入る、教頭先生は忙しい。あわただしく休み時間がすぎてホッと一息入れる。カラスムギならハトムギはどうか、イネならネコは？　ネコはないがイヌコロ草が出はじめたな、これはヨシに近いのかアシなのか？どっちが良くて、どっちがアシなのか、よしあしの話に‥こうして麦草峠の草原を占めていたのはヒゲノガリヤスではないか、という段階に近付いた。

この間○イネ科植物は驚く程の種類があること。○極めて似かよったものが多く[3]、○高冷地や、やせ地では小型化、別種でも見分けがつきにくい、○わずかな期間にイネ科植物の優先が交代してゆく事実、鷹野氏も望月少年自然の家では植物を専門にしていた方である。「数をこなしていないと簡単に見分けられないナ、中山さんでないとわからないかも知れない」、これが中山渕氏を訪ねた理由である。

「完全標本でないから、わからないものが何種類かあるが、参考にしてもらいたい」の電話。それは一枚一枚が押し葉された標本で、「長野県の植生カード」簡単な解説も付け加えられて、驚く程立派なものとなって返却されたのであった。

3　大石峠と麦草峠

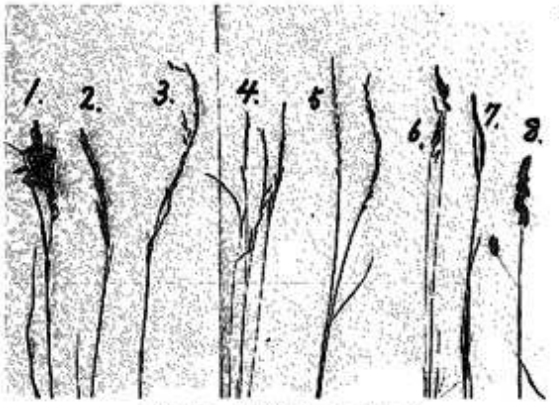
八千穂村と茅野市芹ケ沢を結ぶ国道299号は、カラマツ、シラカバ、シラビソ、オオシラビソ等に移る樹林の美しさからメルヘン街道と呼ばれる。麦草峠山頂は2127m、厳しい気候、人を寄せつけない峠は、志賀有料道路の渋峠が国道に昇格するまで全国一の標高で、冬季間は閉鎖される。例年建設省は4月25日の開通を目指して除雪を行う。開通の一週間前には自転車のツールド・八ケ岳が行われる。この国道の着工は昭和7年11月、茅野側からはじまり、41年10月26日に開通、実に34年もの歳月をかけていた。

(1)　山本茂實と麦草峠

平成4年10月24日、第11回村民福祉大会に招かれた作家の山本茂實は「麦草峠から見た今の生活」と題し、自信の生い立ちや、その時代の生活、自著『あゝ野麦峠』の舞台となった麦草峠の人々の生活について触れ「あまりにも豊かで形だけ整ってしまい、心を置き去りにしつゝある現代に警鐘を鳴らせた」。目標人員400人を大きく上回り、廊下まであふれた参加者は、十分に納得のゆく講演会であった[4]。

公演会終了後、役員達が驚いたのは、話が麦草峠に及んだ時、山本が見せた異常な程の関心であった。「麦草峠」については全く知らなかったと語り、麦草峠についてあらゆることを聞こうとした。役員達には

第1図　麦草峠頂上近くから南を望む山本茂實(文中)
平4．10．25



第2図　麦草峠のムギクサ
左から(1)イワノガリヤス　(2)イヌムギ　(3)ヌマイチゴツナギ　(4)ナガハグサ　(5)ホソムギ　(6)オオウシノケグサ　(7)オオアワガエリ　(8)カモガヤ

ごく身近な内容であったが歴史も由来も、それにかかわることもなぜか答えられなかったという。彼はますます関心を深め、是非麦草峠を見たい、峠越えをしたいと望んだ。翌日の公演は高遠町であったが、その夜のうちに小海線小淵沢回りを変更、茅野駅待ち合わせ、両者の車での送迎となった。大寒波の到来で、峠は凍結が予測された。翌朝は快晴、スタッドレスタイヤを履いた八千穂タクシーは役員二人をのせ峠に向かった。山本はメルヘン街道の美しさに感動し何枚もの写真をとった。麦草峠頂上は深い霧であった。この間彼は何度も麦草峠に関するあらゆる資料を集めて欲しいことを伝えた。

(2)　麦草峠

麦草峠の頂上付近、千曲バスと諏訪バスの出会う終点は、諏訪バス側は麦草峠バス停、千曲バス側は大石峠バス停と呼んだことがある。ここから北西、茶臼山の方向にわずかに登ったところが、かつての大石峠であるが、では大石峠と麦草峠は別かというと、「大石峠も麦草峠と呼ばれていたことがある。また夢科の大河原峠も麦草峠と呼ばれていたことがある。それどころか麦草峠と呼ばれていたところは、ここだけでなく雨境峠も麦草峠と呼ばれていたことがあり、事実樺ケ沢付近に麦草の名を残している。」

麦草峠の由来について作家藤森栄一は、麦のような柔らかい草の原の見えるところ、クサソテツの草原のことだろうと紹介している。[6a]

それでは前掲の野麦峠の麦は何か、こちらはクマザサを示し、60年に一度開花、結実する笹の実を麦に見立てた食糧としての麦である。笹の実は粉にひいて食糧とした。

一方八ケ岳の黒曜石を追い、八幡一郎とともに、この地を何度も探索した小泉は、「エメラルドグリーン、風にさわさわとそよぐ草原の初夏から夏をいろどる麦のような草、イチゴツナギかドジョウツナギだろうと推定、当時植物に造詣の深かった麦草ヒュッテの主人の協力を得て、それは「ミヤマドジョウツナギ」と結論、紹介したのであった。[6a]

(3)　麦草峠付近のムギクサ

7月31日、白駒池駐車場～頂上～麦草ヒュッテ～茅野側まで約4㎞間の路傍を中心に採取したイネ科植物は8種であった。

○クサソテツは全く見当たらない。草原と樹林の境にあるものなのか、又は草原が発達すると背丈の高いもの、間に潅木が育ち始める。ここではヤナギ、シラカバ幼樹が一斉に始まるが、それ以上に笹の繁殖が進んでいるように思う。半日陰のやや湿地を好むクサソテツは全く見られない。既に絶えてしまったものか、主なイネ科植物は[7]

①チャヒキ属・スズメノチャヒキ・ウマノチャヒキ・キツネガヤ

○カラスノチャヒキ（アフリカ～ユーラシア大陸原産、世界各地に分布、日本には1900年代の初頭に入る）

○イヌムギ（南米原産・日本には明治初年に渡来）

②アズマガヤ属・アズマガヤ・エゾムギ・ドクムギ等

③カモジグサ属・カモジグサ・ホウムギ等

○ホソムギ（ペレニアル、ライグラス）ヨーロッパからアジア西部の原産、牧草の一種

④ドジョウツナギ属

○ヌマイチゴツナギ（ヨーロッパから原産、北海道、北州中央部に帰化）

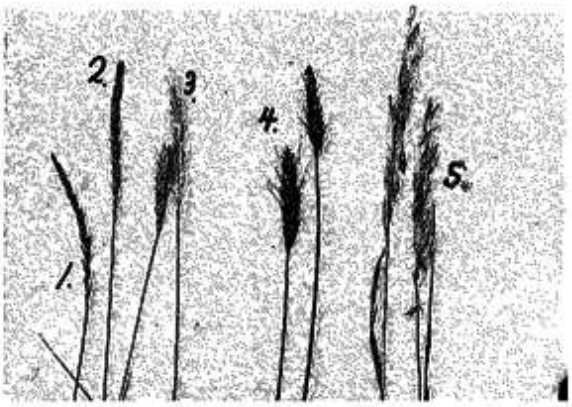
○ナガハグサ（ヨーロッパから牧草として移入したもの）

⑤カモガヤ属

○カモガヤ（英名、オーチャードグラスユーラシア大陸原産で日本全土に帰化、牧草として最も多い）

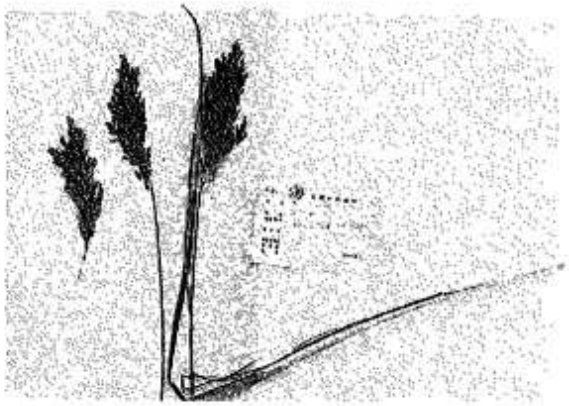
⑥ウシノケグサ属・トボガシラ

○オニウシノケグサ（ユーラシア大陸温帯の原産、日本全土に帰化）



第3図　川上村で採集した麦

1．ホソムギ　2．オオムギ　3．小麦（野生化）
4．小麦（栽培）　5．燕麦



第4図　イワノガリヤス

○オオウシノケグサ（低地から高地まで分布、多くの変種がある）.

⑦オオアワガエリ（アメリカ名チモシー、イギリス名cat's tail猫の尾、ユーラシア大陸原産の牧草）

⑧ノガリヤス属

○イワノガリヤス（亜高山から高山帯に普通に分布する）

以上8属10種のイネ科植物を得ることができた。

(4)　ムギクサを同定する

牧草として入ったチモシー、カモガヤ、ナガハグサは黄色くならない。またウシノケグサ属も細くてこれらは麦のイメージからはほど遠い。イネムギ、ホソムギ等はどうか。牧草とされているが、背は低いが麦のイメージに合う。特にホソムギは大群落をつくり野生の麦畑を思わせることがある。筆者がムギクサと間違えたのもこの種であった。しかし帰化植物が在来種を押して群落をつくったり、道路開通に伴ない優占種になっていたとはとても考えられない。しかも常に霧の巻く高冷地である。

残るはヌマイチゴツナギである。ヨーロッパからの帰化で地下茎を持つ多年草。最もムギクサの可能性が高いが群落、ましてや大群落を確認したことは無い。この種も在来種を押して草原を埋める程の繁殖力はない。このように考えてゆくと残るは一種、イワノガリヤスだけである。一体どのような種なのだろうか。

4　イワノガリヤス

多年草、地下茎がある。稈は多くは単生し80～150cmになる。葉は3～8mm白緑色、葉は7～9月花序は10～25cm、卵形、ややまばら一方に傾斜し赤紫褐色。亜高山～高山帯に分布する。紫色の穂をつけるのでパン小麦を見慣れると、およそ麦のイメージとは異るが白緑色のヨシの様に壮大密生した群落は、たしかに大麦を思わせる。地下茎を持ち、厳しい自然環境の中で、草原を埋めつくしていたのは、間ちがいなく在来種のイワノガリヤスだったことになる。これは現在でも大きな群落を見ることができる。一体ギリシア語ともドイツ語とも思われるガリヤスとはどこから来ているのだろうか。

○ノカリヤス（刈安）属

ホッスガヤ・ヤマアワ・ヒゲノガリヤス・オニノガリヤス・ノガリヤス・シマノガリヤス・チシマノガリヤス・ヒナノガリヤス・キリシマ・ムツ・タカネ・ヒメノガリヤス等15種がある。千島、霧島、陸奥などは在来の固有種であることを示している。

一般に野ガリヤスは山地に生える中型の多年草で1m前後の高さで温帯から本州中部に分布。ススキ属に極めて近い。ススキ（カヤ・オバナ）・オギと同様、用途も屋根ふき、かべの塗込みしん材、敷き物、家畜の飼料に、人間の生活にすべてを利用して来た。更に「古代から葉茎を煮出して黄色の染料とした。刈安は切り取り易い、刈り安い意味から出たもので、伊吹山のものを近江刈安と呼び地名にもなっている。[8]」イワノガリヤスは岩野刈安で、高山帯の代表的なイネ科の植物であった。

おわりに

麦草峠の命名はいとも簡単に行われたという。誰言うとなく麦草であり、大石峠、馬越峠も無かったわけでないが旧地名にこだわる者はなかった。また町村合併が盛んな当時、峠の名前など問題にならなかった。

こうしてみるとかつては多くの峠が麦草峠だったということは、麦草(イワノガリヤス)の仲間がどの峠にも生えていたことを示している。

試しに諏訪側に目を移してみる。茅野線299号には糸萱(いとがや)の地名を残している。これはイトススキのことである。また笹原もある。もっとも茅野は茅、これは乾原の優占種であった。299メルヘン街道が開通

して約30年。考古学の単位からみたら比較にならない程の小さな単位だ。しかしこんなささいなことも人間の生活に深くかかわっていた。この稿が考古学の範囲を広げる一助になればと思う。

麦草峠の草原一帯には現在もイワノガリヤスの群生がみられる。これはまた高山蝶、ベニヒカゲ、ツマジロウジャノメの食草であるとの連絡を宮坂繁氏より受けた(19)。しかし開通時からの変化は確実で、クマザサ(クマイザサ・シナノザサ)だけが勢いを増していると高見沢は語る。路面舗装、拡張、凍結防止の暗渠、U字溝化が進んでいる。自動車の増加、観光客の増加、裸地化がすすむ。ここに入ったのが前掲の帰化植物であった。

追

山本茂実は民俗学的立場から野麦と同様、麦草にも麦を媒介とした食の遺があり、人生の生活悲哀があると予測したのであった。役員達は資料収集に苦慮した。井出正義の佐久の峠からみた大石峠の論文も、峠一体が黒曜石の大原産地であること、この石を求めて旧石器時代から歴史時代の大量村にいたる大遺跡地帯であることも関心の外だったから。

この話はその後山本の「もう、いい」ということで終わってしまった。いつの間に「調べて何もない、麦草峠について調べるのは馬鹿げたことだ」、尾鰭だけが付いたのだった。

おわりに本稿の作成に関しては麦草の同定に当たっていただいた中山洌・鷹野裕由・井出浩二（元青沼小学校長・望月少年自然の家所長）、開通当初からかかわった高見沢太郎（八千穂村教育長）・石田浅治（議会事務局）の各氏には多くの教示を得ました。記してお礼申し上げます。

（1994、11、10八千穂村社会教育主事）

註

(1)中山洌氏（現平根小学校長）植物生態学を専門とし、主著『長野県の植生』1971年他。『川上村村誌』先土器時代（平4年川上村教育委員会）P61～90でも解説している。

(2)『佐久』佐久史学会（1994、9、25日付原稿）に投稿。

(3)およそ195種、これにカヤツリグサ科のスゲ属の中に似たものが何種類も加わってくる。

(4)八千穂村公民館報平4、11月25日号及び村、社会福祉協議会会長山浦貞巳の教示。

(5)小泉袈裟勝『八ケ岳の三万年』にあるが、原典は藤森栄一『蓼科の土笛』

(6)前掲『八ケ岳の三万年』1987年ページ41。
小泉は北佐久郡浅科村矢島の出身、「度量衡」三部作がある。

(7)麦草峠。他は歴史の道調査で採取。どこにでも確認できるもの。

(8)保育社『原色日本植物図鑑』草木編(下)25版昭48年、ページ379。

(9)小諸市諸地の建築設計士でチョウの研究者。無紋チョウ、表裏反対紋蝶の発見など。今年度もキバネツノトンボの産卵シーンが紹介されている。(信毎6月22日付)。

インフォメーション

◆ 新入会員のご紹介

◎小田川栄　さん
〒385 佐久市岩村田888-1　☎0267(67)0183

◎原田政信　さん
〒389-01 軽井沢町追分604-2　☎0267(46)2185

◆ ご結婚おめでとう！

本年1月15日会員の桜井秀雄さんが塩川秀美さんとご結婚されました。ご媒酌人は、本会員の青沼博之さんご夫妻です。

どうぞ末永くお幸せに！

◆ 長野県埋蔵文化財センター佐久調査事務所・閉所

県埋文センター佐久調査事務所がこの3月末で閉所となりました。長い間おつかれさまでした。

◆ 訃報

本会会員の山崎平八郎さんが、2月16日に永眠されました。慎んでお悔み申し上げます。

佐久考古通信　No.64

発行所　佐久考古学会
〒384-01 長野県佐久市桜井879
臼田武正方
郵便振替 (旧)長野 7-2842
(新)00570 9-2842
☎0267 (62) 8133

発行者　由井茂也
編集者　堀　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL
1995. 6. 15. No 65
JOURNAL

★ 旧石器・縄文草創期特集号 ★

■ 全谷里への道 —韓国前期旧石器調査紀行…… 堤　隆……1
■ 根岸遺跡出土の爪形紋土器について…… 遠見秀子……4
■ 謎の黒曜石原産地…… 八ヶ岳旧石器研究グループ……6
■ 荒屋遺跡採集の彫刻刀形石器について…… 美安慶子……8
■ 中ッ原第1遺跡C地点採集の石器について…… 加藤　学……10
■ 馬場平遺跡採集の尖頭器…… 中沢祐一……14

1

乾いたドラム、けだるいテナーサックス、重厚なベース、そしてピアノ、吉祥寺サムタイムの夜はゆっくりと流れていた。この店はとても雰囲気のいいジャズスポットだ。久しぶりに訪れたせいもあってか、立て続けにあおったウオッカで、酔いがまわっていた。一緒に飲んでいた早稲田の亀田直美さんや吉田政行君もちょっときているみたいだった。東伏見の吉田君の下宿に酩酊しながら転がり込んだのは、午前二時半ごろだろうか。目覚めると朝七時をまわっていた。

「遅れる！韓国に行かなきゃ」　わざわざ東京に泊まった意味がない。冷や汗をかきながら成田空港に着いたのは、待ち合わせ時刻の一時間後、あと十分遅ければフライトには間に合わなかった。「たぶん来ないとおもったよ」　出発カウンターで梶原さんは暖かい言葉？で迎えてくれた。やれやれ。

そして飛行機は、古環境研究所の早田勉（火山灰研究）さんと杉山真二（植物珪酸体による古環境分析）さん、東北福祉大学助教授の梶原洋（旧石器考古学）さん、そして二日酔の頭を抱えた僕を乗せ、5月15日ソウルへと飛びたった。

金浦空港に着いたのは午後二時過ぎだった。

2

空港では僕たち4人のご案内をして下さるソウル大学助教授の旧石器考古学者李鮮馥（Yi Seonbok）先生にお出迎えいただいた。

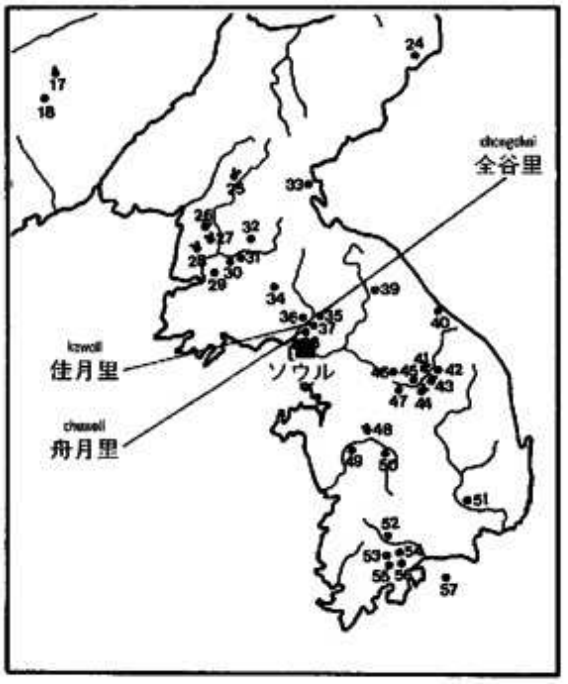
その夜、僕たちはソウル郊外の民家風の料亭へと招待され、マッカリという韓国のどぶろくや真露を飲み焼肉を食べた。そのカルビの味たるや、何とも形容し難く、僕の焼肉体験のうちでも最高のものだった。ウエイトレスの女の娘も可愛くて愛想がいい。キムチは真っ赤な割には思ったより辛くなかったが、翌朝入ったトイレでは尻がヒリヒリとしてあつかった。二次会はホテルのピアノバーで、ジャックダニエルの黒を飲む。すでに前日の大酒のことは忘れ、ふたたびしこたま酔った。席を立つとき、水割りをひっくり返し、李先生のズボンをビショヌレにしたのは、初日から不覚な私である。

3

翌5月16日、李先生の車にゆられること3時間、佳月里（カオーリ）・舟月里（チュウオーリ）・余谷里（チョンゴンリ）遺跡のある北朝鮮との国境近くへと着いた。李先生によれば韓国の旧石器遺跡は現在50あまり、うち細石器の遺跡が35遺跡くらいであるという。

今回の三遺跡は韓国を代表する前・中期旧石器時代の遺跡である。

第2図 佳月里のスクレイパー(15cm)
写真は李先生のご好意による



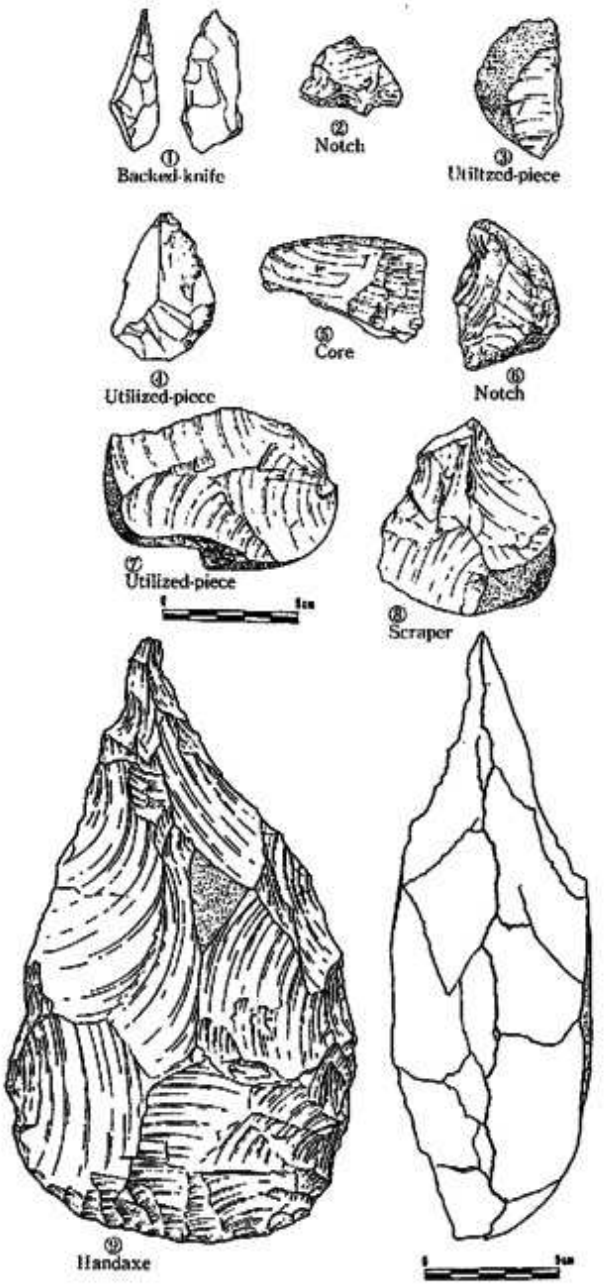
第３図　朝鮮半島の旧石器時代遺跡

遺跡へ向かう途中、車窓に映る風景は、ハングルの看板などを除けば、日本の田園風景と変りなく、ちょうど田植がはじまるという頃だった。

イムジン川の河岸段丘上に立地する佳月里・舟月里遺跡は、相互におよそ500mの距離を隔てている。1988年に発見された両遺跡は、1993年に李先生らによって試掘調査がおこなわれ、報告されている（李1933）。

佳月里から出土した石器は、ハンドアックス・チョッパー・クリーバー・ナイフ・バックドナイフ・ノッチ・コア・ユティライズドフレイクなどで（第２・４図）、大型重厚なハンドアックス・チョッパー・クリーバーがこのインダストリーを特徴付けている。石器の素材は遺跡の段丘礫層中に豊富に含まれる石英（Quart）と珪岩（Quartzite）である。この遺跡については、ＴＬ法や地質学的なデータから４万年前以降５万年前以前の年代が与えられている。石器を包含するのはきわめて特徴的な赤色土である。

遅めの昼食をとったのち、車で30分程の距離にある全谷里遺跡についた。全谷里遺跡から出土した石器はバイフェス・チョッパー・チョッピングトゥール・ピック・クリーバーなど大形の礫石器が特徴的である（第６図）。石器の素材は佳月里と同様石英（Quart）と珪岩（Quartzite）であるが遺跡の段丘礫層中には存在せず、搬入石材と考えられている。全谷里遺跡の基盤層はカリウムアルゴン法によって27万年前の年代が与えられ、またTL法などによって推定された石器包含層の形成年代は12.5～８万年前の間であるという。一方、



第４図　佳月里遺跡（上）と出土石器（李1993）

1986年の調査では、石器を包含する赤色土の年代を17～21万年前頃と想定している（ソウル大学付属博物館1989）。

佳月里・舟月里・全谷里などにみられるHeavy-dutyな石器群は、形態のみでいえば、アフリカからヨーロッパにかけての前期旧石器文化アシューレアンのハンドアックスインダストリーとの対比がまず思い浮かぶところである。アシュールレアンはおよそ50万年前のミンデル氷期から約10万年前のリス・ヴュルム間氷期頃まで続いたとされる文化であるが、これらの石器群を直接アシューレアンと対比することには、分布系統論上当然問題が残る。

こうしたHeavy-dutyな石器出現の背景には、石英や珪岩という大型で粗質な石材を産出する石材環境が大きく働いていることが予測されよう。したがって石器群のオリジナリティーを考慮した場合、他との単純な比較は困難である。

たとえばこれらの石器群について、韓国の研究者の一部は4～5万年前、あるいは10万年前前後という年代を与え、総じて新しく考えている。一方李助教授は、佳月里・舟月里については、実際のところ15万年前ぐらいの年代を想定しているらしい。つまるところ決定的な年代決定の根拠がつかまえられないというのが現状だろう。全谷里をみて「20はいくな」と梶原さんがつぶやいた。

そこで再び自然科学分析によるデーティングが注目される。年代の確定した日本からの広域火山灰が発見されれば、遺跡の年代の重要な指針となる。Aso-4（7～9万年前）やAT（2.2～2.5万年前）などである。そんな期待の中、早田さんによるサンプリングが舟月里と全谷里遺跡でおこなわれた。また、杉山さんは古環境分析のためのサンプリングをおこなった。

第5図　全谷里にて（右＝筆者、左＝梶原洋さん）

4

翌日はソウル大学の李先生の研究室を訪ね、佳月里や全谷里の旧石器を実見させていただいた。ちなみにソウル大では残念ながら旧石器を専攻する学生は一人しかないという。現在、韓国では、ソウルからプサンまでの新幹線計画があり、李先生はその開発についての埋蔵文化財緊急調査プロジェクトの責任者であり、「これからはとても研究どころの状況ではない」と嘆いておられたことが印象的だった。

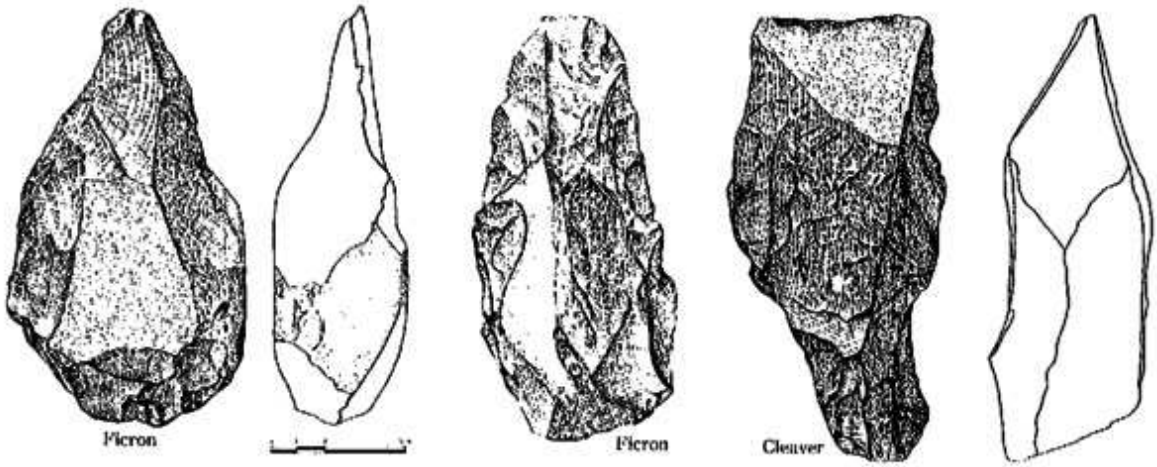
帰国後早々、「土層サンプルの中にATがあるらしい」と早田さんから第一報が届いた。Aso-4は見つかるだろうか。年代推定の期待が膨らんでくる。

引用参考文献

文化財管理局文化財研究所　1983　『全谷里遺跡発掘調査報告書』

ソウル大学付属博物館　1989　『全谷里—1986年度発掘調査報告—』

李鮮馥　1993　『佳月里・舟月里旧石器遺跡』



第6図　全谷里遺跡の石器（文化財管理局文化財研究所1983）

根岸遺跡出土の爪形紋土器について

邊見秀子

1

今回紹介する資料は、御代田町鋳師屋遺跡群根岸遺跡において、平安時代のF－14号掘立柱ピット内から出土した縄紋草創期の爪形紋土器1点である。この他佐久地域では佐久市寺畑遺跡で22点の爪形紋土器の出土がある。

2

第1図1が本遺跡の爪形紋土器の胴部破片である。爪形紋の施紋具は人の爪を用いて刺突した可能性が高い。ほぼ三日月状を呈する。爪形紋は7段認められ、7段目は一部のみ見ることができる。施紋方向は右下りの爪形紋を横位に数段連続刺突し、そして左下がりの爪形紋を1段横位に連続刺突、さらに右下りの爪形紋を数段施す。このように異方向の爪形紋を横位に連続刺突している。内面は指頭による圧痕がみられ、横方向のナデによる細い条線が認められる。胎土には細砂と砂粒を多く含む。繊維の混入はない。色調は茶褐色を呈する。焼成は良い。器厚7㎜を測る。

3

爪形紋土器は諏訪湖底曽根遺跡を標式とし、分布は本州～九州まで広く及ぶ。長野県内では隆起線紋土器や多縄紋系土器などとの共伴を含めて8遺跡を数える（曽根遺跡・石小屋洞穴・やし原遺跡・仲町遺跡・お宮の森裏遺跡・池のくるみ遺跡・寺畑遺跡と本遺跡）。その中で爪形紋土器のみの出土遺跡は2ヶ所となる（曽根・仲町）。かつて片羽町遺跡の爪形紋土器と報告された土器は、近年再検討が行われ絡条体圧痕紋土器と確認された。本資料に見られる異方向の爪形紋を横位に連続刺突している例を近県も含めて示した（第1・2図）。曽根遺跡の爪形紋土器は所謂曽根式である。それに伴う石器群も出土している。お宮の森裏遺跡は遺構外から20数点出土しており、横位の連続爪形紋・異方向の爪形紋・ハの字形爪形紋・異方向の爪形紋＋絡条体圧痕紋とバラエティがある。また、表裏縄紋土器・撚糸紋土器・押型紋土器なども出土している。石小屋洞穴は県内で爪形紋土器を出土する唯一の洞穴遺跡であり、横位の連続爪形紋・ハの字形爪形紋・異方向の爪形紋・縦位の連続爪形紋・押圧縄文＋爪形紋が出土している。やし原遺跡は横位の連続爪形紋・回転縄紋土器を出土する。仲町遺跡は土坑内から横位・縦位の連続爪形紋が石器群と伴出する。寺畑遺跡では遺構外から、横位の連続爪形紋の口縁部破片・底部破片・異方向の爪形紋・横位の連続爪形紋＋ハの字形爪形紋と、無紋土器・表裏縄紋土器も出土している。

4

爪形紋土器に関する研究について、大塚達朗氏は、施紋技法の視点から、ハの字形爪形紋を関東第Ⅰ期（古）南原遺跡の隆起線紋土器にまで時期的に遡上させた。さらに本州系列：曽根式「各列交互に異方向の爪形紋を有し、さらに別種紋様を併用」にその出自・系統を求めた。本資料の異方向の爪形紋や寺畑の口縁部破片の紋様帯・異方向の爪形紋は、まさに中部高地の爪形紋土器を特徴づける所謂曽根式土器の範疇に入るものである（註1）。ハの字形爪形紋について、中部地方では、隆起線紋土器に伴う古手のハの字形爪形紋の出土例がなく、判断としない。戸田哲也氏は、神奈川県内の爪形紋土器、隆起線紋土器と併用されるハの字形爪形紋などの出土例から「ハの字爪形文と密接爪形文（曽根型）」を系統差として捉えた。

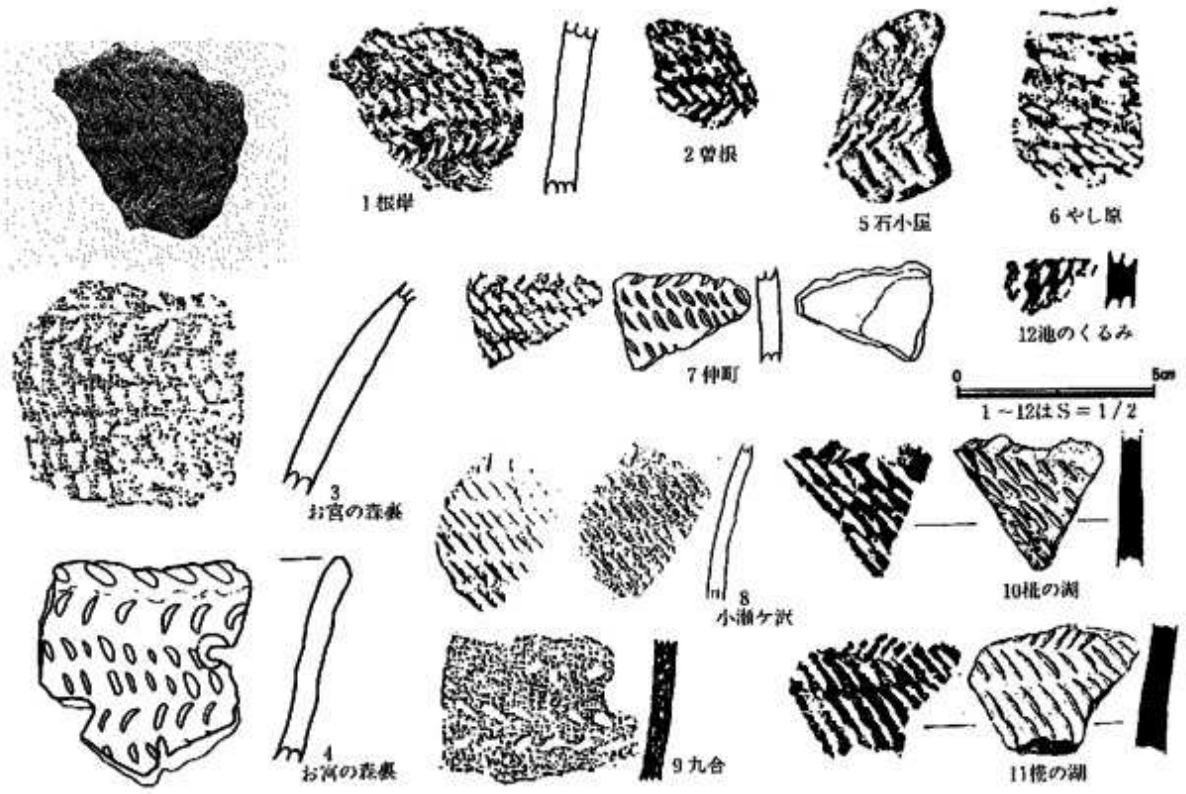
爪形紋土器の変遷案について、（隆起線紋土器→曽根的な爪形紋→押圧・回転縄紋）案及び（隆起線紋土器→曽根的な爪形紋と押圧・回転縄紋の併存）案が提起されている。いずれにせよ、曽根的な爪形紋土器は隆起線紋土器に後続する可能性が高い。ちなみに根岸の曽根的な爪形紋の位置付けとして、型式学的にみれば、刺突列の間隔がやや疎ら、異方向の爪形紋などから、所謂曽根式の中で後半に比定できるのではないかと推察する。

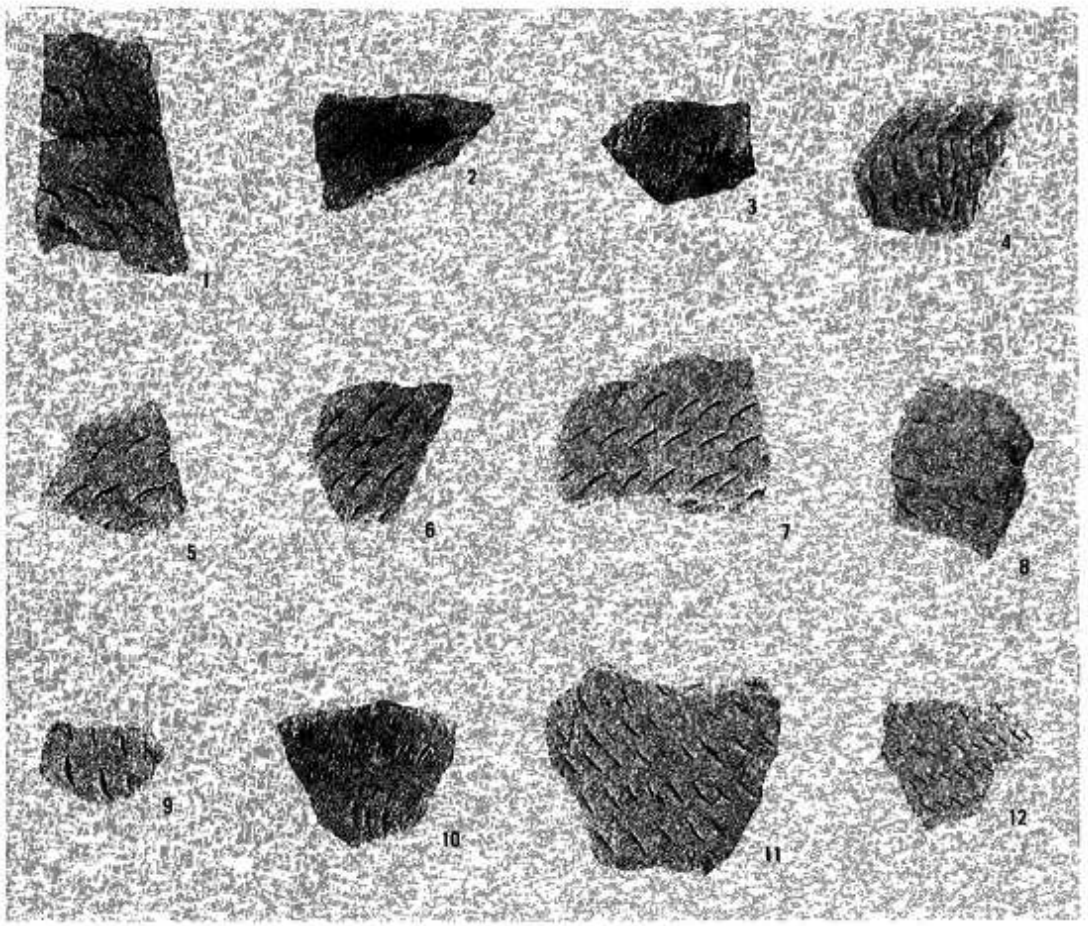
（註1）　山内清男氏は「小瀬ケ沢下層、それと比較し得る諏訪湖底曽根」には「口頸部に狭い所謂爪形文その他の文様帯がある」と古紋様帯について指摘をおこなっている（山内　1960）。

本稿の作成にあたり、堤　隆・中沢道彦・須藤隆司・上原　学・新谷和孝各氏には、資料実見のご配慮・ご教示等を頂きました。心よりお礼申し上げます。

引用参考文献

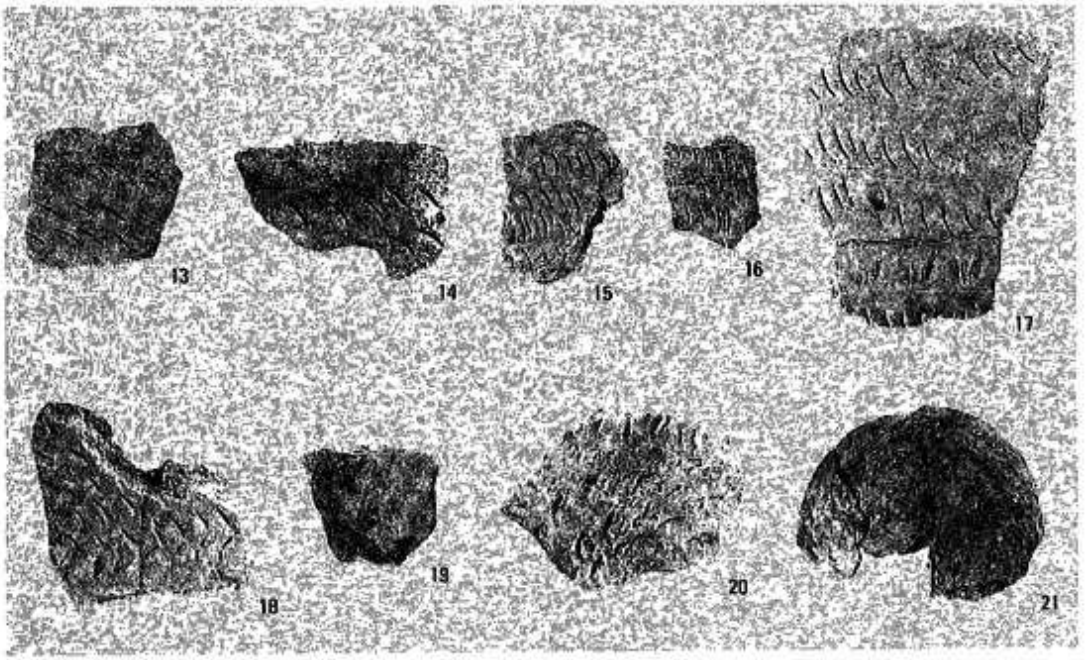
大塚達朗　1988「縄紋草創期土器群研究の回顧と展望」『埼玉考古』24　（記録集）
白石浩之　1984「縄文時代草創期の爪形紋土器の研究とその課題」　『大和市研究』10
新谷和孝　1994「お宮の森裏遺跡の調査と中間報告」縄文時代（早期）研究部会発表資料
戸田哲也　1992「神奈川県における縄文時代草創期研究動向」　『藤沢市文化財報告書』28
山内清男　1960「縄文土器文化のはじまる頃」『上代文化』第30輯





第1図　爪形紋土器の類例

下段写真は佐久市寺畑（上原1995）　S＝1/2縮



第２図　佐久市寺畑遺跡の爪形紋土器（上原1995）より　S＝1/2弱（※22点目の土器は写真掲載なし）

「中ッ原の黒曜石は、日本中どこの黒曜石の成分とも一致せえへんで、どっかに新しい産地はあるんとちゃう。探さへんか」

京都大学原子炉実験所藁科哲男先生から、やや興奮気味に電話が入ったのは今年２月だった。先生には、野辺山の中ッ原１Ｇ地点の旧石器（細石刃石器群）について、蛍光Ｘ線法による黒曜石産地同定をお願いしていた。

困ったことにその産地不明の黒曜石は、中ッ原で出た黒曜石の母岩の八割以上を占めるものだった（残りの二割は麦草峠産と判明）。質は結構いい、少なくとも従来麦草峠産とされてきたものよりずっといい、握り拳ぐらい大きさの原石はある（写真）。しかし、その分析値は、麦草峠とも和田峠の成分ともまったく異なるという結果が出されていた。

現在、国内の黒曜石の原産地はおよそ70か所ほどが確認されているという（右頁図）。だが、１Ｇ遺跡に持ち込まれた八割がその謎の黒曜石だとすると、リスクを低減させるという石材獲得戦略上からみて、原産地がそう遠くにあるとは思えない。

そんな問題がクローズアップされ、私たち研究グループは、八ケ岳周辺に新しい産地がないかどうか踏査を開始した。写真は麦草峠の黒曜石の露頭だが、謎の黒曜石はどうやらここのものではないらしい。

６月中は、冷山・双子池・坪庭など八ケ岳周辺を集中的に踏査しようとおもっている。はたしてその周辺で謎の産地はみつかるのだろうか。それとも和田峠～八ケ岳周辺とはまったく別の場所に、人知れず黒曜石産地が埋もれているのだろうか。

だからフィールドワークはやめられない。

■ 翠川泰弘

現在、私の勤務するさらしなの里歴史資料館において、『古代陶芸教室』というのを、子供からおばあさんまで、15名ぐらいを集めてやっています。

この5月に地元の粘土を採集し、6月にはその粘土の水抜きと寝かせに入りました。このあとは自分たちで薪を用意したり、釉薬を作ったりして、灰釉陶器を焼く予定です。窯は、昨年作った薪窯で、須恵器の窯をモデルにしています。9月に作品の窯入れをする予定です。焼き上がりが今から楽しみです。

■ 冨沢一明

佐久市香坂で、五斗代B遺跡を調査しています。10世紀の竪穴住居1軒のほか押型文～縄文中期の包含層にあたっています。

現場で浅間大窪沢第二軽石(BP15000年前)を抜きましたが、残念ながらその下層に下茂内のような尖頭器石器群を見つけることはできませんでした。

現場は山の中、動物の足跡がたくさん残されています。クマやマムシに遭わないよう気を付けようと思っています。

■ 藤沢平治

長野県考古学会の総会が、この6月4日にありました。事務局を預かる身としては、無事に終ってほっとしています。今回の藤森栄一賞は、第20回ということで、南九州縄文研究会（代表新東晃一氏）と宮坂光昭さんの二名が受賞されました。

また、矢出川国史跡指定による保存対策委解散に伴って、由井茂也さんに感謝状の贈呈がありました。

みなさん、はんとうにおめでとうございます。

■ 羽毛田卓也

現在、標高1,035m、佐久市香坂の八風山遺跡群で、縄文早期の押型文の包含層を調査しています。楕円押型文や山形押型文のほか黒曜石・チャート・緻密黒色安山岩の石器がでています。緻密黒色安山岩は香坂川で入手できる八風山特有の黒い石です。

■ 桜井秀雄

佐久調査事務所から上田調査事務所に変り、現在小諸市郷土遺跡の縄文中期の整理をしています。最近は現場にでていないので、少し太ってきました。室内ばかりにいて狭る心をなぐさめてくれるのは、土偶の笑顔です。

この1月に結婚して、私の研究テーマである祭祀(妻子)が、ようやく半分くらいみえるようになってきました。

第2図　黒曜石の原産地
Fig.2　Major sources of obsidian

荒屋遺跡採集の彫刻刀形石器について

美安慶子

1　遺跡の概要

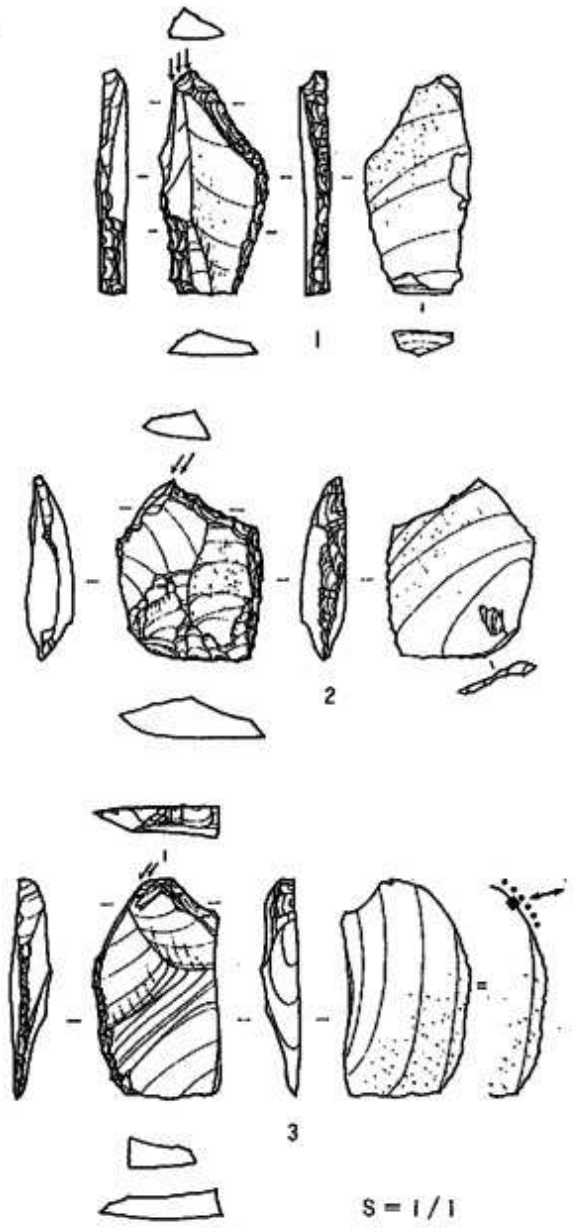
新潟県北魚沼郡川口町に所在する荒屋遺跡は、信濃川と魚野川の合流点の河岸段丘上に形成された細石刃文化期の遺跡である。矢出川遺跡の発見によって日本における細石刃文化の存在が確認されてから5年を経た1958年、第一次調査が芹沢長介氏の手により行われた（芹沢1959）。矢出川遺跡と同じく細石刃を主体とし、かつ信濃川水系に属しながらも、整った流線形をなす細石刃に船底形の細石刃核・彫刻刀形石器を伴う荒屋の組成は、矢出川のそれとは全く異なり、この両者は日本列島を二分して存在する細石刃文化の代表例として理解されている。

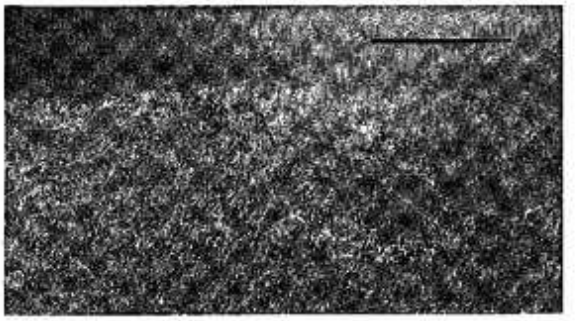
過日、新潟県内の遺跡を踏査した際に、当遺跡にて3点の硬質頁岩製彫刻刀形石器を採集した。荒屋型と称されるこの特徴的な彫刻刀形石器について、その顔付きを少々眺めてみることとしよう。

2　採集資料

1は、最大長28.5㎜、最大幅14.0㎜、最大厚3.8㎜、重量1.76ｇ、先端角は86°を測る。素材剥片を縦に用い、背面側周縁に急斜度の調整を加えた後、左肩部に3条の彫刀面を作出する。彫刀面打撃が与えられた点はかなり左側に偏っており、彫刀面打撃の方向は石器軸にほぼ平行する。石器の基部には折れ面が残る。なお、先端部背面側には彫刀面を打面とした細かな調整がみられる。これは綿貫・堤らによって、フラット・グレーバー状剥離と呼ばれた調整に相当し、荒屋型彫刻刀形石器に顕著に認められるもので「荒屋の彫刻刀形石器の製作技法を特徴付ける重要な要素となりうるものと考えられる」という（綿貫・堤1987）。

2は、最大長23.0㎜、最大幅19.0㎜、最大厚6.0㎜、重量2.64ｇを測り、かなりずんぐりとした形状をなす。右側縁には急斜度の調整が施されるが、左側縁に関しては一部に細かな調整がみられるものの、素材の縁辺を多く残している。左肩部には2条の彫刀面が作出され、先端角は87°を測る。素材とした剥片の打面が残されており、基部背面の剥離痕に関しては素材剥離時の頭部調整と考えられる。



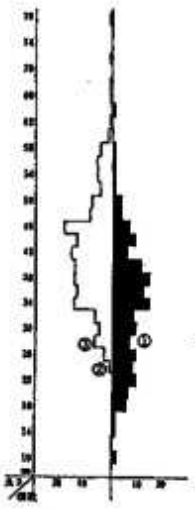


写真は3の石器の裏面右側縁上部（彫刀面腹縁）より検出された、側縁に直交する線状痕とK1タイプ（阿子島1989）と考えられるポリシュ。

写真のスケールは100μ。図の■が撮影部分、●●●は使用痕の範囲、矢印は使用方向（撮影協力　堤氏）。

第1図　荒屋遺跡採集の彫刻刀形石器と使用痕

3は、最大長27.2mm、最大幅16.0mm、最大厚5.3mm、重量2.53gを測る。素材剥片が横位に用いられ、基部には縁辺がそのまま残されている。素材剥片を縦位に用い、打面側を石器の基部とする例がほとんどである中で（東北大学考古学研究室編1990）異色の例である。右側縁の折れ面は右肩部の調整に後出するものとみられ、急斜度調整の代用となる人為的な折断である可能性がある。左側縁、右肩部に調整が施され、内湾する右肩部より2条の彫刻面が作出される。先端部は緩やかなカーブを描き、先端角は93°を測る。なお、先端部には彫刻面を切って細かな調整が加えられている。



第2図　荒屋出土の彫刻刀形石器の長さ
右：折れ面をもつもの、左：完形品、①②③は本資料　（山中1982）に加筆

3　荒屋型彫刻刀形石器について

本資料は、3点共に硬質頁岩の剥片を素材とし、石器の周縁部に腹面からの急斜度調整が施され、先端部が尖頭状に形作られる。続いて左肩部に数条の彫刻面が作出されており、以上の条件から荒屋型彫刻刀形石器と認識されるものである（綿貫・堤前掲）。

これらについては、まずその大きさが注意される。荒屋出土の彫刻刀形石器324点を分析した山中一郎氏のデータによると（第2図）、最大長40mm前後1cmにピークが認められており、本資料が小形の部類に属することが分かる。ところで、「荒屋遺跡の彫刻刀は彫刻刀スポールの影大な量からもうかがえるように、繰り返し彫刻刀面の作出を行うものが多」い（東北大学考古学研究室編前掲）との指摘がある。ゆえに本資料の小形さに関しても、それが彫刀面再生の繰り返しに起因するとみることも可能であろう。

さて、彫刻刀形石器の機能については、従来、先端部を機能部とした溝切りが想定されてきた。しかし、マドレーヌ文化期の彫刻刀形石器の使用痕分析を行った阿子島氏によれば、先端部に限らず彫刀面側縁や彫刀面以外の側縁部により顕著な使用痕が認められたという（阿子島1989）。また、荒屋遺跡出土の彫刻刀形石器に対する使用痕分析では、彫刀面腹縁に刃部に直交する線状痕とE2タイプとされる光沢が認められ、側縁を用いた乾燥した皮のなめし作業という機能が想定されている（東北大学考古学研究室編前掲）。

本資料3点に対しても、堤隆氏の御協力を得て使用痕の観察を行った。金属顕微鏡による100～200倍の検鏡の結果、資料3より彫刀面腹縁に刃部に直交する線状痕と光沢を検出した（写真）。光沢面は、やや明るく表面は滑らかで丸みを帯び、縁辺のところどころにのみ認められた。これらの特徴は阿子島氏のE1タイプ（阿子島前掲）に該当するとみられ、被加工物として肉／皮との対応が考えられるという。すなわち、資料3の機能としては、肉／皮に対しての刃部に直交する方向の作業が想定されよう。

以上、今回の使用痕観察においても、彫刻刀形石器の機能をその先端を用いた溝切り具とする従来の見解に対し、再考を促す結果が得られた。

最後に荒屋型彫刻刀形石器の素材剥片の供給の問題について触れておく。前出の山中氏論文中に「連続剥離によって剥ぎ取られた石刃と呼ぶべきものが素材とされたことは完全に否定できない」とあるように、従来、彫刻刀形石器素材供給のシステムは独立して存在すると考えられてきた。しかし荒屋遺跡において細石刃核と荒屋型彫刻刀形石器との接合が認められ、さらに、荒屋と共通する製作技法・石器組成を有する岡山県恩原遺跡においても、類例が報告されている（稲田他1992）。この事実は両面調整の細石刃核の母型製作と彫刻刀形石器の素材供給との一体化を示唆している。つまり、一つの両面調整体が石器となり、多様な石器の素材供給母体ともなる一連のシステムの存在が窺えるのである。こうしたシステム下においては、必要な機能に応じての石器製作とより効率的な石材利用が可能であると考えられている（佐藤1993）。

末筆ながら、資料2を提供して頂いた江口志麻さん、本文作成にあたり御指導を賜わりました田島新・堤隆さん、そして常に暖かく見守り続けて下さる安蒜政雄先生に深く感謝致します。

引用参考文献

阿子島香　1989　『石器の使用痕』
稲田孝司・網川一徳・光石鳴巳　1992　「西日本の湧別技法」　『岡山大学文学部紀要』18
佐藤宏之　1993「細石刃石器群の行動論的分析のための視点」　『細石刃文化研究の新たなる展開』
芹沢長介　1959　「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋型彫器について（予報）」　『第4紀研究』1-5
東北大学考古学研究室編　1990　『荒屋遺跡―第2・3次発掘調査概報』
山中一郎　1982　「荒屋遺跡出土の彫器」　『考古学論考』
綿貫俊一・堤　隆　1987　「荒屋遺跡の細石刃文化資料」　『長野県考古学会誌』54

中ッ原第１遺跡Ｃ地点採集の石器

加藤　学

１．はじめに

中ッ原遺跡群は、1953年の麻生優氏らによる発掘調査（麻生　1955）をはじめ、京都女子大学による分布調査（京都女子大学考古学研究会　1980）、八ヶ岳旧石器研究グループによる発掘調査（八ヶ岳旧石器研究グループ　1991・1995）など、研究史上度々、注目を集めてきた。

一方では、吉沢靖氏らによって綿密な分布調査が行われてきた。その結果、中ッ原遺跡群は現在、８地点から構成されると考えられており、吉沢氏により統括されている（吉沢　1991）。今回紹介する資料は、これらに追加するものである。

２．遺跡の位置と環境

中ッ原第１遺跡Ｃ地点は、麻生優氏らによって調査された１遺跡Ｂ地点の東北約50mに位置する。平坦地から北斜面にかけて遺物が分布するが、その北側には低湿地が広がっており、遺跡が湿地の「へり」にあったことがうかがえる。また、遺物の集中地点は微高地と重なり、遺跡の立地を考える上でも興味深い。

吉沢氏によると140×40m程の範囲に３箇所の遺物集中地点をもつという（吉沢　1991）が、今回図化した資料は、いずれも北斜面の道路沿いで採集されたものである。

３．既発表資料

中ッ原第１遺跡Ｃ地点における採集資料は、吉沢氏により紹介されている（吉沢　1991）。それによると、ナイフ形石器、掻器、削器、彫器、剥片類の採集が報告されている（第１図）。ナイフ形石器の多くは、幾何学形ナイフ形石器のカテゴリーとして理解されることから野辺山編年第Ⅱ期後半[13]（茂呂野Ⅳ期後半段階）に比定されている。

また、石質としては良質の黒曜石（和田峠産？）、水晶、チャート、チャート質石材、頁岩、安山岩が報告されている。

４．採集石器

第２図１は、八ヶ岳産と推定される黒曜石の石核である。高さ2.2cm、幅5.7cm、厚さ6.2cm、重量87.2ｇを測る。流状構造の節理面ｅ・ｆに沿って薄く剥がれた偏平な礫を素材としている[2]。その一方の平坦な節理面ｃが打面に利用されており、その単一打面内において打点の移動が行われている。

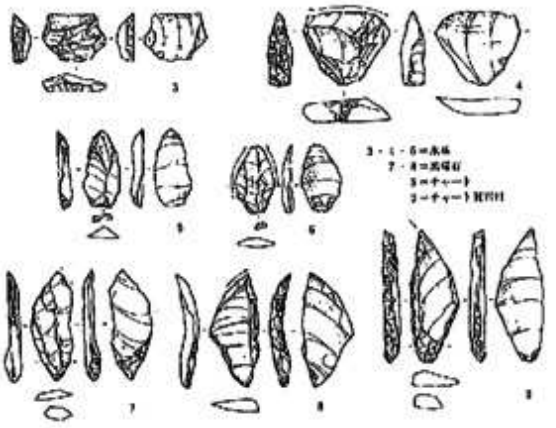
ｂの剥片剥離作業面からは、幅広で寸詰まりな剥片が剥離されており、打面角は３面とも55度前後を測る。

ａ・ｃ・ｄは極めて平坦な剥離面であり[2]、素材を適当な大きさに分割することに目的があったものと思われる。むしろ、折断面と解釈すべきであろう。打面角はａでは105度、ｃでは115度、ｄでは93度を測る。

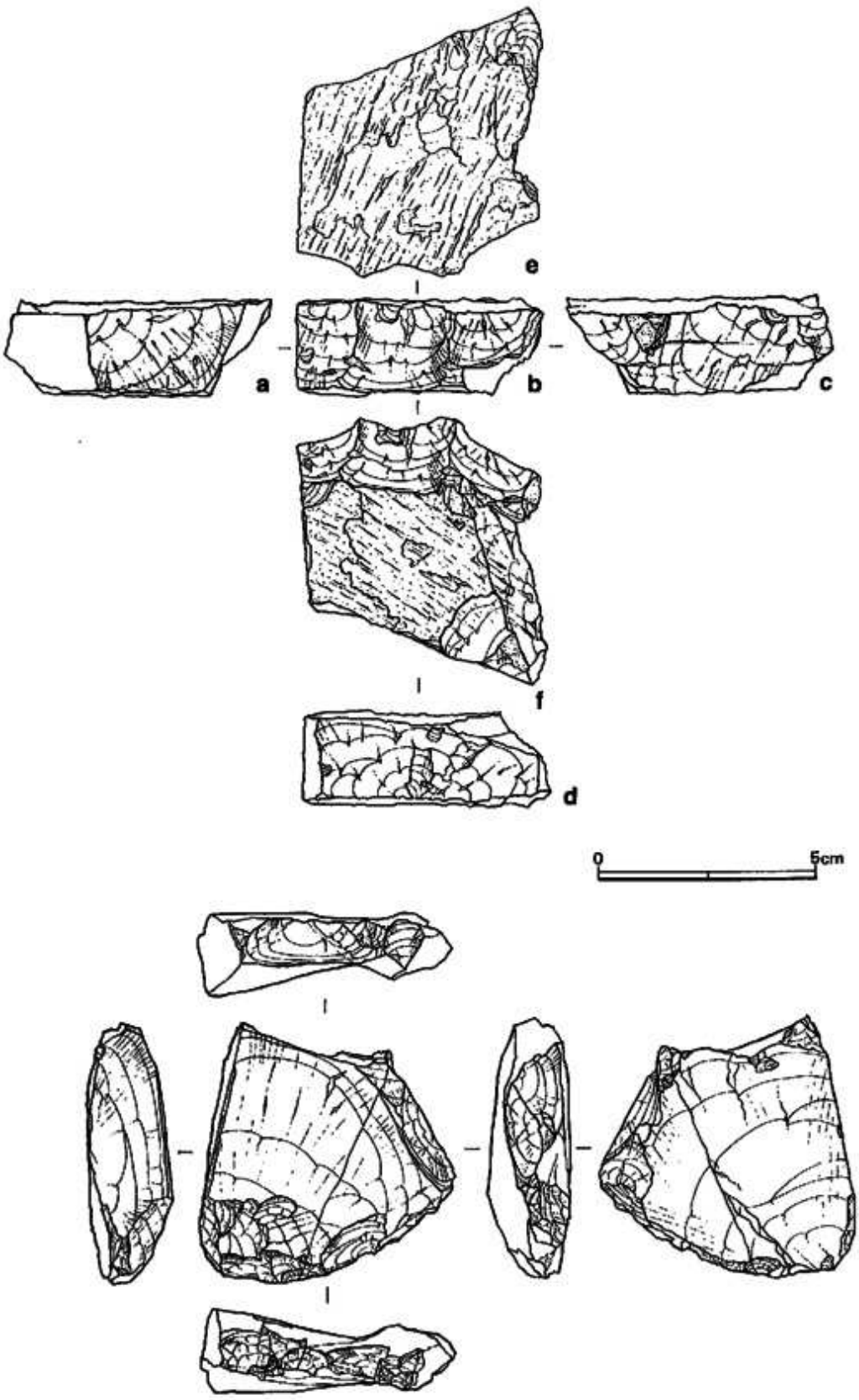
また、本資料が埼玉県・殿山遺跡[14]（石器研究会　1982・荒井・実川　1991）出土の黒曜石の石核に酷似することにも注意したい。黒曜石は、八ヶ岳産と推定され、独特の流状構造と気泡を有するもの[15]である。殿山遺跡においても、このような構造によって、つくりだされた板状の原石が石核素材に利用されている。

石核素材の在り方（形状や石質等）は、剥片剥離に大きく影響を及ぼすことはいうまでもない。むしろ、両者には極めて強い連関があるといえる。中ッ原１遺跡Ｃ地点例と殿山遺跡例の酷似は、このことによる必然であり、必ずしも段階的な同時性を示すのではないことを指摘しておきたい。

第２図２は、長さ6.0cm、幅5.9cm、厚さ1.9cm、重量76.3ｇを測る。石質は、ホルンフェルスであり、一部にチャート質の部分が嵌入する。図化すると、あたかもスクレイパーかのようであるが、刃部の加工は弱く、激しい痛潰れと刃部裏面の一部に剥離面が観察される。むしろ、敲打のような機能を果たした石器と捉えるほうが適当であるかもしれない。素材には、分厚な折断剥片が用いられており、上述した石核と似た在り方を呈する。



第１図　中ッ原１Ｃ地点の既出資料（１/３）（吉沢1991）



第2図　中ッ原ⅠC地点採集の石器（2/3）

また、今回図化しなかったが、黒曜石の剥片を4点採集した。黒曜石には、八ヶ岳産と和田峠産のものとがある。

5．おわりに

今森、中ッ原第1遺跡G地点の第2次調査に参加する機会を得た。東京では、桜のつぼみが膨らみつつある季節にさしかかっていたが、野辺山はいまだ冬景色であった。白銀の中ッ原の大地をはじめて踏みしめた時、ふと、矢出川遺跡発見のエピソードを思い出した。実に感動的なシーンであった。

今回紹介した資料は、その際に八ヶ岳旧石器研究グループ諸氏とともに採集したものである。

これらの貴重な資料を紹介するにあたっては、堤隆氏から、あたたかい御指導と御支援を賜った。また、石器の観察にあたっては、織笠昭先生・西秋良宏先生をはじめ、大倉潤・織笠明子・中沢祐一・永塚俊司・美安慶子・吉田政行の各氏より御指導と御教示を賜った。文末ではありますが、以上の方々に深く感謝いたします。

補　註

(1) 堤隆氏は、野辺山における石器群の段階的変遷を「野辺山編年」として提示している（堤　1993）。これによると、野辺山編年第II期後半は「相模野編年」（矢島・鈴木　1976）の第IV期後半に対比される。その特色として、小形化・幾何学形化したナイフ形石器が特徴的に認められること、小形尖頭器が認められることをあげている。

(2) このような黒曜石の在り方は、八ヶ岳原産地の一つである麦草峠の露頭において普遍的に認められる。

(3) このような剥離面は、原産地における原石にも間々、見られた。偏平であるが故、必然的にこのような剥離面が生じやすくなるのであろう。したがって、人為的な剥離面であるとは断言できないが、全ての剥離方向が同一であることには注意しなくてはならない。

(4) 殿山遺跡といえば、野辺山編年第I期に並行する代表的な遺跡の一つであるが、当該期の資料は中ッ原遺跡群では未発見である。

(5) 堤隆氏のご指摘によると、肉眼での産地推定が、科学分析での産地推定と8割以上の確率で整合するという。それほどに、特徴的な黒曜石である。

また、殿山遺跡出土の黒曜石は、冷山産との見解が示されているが（織笠　1987）、冷山も八ヶ岳原産地の一つと理解されている。

引用参考文献

麻生　優　1955「中ッ原の無土器文化」　『石器時代』2

荒井幹夫・実川順一　1991『殿山遺跡　第2次調査』上尾市文化財調査報告36

織笠　昭　1987「殿山技法と国府型ナイフ形石器」『考古学雑誌』72-4

京都女子大学考古学研究会　1980『信濃野辺山原の分布調査　II』

石器研究会編　1982『殿山遺跡』上尾市文化財調査報告11

堤　　隆　1993『遠き狩人たちの八ヶ岳』

矢島國男・鈴木次郎　1976「相模野台地における先土器時代研究の現状」　『神奈川考古』1

八ヶ岳旧石器研究グループ　1991『中ッ原第5遺跡B地点の研究』

――――　1995『中ッ原第1遺跡G地点の研究I』

吉沢　靖　1991「中ッ原遺跡群の様相と問題点」　『中ッ原第5遺跡B地点の研究』

追　記

4月下旬、春の暖かさをようやく感じられるようになった中ッ原を再訪した。大型重機による耕作が、ところどころで始まっていた。1C地点もその例外ではなく、赤土が掘り返され、遺跡が失われていくさ中であった。寂しさを感じると共に、遺跡保護の問題について考えさせられた。

去る6月10日、ホテル中島において1995年度佐久考古学会総会が開催された。総会の後、情報交換会がなされ、参加人数こそ少なかったが会員からさまざまな情報がよせられた。

終了後は、懇親会がもたれ旧交があたためられた。とくに先の矢出川の国指定という慶事があり話が大いにはずんだ。夜の街に消えた各自の帰宅時間はまったくわからない。

新刊紹介

『伊那の石槍』

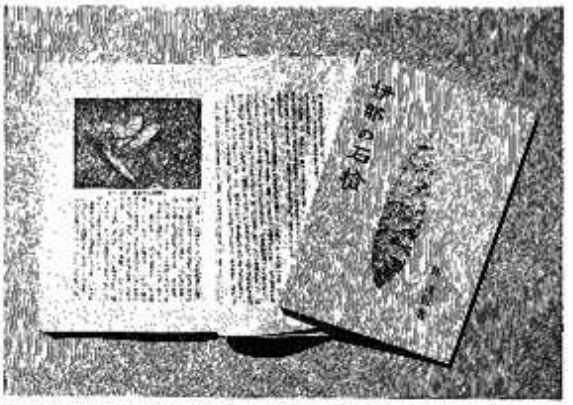
林　茂樹　著

この春、神子柴遺跡調査を中心とした林茂樹さんのフィールドノート『伊那の石槍』が上梓された。「伊那の石槍」・「神子柴遺跡初発掘覚え書」・「神子柴遺跡の意味するもの」・「御園尖頭器遺跡試掘覚え書」・「生徒らと共に」・「伊那のビーナス誕生」という構成で、当時の日誌や、短報を中心としてまとめられたものである。

藤森栄一をして「日本一の石槍」そして「巨大な柳葉石槍と長大な局部磨製石斧の環状配置。日本旧石器発掘史上最高の豪華版」（藤森1965『旧石器の狩人』）とまでいわしめた神子柴については、多言を用しないが、その発掘時の感動がまさに伝わってくるような生々しい記述が随所にちりばめられている。

「黄褐色の土の中に淡黄色～白色の石槍が放射状に並んでいる。誰しもが生れて始めてだ。荘厳な状況にみな黙ってみつめているだけで、手が出ない。神秘的なものが漂っている」

調査は、芹沢長介・藤沢宗平・地質学の小林国夫・松島透・本田秀明・神子柴泰正・藤沢平治などの強力なバックアップで大きな成功を収めている。



本書では、旧石器・縄文を研究するうえでの貴重な学史が語られている。ぜひご一読をお薦めしたい。

本書の申込みは下記のとおり。
〒399-42　駒ケ根市中沢4890　林茂樹さんまで
送料とも　1700円

新刊紹介

『中ッ原第1遺跡G地点の研究』

八ケ岳旧石器研究グループ　編

中ッ原第1遺跡G地点は、野辺山に所在する細石刃文化の遺跡で、北方系の剥片系の細石刃石器群を出土した遺跡である。

今回の報告は、1992年3月に実施された第一次調査の成果が収められている。

出土した石器は、細石刃・細石刃石核・掻器・削器・折断剥片などである。検出された石器群は、1990年に調査が行なわれた第5遺跡B地点にきわめて近い内容のもので、両地点の関連性もうかがわせる内容であった。あるいは近い将来、両地点での遺跡間接合もありうるかもしれない。

本書では、事実報告のほか、いくつかの研究報告がなされている。細石刃の機能、細石刃を埋め込んだ槍刃器の実験製作研究、細石刃技法の研究、黒曜石の産地同定、火山灰分析、古環境分析などである。

神子柴でのミーティング（左から、林・芹沢・神村）

本書の収益は、グループ研究運営のための運営資金となっている。諸氏の購読のご協力をお願いしたい。
申込み先
〒385　佐久市岩村田1317-1　堤　　隆　まで
頒価　3000円　葉書で申込み、代金後納

馬場平遺跡採集の尖頭器

中沢祐一

1　遺跡の立地と石器群の概要

馬場平遺跡は長野県南佐久郡川上村御所平に所在している。その発掘調査は、1953年芹沢長介を中心として行なわれた。岩宿発見の4年後、ローム層から尖頭器が出土することが最初に確認された遺跡として、馬場平は学史上重要である。

馬場平遺跡の北側には千曲川が西流し、西側には黒沢川が北流する。遺跡はその両河川の合流点にあたる河岸段丘の縁辺に形成され、千曲川からの比高差は約20mである。発掘調査によって出土した石器群は、段丘の縁辺から約100m南側に分布し、ローム層上面から約10～30cm（地表面下約30～50cm）の間に包含されていたことが確認されている（芹沢1955）。

河岸段丘面には馬場平遺跡の他に、菅の平遺跡・諏訪遺跡・前の山遺跡・よしのしり遺跡が近接しており、それらは馬場平遺跡群と総称されている。馬場平遺跡はその中でも最大の石器点数を数える。

採集されたToolだけでも682点に及び、発掘資料（芹沢前掲）と合わせると758点になる。中でも尖頭器は606点と圧倒的で、Tool全体の約89％を占める（林1992）。この他、ナイフ形石器（約9％）・スクレイパー・石錐・ピエスエスキーユ・彫器・片刃礫器・石核・剥片・砕片等が認められている。

2　採集資料（第1図）

本年5月、筆者らが表面採集した尖頭器2点について紹介する。

1は半両面調整の中形の尖頭器である。左右対称の細身の尖頭器で、長さ5.4cm、幅1.5cm、厚さ0.7cmを測り、最大幅は器体中央にある。断面は扁平なD字形を呈する。上下両端を新しく欠損しているが、完形時の長さは6cm以上であったと推定できる。表裏両面にわたって器体の調整が行なわれているが、裏面の中心部分にまでは及んでおらず、平坦な自然面を残す。全体のフラットな形状からは恐らく、剥片素材と思われるが、その縦横は不明である。両面ともに細かな調整加工が施されているが、正面図の上端には特に細かな調整が認められたため、これを先端部と捉えた。半透明で縦縞の入る良質な黒曜石を使用している。

2は両面調整の小形の尖頭器である。長さ3.6cm、幅1.3cm、厚さ0.9cmを測る。剥離の大きさは全体的に不揃いで、ゴロッとした形状を呈している。先端部の周縁には細かな調整加工を認めることができるが、尖鋭な先端の作り出しの意図は薄い。黒曜石製。

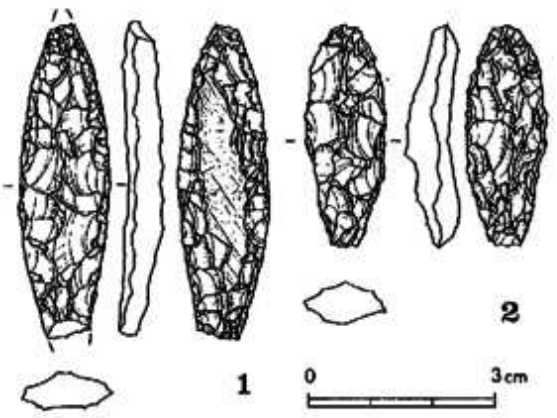
これらの尖頭器の形態的特徴を発掘による尖頭器石器群（芹沢・柳沢1982a）と比較してみると、発掘による尖頭器は長さ5～8cm前後で、細身のものとやや幅広のものとに分けられる。採集した2点の尖頭器は前者、すなわち細身の形態に含められよう。

3　馬場平の尖頭器の編年的位置付け

馬場平遺跡では発掘調査によって尖頭器が石器群の主体を成していることが確認されている（芹沢前掲）。こうした本遺跡の尖頭器石器群の編年的位置付けを、細石刃出現以前にするか、細石刃衰退以降にするかは研究者間の一致をみていない（柳沢1985、栗島1986、大竹1988、森嶋1988、白石1989、堤1993）。なお、1953年の発掘調査に基いたその後の芹沢らの所見では「細石刃出現以後、有舌尖頭器出現以前」と位置付けられている（芹沢・柳沢前掲）。

ここでは本資料も含め、馬場平の尖頭器石器群の編年的位置付けについて、私見を述べてみたい。

まず編年を行なう上で、発掘による芹沢・柳沢両氏によって捉えられた馬場平石器群の特徴をもう一度みてみよう。石器組成としては、尖頭器を主体とし、少量のナイフ形石器・スクレイパー・石錐・ピエスエスキーユ・片刃礫器を伴う。尖頭器の形状には細身のものと幅広のものがあり、調整加工は両面調整・片面調整・周縁調整など多様である。素材はほとんどが剥片である。それらの基盤となる剥片剥離技術は縦もしくは横の規格性のある剥片を連続して打ち剥がす技術ではなく、打点・打面を頻繁に変えながら縦長・横長の剥片を得る技術である。このような剥片剥離技術が、



第1図　馬場平遺跡採集の尖頭器（4/5）

有舌尖頭器を含む石器群に類似している点も編年の根拠とされている（芹沢・柳沢前掲）。

同じく野辺山で尖頭器を主体としナイフ形石器が共伴する柏垂遺跡は、1972年に東北大学考古学研究室によって発掘調査が行なわれている（芹沢・柳沢1982b）。その報告によるとほとんどのナイフ形石器の素材は、石刃技法によって生みだされているのに対し、尖頭器の素材は打点を移動させながら求心的に剥片を剥離することによって得られる形状の不揃いな剥片であるという。つまり、尖頭器を製作するこのような技術は、馬場平石器群と共通していると言える。

次に尖頭器とナイフ形石器の石器群におけるあり方を検討したい。柏垂遺跡では尖頭器に二側縁加工のナイフ形石器が伴っている。尖頭器は両面調整・片面調整・周縁調整と多様である。周縁調整の尖頭器にはナイフ形石器に施されるブランティングに類似した細かく急斜度な調整を認めることができる。それに対し、馬場平遺跡の尖頭器石器群は両面調整と反両面調整が主体となっており、周縁調整の尖頭器にはブランティング的な調整技術は認められない。また、ナイフ形石器については2点のみの共伴である。

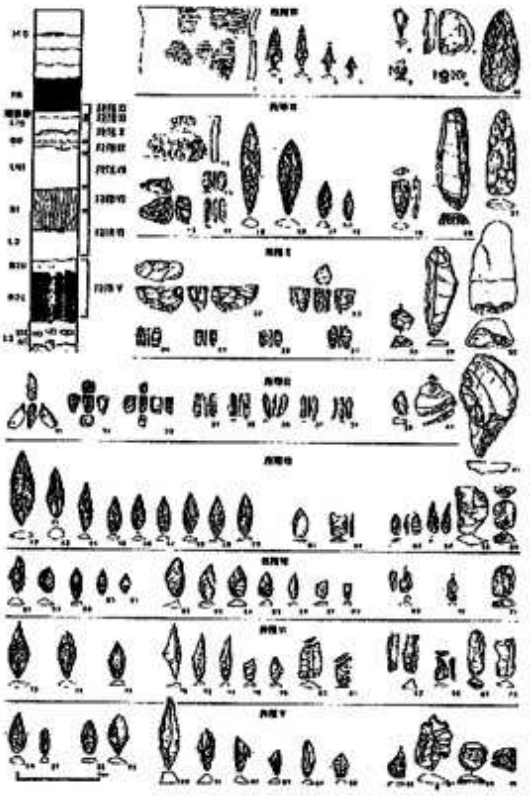
このように馬場平遺跡と柏垂遺跡を比較すると、石刃技法の保有の有無という相違が認められる。そしてその相違はナイフ形石器と尖頭器の保有率の多寡を示しているとみてとれよう。これらの相違と対応関係を時間的前後関係の反映として捉えたとき、ナイフ形石器の衰退と尖頭器の量的増加という組成比率の変化が浮え、柏垂遺跡→馬場平遺跡という変遷の図式が描けよう。

以上を踏まえ、次に石器群の層位的出土事例に恵まれた南関東相模野台地の石器群との対比を試みたい。

相模野台地ではL2からL1Hにかけて、ナイフ形石器の衰退と対応するように尖頭器が増加していく様子が層位的に把握されている（第2図参照）。具体的には諏訪間の設定する段階VI（L2～B1中部）、段階VII（B1上部～上面）、段階VIII（L1H下部～上部）の各段階として把握されている（諏訪間1989）。

段階VIでは石刃技法を基盤とする二側縁加工のナイフ形石器を主体とし、少量の尖頭器を伴う。次の段階VIIでは石刃技法は客体化し、尖頭器の石器群に占める割合は高くなる。ナイフ形石器、尖頭器ともに形態が多様になる。そして段階VIIIになると石器群の主体が尖頭器に変化し、剥片剥離技術は尖頭器中心の体系に変わり石刃技法は消失する。ナイフ形石器は質、量ともに乏しくなる（諏訪間前掲）。この変化の内容は、野辺山原の柏垂遺跡から馬場平遺跡への石器群の変化と同様である。

ここで相模野段階VIIIの尖頭器をみてみたい。中村遺跡第III文化層では、5～6cmの中形の尖頭器が主体となり、素材や形状に統一性の欠けるナイフ形石器を少量伴っている（中村遺跡発掘調査団1987）。また月見野遺跡群上野第1遺跡第IV文化層から出土した尖頭器は5cm前後の中形と3cm前後の小形を中心とし、小形のナイフ形石器を少量伴っている（相田1986）。翻って今回採集した2点の尖頭器の形態的特徴（形状・調整加工）をみたとき、相互の形態的特徴の類似性は高いと言える。



第2図　相模野台地における石器群の変遷（諏訪間1989）

一方、同じく尖頭器を石器群の主体とする細石刃石器群衰退以降の段階VIの石器群はどうであろう。細石刃石器群の衰退時に出現するそれらの尖頭器は両面加工の大形・中形を中心とする。大形は10cm以上で細身を呈し、中形は4～5cmの基部の丸い幅広を呈する。だが、今回採集したような形態的特徴をもつ尖頭器はこの段階には顕著でない。

以上の検討から、本資料も含めた馬場平遺跡の尖頭器石器群は、細石刃出現の前段階（相模野段階VIII）に位置付けておくことに妥当性があると考えたい。

本稿を草するにあたり、堤隆氏と島田和高氏からは適切な御指導、御教示をいただいた。末筆ながら感謝の意を表したい。

（1995年5月23日脱稿）

引用参考文献

相田薫　1986　「第II文化層」　『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』大和市教育委員会

大竹憲昭　1988　「長野県先土器時代文化の編年」　『第1回長野県旧石器文化研究交流会』

栗島義明　1986　「槍先形尖頭器石器群の研究序説」　『考古学研究』32-4

白石浩之　1989　『旧石器時代の石槍』東京大学出版会

諏訪間順　1989　「相模野台地における尖頭器の様相」　『長野県考古学会誌』59・60

芹沢長介　1955　「長野県馬場平遺跡略報」　『石器時代第1号』

芹沢長介・柳沢和明　1982a「馬場平遺跡」　『長野県史考古資料編』全1巻(2)

芹沢長介・柳沢和明　1982b「柏垂遺跡」　『長野県誌考古資料編』全1巻(2)

堤　隆　1989　「尖頭器の形態的把握とその製作について」　『長野県考古学会誌』59・60

堤　隆　1993　『遠き狩人たちの八ヶ岳』ほおずき書籍

中村遺跡発掘調査団　1987　『中村遺跡』

林浩世　1992　「1馬場平遺跡」　『川上村誌』

森嶋稔　1988　「II時代と編年　1先土器時代の道具」　『長野県史考古資料編』全1巻(4)

柳沢和明　1985　「中部高地における後期旧石器時代石器群の構造変化」　『東北大学考古学研究報告』1

■　小田川　栄

昨年暮れに入会させていただきました。昭和61年頃から発掘調査に参加させていただいています。今は佐久市の上久保用向遺跡の整理を手伝っています。この他、栗毛坂遺跡や下茂内遺跡、自分の家の畑にある遺跡の発掘をしたこともあります。特に縄文時代に興味があります。どうぞよろしくお願いします。

■　柳沢宏幸

私は発掘作業に携わることはないのですが、研究者の方々により、佐久の歴史を包むベールが一枚づつ剥され、新たな事実が見えてくることに胸踊らせる一考古学ファンです。昨年から会員になり、多くの先達の方を知ることができ、心強く思っています。今後、現場の説明会等にも積極的に参加したいと思います。

これからも、新しい発見の裏には多くの方々の地道な作業と努力があることを忘れずに、私なりの研究を続けていきたいと考えていますので、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

■新入会員　上原祐子　〒384　小諸市諸143 1　☎0267-23-8445

♪　編集後記　♪

阪神大震災被災地の埋蔵文化財調査が問題となっている。「この非常時に遺跡の調査など必要あるのか」明日の生活さえ事欠くそんな状況からの生の声に、少なくとも私は、説得力あるその意義を説くことができない。情けない話だ。暗澹たる思いである。

しかし、行政・文化財保護法という大義名分のもと何千万・何億の血税が埋文に注ぎ込まれたが、果たしてその社会的意義がどれだけ説かれてきただろう。確かに行政担当者は期限と予算に追いつめられ身を粉にして埋文保護にあたっている。だが「理念」なき戦いは、マゾヒスティックな自己満足にすぎない。（つつみ）

佐久考古通信　No.65

発行所　佐久考古学会
〒384-01　長野県佐久市桜井879
白田武正　方
郵便振替　(旧)長野　7-2842
(新)00570-9-2842
☎0267 (62) 8133

発行者　由井茂也
編集者　堤　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL
1996. 6. 6. No 66
JOURNAL

★ 目 次 ★

■ 新刊紹介『現場取材、信濃の古代遺跡は語る』……堤 隆……1
■ 上州考古見学記……佐々木宗昭……3
■ 中ッ原第1遺跡G地点の新資料……堤 隆……4
■ 中ッ原のはっくつにさんかして……唐沢三兄弟……7
■ 東部町大川遺跡A地点SB-14号住居址出土土器について……小林眞寿……8
■ 土偶のつぶやき……各会員……12

新刊紹介
『現場取材、信濃の古代遺跡は語る』
片岡正人 著

1

夕方、FM長野の「よみうりタウン情報」というのを何気なく聞いていたら、片岡正人さんの『現場取材信濃の古代遺跡は語る』が東京の新泉社から発刊となったというニュースが流れた。

私の頭の中にニヤニヤとしたあの細い目があらわれやがて荻原健司似とも昭和天皇似ともいわれる片岡さんの顔が浮かんでできた……いけない。

その夜、私はうれしくなって、片岡さんに早速電話したのだが……飲みにいったらしく留守だった。

2

片岡さんは、読売新聞の記者、私よりひとつ年下の二十代前半（ンなわけないか）、1963年生まれである。読売では本社文化部で考古の記事を手がけている。

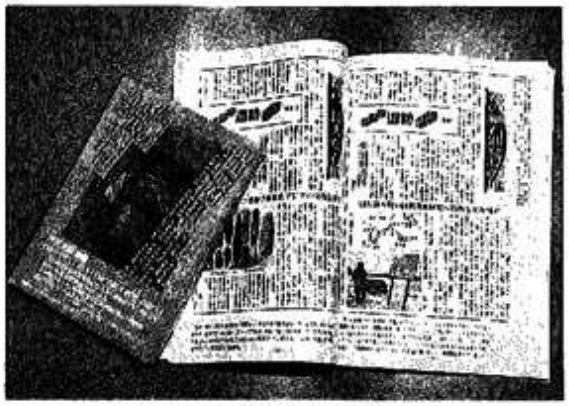
読売新聞の読者はしばしば目を通されていたとおもうが93年9月から70回にわたって読売に掲載された「しなの遺跡探訪」というシリーズがあった。片岡さんが長野支局時代に、信州の著名な遺跡を独特なエピソードを添えてルポしたもので、それが本書『現場取材信濃の古代遺跡は語る』としてまとめられ、発刊のはこびとなったのである。

本書の構成テーマは以下の十項目である。

1 遺跡に古代のロマンを追う
2 古代の人びとの暮らし
3 古代の災害を発掘する
4 時代像の再検討をうながす発見
5 論争を呼び起こした遺跡
6 さまざまな古代人の交流
7 古代人のこころに触れる
8 古代信濃の豪族たち
9 政治と戦いの匂いをもつ遺跡
10 現代に生きる古代遺跡

このテーマにそって、70数カ所の遺跡が紹介されている。たとえば佐久地方では、矢出川・下茂内・北西ノ久保・平石・川原田・栃原岩陰・入山峠などの遺跡が登場してくる。

片岡さんはまるであのXファイルのモルダー捜査官のようなカンの切れをみせ、これらの遺跡のナゾに立ち向かい、大胆な発想から遺跡を解釈している。とは



本書とウラ本（右）

いっても、モルダーのように、土偶＝宇宙人といったUFO直結型の思考回路をもたない。あくまで、考古学的事実を歪曲しないのである。が、それでいて時おりみせるユーモラスな発想には、脱帽してしまう。たとえば私が好きなのは「銅鐸＝ウエディングベル説」・・・・これぐらいのノリがあったほうが一般読者は考古学を楽しめるにちがいない。

一方、こんなシビアな記述もある。栃原岩陰の話しでは「ただ、この遺跡にとってもっとも不幸なのは、縄文時代早期を語るのに、これ以上はないと思われる資料が十分に活用されていないことだ。最初の発掘以来すでに30年近く。多くの人が、一日も早い調査報告書の刊行を望んでいる」と結ばれている。

3

片岡さんが出身校である東京都立大学で専攻したのは、コウコ学でなくコクゴ学であるそうだが、長野県考古学会の会員でもある片岡さんの考古学的知識は、相当なものである。たぶん、旧石器以外の知識はこの私よりずっと上だろう。少し調べれば学会誌にすぐ研究論文も書けちゃうぐらいの実力だとおもう。

さらに片岡さんは、自分の子供にハヤト君・ヒミコちゃんという名前までつけてしまう真の考古学オタクなんである。クソ～、こうなったらオレも対抗してやる。自分の子供にはもっとマニアックな名前をつけてやる。「やよい」ちゃんじゃ無難すぎるし、「須恵器」くんじゃ、あまいな。山梨に末木さんという縄文研究者がいたからな～。「多紐細文鏡子」（たちゅうさいもんきょうこ）じゃ、ちょっと長いか。ええい！「焼町子」なんてどうだろう。男だったら私の研究分野から「堤植刃器」では・・・・いいや「食人鬼」と発音が同じでマズイよな～。

おっと、片岡さんの新刊紹介だった。話をもとに戻さなくては・・・。

4

昨年９月、片岡さんが読売長野支局から東京本社に戻る際、それまでの記事「しなの遺跡探訪」シリーズが友人らによって一冊の冊子にまとめられ、『新聞記者片岡正人』という題で関係者に配布された。これは本書の原本、いやウラ本というべきものである（写真右の本）。

これには、片岡さんの、公共出版物には書けないユニークな遺跡についてのコメントや、人物評が載せられていて業界受けする。その中で私は「エッチでミーハー」な人物との最高の褒め言葉をいただいている。もっともこのエッチという点について片岡さんと私を比較したら、ゴジラとミニラ、あるいはウルトラマンとピグモン、小室哲哉と小室等、田原総一郎と田原俊彦、アムロナミエとヒムロキョウスケぐらいの差がついてしまう。もちろん片岡さんが哲哉、私が等、当然軍配がどちらに上がるかはおわかりとおもう。

著者の片岡さん（前列中央、手をひろげている人）
野辺山中ッ原遺跡の調査で

いずれにせよ、この楽しいウラ本も片岡さんの人柄を物語るものである。近くにお持ちの方がいたら、こちらもぜひ御覧いただきたいものである。

5

「縄文最大の黒曜石鉱山－長野県長門町－」1993年９月12日、読売新聞の全国版のトップを飾るニュースが出た。片岡記者がスクープしたものである。

本書にもその記事のコピーが載せられているが、その記事は、縄文時代観の転換を迫る縄文黒曜石鉱山の発見の意義を正確にしかも余すところなく伝える。

しかし、一方で片岡さんはこうもいう。

「遺跡の学術的価値や教育的意義を振りかざしてもあまり意味がない。まず楽しくなきゃいけない」と。

なるほど本書が堅苦しくなく、親しみやすいのはこんなところに理由がありそうである。

ともかく本書のご一読をお薦めする。

地元にいながら、私も大部分の遺跡にいったことがないことに、改めて気付かされた。いってみよっと！

本書に寄せて監修者の明治大学の戸沢充則先生はこう述べている。

「片岡記者の文章を読んで、もう一度改めてそこを訪ねてみたいと思う遺跡がいっぱいある。その時はきっと、片岡記者の記事が私に新しい感動をよびさましてくれるにちがいない。」

（堤　隆）

東京　新泉社　刊行　（税込み2,575円）
☎ 033（815）1662
電話注文，宅配によるブックサービスあり（送料700円）

上州考古見学記

佐々木宗昭

去る３月３Ｈ佐久考古学会恒例の見学研修会を行った。暖かな陽光が恋しく３月に計画を設定したが、当日はやや寒く感じる一日であった。しかし、冬晴れのもと由井会長を初め13名が参加し有意義な研修会を過ごすことができた。

今年は群馬県の資料館見学を主とし、高崎市「観音塚古墳」、榛東村「耳飾り館」、笠懸町「岩宿文化資料館」の３ヶ所を訪ねた。

碓氷峠を越えるとさすがに残雪の佐久平と違う陽差しである。明るくうららかな陽光が車中にぬくもりを感じさせる。ヒーターのスイッチを切り車窓を望むとはるか佐久の山々は白く雪化粧し佐久平の陽春はまだ先であることを知らせている。一方、進行する高速道路沿からは、梅の花が上州の風に揺られ春の訪れが感じられる。あらためて碓氷の峠の厳しさを思いつつ車は最初の目的地観音塚へと向かう。

車で約１時間、観音塚考古資料館は地方道渋川・安中線沿の八幡町にある。この資料館に隣接して観音塚古墳が所在する。

当古墳は、全長105ｍを測る横穴式の前方後円墳である。昭和20年３月に発見され、出土した副葬品は300点を超えた。中でも銅鏡、銀装の大刀他は、古墳と共に国指定の重要文化財となっている。これらの貴重な出土品が保管される資料館・古墳を見学し、次の目的地である耳飾り館へ向かうことにする。

※

40分程榛名山方面に進むと前橋台地の移行部にかけて拓けた榛東村がある。ここに平成４年11月に開館した「耳飾り館」がある。

当館には世界の35ヶ国から収集された綺麗な耳飾りが展示されている外、榛東村茅野遺跡から出土した耳飾り・岩版・土版等が国の重要文化財として一括指定されて所蔵されている。

茅野遺跡は、縄文時代中期から晩期にいたる集落遺跡である。古墳時代に噴火した榛名山の火山灰が厚く堆積し、遺構の保存状態がきわめて良好に残存していた遺跡の一つでもある。したがって多量の遺物が出土し、中でも耳飾りは約600点が出土し、その内の６割が完形品であったというから驚きである。

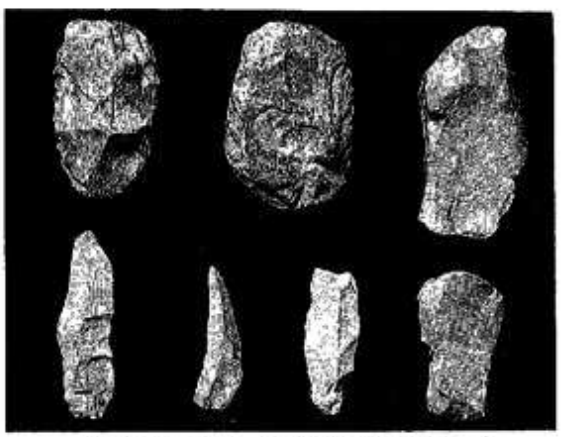
ＰＭ１：30分きらびやかで明るい雰囲気が印象に残る館を後に、岩宿文化資料館に車を走らせる。

※

前橋市から約30分程で笠懸町に入る。やがて「岩宿文化資料館」の標識が見え、左折することしばらくすると広大な公園が目に留まる。この園内に日本で最初に旧石器文化が発見された岩宿遺跡、そして文化資料館がある。この資料館には旧石器時代の遺物が展示されていることはもちろんであるが、時にはコンサート会場ともなるようである。まさに古きを訪ね新しきを知るホールでもある。

館内説明を聞き、発見現場へ行く。山井会長さんの話によると現地周辺は当時と大部違っており、発見者の相沢さんが通った道も今は一変したようである。しかし切通しとなっている地形は当初と大差はなく、そこに立つ「岩宿遺跡址」の石柱を見いる由井会長さんの後姿は感慨深そうであった。

帰路、春の陽光にジャンパーを脱いで運転をしていたはずだが、足もとが寒く感じる。ヒーターのスイッチを入れ、アクセルを踏むとすでに佐久と群馬の県境碓氷峠の厳しい坂にかかっていた。



岩宿遺跡の石器（資料館絵はがきより）

中ッ原第１遺跡 Ｇ地点の新資料

八ケ岳旧石器研究グループ
堤　隆

1

ここに紹介する資料は、細石刃文化の遺跡である南牧村野辺山中ッ原第１遺跡Ｇ地点（以下、１Ｇ地点と省略）において、本会会員山井一昭氏によって採集された資料である。

１Ｇ地点の最終調査報告は、この５月に刊行されてすでに完結をみており（八ケ岳旧石器研究グループ1996『中ッ原第１遺跡Ｇ地点の研究』II）、本資料の掲載がままならなかったため、この場所を借りて紹介することにしたい。

なお、１Ｇ地点は、発掘調査の結果、単一の細石刃石器群のみで構成されることが判明しており、本資料は表面採集品といえども、これに帰属することに疑いの余地がないことを明記しておく。

2

(1)　細石刃石核原形

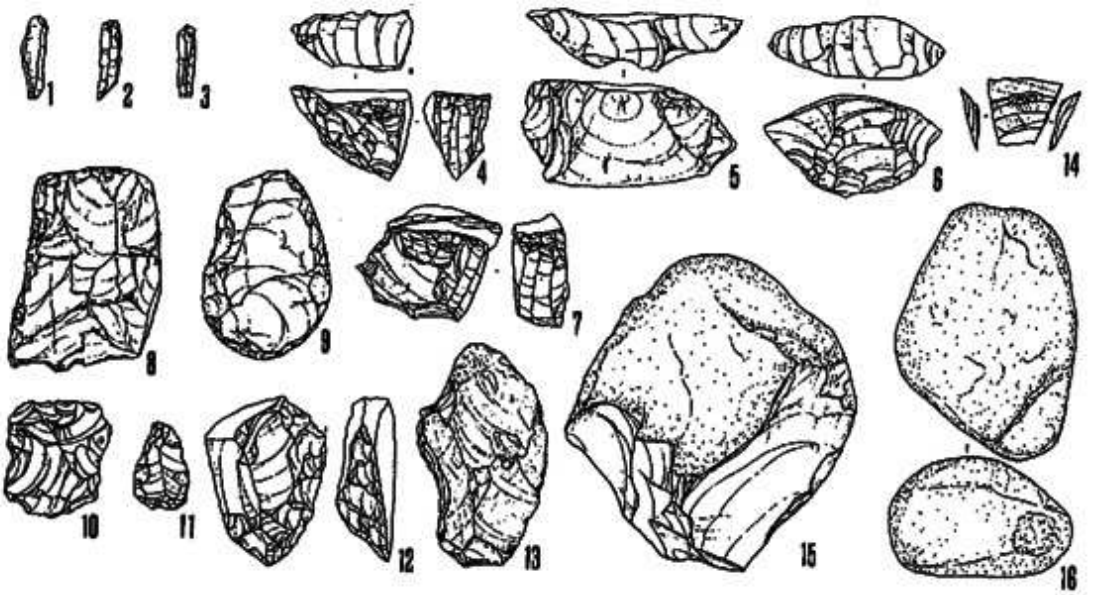
１は、黒曜石の細石刃石核原形である。表裏左右に残る原石面から、その元となる原石が、現在のサイズとあまり変わらない大きさであることがうかがえる。

まず、その長軸方向に剥離が加えられて細石刃剥離の際の打面（ｅ）が準備され、その後ａ面には下縁からの、ｃ面には下縁およびｅ面からの調整が若干施されている。細石刃剥離作業面にあてられるであろうｂ面は平坦な原石面のままで未調整である。また、その面の後背面（ｄ）も平坦な原石面のままで残っている。なお、ｃ面には下縁からのガジリ痕（図の空白部分）がある。本原形には非常にラフな加工が残るのみであり、端正な両面加工体を作り出す削片系細石刃技術とはかけ離れた感があるが、１Ｇ地点にはその両者が認められており、本資料も削片系細石刃技術のバラエティとしてとらえて差し支えないものと考えられる。

本資料は、石器群の中に共通個体がみられず、単独個体としてとらえられる。したがって１Ｇ地点にはこの状態で搬入され、一切の加工がなされなかったものとみられる。

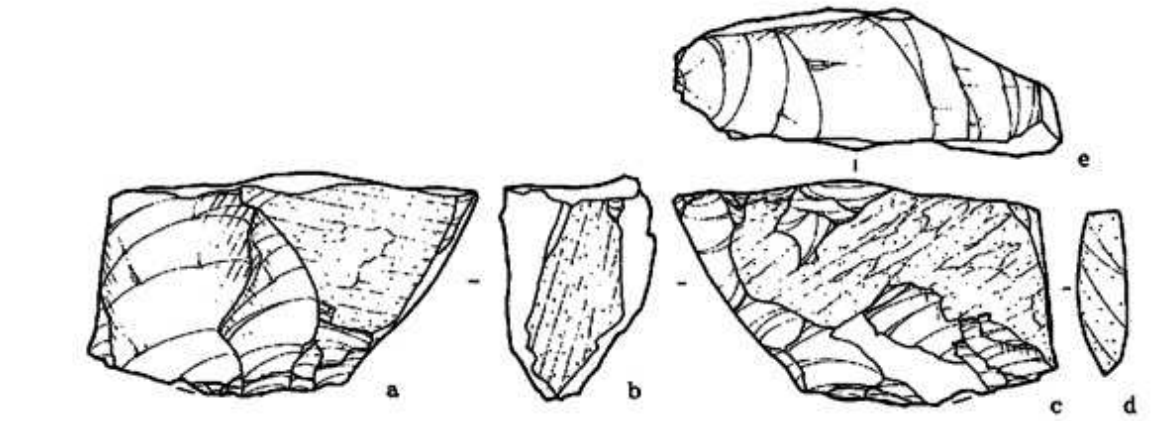
個体の特徴は、わずかな気泡を縞状に含む黒色の黒曜石で、肉眼では麦草峠産のものと推定される（ちなみに、肉眼で麦草峠産と推定された黒曜石について、蛍光Ｘ線分析の結果と照合すると九割以上の整合率が得られている）。

高さ・幅・奥行きは、36.5×25.5×62.0㎜,52.5ｇ。個体別資料№41。

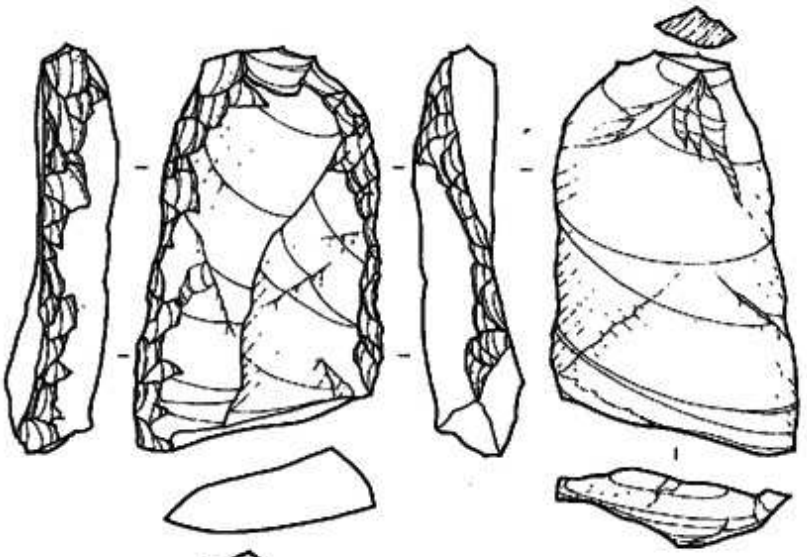


1～3＝細石刃　4・7＝細石刃石核　5・6＝細石刃石核原形　8・10・12＝削器　9・11＝掻器
13＝微小剥離痕を有する剥片　14＝切断剥片　15＝礫器　16＝敲石

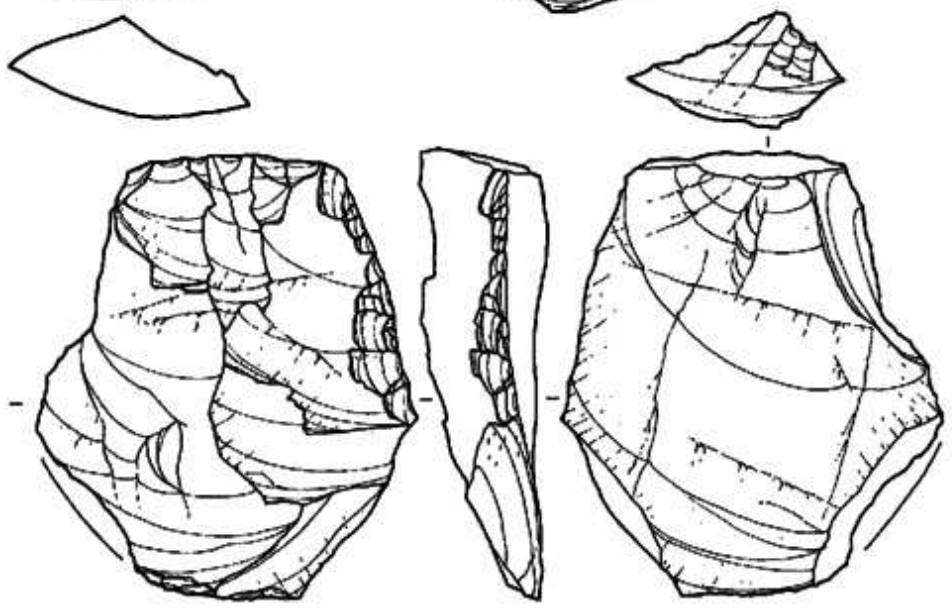
第１図　中ッ原１Ｇ地点における石器組成（1/3）（加藤1996）より



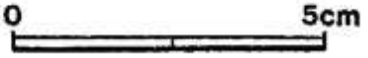
1　細石刃石核原形　黒曜石



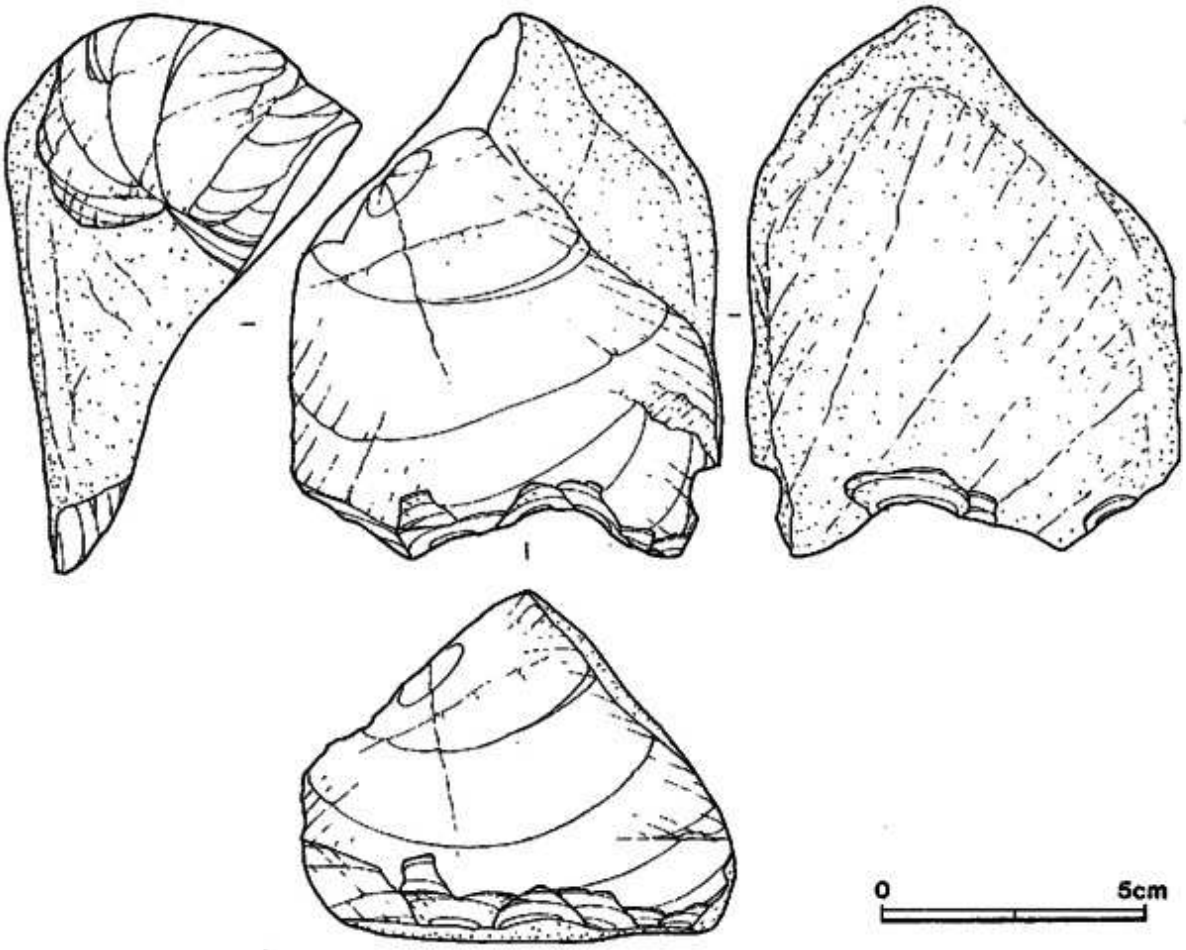
2　削器　チャート



3　削器　チャート



第2図　中ッ原ⅠG地点の新資料（4/5）



第3図　中ッ原ⅠG地点の新資料（2/3）

第Ⅰ表　中ッ原ⅠG地点　群別器種一覧表

	細刃刃	彫刻刀形石器	錐状石器	削器	掻器	加工痕のある剥片	微小剥離痕のある剥片	礫器	磨石	敲石	細石刃石核	細石刃核原形	削片	剥片	砕片	石核	原石	計
1　群	9						1					1	1	221	115			338
2　群	86			3	1	1	3	1	1	1	2	3	4	252	120		1	479
不　明	67			6	1	2	1	1			7	4	14	509	186	2		800
計	162			9	2	3	5	2	1	1	9	8	19	972	421	2	1	1,617

※新資料を含む

(2) 削器

2はチャートの削器である。素材である縦長剥片の両側縁に刃部が設けられている。また、下端部には折れ面が残る。折れ面と削器の刃部形成との新旧関係を切り合いから判断しにくいのでなんともいえないが、あるいは折れ面側にかつて刃部が付いていた場合、本資料が掻器である可能性も残る。なお、素材の縦長剥片の打面は節理面である。

石材は、節理が平行して密に入る青黒色（5B5/1）のチャートで、単独個体として1G地点に搬入されている。接合はみられなかったが、500m離れた5B地点の個体別資料No.19と質感が近く、同一個体である可能性がある。

64.0×40.0×18.0mm,38.4g。個体別資料No.42。

(3) 削器

3はチャートの削器である。素材は長幅にあまり差がないやや肉厚な剥片で、その片側の側縁と下縁に刃部が設けられている。ただし、下縁の半分を新しく欠くため、下縁の加工の状況は不明である。また、下縁と側刃部の中間には折れ面が残る。

節理が多く入る暗青灰色（5B4/1）チャートがその石材で、単独個体として1G地点に搬入されている。

76.0×61.5×20.5mm,76,3g。個体別資料No.43。

(4) 礫器

4は、円礫をおそらく二分割し、その核となった側を素材とした片刃礫器である。刃部とみられる縁には連続する小剥離痕が残るが、やや不規則に並ぶため、加工痕か使用痕かの判断がつかない。ただし、その裏側に単発で残る剥離痕は使用痕とみなしたほうがよいのかもしれない。なお、表側の連続剥離が使用痕の場合、本礫器は、分割によって生じた鋭いエッヂを、未加工のまま刃部としたものということになる。

石材は浅黄（2.5Y6/4）色のホルンフェルスで、風化が進行している。他に同一個体がなく、単独個体として1G地点に搬入されている。

105.0×82.5×68.5mm,455.3g。個体別資料No.44。

3

本資料を加えた1G地点の石器点数は第1表のとおりである。細石刃・削器・掻器・礫器・細石刃石核・細石刃石核原形といった組成に、本資料が追加されたことになる。

結論的にいえば、本資料が加わったことにより、器種組成の数量は変化したが、これまでの器種組成（第3図）の本質的な枠組み（たとえばこれまで認められなかった彫刻刀形石器といった新たな器種が加わったといったような）が変わるものではないといえる。

末筆ではあるが、本資料紹介を快諾いただいた由井一昭氏に御礼を申しあげる。

■ 唐沢 豊秀

僕が初めて発掘をした日は、3月29日、雪の降る日でした。次の日30日は、朝から雨でした。かっぱを着て、お父さん（唐沢緒孝さん）と一緒に発掘現場へ行き、ゆっくり土をけずっていると、11時ごろ僕のジョレンに初めて石が当たりました。手にとって見ると、それは、とうめいな黒曜石でつくられた細石刃でした。4人の中で、僕が最初に定形石器をほり出せて、うれしかったです。

またその日の夜、由井一昭さんの家へ石器を見に行きました。沢山あり、おどろきました。

■ 唐沢 謹宏（のりひろ）

お父さん、お兄ちゃんが、さい石じんをほりだしたのに、ぼくとりょうは、いくらほっても何も出ません。でも、はっくつさいしゅう日の4月1日、11時ごろぼくが、「何も出ない」と何度も言っていると、すどうさんが「ここは出るから、ここをほってごらん」と場所をかわってくれました。その場所をほっていると黒曜石の第1スポールが出てきました。すどうさんの言うとおりに、本当に出てきてびっくりしました。すどうさん、ありがとうございました。

■ からさわ りょうじ

4がつ1にち、おひるをすぎてもぼくだけなにもでません。でも、いっしょうけんめいほっていると、4じごろおおきなこくようせきがでてきました。ほりだしてみると、さいせきじんせきかくげんけいでした。1G1059は、ぼくがほりだしました。4にんのなかで、ぼくがいちばんおおきな、さいせっきをほりだしました。ぼくは、なかっぱらだい1いせきGちてんのさんかしゃのなかでいちばんちいさく、そのとき5さいでした。

東部町大川遺跡Ａ地点
ＳＢ−14号住居址出土土器について

小林眞寿

1　はじめに

長野県小県郡東部町和大川に所在する大川遺跡のＡ地点の調査は1990年に実施され、1992年に報告書が刊行されている。ここで取り扱うＳＢ−14号住居址出土の資料は、復元されていない状態で調査を担当した坂井美園氏に実見させていただき、強く興味を抱かされた土器群であり、その後、復元された姿を見て再度衝撃を受けた土器群である。

ＳＢ−14号住居址出土の土器は10点が図化されており、報告書においては住居址の様子、土器の出土状況等が細部にわたり入念に記載されている。しかし、その時期・型式等については語られておらず、位置付けを棚上げした結果となっている。

今回、この土器群を取り上げたのは「後沖式土器」、「新巻類型」、「焼町土器」をいわば地元の土器として有している地域においての異系統土器の存在や、過去において、あまりクローズアップされることがなかった、空間的・時間的にある広がりを有していると思われる土器群の存在を提示するためである。

2　位置付け

第１図に示した大川遺跡ＳＢ−14号住居址出土資料を個々に評価していく。

第１図−１（以下１−１と略記）の深鉢は地文に縄文を持ち、文様は全て半裁竹管による２条１組の沈線により描かれている。横位の半隆起線により口縁部文様帯と体部文様帯を区画する。口縁部文様帯は欠損しているため全容は不明であるが、残存部には縦位の沈線が細かく施されている。「Ｕ」字状、逆「Ｒ」字状の縦列モチーフにより、体部は縦位に４分割され、「ハ」字状の沈線が充填され、「ハ」字の中央を沈線が縦貫する。

この土器は、三上徹也・上田典男氏により縄文時代中期初頭の「松原土器」に比定されている。[1]類例としては２−６の寄山遺跡H74号住居址例や、２−７の梨久保遺跡Ｅ地点小竪穴451Ｐのものが認められる[2]。梨久保遺跡例は半裁竹管による沈線が半隆起線化しており、他の２例に比べ全体に精緻な作りである。この土器が縄文時代中期初頭に位置付けられることに対しては異論はないのだが、大川遺跡Ａ地点の土器について、筆者は三上、上田両氏と見解を異にする。第３図の写真は寄山遺跡H74号住居址における２−６の土器の出土状態である。ほど完形の２−４の浅鉢土器[3]が２−６を覆って出土している。２−６はH74号住出土の１〜５の土器とほぼ同時期の所産の可能性が認められるのではないのだろうか？　そうであれば、２−６の土器は縄文時代中期中葉に位置付けられる。大川遺跡Ａ地点１−１の土器を中期初頭の土器とする根拠は認められないように思われる。

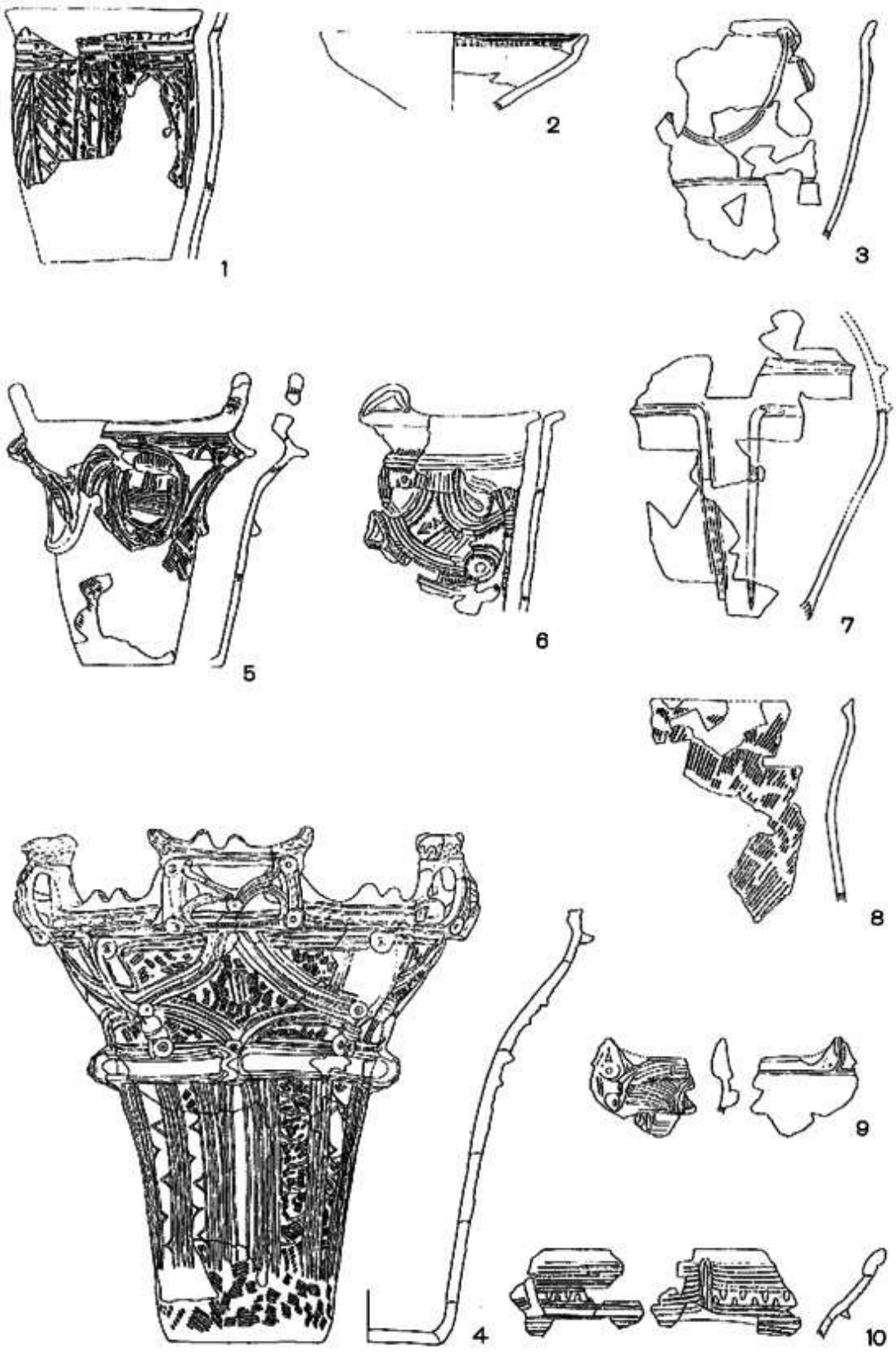
１−２の浅鉢は口唇部内面に半裁竹管による平行沈線と同一原体による爪形文が施されている。浅鉢土器については縄文時代中期初頭〜中葉の良好なセット例が少なく判然としないが、口唇部内面に施文されるものは中期初頭から中葉の古い時期[4]に多く認められ、初頭期のものは密接な爪形文により文様が描かれるものが多く、続く狢沢式期のものは、大石遺跡[5]資料では角押文により文様が描かれるものが多く見受けられる。文様面からは、１−２の資料は、中期初頭期や狢沢期のものよりは新しいように思われるが、根拠はない。

１−３の深鉢は、口縁部に隆帯による横位展開の半円区画が設けられ、体部下半に隆帯による横位区画線が施される。他に文様は施されない。あまり類例は知られないが、勝坂式土器の区画手法により作られた土器と思われる。

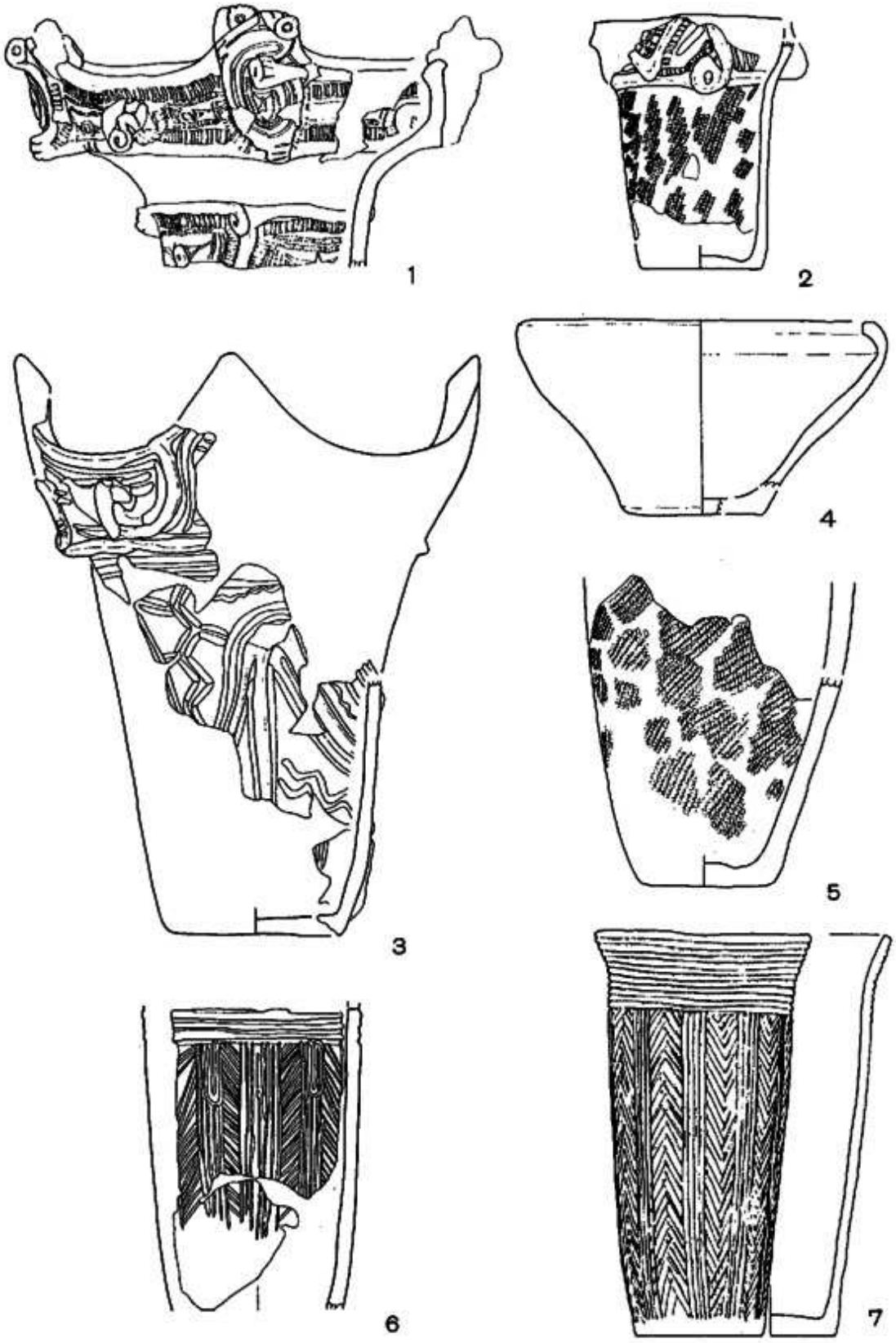
１−４の深鉢は特異な土器である。この土器も註[1]文献に１−１の土器と共に、三上徹也・上田典男氏により掲載されているが、文書中ではふれられていない。

口縁部に４ケ付される把手が、「火焔土器」の鶏頭冠に見えるのは筆者だけであろうか？　また、この把手を結び、口唇部に狭小な横位文様帯を造り出す張り出した隆帯と口唇部文様帯の存在、その下の口縁部文様帯を区画する向かい合う半円区画[6]、橋状突起により４分割される頸部の幅狭い文様帯、縦位の体部文様帯、器形等はすべて「火焔土器」と共通する。「火焔土器」と異なるのは地文に縄文を持つこと、口縁部文様帯の半裁竹管による２〜４本１組の短沈線、体部文様帯の４単位の逆「Ｕ」字状に垂下する隆帯と、それに沿う半隆起線により造り出された縦位の文様帯を更に４分割する数条の半隆起線間に描出された縦位の蛇行文の存在であろう。しかしこの蛇行文や地文の縄文は、福島県や栃木県、茨城県で出土する「火焔土器」様式の土器[7]には認められるのである。[8]以上のことから、この土器は「火焔土器」との密接な関係が推測され、中期中葉の土器であると考えられる。

１−５は「焼町土器」的な土器であるが、地文に縄文が施されること、環状突起を有さないこと、隆帯に沿う半裁竹管状工具による半隆起線が２〜３条しか施



第1図　大川遺跡A地点　SB－14出土土器（1/8）



第２図　寄山遺跡　Ｈ74号住居址出土土器（１～６）
梨久保遺跡Ｅ地点　小竪穴451Ｐ出土土器（７）（Ｓ＝1/4）

されず、全面に展開しない事等の相違点が認められる。また、無文の口唇部下に横位の半裁竹管等による数条の沈線を巡らすことや、隆帯による文様が口縁部にだけ施されている点などは「三原田式土器」と呼称される土器群に似ているが、口縁部の2ケの環状把手や、文様構成、器形等は異なる。更に隆体に沿う2～3条の半裁竹管状工具による半隆起線の存在や環状把手は「新巻類型」と呼ばれる土器群と共通するが、「新巻類型」を特徴付ける横位構成の口縁部文様帯と縦位構成の体部文様帯という2文様体構成はとらないため「新巻類型」とも異なる土器である。時期的には中期中葉の土器であろう。

1－6の土器は群馬県の新巻遺跡、房谷戸遺跡、三原田遺跡や長野県久保在家遺跡等に類例が認められる勝坂式土器で、特に新巻遺跡例に酷似している。中期中葉の土器である。

1－7は報告書で述べられているように有孔鍔付土器と考えて間違いないであろう。時期的には中期中葉の所産と思われる。

1－8は縄文だけが施される深鉢土器である。時期比定の根拠となる情報が存在しないため時期不明である。

1－9は「焼町土器」であり、中期中葉の土器である。

1－10の深鉢は、金雲母を多含する胎土や、茶褐色の色調、半裁竹管による数条の横位半隆起線間に施される交互刺突文等から、中期初頭の土器の可能性が強い。

3　整　理

報告書によれば、1－1・2は住居址床面から出土し、他は床面より浮いた状態で出土している。また、1－5に1－6の破片が伴出し、1－4に1－6の破片が伴出していることから1－6を介在させることにより1－4・5・6は同一所産期の可能性が高いとしている。

前項での個々の土器の位置付けからは、本址出土土器の大部分は、縄文時代中期中葉の所産であることが明らかとなった。では同時性はどうであろうか？1－4・5・6から考えてみたい。4は「火焔土器」様式の範疇で捉えられる土器である事から、その上限は「火焔土器」の出現期に固定される。つまり、大木8a式期であり、井戸尻編年に対比させた場合、藤内式期～井戸尻式期が該当するようである。(9) 5の土器はどうであろうか、環状把手に加えられる「挙状」と報告書において表現されている、半裁竹管による数条の半隆起線状の短沈線は、「新巻類型」では認められず、藤内式期以降の「焼町土器」に伴うものである。(10) 6の土器は、今のところ長野県や群馬県の一部の地域で、新道式期～藤内式期に認められる土器である。以上からこの3個体の土器は藤内式期において共伴してもよいように思われる。床面より浮いて出土した他の5個体の土器の内、1－10をのぞく1－3・7・8・9の4個体は、1－4・5・6と同時期の所産であっても問題はないように思える。では、床面から出土した1－1・2はどうであろうか。出土状態からは、若干の時間差が存在する可能性はあるが、ほぼ同時期と考えて良いのではないだろうか。

第3図　寄山遺跡　H74号住居址土器出土状況

4　まとめ

大川遺跡A地点SB－14号住居址出土土器は、実に興味深い内容を有する土器群である。特に1－1の土器が中期初頭からの系譜を引き、中期中葉に至るまで存在する土器である可能性を内包する事。1－4の土器は、長野県東信地方において初めて出土した「火焔土器」様式の土器である事。しかも、福島県や茨城県、栃木県で出土するものに近い事から、伝搬経路を千曲川下流域に限定して考えるよりも、群馬方面からの経路も考慮する必要があり、今後類例が発見される可能性は低いであろうが、地元の土器群との共伴関係の把握が必要である事。1－5の土器の時間的な位置付けは、今回の結論で正しいのか、否か。また、存在がアクシデント的なものなのか、普遍的であるのかを資料の蓄積により見極めなければならないであろう事。などいくつもの課題を提示している。

註

(1) 三上徹也・上田典男　1995　「縄文時代中期初頭土器群について―長野県の動向―」第8回縄文セミナー中期初頭の諸様相

(2) この他に、飯山市深沢遺跡に類例が存在する。

(3) 1995「寄山」報告書中において、2－4の浅鉢がH73号住居址出土の図版に掲載されているが誤りである。この場を借りて訂正させていただきたい。

(4) 具体的には、井戸尻編年の狢沢式期～新道式期。

(5) 長野県教育委員会　1975　長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　―茅野市・原村その1、富士見町その2―

(6) 例えば新潟県糸魚川市「長者ケ原遺跡」出土例や、新潟県長岡市「山下遺跡」出土例など。

(7) 小林達雄　1998　「縄文土器大観」3－火焔土器様式　での用語を使用した。

(8) 例えば、福島県郡山市「野中遺跡」出土例や、福島県西会津町「小屋田遺跡」出土例など。

(9) 小島俊彰　1988　「縄文土器大観」3－上山田・天神山式土器様式　の様式の並行関係を援用させていただいた。

(10) 「新巻類型」の環状把手は加飾が加えられない。「焼町土器」以外では勝坂式土器の把手に認められる。

引用・参考文献

坂井美鋼　1992　大川遺跡・中原遺跡群　東部町教委
1994　縄文文化の研究4　雄山閣出版

土偶のつぶやき

■　藤森和仁

信濃毎日新聞社に就職し、佐久支社に勤務することになりました藤森和仁です。大学時代に考古学を専攻していたので、少しでも今の仕事に役立てたいと思い、入会し勉強させていただくことになりました。

ただ、学生時代は『非常に』不まじめな学生で、学会や協会といったものに出席したことはなく、実測もまともにできないといったありさまです。

古墳時代を中心に勉強？してきたので、今度は縄文時代について知識を深めていきたいと思います。現地説明会や見学会、勉強会などがあったらぜひ誘ってください。佐久には三河田大塚はじめ後期古墳がたくさんあるので、古墳についてもさらに勉強していきたいと思っています。

佐久地域では高速道路と新幹線の開設工事でいくつもの遺跡が発見されましたが、記録保存の名のもとに壊されてしまいました。中央高速道路が開設されたときにも多くの遺跡が発見されながら、阿久遺跡が埋土保存されただけでほかの遺跡はほとんど記録保存になってしまいました。現在これほど文化財についての関心が高まっていながら、行政の対応が当時とそれほど変わっていないことが残念です。

無くなってしまった遺跡は元には戻りません。なぜ、保存できなかったか、工事は適切に進められたのか（十分に調査をするだけの時間が保証されていたのかなど）をマスコミは検討しなければならないと思います。入会して、文化財の保存のために何を成すべきかを考えていけたらと思っています。考古学も含め佐久について全く無知ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

■　安藤正俊　唐沢繕孝（よしたか）

佐久考古学会の皆様初めまして。今回、会員になりました、愛知県の安藤と唐沢です。どうぞ、よろしくお願いします。私達は約20年前、藤森先生の『信濃考古学散歩』を手に伊那谷、諏訪、霧ケ峰、野辺山、信濃川上と2度旅しました。そして、唐沢は昨年の春、中ッ原1G2次調査に参加しました。安藤も、また機会があれば参加したいと思っています。唐沢が2次調査に参加できたのは、堤さんの著書『遠き狩人たちの八ケ岳』との出合い、そして、会員で「ペンション森のふぁみりぃ」の平松さんご夫婦の仲介のお陰でした。1G2次調査では、参加された佐久考古学会の皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。こんな二人ですがどうぞよろしくお願いします。

♪新しく入会された会員のご紹介♪

◆唐沢繕孝　☎ 0565（45）1170
〒470-03　豊田市高町東山　4-32

◆安藤正俊　☎ 0565（45）9698
〒470-03　豊田市四郷町下古屋　57-8

◆藤森和仁　☎ 0267（67）9614
〒385　佐久市岩村田687 さかいコーポ 103号

◆藤森英二　☎ 0267（77）2231
〒400-01　南佐久郡北相木村 3210、2号室

◆古越永子　☎ 025（270）7939
〒950　新潟市向陽1-13-3 フレグランス向陽101

佐久考古通信　No.66

発行所　佐久考古学会
〒384-01　長野県佐久市桜井879
臼田武正方
郵便振替　（新）00570-9-2842
☎0267（62）8133

発行者　由井茂也
編集者　堤　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL
1996. 7. 30. No 67
JOURNAL

★ 目 次 ★

■ 佐久考古学会総会報告……事 務 局……1
■ ごあいさつ……井出正義……2
■ 会長退任のごあいさつ……由井茂也……3
■ 1996年度佐久考古学会新役員……事 務 局……3
■ 鄧先生をお迎えして……事 務 局……3
■ 考古学はほんとうにニュースか？……片岡正人……4
■ 神戸通信……藤原直人……6
■ 身近な発掘調査の動向……臼田武正……7
■ 地主さんからいただいた黒曜石のおっかけ……唐沢綉孝・安藤正俊……8
■ 土偶のつぶやき……事 務 局……3
■ 外報・森嶋稔先生ご逝去……事 務 局……12

佐久考古学会総会報告

事務局

日時　平成8年6月15日（土）午後4時から
会場　浅間会館（佐久市岩村田）

佐久考古学会は昭和45年の発足以来26年目を迎えた。総会は1年に2回開かれたこともあったので通算31回目である。この31回目の総会は佐久考古学会にとって大きな節目となった。

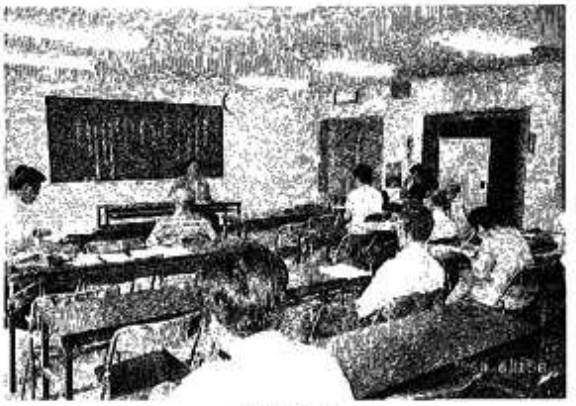
議長に選出されたのは八千穂村の佐々木廣雄会員。第1号議案の活動及び決算報告は難なく承認され通過した。

ところが第2号議案の役員改選の件は会長の後任人事で難航した。話は1年前に遡る。総会直前に山井茂也会長は高齢と健康上の理由から会長辞任の文書を提出された。矢出川遺跡国史跡指定の記念行事を控えた年でもあったため、何とか後1年と言うことで山井会長から了承を得、後任については役員会等で幾度か慎重に検討されてきた。総会当日、新役員の選出は地区役員が選出委員会を組織して決定することになった。そこで推薦された新会長は井出正義氏であった。佐久考古学会の若返りを念願する井出氏は自分の高齢を理由に何度も固辞されたが、これからの佐久考古学会を真剣に考える諸氏から井出会長就任を要請する意見が多く提出され、遂に新会長誕生の運びとなった。約22年にわたり、会長の重責を担い続けた由井茂也氏には顧問の席にお着き頂いた。

第3号議案の土器造り体験等の新企画が盛り込まれた活動計画及予算案は無事通過した。

例年になく白熱した意見が飛び交った総会議事を見事に乗り切ってくださった佐々木議長本当にご苦労様でした。紙面を借りてお礼申し上げます。

総会終了後の懇親会は、星河園という中国料理の店で行われた。会員のほか矢出川遺跡見学のため、信州へお越しの香港中文大学主任研究員の鄧聰先生が特別参加され、日中両国の考古学談話に花が咲いた。久しぶりにたくさん飲んだ人もいたのではないでしょうか。



総会風景

ごあいさつ

佐久考古学会
新会長
井出正義

由井茂也さんが会長を辞めたいといっているときいて、ことしは止めようがないと思いました。由井会長が辞意を表明してからもう10年以上になります。しかしその間、会員の誰もがそれを認めませんでした。由井さんは佐久考古学会の核であり、象徴であり、誇りであると誰もが信じていたからです。由井さんは幾度が病気もしましたが、そのつど克服してきました。会員もその強い心身の健康を信じて、当然のように無理をお願いしてきたのです。その由井さんが多年の懸案である矢出川遺跡の国史跡指定を果たしたいま、いちばんの念願は、多年ご苦労をおかけした、奥さまのご心労をねぎらってお上げしたいというお気持ちだと思います。由井さんの後輩をだいじにし、考古学を愛する人柄と熱意によって、佐久考古学会には、りっぱな若い研究者と後継者がたくさん育ってきています。いまこそ若い人たちが心を一つにして、新しい技術と理論を活用して、佐久地域社会の文化と、歴史認識の理解と発展のために、積極的な活動をますます強化していくときがきたのだと思います。現在長野県考古学会事務局を担当して、その実力を高く評価されています。

さて、このたび私は皆様のご推薦によって、県学会事務局担当期限の完了するまでということで、つなぎの役をつとめることになりました。顧問の由井さんに学びながらみなさんと共に同好の道を歩んでまいりたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

ここでこのたび佐久考古学会の顧問に就任された由井さんの若き日についてふれておきたいと思います。

由井さんの家は代々御所平の名主役の旧家で、祖父茂平は漢学、和歌に通じ、医を業とし、村の子弟に読書、算術を教えました。父保平は川上村村長、郡会議員。茂也さんは明治38年に生まれました。茂の字は祖父からいただいたもので、茂也さんの和歌、俳句、歴史への関心は祖父ゆずりなのでしょう。茂也さんは第一次世界大戦後の農村苦境の中で、社会問題に関心をよせ、大正15年新潟県木崎村（豊栄市）に小作争議で農民組合員の児童を対象とする農民小学校と無産農民学校ができると、21歳の由井さんは、自らこれに参加。稲村隆一から日本農民史を学び、夜間は小学校で珠算と国語の指導をしましたが、生家に警察の手がまわってよび戻されています。これを機に労農党支持に進み、青年団運動に関係して反戦思想を深めました。農民自治会南佐久連合会の組織指導者竹内圀衛（御牧原開拓農家の生れ）は昭和２年、突然由井さんを訪ね、以後親交を結んでいます。昭和５年５月、竹内圀衛は御牧ケ原大運動会で、反戦ビラを撒布する腹案をもって川上村に由井さんを訪ねます。御牧ケ原大運動会は日本海々戦を記念して、毎年５月27日、北佐久郡下全小学校３年以上と中等学校が参加する全郡の大行事でした。特にその回は第25回の記念大会で、海軍中将中島資朋と県学務部長が出席して祝辞を述べることになっていました。参加職員547人、児童生徒9382人、観衆３万人が集まったのです。（28日の「信毎」）

竹内と由井さんは協議の上文案を練り、由井さんが原紙をきり、竹内が持参し、柳沢恰が印刷しました。(1)治安維持法反対、(2)軍国主義反対、(3)帝国主義反対、(4)天皇制打倒、(5)戦争を記念する運動会反対、の五項目を記した藁半紙四つ切の反戦ビラをそこで撒布したのです。観衆のすきをみて、ビラは風呂敷や脱いだ衣服に忍ばされたといいます。そして、引続き小諸小学校で講演した中島中将の玄関に脱いだ長靴の中からそのビラが発見されて大騒ぎになりました。柳沢恰は目撃者の証言で逮捕されましたが、自分が一人でやったと主張しつづけます。由井さんには高倉輝の使いで鈴木茂利美が自転車でかけつけ、柳沢ががんばっているから絶対に否認するようにとの伝言がありました。そして運の良いことに駐在巡査の家宅捜査では証拠物件は出なかったのです。（大井隆男著『農民自治運動史』―転換期の青春群像）

当時の社会運動・農民運動は、個人や一家の浮沈にかかわりかねない危険性をもっていました。その実践には慎重な配慮と果断な行動が必要であったのです。由井さんの誰に対しても優しくおだやかな人がらの中にはそれを支えた、私たちの想像を超えた強靱なものがあったのだと思います。

天皇制や神話に疑問をもった若い由井さんは、はやくから地上の自然や地下の遺物に鋭い目をむけていました。長い間の採集や観察で、縄文土器や石鏃・石器こそ歴史の証人であると考えていました。これが戦後学問の自由と共に馬場平や矢出川の発見に結びついていったもので、それは単なる偶然ではなく、永年の緻密な観察と資料処理という考古学的な手法によって得られた結果であったと考えられます。私たちは由井茂也さんにもっともっと人間として学ばなければならないものがたくさんあると思います。由井さんの一層のご健康にご期待申し上げ、佐久考古学会がますます楽しい学問の会であるように願っております。

会長退任のごあいさつ

由井茂也

命長ければ恥多しといわれながら、思いがけない長居をしてしまいました。もともと考古学に対する学識があったわけでも、また熱心な研究心があったわけでもありませんでした。

一片の土器を拾ったり、一個の石器を見つけたりしたそのたびに、これがほんとうの人間の歴史だと思い、権力のために作られた史観に対する反ばつ心を盛んに燃した青年の日を思い出します。そうして、無意識の間に自然と研究者達に接する機会が生じ、いつかその後をついて歩くようになってしまいました。後をついて歩いていると、考古学が非常に若い学問であり、それは限りない高遠な学問ではあるが、すばらしく幅の広い学問で、またそれは一人学者達の学問ではなく、特殊な学問が無くとも、われわれにも出来ることのある学問だということを思いつくようになりました。

芹沢長介さんから相沢忠洋さんの話をきき、又藤森栄一先生に接するようになって、その感を一層強く持つようになりました。地域に住む者でなければ、どうすることもできない研究の分野があることを強く感ずるようになりました。それは自分自身が研究者になることではなく、研究を支える人間になること、それはそれとして実に大切な仕事だと私は今も変らずに信じています。

「初心忘るべからず」私はこの初心のままついに進歩も発展もなく、ほんとうに平凡にこの年齢を迎えてしまいました。しかし私は悔る事はありません。むしろそのことを誇りとしています。そしてこの長い間、心から楽しく老いを忘れて過させていただいた佐久考古学会会員の皆さんに、ほんとうに心から感謝を申しあげます。また、新会長のもとでの皆さんのご活躍と、ご発展をお祈りいたします。

ほんとうにありがとうございました。

1996年度　佐久考古学会　新役員

会　　長　　井出正義
副 会 長　　藤沢平治
地区役員
Ⅰ地区（軽井沢・御代田・小諸）高地正雄
Ⅱ地区（北御牧・浅科・立科・望月）倉見　渡
Ⅲ地区（佐久市）木内　捷・羽毛田伸博
Ⅳ地区（臼田・佐久町・八千穂・小海）
佐々木廣雄
Ⅴ地区　（北相木・南相木・南牧・川上）中島芳榮
Ⅵ地区　（佐久地区以外）　藤原直人
会計監査　井上行雄・由井　明
事 務 局
事務局長　　臼田武正
幹　　事　上原　学・小林眞寿・小山岳夫・桜井秀雄・
佐々木宗昭・冨沢一明・堤　　隆・
林　幸彦・星野保彦・三石宗一
顧　　問　由井茂也

鄧先生をお迎えして

6月15日の佐久考古学会の総会の折、長野県内のIH石器時代資料の実見のために来日されていた香港中文大学の鄧聰（タン・チュン）先生をお迎えする機会が得られました。

先生はかつて日本の東北大学に留学され、芹沢長介先生のもとでIH石器時代を研究され香港に戻られました。中国大陸のみならず日本の細石器文化にも造詣が深く、特に矢出川や中ッ原遺跡に深い関心を寄せられ、今回のご訪問実現となった訳です。

当日、矢出川遺跡の現地をご案内したあと、日本の細石器文化の発見者でもある由井茂也顧問と総会でお会いいただくことができ、感慨深い機会でした。懇親会では先生の流暢な日本語で、夜遅くまで考古学の話に花が咲きました。

鄧先生と由井顧問

考古学はほんとうにニュースか？

読売新聞
文化部記者
片岡正人

◆はじめに

「最近、遺跡の発掘のニュースが毎日のように新聞の紙面を賑わせている」といった書き出しで始まる考古学研究者のエッセイを最近、たびたび見かけるようになった。考古学業界のみなさまが新聞の考古学報道に関心をもってくださっていることの表れであり、報道機関に身をおく者として、「ありがたいことだ」と思っている。しかし、その文章の中には「記事の正確さ」や「記事の大きさの妥当性」が批判されていることが少なくない。ここでは、そうした新聞に対する業界の方々の期待感と不信感に対し、多少なりとも回答が示せればと思っている。

◆なぜ、考古学の話ばかりが新聞に載るのか

世には何種類の学問があるのだろうか。見当もつかないが、数ある学問の分野のうち、新聞に載る頻度が最も高いのは考古学であることは間違いない。「政治、経済のニュースもあるぞ。あれは政治学、経済学ではないのか」と言われるかもしれないが、あれは学問ではない。現象である。（考古学の記事だって、何が出土したというだけの話なら、現象じゃないか――そんな、いじめないでください）

新聞というのは、文字通り「新しいことを聞く（書く）」ものなのに、どうして考古学のような古い話がたくさん載るのか。それは、新聞に掲載される他の学問分野に目を向けるとわかりやすい。考古学以外では、天文学、医学、それから、文学、美術（これは学問というより芸術かな）、ってところだろうか。これらは、こんな風に出てくる。「百億光年離れた恒星を確認」「初めての生体肝移植に成功」「井上靖の未発表原稿発見」。共通点にお気づきだろうか。そう、学問とは言いながら、学説を紹介しているのではなく、誰が見ても自明な「新発見」「新しい事業」を記事にしているのである。つまり、新聞から見れば、考古学は「古い」のではなく「新しい」ことになる。毎年全国で一万件近くも発掘調査が行われていれば、それだけ載る頻度も高くなるわけだ。

しかし、これは現実面での話で、忘れてはいけないのは「考古学は人間の学問である」という根本的な問題である。発掘で出てきたモノは、すべて我々の先人が残した足跡である。だからこそ、人々の関心も高く、ロマンもかきたてられる。それが、考古学を新聞が好んで取り上げる最大の理由である。

◆新聞は考古学記事をどのように位置づけているか

前項で考古学を最大限に持ち上げておきながら、新聞全体の中での考古学記事の地位ははっきり言ってあまり高くないということも申し上げておかなければならない。

新聞のニュースは大きく分けて、「生ダネ」（日付もの、ともいう）と「話題もの」の二つがある。「生ダネ」は、事件・事故や国会、スポーツなど、翌日の朝刊もしくはその日の夕刊に必ず載せなければいけないもの、「話題もの」は記者自身が掘り起こしてきた町ダネみたいなもので、時期を逸しなければ、いつ載せてもいいものである。当然、その日の紙面割りを決める際には、「生ダネ」が優先される。「話題もの」はそのニュース価値の軽重にもよるが、「生ダネ」が多い日に載せようとすれば、扱いは小さくなるし、大きく扱おうとすれば、何日か待たされることになる。

では、考古学はどちらか。藤ノ木古墳や吉野ケ里遺跡のように、ほとんど衆人環視のもとで行われるようになると「生ダネ」になるが、基本的には「話題もの」である。だから、考古学の記事は格が一段低い。考古学を担当している記者（とくに筆者）は、その克服に向け日夜奮闘しているのだが、社内的に悲しい思いをすることがたびたびである。

◆どんな発掘の話が記事になるか

新聞の考古学の記事は「最古」「最大」「全国初」（地方版では「県内初」とか）ばかりで、本当の学術的価値に基づく扱いがなされていないと、業界の方々が批判されているのを、よく耳にする。確かにそうである。でも、言い訳をさせてほしい。

一つは、先に上げたキーワードは結構、学術的価値を物語っていると思うのである。「最大」は例えば「当時、こんなに大きなものをつくる技術があった」ということを示す。「最古」は「これまでの定説を何百年遡上るものである」。「全国初」は新しい資料を提供するという意味で価値は大きいはずだ。

二つめには、学術的価値をニュースの柱に据えた場

合、その説明がむずかしく、原稿が長くなってしまうし、ひと言で的確に示す見出しがつけにくいということがある。

三つめには、学術的関心と読者の関心は必ずしも一致しておらず、新聞は読者寄りのスタンスをとっているということである。例えば、三内丸山遺跡が話題になっている時期であれば、他の遺跡ですでに発見されており、めずらしくないものでも、三内丸山遺跡で出たからということで記事になることは十分ありえる。我々の業界では、こういう扱い方を「三内丸山遺跡なら、その名前だけで一段アップだ」などという。

新聞にとってみれば、先にも述べたように「新しい」ことに最大の価値を置いているので、「最大」か「二番目に大きいか」は月とスッポンのような差がある。しかし、学術的には「ひとつだけ」より類例が増える方が意味がある場合があり、それも無視できない。また、資料の集成がいきとどいていない場合や年代判定の問題で、最大かどうか、最古かどうか、がはっきりしないことも少なくない。その場合は「最大級」や「最古級」という表現でごまかしながら、学術的な立場にも配慮しているつもりなのだが、最近では、この言葉づかいを批判する声もあって、とほほほである。

◆考古学報道と特ダネ1

遺跡の発掘のニュースが記事になるのは、二つのケースがある。発掘主体が記者発表する場合と、記者個人が発掘現場に行って取材し記事にする場合である。関西などでは、発表がほとんどだが、東日本では独自取材がけっこう多い。よく「○×新聞は考古学記事が充実しているね」などという話を聞くことがあるが、とくに会社として考古学に力を入れているという社はないように思う。読売新聞の場合も、文化部に担当が二人いるが、社が「考古学は重要」と認識して、担当を増やしたのではなく、筆者自身が既成事実をつくって居すわってしまっただけのことである。だから、考古学報道は考古学の好きな記者個人に寄りかかっている面が少なくない。それは、地方支局の場合の方がはっきりしている。好きな記者がいる社は必然的に遺跡の記事が多くなるのである。

新聞社というのは、見かけ以上に他社との競争が激しいところである。一般には、「特ダネ競争」とか「スクープ合戦」などと言われたりするが、業界内ではあまりそういう表現はつかわない。「ぬいた」「ぬかれた」という。我々新聞記者にとっては、日々、他社との競争の結果が各紙の紙面に表れるということが、自らの仕事に対する誇りとエネルギーにつながっているのである。一般の読者はふつう、一紙しか購読していないのだから、自分の新聞が「ぬかれている」などということに、ほとんど気づかないのだが。

「ぬかれる」と、「追いかける」のが普通である。事件がらみや政治関連のニュースはたいてい、悔しさをこらえて「追いかける」。そのネタは是非掲載しなければいけないもので、書かないことが読者の信頼を失うことにつながると考えるからである。しかし、「話題もの」と認識されている考古学記事は「ぬいて」も、あまり追いかけられない。ここには、新聞社独特の心理がはたらいている。その理屈は筆者が理解する限り、こうである。話題ものは記者が掘り起こしたニュースで、記者（新聞社）が「このネタはおもしろい」と判断したから記事にした、そういう性格のものである。だから、ぬかれた方は、追いかけないことによって、「そのネタは（もともと知っていたが）、当社はあまりおもしろくないと判断していた」ということを示すのである。あわてて追いかけると「私どもは、重要なネタを見落としていた」という格好の悪い姿をさらすことになるから、追いかけないのである。つまり虚勢である。

◆考古学報道と特ダネ2

その一方で、どこかの新聞だけに記事が出ると、発掘主体である教育委員会や埋蔵文化財センターへ、「どうして一社だけに情報を流すんだ」などと、ぬかれた新聞社が苦情を言ってくることがあるらしい。彼らは別に特定の社だけに積極的に流したのではない。取材に来たから、それに答えただけである。だいたい、他社との競争を行動原理にしている新聞記者は、情報を握っている人間に対し自分だけにそっと情報を流してくれるよう信頼関係を築くのが究極の目標のはずである。遺跡に足を運ぶ努力もせず、「こんなモノが出ました」という電話を待っている記者に、記者の資格はない。

ところが、こんな新聞社があるためか、せっかく取材に行っても発掘主体側に渋い顔をされることがある。曰く、「一社だけに載ると、他の新聞社さんに叱られますので。一斉に発表したいんです」。取材に行ったら、他社にも連絡されてしまったという最悪のケースもある。曰く、「全社に平等にと思いまして」。行政側が一

斉に記者発表をしたいという発想はわかる。しかし、この平等は、努力している者としていない者を同列に扱うという意味で、全くの悪平等である。勉強した人も遊んでばかりいた人も、同じようにいい大学に入れるような世の中だったら、やっぱりおかしいでしょう。

◆結　び

新聞社の立場から、いろいろ注文めいたことを書いてきたが、行政の方も新聞社を上手に利用すべきだと思う。もちろん、開発に伴う発掘調査では、新聞に報道されることによって、調査に時間がかかるようになったり、保存運動が起こったりしては、事業者に迷惑がかかるという恐れから、消極的にならざるをえない場合もあるだろう。しかし、それだけの発想ではつぶされる遺跡がかわいそうである。

新聞には、特ダネは大きく扱うという習性がある。考古学記事は「追いかけない」と書いたばかりだが、その記事が大きければ大きいほど、追いかけざるをえなくなるのである。その場合、その大きさに引きずられ、追いかけ記事もそれなりの扱いになる。一方、発表で横並びになると、わざわざ大きくしようという心理はなくなるので、扱いにも低調にならざるをえない。だから、宣伝効果は一社に特ダネを書かせた方が絶大である。何も積極的にリークしろ、とは言うのではない。どこかの記者が取材に来たら、大きく扱ってもらえるよう、どんどん宣伝した方がいいですよということである。どうか、よろしく。

阪神大震災復興支援発掘調査のため、今年４月から長野県教育委員会より派遣されている藤原直人会員からのお便りです。

※

青葉麗しい五月の風は、いつしか、あの暑い夏の準備に入ったようで、なま温かい風に変わり、どんよりした雲が六甲山をおおい隠して今日も見えません。そういえば、私が生まれた関東の空も六月は「こんなふうに暑かったなぁ」と懐かしくもあって感慨深いですが、身体には少しこたえる神戸の毎日です。そんな日はやはり長野の空と山と街と…が、なつかしく…少しホームシック？？。

阪神・淡路大震災からおよそ一年半の月日が経とうとしています。神戸に来たばかりの頃は、建築物の倒壊や火災の跡など見ることもなく、予想以上の街の活気に驚きましたが、一カ月、二カ月と神戸での生活が続くうち、この街の現状は、かなり深刻であることに気付きました。一歩路地裏に入れば・下町に行けば、瓦礫こそ無いものの目を覆うばかりの状況です。そこには倒壊や火災から免れた建物がまばらに残り、まるで飛行機から爆撃でもされたかのような荒涼とした街の形骸が横たわっていました。

数百年かけて築かれた街を襲った惨劇は、一年二年の復旧・復興で「簡単に元に戻せるものではないのだなぁ」というのが最近の実感です。そこには神戸・阪神地域が震災前から抱えていたさまざまな問題と震災とが複雑に絡みあって、震災復興の声高なコールを見聞きすると、如何ともしがたい現実が神戸の人々の前に立ちはだかっているのを目の当りにさせられ空虚さえ覚えます。「がんばれ！神戸」「頑張ろう神戸！」の垂れ幕・ステッカーが頼もしくもあり、悲しくも…梅雨空にはためいています。

震災復興に関しての復興支援発掘調査は兵庫県の十市十町（神戸市を初めとして阪神間と淡路島の一市十町を含めて）で行われています。最初の現場は川西市で、東は大阪府に接しすぐ横には大阪空港（伊丹空港）があり、西はあの宝塚、という兵庫県でも東の端の地でした。次（今回）の現場は神戸市の北区で、その名の通り神戸市の北に位置する山間地です。総調査面積は約12,000㎡の都市区画整備に関わるもので、約５カ月間の予定で６月から開始しています。

今日こうしていることを去年の今頃は想像もしていませんでしたが…。

私のほうは、あいも変わらず誠実（？）な毎日を送っております。

知らない土地でしんどいこともありますが、見慣れぬものや聞き慣れない言葉があふれていて見るもの聞くもの…すべて新鮮で面白いです。

照る照る坊主を疎ましく思う頃となりましたが、夏バテなどないよう…。

近いうちに又顔を出します。

それでは又

一九九六年六月十四日

神戸・日下部遺跡にて

身近な発掘調査の動向

今年も佐久各地で発掘調査が行われています。既に調査が済んだ遺跡（●）・現在調査中の遺跡（◎）・今後調査予定の遺跡（○）について6月末時点の動向を紹介しますので、折を見て立ち寄ってみてはいかがでしょうか。今後も状況に応じて紹介していきたいと思いますので、最寄りの発掘調査・遺物出土・遺跡発見などに関する情報を（今回掲載できなかった分も含めて）編集担当または事務局までお知らせください。

＊川上村

●居倉地区で、かつて耕作中に五輪塔が出土したという畑地の確認調査を6月に行ったが、新たな発見はなかった。立会／由井茂也・井出正義

＊八千穂村

●村誌編纂事業の一環として、3月に村内の遺跡詳細分布調査を実施。鴛ノ口集落の入り口付近で土師質土器（かわらけ）が集中して採集され、中世居館跡の可能性がある新遺跡を発見した。この分布調査は今後も計画的に行われる予定で結果が期待される。担当／佐々木虎雄・佐々木春蔵・佐々木宗昭

＊佐久市

●円正坊遺跡（岩村田）　鉄塔建設に伴い5月・6月に発掘。竪穴住居跡（弥生4、古墳2、平安1）、掘立柱建物跡1、土坑5などを調査。担当／宮沢一明

○上の城遺跡群観音堂遺跡（岩田村）　国道141号バイパス建設予定地で4月～6月に発掘。弥生時代中期から平安時代の竪穴住居跡72、同掘立柱建物跡28、土坑14、溝19などを調査。円面硯も出土。担当／須藤隆司・小林眞寿・森泉かよ子

◎中長塚遺跡（岩田村）　同じくバイパス予定地で5月から近世水田跡を発掘中。担当／上原学・林幸彦

○松の木遺跡（岩村田）　同じくバイパス予定地で7月から発掘の予定。

◎中原遺跡群梨の木遺跡III（中込）　同じくバイパス予定地で4月から7月までの予定で発掘中。これまでに中世・近世の竪穴遺構と土坑合わせて150、柱穴500、溝2などのほか太平洋戦争時の防空壕を調査。土坑からの和鏡（時期不詳）が出土。担当／林幸彦

○長土呂遺跡群上前田遺跡（長土呂）　区画調理事業で7月から発掘の予定。担当／須藤隆司

○栗毛坂遺跡群前藤部遺跡（岩村田）　大規模店舗の建設に伴い7月から発掘の予定。担当／小林眞寿・佐々木宗昭・森泉かよ子・上原学

○大和田遺跡（大和田）　宅地造成により8月から発掘の予定。

◎蛇塚1号・3号古墳（安原）　宅地造成に伴い4月から発掘中。6世紀末から7世紀代の築造とみられる円墳。1号墳は自然丘上に石室を設けてあり、石障（衝立状に仕切り石を立てて玄室を区切ったもの）が確認された。3号墳は石室の保存状態はよくないものの、墳丘周囲には高さ1m以上に垂直の石積みが整然と廻っている。両古墳とも構造上、県内では類例の極めて少ないものである。このほか、調査区域からは縄文時代中期末の竪穴住居跡1が発見されている。古墳の調査は現在解体作業の段階である。担当／三石宗一

○芝宮遺跡群下曽根遺跡（小田井）　高速道関連で市道の拡幅工事に伴い10月から発掘の予定。

○一本柳遺跡群（岩村田）で大規模店舗、中西の久保遺跡群（同）でグランド造成の計画があり、今年度中に試掘の予定。

＊小諸市

●氷遺跡（大久保）　県道改良事業により4月～6月に発掘。縄文時代中期後半が一部と晩期を中心とする遺物包含層、平安時代の灰釉陶器を伴う竪穴住居跡3（内、カマドのみ1）を調査。

○富士見城（菱平）　一部市道建設にかかる部分を7月から発掘の予定。主な調査遺構は石垣か。

○愛宕山城（大久保）　県道改良事業により8月から11月に全面発掘の予定。城は小規模ながら、主郭部に土塁が廻り、堀切・縦堀が複数認められる。担当／上記3遺跡とも星野保彦

＊浅科村

●寺田遺跡（蓬田）の隣接地　望月町の下水道終末処理施設を建設することになり6月に試掘。遺構・遺物はなく、遺跡の広がりは確認されなかった。担当／福島邦男・峯村今左夫

●入の沢遺跡（入の沢）　村道改良工事に伴いかつて土坑が確認されていた箇所を6月に発掘。黒曜石の剥片や石鏃がまとまって出土。担当／峯村今左夫

○宅地造成予定地（八幡）　遺物が表面採集されたため、7月に試掘を今後予定。

＊望月町

◎大塚第3号古墳（協和の国道バイパス沿い）　国庫補助事業で6月から発掘中。玄室幅2m前後の比較的規模の大きい石室をもつ円墳。須恵器・耳環・人骨などが出土。担当／福島邦男

＊北御牧村

●野馬除土手跡（御牧原）　小範囲を発掘。出土遺物なし。担当／塩入秀敏・福島邦男

（文責　臼田武正）

地主さんからいただいた黒曜石のおっかけ

—鷹山第Ⅴ遺跡の石器—

唐沢繕孝・安藤正俊

1　はじめに

私たちは、1994年に初めて男女倉遺跡群、鷹山遺跡群を訪れて以来、毎年春まだ畑に野菜が植えられる前と、晩秋畑から野菜が無くなる頃になると表採に出かけます。今春も、5月4日に両遺跡群に表採に出かけ鷹山第Ⅴ遺跡で、幸運にも地主さんから黒曜石の「おっかけ」をたくさんいただくことができましたので、紹介いたします。

2　遺跡の概要

鷹山遺跡群は、長野県小県郡長門町大字大門鷹山に所在します。鷹山は八ケ岳の北西、霧ケ峰高原のすぐ北に位置し、周囲を山に囲まれた狭小な盆地状な地形をなし、その北よりを鷹山川が東南に流れていて、黒曜石の原産地として著名な、星糞峠の南側直下に遺跡群は立地しています。標高は約1350から1390m。

現在鷹山遺跡群には、11の遺跡と5ケ所の遺物散布地が知られていて、私たちが地主さんからおっかけをいただいたのは、第Ⅴ遺跡に位置付けられています。

第Ⅴ遺跡は、星糞峠に最も近い位置にありますが、地表が露出している畑地は少なく、私たちが地主さんからおっかけをいただいたのは一番奥の畑地でした。

3　発見と過去の調査

1955年、地元長門町の篤学の考古学研究者、故児玉司農武氏によって発見。

1961年、信州ローム研究会が第Ⅰ遺跡を試掘。

1964年、尖石考古館が第Ⅰ遺跡の60㎡を発掘。この時、第Ⅰ遺跡の南端と第Ⅲ遺跡も試掘。

1965年、尖石考古館の第2次調査として、第Ⅰ遺跡の60㎡をトレンチ法により発掘。

1968年、尖石考古館の第3次調査として、第Ⅰ遺跡の40㎡をトレンチ法にて発掘。

1976年、中村龍雄・児玉断・児玉修氏らが、第Ⅶ遺跡の33㎡をトレンチ法にて発掘。

1983年、森嶋稔氏らによる調査団が、第Ⅵ・Ⅶ遺跡などの一部を発掘。

1984年、明治大学考古学研究室により、第Ⅰ遺跡の西半部の約350㎡を発掘。

1986年、明治大学考古学研究室により遺跡群全体の分布調査と、第Ⅲ遺跡と第Ⅴ遺跡の中間区域の一部を発掘。

1987年、前年に続き分布調査、一部小発掘、黒曜石産出地の確認調査など。

1989年、第Ⅰ遺跡の約400㎡を発掘。

4　おっかけ紹介

この日、私たちが地主さんからいただいた黒曜石の「おっかけ」は全部で37点で、その内訳は尖頭器1点・原石5点・石核18点・剥片13点です。

1は唯一の定形石器で、両面調整の木葉形尖頭器で、裏面にごく一部自然面を残しています。上部を欠損し、長さ4.7cm・幅3.1cm・厚さ1.0cmを測ります。長さは、復元すると6cm以上と思われ、中型の部類に入ります。上部左側の欠損は新しい欠損で、製作時の折れは、上部右側と思われます。また、下部右側の欠損も、製作時の折れと思われます。器体の調整は、両面とも比較的大きめの剥離によるものが多く、おそらく細かな調整加工を施す前に欠損したため、破棄されたと思われます。比較的不透明で、斜めに縞の入る流紋岩の球顆のない、良質な黒曜石が用いられています。

原石は5点ですが、その中の4点は「ズリ」と呼ばれる、3cmから6cm位の小形の原石です。ズリとは、黒曜石の鉱脈から崩れおちて山腹を滑落＝ズリ落ち、あるいは地表で、時には土層中で風化を受けた礫で、武居幸重氏の命名によるといいます。1点は、角礫状の大型の原石で、長径9.9cm・短径6.1cm・厚さ4.5cmを測り、いただいた中で最大の大きさです。流紋岩の球顆もあまり見られず、またその原石の割口をみると良質な黒曜石と思われます。

石核は18点で、縦長剥片を同一の打面において、1回から数回剥離してあるものが10点あります。打面は一か所ですが、剥離面が石核の側面部分にまで回りこんでいて、石核の形状が半円錐形を呈しているものが2点あります。小形の横長剥片を、一か所剥離したものが2点あります。上下を打面として、大型の横長剥片を剥離したのが1点あります。石核の打面が、多方向なのが3点あります。

黒曜石の特徴は、黒色に褐色の縞が入る不透明なもの、黒色でやや透けるもの、黒色で霜降り状に白い縞が入り、灰色に似たものに分けられます。全体に流紋岩の球顆が入っていますが、黒色で褐色の縞が入る不透明なものには認められないようです。

2はその内の一点の石核で、同一の打面から縦長剥片を数回剥離したもので、長さ6.5cm・幅4.5cm・厚さ

2.9cmを測ります。その背面は、自然面となっています。黒曜石の特徴は、比較的不透明な黒色で、流紋岩の球顆が入っています。

3は剥片で、長さ6.7cm・幅6.4cm・厚さ2.3cmを測ります。黒曜石の特徴は、透明感の強い黒色で、左側面に自然面を残しており、そこから一部白い縞が右方向に向かって入っています。流紋岩の球顆も入っておらず良質。打面には、剥離時のパンチ痕と思われる約9mmの三日月状の痕跡がみられます。

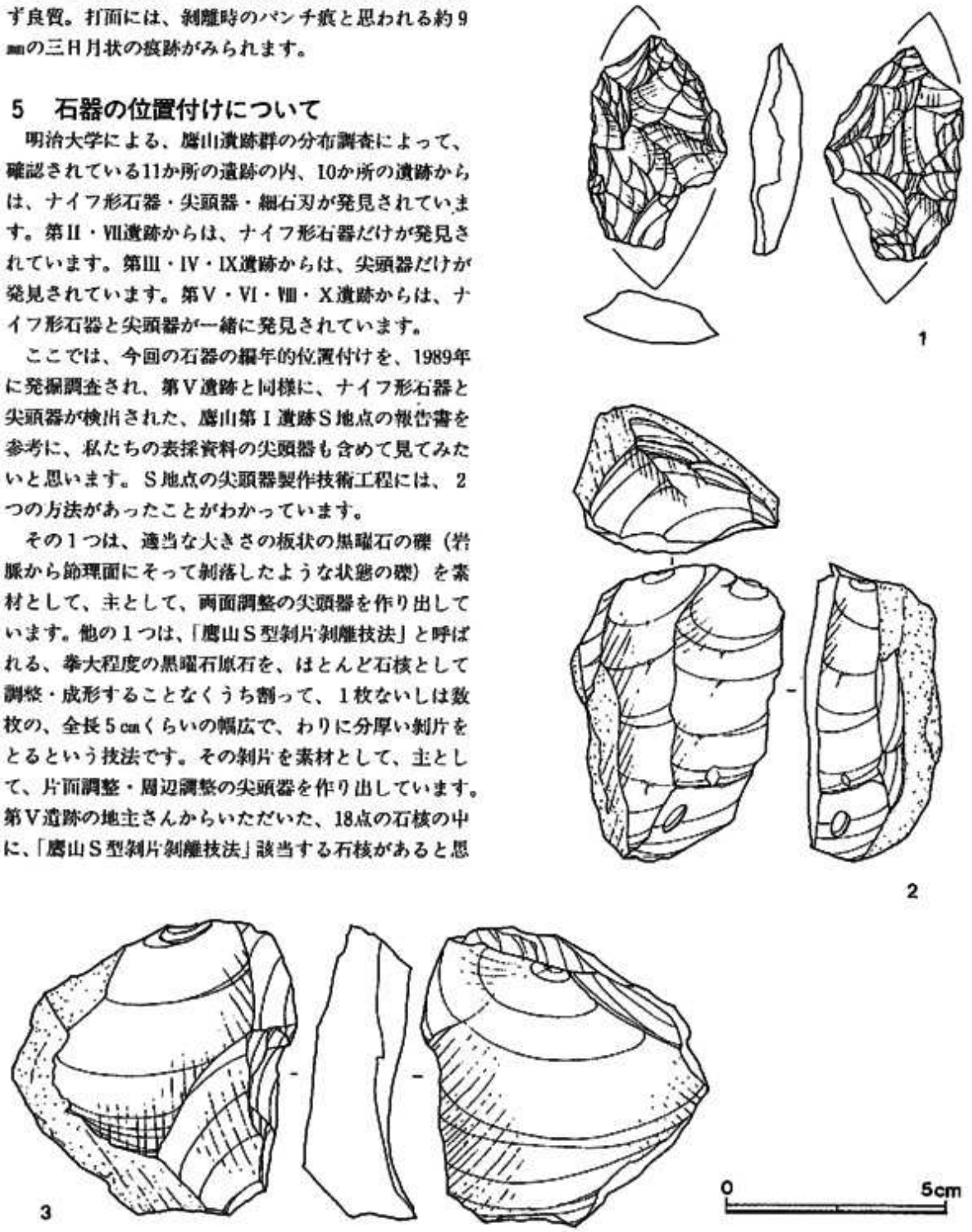
5　石器の位置付けについて

明治大学による、鷹山遺跡群の分布調査によって、確認されている11か所の遺跡の内、10か所の遺跡からは、ナイフ形石器・尖頭器・細石刃が発見されています。第II・VII遺跡からは、ナイフ形石器だけが発見されています。第III・IV・IX遺跡からは、尖頭器だけが発見されています。第V・VI・VIII・X遺跡からは、ナイフ形石器と尖頭器が一緒に発見されています。

ここでは、今回の石器の編年的位置付けを、1989年に発掘調査され、第V遺跡と同様に、ナイフ形石器と尖頭器が検出された、鷹山第I遺跡S地点の報告書を参考に、私たちの表採資料の尖頭器も含めて見てみたいと思います。S地点の尖頭器製作技術工程には、2つの方法があったことがわかっています。

その1つは、適当な大きさの板状の黒曜石の礫（岩脈から節理面にそって剥落したような状態の礫）を素材として、主として、両面調整の尖頭器を作り出しています。他の1つは、「鷹山S型剥片剥離技法」と呼ばれる、拳大程度の黒曜石原石を、ほとんど石核として調整・成形することなくうち割って、1枚ないしは数枚の、全長5cmくらいの幅広で、わりに分厚い剥片をとるという技法です。その剥片を素材として、主として、片面調整・周辺調整の尖頭器を作り出しています。第V遺跡の地主さんからいただいた、18点の石核の中に、「鷹山S型剥片剥離技法」該当する石核があると思われます。それは、小形の横長剥片を1か所剥離した石核2点と、上下を打面として大型の横長剥片を剥離した石核1点と、縦長剥片を同一の打面において剥離した石核10点の合計13点だと思われます。

さらに、石核10点の中には、「一発コア」と称される平らな自然面を打面として、一回剥片を剥離しただけ



第1図　鷹山V遺跡の石器（2/3）

の石核が2点あります。

次に尖頭器ですが、私たちが表採した尖頭器は、すべて黒曜石製の未成品ばかり5点で、その5点と地主さんからいただいた1点の6点で見てみたいと思います。

6点の内、両面調整尖頭器が3点です。片面調整尖頭器が1点です。両面とも調整は、片側だけの尖頭器が1点です。調整加工の進展が、第1の段階程度なので、調整加工が不明な尖頭器が1点です。

第Ⅰ遺跡S地点からは、両面調整尖頭器・片面調整尖頭器・周辺調整尖頭器が発見されていますが、私たちの第Ⅴ遺跡の6点の尖頭器には、両面調整尖頭器と片面調整尖頭器はありますが、周辺調整尖頭器はありません。が、それは資料が少ないためだと思います。

以上のように少ない資料ですが、それでも鷹山第Ⅴ遺跡には、鷹山第Ⅰ遺跡S地点と同じ尖頭器製作技法が見られ、作り出された尖頭器の形態も、ほぼ同じと思われます。そのことは、2つの遺跡は、同じ時期に同時に営われていた可能性が高いと思われます。

鷹山第Ⅰ遺跡S地点の編年的位置付けは、同じ黒曜石原産地の石器製作址遺跡の、ほぼ両面調整尖頭器のみで占められている男女倉B地点より後で、さらに、両面調整と並んで片面調整尖頭器が少量存在する男女倉J地点より後の、尖頭器文化のやや発達した段階に位置付けられており、鷹山第Ⅴ遺跡の編年的位置付けも、同じ時期に位置付けられると思われます。おそらく、細石刃のつくられる前の段階ぐらいと見ておくことができないでしょうか。

あるいは、将来第Ⅴ遺跡が発掘調査されても、周辺調整尖頭器が発見されなければ、第Ⅴ遺跡は第Ⅰ遺跡S地点より時期的に先行していた可能性もあると思われ、男女倉J地点とほぼ同時期か、男女倉J地点と鷹山第Ⅰ遺跡S地点の間の時期に位置付けられる可能性もあると思われます。

6　鷹山の野に立ちて

鷹山第Ⅴ遺跡で表採をしていて、また、男女倉遺跡群でも同じですが、私（唐沢）は石器を見つけた時、石器を一見した後でまわりの景色をながめます。

私が、旧石器人になれる一時です。今から、1万5千年以上も前に、この地にやってきて石器をつくり、やがてどこかに去って埋もれていった人たち。私は、そんな人たちのことを少しでも知りたくて表採をしています。本当は、石器の寸法や形態よりも、その人たちのことを、いつか起草できればと思っています。

鷹山遺跡群・男女倉遺跡群は、旧石器時代の黒曜石原産地の石器製作址遺跡として著名です。

また、現在そこに生きる人たちの生活の糧である、畑地でもあります。男女倉遺跡群の各地点には、立入禁止の看板を見掛けます。一昨年に、A地点の地主さんから、「種をまいたところには入らないでくれ」とまた、A地点南の隣のおばあさんから、「畑に作物があるときは入らないでほしい」と声を掛けていただいたり、J地点のおばあさんに、「高校の先生に、じゃがいもの新芽の出たばかりを全部踏み荒らされ、おじいさんがものすごく怒った。」と教えていただけました。鷹山の畑には、現在立入禁止の看板はありませんが、農道の入口に車止めの柵があります。今年、第Ⅴ遺跡へ行く前に初めて第Ⅵ遺跡に入ったところ、まだ作物のない畑でしたが、地主さんに「畑に入らないでくれ」と注意されてしまいました。農家の人にとって迷惑な表採者である私たちなのに、第Ⅴ遺跡の地主さんは「これあげるよ。おっかけしかないけど。」と言って子供に手渡していただけました。私たちは、お礼を言うと共に驚きました。私たちが表採できるのは、農家の人たちが一生懸命に畑を耕していていただけるからで、畑が荒れてしまえば表採はできません。畑で人を見かけたら、声をかけてから畑に入るようにして、作物のない時期にしたいものです。

現在、第Ⅴ遺跡ではこれ程大きい黒曜石は採集できず、地主さんがおっかけを採集したのはかなり以前と思います。また、一度でこれだけのおっかけを採集したとは思えず、長い時間をかけて採集されたと思います。そのおかげで、第Ⅴ遺跡の紹介を今回することができました。ありがとうございました。

「おっかけ」とは、信州地方の方言だと思うのですが、私の両親は、下伊那郡高森町と飯田市川路ですが、聞いたことがないそうです。私が初めてこの言葉を知ったのは、山井茂也さんの『草原の狩人』を読んだときでした。由井さんの家に初めて、芹沢さんと戸沢さんが訪ねてきた時、「芹沢さんは、石槍ばかりでなくてもっと異った石器もある訳だといった。私は石器といえば、縄文時代の形の整ったものばかりを想像していた。それでおっかけならなんぼでもあるといった。」とあります。由井さんや、地主さんの言い方からおっかけとは、「たいしたものではない」という意味ではと思っていました。しばらくしてから、おっかけとは「かけら」と教えていただけました。なるほど、おっかけをかけらに変えて読めば、山井さんの話の意味がよくわかります。方言は難しくて、おっかけの意味を教えていただいた時、苦笑してしまいました。

先日、堤さんより男女倉の報告書のコピーを送っていただきました。これは、「次は男女倉を書け」という堤さんの圧力ではと思い、それに対して私たちは牛歩戦術でいきたいと思いますが、どうなるでしょうか。

文末ながら、私たちの書きなぐりの原稿を、『佐久考古通信』に掲載できるようにまとめていただき、また、

実測図を作成していただいたのは、その堤さんです。深く感謝いたします。ありがとうございました。

引用参考文献

鷹山遺跡群調査団　1983　『鷹山遺跡群Ⅰ』
鷹山遺跡群調査団　1991　『鷹山遺跡群Ⅱ』
和田村教育委員会　1993　『長野県黒曜石原産地遺跡分布調査報告書（和田峠・男女倉谷）』
堤　隆　1993　『遠き狩人たちの八ヶ岳』
白石浩之　1989『旧石器時代の石槍』
草原の狩人刊行会編　1993　『草原の狩人』
中沢祐一　1995　「馬場平遺跡採集の尖石器」『佐久考古通信　65』
加藤晋平・鶴丸俊明　『石器入門事典・先土器』

■ **桐原　健**

昭和８年の酉歳生れ。松本在住。年金生活。家居。佐久との係り、中学時代に野沢高女は冬でもスカートを穿いていると聞かされました。

浅間風しの寒風に向かって凛然と通学する姿につい・ての賛辞です。『弥生式土器聚成図録』で後沢の土器を知ります。実際に遺跡を訪ね得たのは昭和52年６月、高村さんが調査していました。竪穴の入口部に梯子の痕の在ったことを覚えています。39年、岩崎さんの「佐久平の古墳」で藤森先生の『諏訪地方古墳墓立地の観方』が適用できないものかと思いました。

しかし、佐久の地形がなかなかに把握できません。ましてや『倭名抄』記載古郷との対比などいやはや。大坂氏の実態も判りません。ところで、平根・志賀・平賀地区の古墳が湮滅し去ったことは返す返すも残念です。平坦地に築かれている大形石室墳や県内最東端に当る臼田町の古墳群にも、蕨手刀出土の古墳にも大層な関心があります。これからの御教導を切にお願いいたします。

■ **島田幹子**

佐久考古学会の皆様初めまして。島田幹子です。現在国学院大学栃木短期大学に通い日本史の勉強をしています。今年で二年目なので、卒業論文に追われる毎日です。卒業論文は、青森の三内丸山遺跡からヒントをもらい「縄文尺」に関して書こうと考えています。

そもそも私が歴史の方に進むきっかけとなったのは、中学生の頃社会科で利用していた資料集で鉄剣を見てからでした。"昔の人の生活や他の国との関係はどんなだったのだろう"という誰もが考える様な事が歴史の方に進む第一歩だったのです。それ以来遺跡や博物館の見学が趣味となり、短大では考古学研究会と博物館研究会に所属し、夏休み中に奈良方面への遺跡見学や地元での発掘、博物館の裏側の見学等に行っています。

今は栃木に住んでいるため佐久考古学会の行事にあまり参加できませんが、来年は南佐久郡に移りますので行事に参加したり皆様のお話を通して色々と学んでいきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

■ **古越永子（ふるこしながこ）**

今春より新潟市埋蔵文化財センターに勤務しております、古越です。実家が佐久市岩村田にある縁から、遅れ馳せながら今回入会させて頂くことになりました。学生時に考古学を専攻していましたが、そもそも考古学に興味をもったのは小学生の時、近所の北西の久保遺跡の調査を見学し、強烈な印象を覚えたのが始まりであったように思います。大学では、木製品の加工技術について勉強し、現在は木製品、金属製品の保存処理業務を中心に担当しています。行政側に立って考古学と向きあうことは、やはり学生時のそれとは異なり、色々と考えさせられることがあります。日本海側に来て５年になりますが、未だに広い海をみると感激してしまいます。この機会に故郷・佐久の歴史を改めて学び、又皆様方との情報交換から、更に見聞を広げていきたく思っています。どうぞよろしくお願いします。

■ 藤森英二

はじめまして。この4月から北相木村考古博物館に勤めている藤森英二です。学生時代から長野県内には何度も来ていましたが、諏訪・松本地方が多く、佐久は2回ほど訪れただけでした。八ケ岳が西に見えるのが少し不思議な感じがします。近頃はなるべく外に出て土地勘を養おうとしておりますが、慣れない一人暮らしと新しい職場での生活ではなかなか思うような活動が出来ません。やりたいこと、やるべきことは山ほどあるのですが。佐久で考古学を学ぶ者の端くれとして、恥ずかしくない活動が出来るよう努力するつもりです。

■ 桜井秀雄

現在、浅間山麓の小諸市郷土（ごうど）遺跡の整理に追われる毎日です。郷土では高速道建設にともなって縄文中期中葉から後期初頭の住居が100軒近く発掘されました。

検出された土器で復元個体は約300点、打製石斧は4000点とその数の多さに頭を痛めています。土器にはかなり大きなものがあり、持つだけでもひと苦労しています。

土偶は70点みつかりましたが、中でも注目されるのは、焼町土器と同じ文様（列点刺突など）をつけた「焼町土偶」の存在で、これまでに初めてのものです。

平成9年度の報告書刊行にむけ、全力投球です。

訃報・森嶋稔先生ご逝去

本学会会員、前長野県考古学会会長の森嶋稔先生が、6月16日多臓器不全のため永眠されました。享年66歳という、あまりに早いご逝去でした。

森嶋稔先生は本学会の設立当初から、その活動についてご理解・ご協力をいただきました。先生が小諸市坂の上小学校在職時の昭和45年には、臼田町咲電気において、先生を講師として学習会が幾度かもたれています。また、その後、昭和52年の講演会「長野県における旧石器時代」、考古学会15周年記念式典、矢出川遺跡保存運動などを通じさまざまなかたちで、ご教導をいただきました。

先生のご逝去を悼み、会員一同謹んでご冥福をお祈りいたします。

由井茂也さんの祝賀会での森嶋先生

新入会員紹介

島田幹子　〒328　栃木市薗部町2-13-3　美蔭ハイツ206　☎0282(23)7671

森嶋先生の大きな手

森嶋先生の手は大きいな。ほんとうに大きいな。
先生の手はグローブだ。体も大きいな。
ズボンも大きいな。だから心も大きい。
ぼくも大きな大きな心の持ち主になろう。

（『あたりまえ』教え子の詩より）

森嶋先生の告別式の日、たくさんの教え子たちが花を捧げた。そこには、私の知っている考古学者森嶋稔とはちがった、教師としての森嶋稔の顔があった。「あたりまえ」を問い続けながら、それを遙か越してほんとうに大きかった先生。お別れを言うにはあまりに残念です。　（編集後記にかえて、つつみ）

佐久考古通信　No.67

発行所　佐久考古学会
〒384-01　長野県佐久市桜井879
臼田武正方
郵便振替　(新)00570-9-2842
☎0267(62)8133

発行者　山井茂也
編集者　堤　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL
1996. 10. 10. No 68
JOURNAL

★ 目 次 ★

■ 栃原岩陰遺跡出土の拇指状掻器について……藤森英二……1
■ 神戸通信 Vol. 2 ……藤原直人……6
■ 大型尖頭器の基部 ―男女倉遺跡群A地点南の石器― ……唐沢穣孝・安藤正俊……7
■ シンポジウム「押型文と沈線文」のご案内……事務局……9
■ 樋村遺跡と後家山の古墳群……桐原 健……10

1 はじめに

長野県南佐久郡北相木村に位置する栃原岩陰遺跡は、縄文時代草創期から早期を中心とした遺跡であり、多数の人骨と多くの骨角器が出土した遺跡として広く知られている。しかし実際は正規の報告書も発行されず、その全体像は曖昧のままである。今日この1965年から行われた16回に及ぶ発掘調査の正報告刊行のための作業に入りつつあるが、現段階ではその全体像の把握に至っていない。

今回より当紙面を借りて栃原岩陰遺跡出土遺物の紹介を行っていくが、本来であれば遺物の個別的な発表は避けるべきかもしれない。しかしこのようなことが報告書作成のスピードを速めると同時に、多くの方の興味や関心を呼び起こし、さらにアドバイスや意見などをいただくことで、今後の研究のためにもなるものと判断してこのようなかたちでの発表を行うことにした。したがってここに掲載する資料等は当然後に正報告に掲載されるべきものであるが、今後の見解によっては別の見方もされることになるかもしれないことをまず断っておきたい。

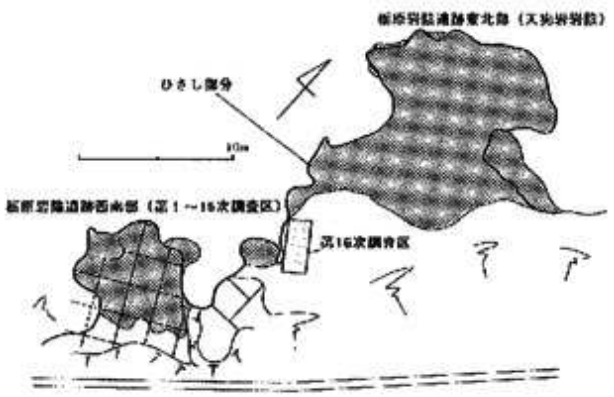
今回はそのなかでも形態が捉えやすく、ほとんどが限られた範囲で出土するなど、今後の研究の上で比較的その位置付けが変化しにくいものと判断した拇指状掻器を取り上げてみたい。

2 対象遺物の選択

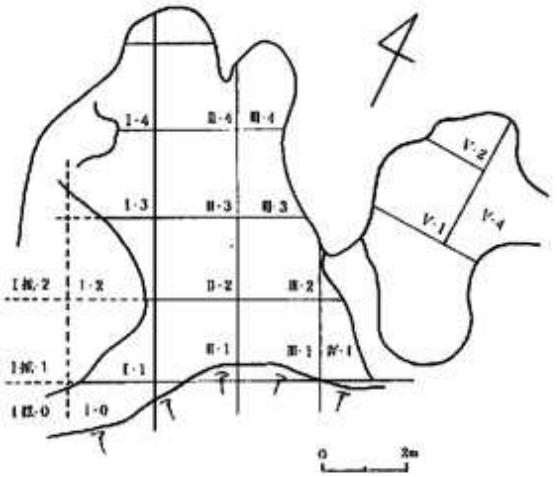
栃原岩陰遺跡は、千曲川の支流である相木川が八ヶ岳起源の泥流を削って出来た岩陰群の一つで、標高は約960mである（図1）。1965年に信州大学が調査をはじめて以来、1983年まで断続的に16回の発掘調査がなされている。このうち第16次調査に関しては、それまでと違い層位的発掘が行われ、報告書も刊行されている（西沢・佐々木 1984）。また、これ以前に調査をした栃原岩陰遺跡西南部と東に延びる栃原岩陰遺跡東北部（天狗岩岩陰）との関連性を調べることを目的に含めていたが（図2）、結果的に両者を結びつける結論に至っているなど、多くの点で成果が見られる（大参・佐々木 1986）。

しかし、これ以前の調査での遺構・遺物はその一部

第1図 栃原岩陰遺跡位置図



第２図　栃原岩陰遺跡平面概念図



第３図　栃原岩陰遺跡第Ⅰ～15次調査平面概念図

が掲載されたり（西沢　1982、宮下　1985など）、個別の資料が検討されるなどで、全体としては曖昧のままで来てしまっている。目下この部分も含め、1965年の調査記録から再検討しているが、様々な要因から未だ全体像の把握に至っていない。確かに個々の遺物の実測図を載せるだけでも報告書は出来るし、未だされていない資料の発表は出来るだけ迅速に行うべきものとも思う。しかしそれでは、それぞれがまるで関連のないものとして扱われ、当時の生活様式を構成する要素であり、それぞれが密接な関連を持って存在したことを忘れてしまう恐れすらある。少なくとも多くの方にとってその遺跡の情報を引き出す唯一の資料となる報告書には、それを考察可能な情報は掲載すべきではないだろうか。つまり現在はこういったデータを模索中であると考えていただきたい。そこでここでも単に形態的に同じものを抽出するだけではなく、ある程度の限定を行い、出来る限り今後に混乱をきたさないように心がけた。

結果的に今回分析の対象としたのはこの第１次から15次調査までに検出された拇指状掻器で、さらにその中でも連続性の高いⅠ～Ⅳ区（図３）のものである。Ⅴ区及び第16次調査区についてはその層位的連続性を含め、今後改めて検討したい。

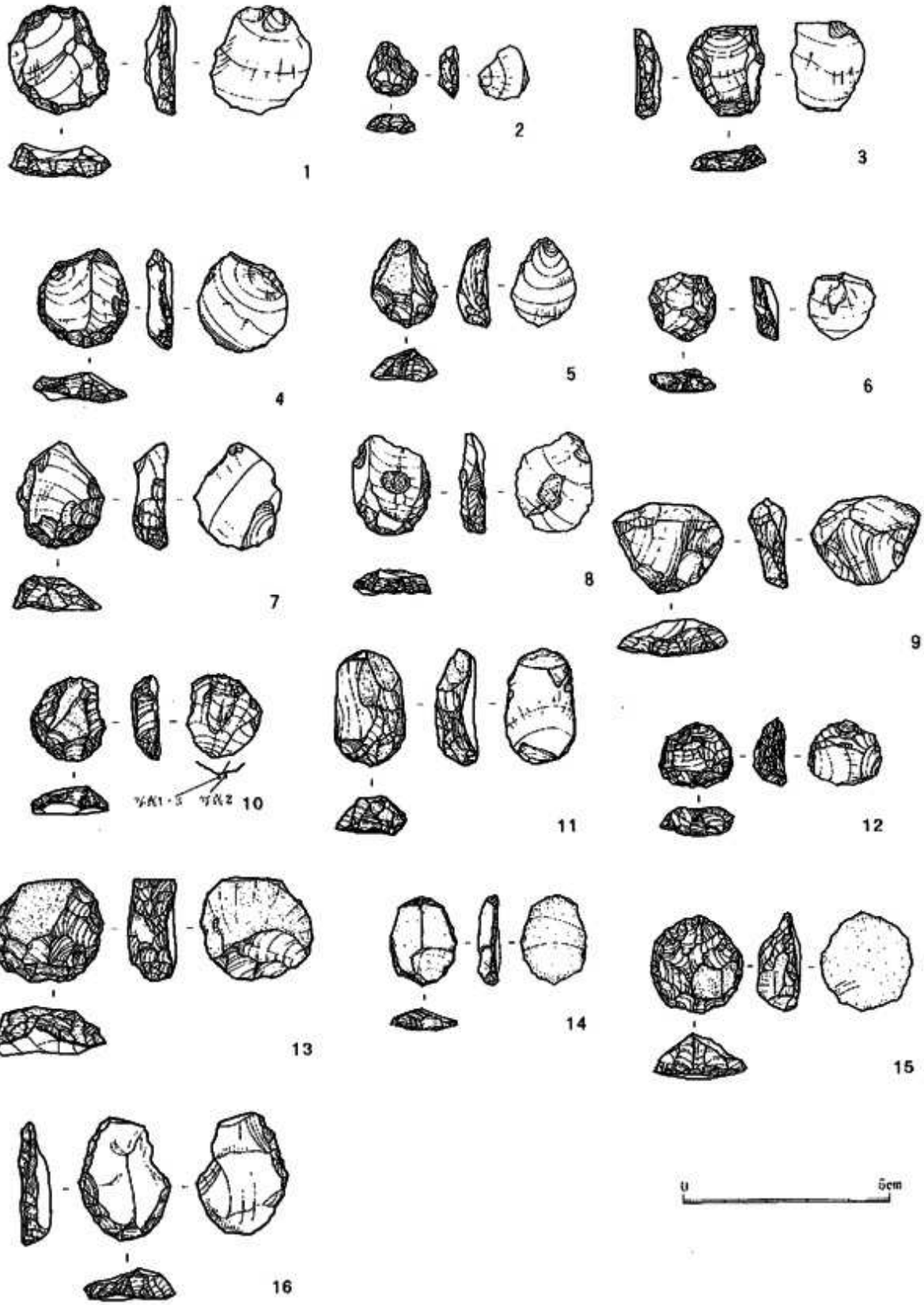
３　石器の分類

そもそも拇指状掻器といった名称はかなり広い範囲の対象物を指すことが多いようである。実際著者も明確な分類を意識したことはなかった。そこでまずここで拇指状掻器とした石器の定義を述べておく。

縄文時代の打製石器は旧石器時代のような定型的な石器製作技法がつかみ難く、出来上がった製品の形態からの分類が多い。それはそれで有意義なことであるが、不定形剥片石器などと称される形態的分類すら難しいものの多いのも事実である。本遺跡でも例に漏れず二次加工のある不定形な剥片石器は多数出土しているが、『長野県史』のなかで西沢がこれらの分類を行い、「小石刃」「掻器」「削器」「ピエス・エスキーユ」の４つに分けている（西沢　1982）。しかし今回は従来の分類にとらわれず、これらを一度フラットな状態にして再度分類を試みた。

まず刃の角度が45度以上であり、このための加工が連続して行われているものを大きく「掻器」と分類した。この中には剥片の末端に刃部のあるもの、側面に刃部があるもののいずれも含まれる。従来の削器（サイドスクレイパー）の一部と、掻器（エンドスクレイパー）のほとんどがこれにあたる。ただし刃部と思われる箇所がこれ以外にもあり、その角度が45度を越えないものでもここに含めた。このうち刃部の平面形が曲線を描き、さらに二次加工を施し、全体が楕円形から円形に近いものを従来からある呼び名を当て「拇指状掻器」として抽出した。なおこの定義に当てはまらなかった掻器、また掻器としなかった二次加工のある剥片については、現在検討中である。

掻器の分類に関して、山中は非常に細かな項目を設定しこれを紹介しているが（山中　1976）、今回の分類はこのような細かな設定は行っていない。あまり細かな設定は一つの道具としての範疇を見失う恐れもあると考えたからである。結果的には今回のような分類基準でもほとんどが限られたレベルでの出土の石器となり、それなりの有用性はあったと考えている。さらに細かな計測、またそれに基づく考察は、むしろこの範疇の中で行なっても遅くはないのではないだろうか。尚石材は全て黒曜石であった。



第4図　Ⅰ～Ⅳ区拇指状掻器実測図

4　拇指状掻器の分類と特徴

もちろんこのようにして抽出した拇指状掻器のなかにも多くの形態が見られる。そして何らかの使い分けがあった可能性は十分に考えられるが、それが必ずしもその形態と対応関係にあるとは限らない。石器はその機能から分類すべきと考える立場からは、ここで安易な分類は控えるべきであろうが、便宜的に背面の特徴から推察される素材の種類によってA類・B類・C類の3つに分類した。尚、抽出出来た資料はA類23点、B類11点、C類9点であるが、そのうち今回図化出来たものは全部で16点で、他は付表を参照されたい。

A類（図4・1～8）

裏面が一枚の剥離面からなる剥片素材のもの。主要剥離面の打点、打面が残されているものはわずかである。またバルバスカーや打瘤痕の見られないものが多い。

B類（図4・9～12）

裏面に両側からの剥離が見られるもの。基本的にはA類と同じ石器であろうが、裏面に残された剥離痕から推察できるのは両極打法による剥片が素材ということである。それ以外の部分ではA類・C類と特別な違いは見られない。

C類（図4・13～16）

裏面が古い剥離面のもの。もはや自然面と表現すべきものもあるが、いずれも平坦な面を石器の裏面としている。中には両面が古い剥離面のものもある。

以上その素材には違いが認められるが、その後の加工はほぼ同質である。刃部は主要剥離面（あるいは古い平坦な剥離面）から急角度の剥離を行いこれを設けている。刃部の位置は打点（もしくはその方向）の反対側にあるものもあるが、必ずしも一定していない。平面的には丸みを帯びている。そして刃部以外の周縁部にも加工を施し、全体を円形もしくは楕円形に仕上げている。この時の剥離は刃部よりも緩やかな角度である場合が多い。この部分は別の機能を持っていたか、何らかの装着痕とも考えられるが、直に手で持って使用したとすれば刃潰し加工となるかもしれない。ただし全体がほぼ同じ角度で剥離され、はっきりした刃部が捉えがたいものもある。また、ほとんどが片面加工で、両面加工を施したものはまれである。

5　使用痕の観察

これらの使用方法に関しては主に掻き取り（Scrape）か削り（Whittle）が想定できるが、今回堤氏の協力により、図化した石器の一部について金属顕微鏡による100から200倍の使用痕の観察を行った。全ての石器について観察することは出来なかったが、数点については線状痕が確認できた。

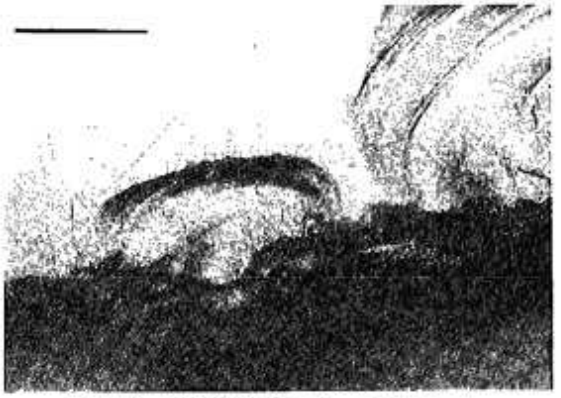


写真1　刃部線状痕（スケール200ミクロン）

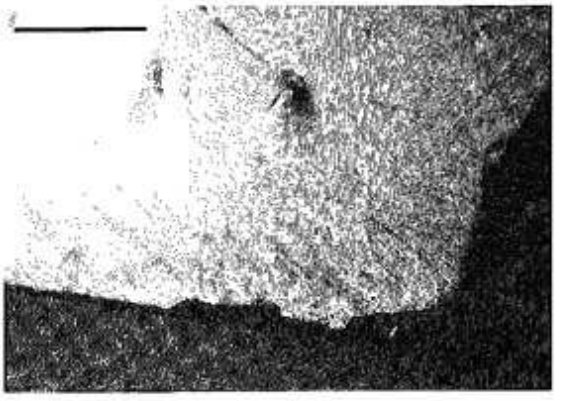


写真2　刃部線状痕（スケール200ミクロン）

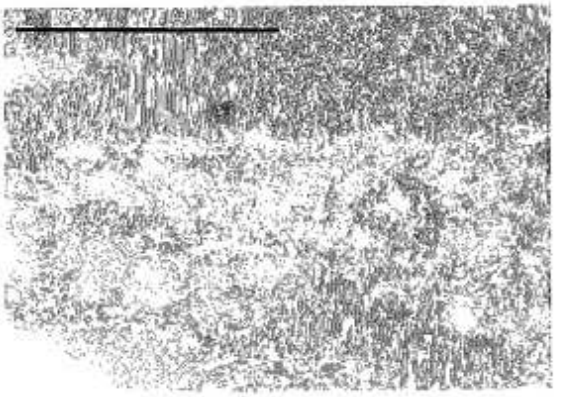


写真3　刃部ポリッシュ（スケール200ミクロン）

特に図4・10では刃部に顕著な線状痕が認められた（写真1・2）。本資料の激しい使用を物語っていると言えよう。さらに刃部の先端部にはポリッシュが見られた（写真3）。これは阿子島らのいうE2タイプのものに類似していると言える（阿子島　1989）。この線状痕からは刃縁に対して直交する運動を想定でき、その機能が掻き取り（Scrape）であった可能性が高いと出来るだろう。またE2タイプのポリッシュは被加工物が皮であると指摘されており、総合して本石器は皮な

めしの作業に使われていた可能性が高いと考えられる。ただし全石器についての観察は行っておらず、また一つ一つの石器についても側面の加工部を含め、今後さらに細かな検討を加えていきたい。その上で、今回の分類基準が何らかの意味を持つかどうかも考えるべきであろう。ただし今回顕著な使用痕が認められた資料は図化したように一方向からの打撃による剥片ではないここでいうB類のものである。それでも明らかにスクレイパーとして認識すべき石器であるなど、外見のみでは分類しがたい状況を示していると言える。

6　拇指状掻器の時代的意味付け

拇指状掻器は旧石器時代から縄文時代草創期に多いものとされ、長野県内でも草創期では諏訪湖底曽根遺跡や下伊那郡高森町増野川子石遺跡などでまとまって出土している。また最近ではお宮の森裏遺跡での、表裏縄文土器との共伴関係も報告された。

かつて藤森栄一は、曽根遺跡の掻器を取り上げるなかで、拇指状掻器が旧石器時代末期以降小型化する傾向を指摘し「動物層の変化が、この皮剥ぎ形器具をかえたのだろうか。やがて曽根期にはいって爪よりも小さくなるのは、魚肉または鱗が対象になってのことであろうか」と拇指状掻器の役割を疑問形ながらも具体的に述べている（藤森　1965）。

曽根遺跡の土器は爪型文が主体で、同時に採集されている拇指状掻器も同時期のものと考えられる。栃原岩陰遺跡では残念ながら第16次調査以外層位的発掘は行われていない。よって各遺物の共時性は調査時に記録された相対レベルによるしかない。付表を見ての通り拇指状掻器は420cm以下の比較的まとまった位置で検出されている。そしてこの位置から出土した土器はほとんどが表裏縄文土器であるので、拇指状掻器もこの時期の遺物と考えたい。またこのことはこの遺物が使われた時期を限定できると同時に、該当する箇所が後世の撹乱等をあまり受けていないことを示唆しているとも考えられ、縄文時代草創期末の文化層を見出せるかもしれない。そして栃原岩陰遺跡の場合、小型哺乳類の獣骨出土レベルが表裏縄文土器つまり拇指状掻器の出土レベルとほぼ重なっており、小型の石鏃同様これらとの結びつきを考えたくはなる（西沢　1982）。ただしそれぞれが違った機能を果たしていたことも十分考えられる上、シカやイノシシの骨の量が増える押型文土器が中心のレベルでは、拇指状掻器のみではなくその他多くの道具の出土が激減しており、この辺りは単純に小型哺乳類との対応を考えるだけではなく、岩陰の利用の変化を想定する必要もあると思われる。

また上部から出土した数点に関しては、その出土土器からも明らかに異なる文化層に属するものであるが、これが撹乱等によりこの層に混入したものなのか、この時期に系統的あるいは収斂的に存在したものなのかは検討を要する。

従来から拇指状掻器は旧石器から縄文時代草創期に特徴的な遺物とされてきたが、今回の分析結果もこれと矛盾しないものと言える。特に表裏縄文期の住居址から同様の拇指状掻器がまとまって出土したお宮の森裏遺跡の成果などからも、この石器が縄文時代草創期の石器組成の一端を成すことはほぼ確実と言えるだろう。もっともお宮の森裏遺跡の報告書では栃原岩陰遺跡について「出土している土器には時間幅があるが、黒曜石製の掻器や小型の石鏃がほぼ同じ程度の発掘深度から出土していること、その深度から表裏縄文土器群が多く出土していることから、これらの石器群は栃原岩陰遺跡の表裏縄文土器群に伴うものといえそうである（西沢　1983）。栃原岩陰遺跡の石器群は、概略ながら本遺跡の石器群にきわめて近い様相であるといえよう」という指摘が既になされている。今後このようなことが客観的に検証できるデータを発表することも当方の責務であろう。

そして何故草創期末の段階でその姿を消していったのかを含め、栃原岩陰遺跡の特徴といえる、ほぼ撹乱のない草創期末の文化層を通して拇指状掻器の存在した意味を考えていきたい。

追　記

先日長野県小県郡長門町の鷹山遺跡発掘現場を見学させていただいたおり、明治大学大学院博士後期課程の野口淳氏より、本資料のA類とした石器の多くが、明確なバルバスカー、打留痕が見られないことなどから両極打法による剥片が素材である可能性が高いという指摘を頂いた。鷹山遺跡の石器製作址では両極打法による剥片あるいは楔形石器が多数出土しており、わずかながら表裏縄文土器も出土している。黒曜石の原産地遺跡と栃原岩陰遺跡を結びつけるかもしれない大変興味深い意見である。

最後になりましたが、このような場を与えて下さった堤氏に感謝の意を表したいと思います。それと同時に大勢の方から忌憚なき意見をいただきたいと思っております。それが自分のような無学のものが独りで整理作業を続ける上で、良い意味での緊張となり、誤った認識を正す絶好の機会であると言えるかと思います。

引用・参考文献

阿子島香　1989『石器の使用痕』

大参義一・佐々木明　1986「栃原岩陰遺跡の考古学的概観」『信州大学人文学部　人類学科論集』第20号

上松町教育委員会　1995『お宮の森裏遺跡』

西沢寿晃　1982「栃原岩陰遺跡」『長野県史考古資料編(1)　東信地区』

西沢寿晃・佐々木明　1984「栃原岩陰遺跡の調査研究経過」『栃原岩陰遺跡発掘調査報告書　—昭和58年度—』長野県北相木村教育委員会

藤森栄一　1965『旧石器の狩人』

山中一郎　1976「掻器研究法」『史林』59-5

宮下健司　1985「長野県栃原岩陰遺跡」『探訪縄文の遺跡　東日本編』

付表　Ⅰ～Ⅳ区拇指状掻器一覧表

分類	グリッド	レベル	石材	重量(g)	図版
A類	Ⅱ	−320～330	黒曜石	4.3	図4・1
A類	Ⅱ−3	−420～430	黒曜石	1.4	
A類	Ⅰ−1	−423	黒曜石	5.7	
A類	Ⅱ−3	−430～440	黒曜石	2	
A類	Ⅲ−3	−430～440	黒曜石	2.3	
A類	Ⅲ−1	−430～440	黒曜石	2.9	
A類	Ⅰ−0	−458～470	黒曜石	0.6	図4・2
A類	Ⅲ−2	−460～470	黒曜石	2.2	図4・3
A類	Ⅲ−2	−460～470	黒曜石	9.4	
A類	Ⅲ−4	−460～470	黒曜石	2.6	
A類	Ⅱ−3	−470	黒曜石	3.6	図4・4
A類	Ⅱ−3	−470～480	黒曜石	2.7	
A類	Ⅲ−2	−470～480	黒曜石	3.9	
A類	Ⅱ−1	−480～490	黒曜石	2.5	
A類	Ⅱ−2	−490～500	黒曜石	1.9	図4・5
A類	Ⅲ−3	−490～500	黒曜石	1.5	図4・6
A類	Ⅲ−1	−490～500	黒曜石	5.1	図4・7
A類	Ⅲ−1	−490～500	黒曜石	3.2	
A類	Ⅱ−1	−500～510	黒曜石	3.4	
A類	Ⅲ−1	−510～520	黒曜石	8.8	
A類	Ⅰ	−510～530	黒曜石	4.5	
A類	Ⅲ−1	−520～530	黒曜石	3	
A類	Ⅱ−1	−535	黒曜石	2.8	図4・8
B類	Ⅰ	−235	黒曜石	3.2	
B類	Ⅲ−1	−450～460	黒曜石	1.9	
B類	Ⅱ−3	−470	黒曜石	4.3	図4・9
B類	Ⅱ−0	−470～480	黒曜石	2.4	図4・10
B類	Ⅲ−0	−470～480	黒曜石	3	
B類	Ⅱ−1	−470～480	黒曜石	4.1	図4・11
B類	Ⅱ−1	−480～490	黒曜石	2.6	
B類	Ⅲ−1	−490～500	黒曜石	4.7	
B類	Ⅲ−0	−500～510	黒曜石	2.1	図4・12
B類	Ⅲ−0	−500～510	黒曜石	2.1	
B類	Ⅱ−1	−510～520	黒曜石	2.7	
C類	Ⅱ−3	−430～440	黒曜石	8.9	図4・13
C類	Ⅲ−2	−470	黒曜石	1.6	図4・14
C類	Ⅱ−2	−470～480	黒曜石	1.9	
C類	Ⅱ−0	−470～480	黒曜石	2.9	
C類	Ⅲ−3	−470～480	黒曜石	5.2	
C類	Ⅲ−4	−470～480	黒曜石	9	
C類	Ⅲ−0	−480	黒曜石	4.7	図4・15
C類	Ⅲ−3	−490～500	黒曜石	3.5	
C類	Ⅳ−1	−500～510	黒曜石	3.8	図4・16

関西の南国のような太陽が去って、そろそろ秋です。暑かった夏も過ぎてしまえば良い思い出となって、私の記憶の中に残されるのでしょう？

長野の秋は素晴らしい。流れる雲・夕日に映える雲・そよぐ風・舞い散る落葉・落葉を浮かべて流れる千曲川……。目を閉じると絵葉書のような信州の秋の景色が見えてきます。季節の四季の素晴らしさは自然に囲まれていてこそ感じることができるものなのでしょう。関西に居ると信州の山や木がとても恋しくなります。

そんな信州とは違って首都圏・関西には自然がないと思っていましたが、神戸には意外と自然が残っています。それは神戸が六甲山を後ろにひかえ、さらに北側には三田・丹波篠山を取り囲むような摂丹（摂津・丹波）の山地があるからで、言い換えればそれらを六甲山が開発の手から自然の破壊を食い止めていたからといえるのでしょう（そうは言っても六甲山の裏側の航空写真を観るとゴルフ場の乱立で森は虫食いのようですが）。

今年の震災復興支援のための派遣職員は日本全国の都府県・一部の政令指定都市から集まっています。総勢49名（昨年度からの継続を含む）の大所帯で、地震の被害のひどかった神戸市を始めとする十市十町で遺跡の発掘調査を担当しています。調査の形は兵庫県教育委員会が受託した調査・市町（教育委員会）支援の調査・国庫補助事業による遺跡確認調査の三つに大別され、遺跡調査事業の規模によって調査員の担当員数も1～8人と様々ですが、ほとんどの調査は2人態勢で実施されています。

神戸の夜景は夙に有名ですが、震災後百万ドルの夜景は復活しつつあります。震災復興は繁華街から始まったと言う人もいるくらい急速な回復のようです（震災前の神戸を知らないので比較できませんが）。雨上がりの日の夜景の美しさは鳥肌ができるほどです。被災し仮設住宅に住まざるを得ない人々がいる一方で、歓楽街でお金を落とす人がいる……、ネオンの光を見ていると「これでいいのか神戸？」と考え込んでしまいます。震災という風雪を経験し、その果てにまたネオンの乱立なのか？　被災し日常生活にも問題を残している人々がいるというのに……、その人々の意志や感情はどこに反映されているのか？　そのネオンを見るたび「震災の風化」を感じてやるせなくなります。先進的な自治体をうたっている神戸だからこそ、「震災経験が色褪せない街づくりをして欲しい」そんな想いで頭はいっぱいになります。

そしてそれは神戸・兵庫だけでなく、私たち全体に言えることではないか？　とも思います。今の日本で怖いことは震災などの災害だけでなく、経験してきた様々な問題を忘れること、風化することに気が付かないで居ることではないでしょうか（大戦・水俣・チェルノブイリ……のように？）。

大型尖頭器の基部

—男女倉遺跡群A地点南の石器—

唐沢繕孝・安藤正俊

1　はじめに

故児玉司農武氏によって発見された、黒曜石原産地の旧石器製作址遺跡として著名な男女倉遺跡群に、私たちが初めて訪れたのは1994年でした。その時、最初に表採をして歩いたのがこのA地点南でした。

以来、男女倉遺跡群では一番多くこの地点で表採をして、石鏃3点、尖頭器の未成品7点、楔形石器2点、削器2点、ノッチド・スクレイパー2点などの石器を持っています。その石器の中に、1点だけですが、大型尖頭器の基部があり、その石器について、かながわ考古学財団の吉田政行さん、八ヶ岳旧石器研究グループの堤隆さん、神子柴遺跡を発掘された林茂樹先生にお聞きいたしました。また、林先生からは神子柴遺跡・神子柴文化について大変興味深いお話をお聞きすることができましたので、合わせて紹介いたします。

2　資　料

第1図がその尖頭器で、現存する長さは6.0cm・幅5.3cm・厚さ1.7cmを測ります。現存する長さを3分の1と考えると18cmとなり、大型の部類に入ります。

黒曜石の特徴は、黒色で透明感はまったくなく、流紋岩の球顆が縞のように入っています。

林先生のお話によれば、「霧ヶ峰の星ヶ塔露頭・和田峠露頭の黒曜石が一番質が良くて、男女倉・鷹山・八ヶ岳と、東へ行くほど流紋岩の球顆が入り、質が悪くなる。」そうで、この尖頭器も、「男女倉の黒曜石で間違いないでしょう。」とのことでした。

私たちの尖頭器の知識は乏しくて、大型の木葉形尖頭器＝神子柴型尖頭器と単純に考えていました。

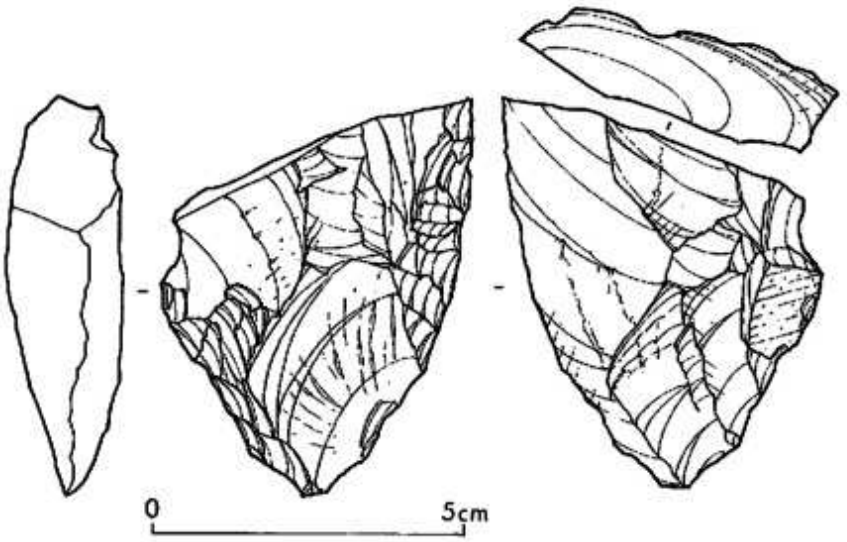
ところが、昨年12月30日に、吉田さんが私（唐沢）の家に、男女倉・鷹山などの表採資料を見にきていただいたときに、この尖頭器を見て、「加工途上であるにしても、神子柴型尖頭器にしては、厚みがありすぎるのでは。」と教えていただけました。

また、今年5月24日に東京でおこなわれた、報告書『中ッ原第1遺跡G地点の研究II』の完成祝いパーティーの席でしたので、詳しくはお聞きできなかったのですが、堤さんにその尖頭器を見ていただき、私の、「神子柴型尖頭器ですか。」の質問に、「大型尖頭器の基部で、神子柴型尖頭器ではないと思いますよ。特に原産地遺跡には、大型の石器が残されやすいので、サイズのみで型式を決めるには注意が必要です。」と教えていただけました。

そして、7月21日に林先生にも、その尖頭器を見ていただいたところ、林先生は手にとって時間をかけてゆっくり観察された後、「第1次調整の後、第2次調整の途中で折損してしまったようだ。表面のやや右側に高い部分があって、それを除去しようとして折れてしまったようだ。表面の右側に比べて左側は、第2次調整があまりおこなわれておらず、断面がD字形のようになっている。それに、表面の左側は第2次調整がおこなわれていない。製作者の、ローレル・リーフ形の尖頭器を作ろうとした意図はわかるが、調整剥離の段階がこの程度では、神子柴型とは断言できない。」と教えていただけました。

今回の尖頭器を表採できたことで、吉田さん・堤さん・林先生から、ただ大型の木葉形尖頭器だけでは、神子柴型尖頭器と考えてはいけないことを教えていただきました。また、堤さんのご教示のように男女倉遺跡群の調査により、原産地遺跡の石器は大型の傾向が

みられるようなのですが、この地点表採の他の尖頭器は小型で、偶然に1点だけ大型尖頭器が作られたとは思えず、これからも、この地点を注意して表採してみたいと考えました。もちろん地主さんに、ご迷惑をお掛けしないように、畑に作物のない時期に。



第1図　男女倉遺跡A地点南の石器（4/5）

3　林先生のお話から

駒ヶ根市の林先生のお宅を、私が訪れたのは故藤森栄一先生のお話を、お聞きしにでした。

林先生は、藤森先生のことをしばらくお話していただいた後で、神子柴遺跡・神子柴文化についても、触れていただけました。

そのお話の中に、「神子柴遺跡の、出土石器の詳細検討中に、細石刃技法と神子柴技法とは、関連があることに気付いた。」と教えていただけました。

それは、林先生ご自身がまだ発表されておられないので、ここに記述することはできませんが、林先生が現在作成中の、神子柴遺跡の報告書の中で記述されるそうです。なんと、一足先に私は林先生より、お聞きしてしまいました。皆様は、報告書ができるまで、お待ち下さい。悪しからず。

また、「神子柴の石器群は、完成された石器文化の様相を呈していることから、日本列島全域に存在するはずで、必ず九州からも見つかるはずだ。と考えていたところ、近年になって、九州では最南端の指宿まで8ケ所の神子柴文化の遺跡が、確認された。」とも教えていただけ、そして、「現在、朝鮮半島からは神子柴文化の遺跡は、確認されてはいないが、必ずあるはずだ。」とも、教えていただけました。

また、私が以前から疑問に思っていた、「細石刃文化の後に、なぜ、神子柴型のような大型尖頭器文化が出現するのですか。」との問いに、林先生は、「それは、石材が関係している。神子柴遺跡には、大型の局部磨製石斧が出土している。細石刃で槍は作れても、重量を必要とする石斧は、細石刃を組み合わせても作れない。大型の石斧を作るためには、質量ともに適切な石材が求められる。大型な石材があれば、なにも小さな細石刃を組合せて槍を作らなくてもよい、という考えからですよ。」と教えていただけました。

私は、単純に細石刃文化の槍と、神子柴文化の石槍だけを考えていて、両文化の他の石器組成までは、考えていませんでした。

昨年に、私が発掘調査に参加した、細石刃文化遺跡の、中ッ原第1遺跡G地点には、片刃礫器が2点あります（3月30日の午後3時頃、悪天候の中の休息時に、堤さんより片刃礫器の用途を木を切ったり削ったりする道具と教えていただけました）。それに対して、神子柴遺跡には、13点の局部磨製石斧があり、両遺跡の木材利用に、大きな違いがあることがわかります。

細石刃文化の遺跡に比べ、神子柴文化の遺跡は、より積極的に木材を利用した遺跡だと思われます。

それは、その当時、気候の温暖化によって、森林が形成されていったために、それを利用するために生まれたのが、神子柴文化だと思います。

また、細石刃文化の石器は小形で、運搬形態としては最も効率がよいと考えられており、旧石器人の移動生活を裏付けると思われるのに対して、神子柴文化の石器は大型で、森林資源を効率よく利用して、あるいは一定期間かもしれませんが、定住化が始まったのかもしれません。

そして、神子柴文化から土器が発生したのは、旧石器人が新しく形成された、森林の木の実などを、活用しようとしたためではないでしょうか。

また、林先生は、「ただ木を切るだけなら、打製石斧で用が足りる。わざわざ刃部を磨いたのは、木材に対して細かい細工をする必要があったため。」と教えていただけ、さらに、「神子柴遺跡の石斧の使用は著しく、そのため磨滅折損が多く、それを再生するための調整剥離を繰り返していて、そのために石斧に厚みがなくなってしまっている。」とも教えていただけました。その石斧を使って、細かい細工をした木材を、何に使用したのでしょうか。

また、尖頭器についてのお話では、「神子柴型尖頭器の製作技術には、それまでの、旧石器時代の石器製作技術がすべて使われており、神子柴文化は細石刃文化の中から生まれたのだ。その、神子柴型尖頭器の定義・技法をごく簡単に言うと、長大な板状の素材から加工された、ぶ厚い尖頭状ブランクに、精密な調整剥離を加えて、中央基部よりに最大幅をもち、平面を木葉形に、断面を薄い凸レンズ状に整えると共に、さらに、両面の全部及び両側縁に精密な各種剥離を加えて、極めて平滑に調整し、尖鋭な頭部、及び基部、及び鋭利な縁辺が作出された大型尖頭器である。」と教えていただけました。さらに、よく問題になる神子柴遺跡の尖頭器の実用性についても、「磨滅・使用痕が多い。」と非実用説を否定され、「神子柴遺跡は、キャンプ・サイトである。」と教えていただけました。

それから、林先生は、「既刊の専門書に記述されている、神子柴遺跡・神子柴文化の内容には、誤りが多い。」とも教えていただけました。正しい、神子柴遺跡・神子柴文化を世に示すためにも、1日も早い神子柴遺跡の報告書の完成を祈ります。

4 謝　辞

この原稿は、吉田政行さん・堤隆さん・林茂樹先生からのご教示のお陰で、起草することができました。

深く感謝いたします。ありがとうございました。

中ッ原1G2次調査の後も、愛知県に帰省の折、遠路を私の家にまで訪ねていただけ、ご指導していただいた吉田さん。また帰省の折には、遠路ですがご指導をお願いいたします。

出会いは、著書『遠き狩人たちの八ヶ岳』でした。

素人の私に、いつも気を使っていただき、常に温かくご指導をしてくださる堤さん。今回も、原稿の手直しをしていただきました。そして、実測図を途中までしか書けずに、再びお手を煩わせてしまいました。すみませんでした。これからも、ご指導よろしくお願いいたします。

今回初めてお会いいたしました林先生。7月21・28日と真夏の暑い時期なのに、子供と一緒に2日間も、長時間お邪魔してしまい、すみませんでした。私の持参した石器を見るときの、林先生の鋭い目が忘れられません。それから、今なかなか手に入りにくい林先生著、『上伊那の考古学的調査』『長野県予長丘遺跡調査報告』（角錐状石器出土）をいただきました。有意義に活用させていただきたいと思ったことでした。

また、療養中のお体なのに、車で帰る私たちを、わざわざ道路にまで出て、見送ってくださいました。

車を走らせながら林先生の、「神子柴遺跡へ行くのなら、案内してあげたいのだが、あそこに行くと、涙が止まらなくなってねぇ……。」のお言葉が、いつまでも私の耳に残っていました。

引用・参考文献

堤　隆　1993『遠き狩人たちの八ヶ岳』
堤　隆　1996「中ッ原第1遺跡G地点の新資料」『佐久考古通信』66
林　茂樹　1966『上伊那の考古学的調査』
林　茂樹　1995『伊那の石槍』
和田村教育委員会　1975『男女倉』
和田村教育委員会　1993『長野県黒曜石原産地遺跡分布調査報告書（和田峠・男女倉）III』
和田村教育委員会　1996「和田村の黒曜石をめぐる課題　―原産地遺跡分布調査を終えて―」
稲田孝司編　1988『旧石器人の生活と集団』
白石浩之　1989『旧石器時代の石槍』
加藤晋平・鶴丸俊明　1991『石器入門事典　先土器』
鈴木道之助　1991『石器入門事典　縄文』
佐藤宏之　1992『日本旧石器文化の構造と進化』
橿原考古学研究所　1994『一万年前を掘る』
戸沢充則編　1995『縄文人の時代』
片岡正人　1996『現場取材・信濃の古代遺跡は語る』

シンポジウム　**「押型文と沈線文」のご案内**

日　時　1997年1月18日（土）13：00～
　　19日（日）9：00～
場　所　望月町駒の里ふれあいセンター
主　催　長野県考古学会　縄文早期部会
後　援　佐久考古学会

宿泊・懇親会　春日温泉　もちづき荘
（宿泊＋懇親会＝12,000円、懇親会＝4,000円）
申込み（ハガキで）
〒389-06 坂城町坂城6539　中沢道彦まで
照会 ☎（0268）82－2637（夜9時以降）

樋村遺跡と後家山の古墳群

桐原　健

1　はじめに

佐久盆地東部、関東山地西麓から千曲川に至る地域は、山地に発し西流して千曲川に注ぐ香坂・志賀・滑津・田子・雨川・谷川によって細かく区画されている。東西に細長い小区画は東から谷、谷口、沖積地で、沖積地と谷筋は水田、谷口の微高地は居住域として利用され、川筋に添っては峠を越して上野と結ぶ道路が設けられている。

このような地表景観の中にある古墳の様相だが、数基の単独墳を除いては、張り出した山裾の間に群をなして築かれ、グルーピングが容易である。このために当地域は古墳・集落・水田を一位一体とする総合研究展開の場として夙に注目されてきた[1]。その好適な地域の一つが南北と西を志賀川と滑津川によって画されている佐久市内山と平賀のうちの北半分で、ここには山裾に50基の古墳[2]と昭和57・58年に調査された谷口に立地する樋村遺跡[3]がある。水田面積は明治７・８年時にあって平賀114、瀬戸42町歩。目見当で往時は６掛け程度だったとして90ha、平賀に限れば70haが生産域となる。現在のところ古墳時代の遺跡は樋村だけだから、樋村集落の住人が50基の古墳を築いたとする考えに短絡的との誇りは受けないだろう。70から90haの水田を営んでおれば150年のうちに50基程度の古墳は築き得る。

早々に結論を言ってしまった。以下、遺跡と古墳の関係を考えていきたいが、樋村遺跡の報告書『遺物編』は未刊行、古墳の半ばはゴルフ場造成で消滅してしまっており、考察の多分に恣意的・観念的になる懸念がある。

2　樋村遺跡

集落は滑津川の北200mのところに、東西450、南北は100から150mと東西に細長い形をとっている。現在、中央を西流する幅1.5mの水路があるが、古代においても自然流の存在が考えられる。この範囲内に推定400軒の住居が営まれていた。古墳後期とされているので６・７世紀の200年間と受けとれるが、この集落の期間はもう少しは短かったもののようである。報告書は住居の重複状態に主眼をおいてⅠ・Ⅰ′・Ⅱ・Ⅱ′・Ⅲの５時期区分を行い、Ⅱ期は更に細区分できるとしている。竪穴住居の耐用年数は25年とされているから、そうなると集落の存続期間は１世紀半となる。時期毎の住居数はⅠ期20、Ⅰ′期19、Ⅱ期25、Ⅱ′期20、Ⅲ期16％なので、Ⅱ期には100軒、Ⅲ期になっても65軒、ワン・モメントでは50軒前後となろうか。

この集落がもつ特徴の第１は、古墳後期に突如として形成されたこと、先行する遺構は弥生後期の住居址17軒なので200年に亙る空白がある。しかも形成時から50軒という大集落である。特徴の第２として、発掘された288軒のうち、重複していない住居址は65軒の23％に過ぎない。このことから住人の宅地は決まっていて、それぞれの家では自分の宅地内で建て替えを行ってきたのではないかとの推察ができる。つまり彼等には相当にきつい規制が課せられていたのである。それから、各期に大型住居が見られる。Ⅰ期の220住は85.2m²、Ⅰ′期258住115.6m²、Ⅱ期の111住94.5m²、264住64.6m²、54住63.9m²、125住60.3m²、127住55.1m²。

これらの住居だが、54住の一例を除いて同時期、及び次期の住居によって切られることはない。大型住居は長期間存続していたか、後人が跡地を敬遠したのいずれかであろう。最初の古墳に葬られた人物を想定する場合、候補に上ってくるのはかかる大型住居の家長と観てよい。Ⅰ期では220住と、64住か78住のうちのどちらか。Ⅰ′では258住、Ⅱ期では111住と127住か125住のどちらかだろう。

3　後家山の古墳群

樋村集落に最も接近している山塊は後家山で、西端に張り出した丘陵上に後家山古墳[4]１基が存在、そこから山麓を東に400m廻って東久保古墳群（５基）、更に600mで東姥石古墳群（５基）と月崎古墳群の19基[5]。山麓はこれより北に大きく湾入して内山地区の西和田に

第１図　樋村遺跡（１）と後家山古墳（２）

3基、長峰に8基[6]、大間に7基。そこから1支脈が南に垂れて同上に観音堂古墳、山から離れた水田中に塚田古墳、これが最東端の古墳で樋村とは2.4kmの距離がある。なお、最近、後家山の北の寄山北麓で1基が調査報告[7]されている。

後家山山麓に築かれている古墳の特徴について、墳形は円、規模もさほど大きくはないが殆どの古墳が横穴式石室を内蔵している。この点は留意する必要がありそうだ。

墳丘規模では径3mといった報告もあるが精査すれば一廻りは大きくなる可能性がある。

しかし、この地域で径10mを超えていれば大型墳としての取り扱いを受ける。

石室の形態は大半が長方形の玄室に両袖の羨道が付いている。長野県の石室で幅が1.5mを超えていれば大型とされている。概してこの地区の石室幅は広い。墳丘が小さいだけに特にもその感は強い。それに対して玄室長はあまり延びてはいない。確かにプランは長方形だが、幅1.0に対し長さは1.16から1.86までの間におさまり、2.0以上の長さをとるものは3基しかない。

羨道のあり方は両袖式だが、袖石張り出しの顕著なものと形ばかりのものとに二分される。これも数値で示すならば、羨道幅を1.0とした場合、玄室幅が1.5以下のもの4基、以上のもの6基。最も顕著なものが月崎地籍にあるゴルフ場7号墳の2.9で、玄室幅1.6mに対し羨道幅は0.55mである。

玄室の構築法で、奥壁は鏡石1枚の場合と磐石を2段に重ねたケースとがある。当然のことだが、幅広の石室の場合に後者の構築が採られているように見える。側壁の積み方は長峯古墳群の場合、下段は板石を立て、その上の空隙は割石の乱れ積みで塡めている。従って基盤だけ見ると玄室の三壁は板石で囲繞されている。この構築は月崎古墳群の2基にも見られている。この他に、1例だけがゴルフ場2号墳（東姥石）には側壁に切石が用いられていたとの報告がある。注意したい。

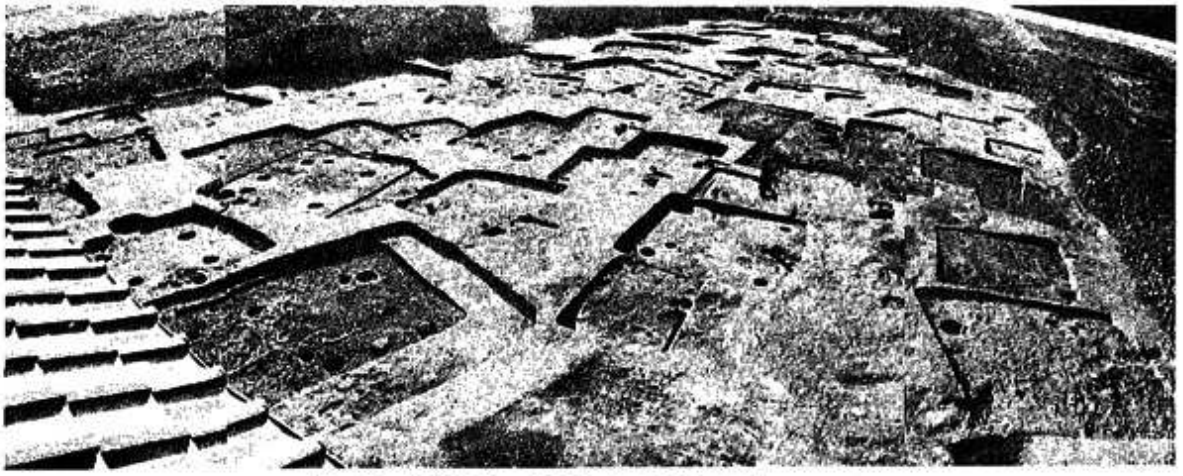
副葬品にも特徴はある。構成は武器・装身具・土器のセットが通有で、長峯7号墳ではこれに馬具（轡）が加わっている。武器の内容は直刀・鉄鏃・刀子で、このうち、長峯6号墳の直刀は金銅装の鞘を伴う儀刀である。装身具は耳環と玉類で、このうち、後家山、大間、長峯7号墳には切子玉がある。他地域の例だが切子玉出土の古墳からは実用的な馬具が発見されている。長峯7号墳からは素環の轡が出土している。

被葬者について、横穴式石室墳だから追葬は普通で、長峯1号墳では3体、寄山古墳では6から7体が発見されている。又、長峯5号墳では8世紀後半まで利用されていたらしい。棺床上より焼骨片・焼土・炭化粒が検出されている。松本市の安塚・秋葉原古墳群で見られたような骨化促進の作業が石室内で行われていたらしい。

以上の古墳特徴をあらためて50基に適用すると単独墳と群中の盟主的古墳、それと一般群集墳との間に一線が引けそうである。前者の墳丘規模は径10mを超えている。石室も大きい。後家山古墳は無袖式で幅2.3、長さ2.9m、観音堂古墳は幅1.99、長さ2.45m、ゴルフ場15号墳、長峯7号墳も石室幅は2mを超えている。副葬品では馬具と切子玉の出土を挙げておこう。これに対し、後者の墳丘・石室規模は概して小型で、月崎古墳群のマウンドは径10m以下、石室幅も1.5m以下である。

4　古墳と集落

古墳様相から樋村集落の性格は窺えないものか。石室の規模・構造は7世紀代古墳の特徴とマッチしているが、玄室の幅員に比し長さが2倍を超えるものの少ないこと、両袖式で羨道幅の狭いこと、及び板石を立てて玄室の3壁を構成していることなどは滋賀県大津



第2図　樋村遺跡の住居群（佐久市教育委員会1985より）

市の坂本から錦織間に見られる渡来系氏族の石室墳[5]を連想させる。

大和政権の東国経営の一環に渡来人の大量移住が挙げられる。滑津川を遡れば内山峠を越えて甘楽郡の下仁田町に至る。鏑川流域には緑石切石積石室墳が築かれている。甘楽郡という郡名、多胡碑や『続日本紀』和銅4年3月条の多胡建郡記事により渡来人の居住は確実で、しからば、その背後の、東国経営の兵站基地である科野国佐久郡においても渡来人の徙民実辺策が講ぜられたとする推察は許される筈である。中央の指令により渡来人の集団を引率した氏族がこの谷筋に定着した。氏族の長は単独墳に葬られ、主力をなす渡来人には墓地が与えられて群集墳を構築した。彼等の主生業は水田経営に置かれた。

谷筋を抑える軍事的任務も加わっていた。上野甘楽郡との交流も繁かったことだろう。

5　平賀という地域

私に平賀の名を教えてくれたのは藤森栄一先生で、「他人は他人、俺は俺というのが信州人でね。これは古代からあるんだ。源氏旗上げの時に佐久の連中は義仲を担いだんだが一人、平賀だけは頼朝方だったんだ。」たしかに義仲方には根々井の大弥太・小弥太から楯の三郎頼忠、桜井の太郎、志賀の七郎、野沢太郎と在処の名のついた武者が見えるが平賀はいない。一方、建久元年の頼朝入京の時、平賀三郎朝信は後陣12番として扈従している。荒船山の襞の一つを占めている程度の小勢力といった先生の口振りではあったが、彼の世界は結構広い。元徳元年3月、諏訪上社の五月会頭役状の八番に「平賀郷内三河田・滑瀬・平林・平賀・松井地頭等」とあり、市村咸人先生の研究[9]によれば、平賀郷は南佐久郡平賀村平賀を中心とする地で、東明寺・滑瀬・平賀・内山・松井・平林・入沢・青間・三河田・小井河の10ケ村に亘っている。明治22年時の村名に重ねると、青沼村（入沢・平林）、内山村（松井・内山）、中瀬村（東明寺・下中込・瀬戸）、平賀村（平賀）、高瀬村（三河田）。地図で按ずれば南は小海線の羽黒駅から8km北の志賀川までの千曲川右岸一帯となる。明治7年の水田面積は499、畑は636町歩。この世界の中に12世紀後半より平賀氏が登場してきて活動をする訳だが、『佐久市志』[10]によれば2世紀以前の10世紀前半ごろ、この一帯は佐久郡8郷のうちの青沼郷だった。佐久郡の郷は8世紀には既に成立していたと言っている。そうなるといま一歩で樋村遺跡や後家山の古墳と結びつく。

註

（1）大塚考古学研究会「長野県における古墳の地域的把握」『日本歴史論究』所収　1964

（2）佐久市教育委員会『佐久市遺跡詳細分布調査報告書』　1984

（3）佐久市教育委員会『樋村遺跡』　1985

（4）佐久市教育委員会『佐久市平賀後家山古墳緊急発掘調査報告書』　1974

（5）佐久市教育委員会『佐久平ゴルフ場古墳群調査報告書』　1967
ゴルフ場造成のため地境不明となる。このため従来の東姥石・月崎古墳群を佐久平ゴルフ場古墳群と総称し、通し番号をつけた。1号から6号墳までは東姥石地籍、7号から23号墳は月崎地籍に所在する。

（6）佐久市教育委員会『長峯古墳群』　1988

（7）佐久市教育委員会『寄山—寄山古墳の調査』　1995

（8）水野正好「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本(5)』所収　1970

（9）市村咸人『建武中興を中心としたる信濃勤王史攷』　1939

（10）井出正義「佐久郡の成立」『佐久市志歴史編(1)』所収　1995

♪　編集後記　♪

「考古学に数十年もつ学説なんてそう無いんだから後悔せずにどんどん書きたい事を書いたほうがいい。間違ったら訂正すればいいことなんだし……」

以前、桐原先生からこんなことをいわれ、印象的だった。なるほど、そんな思いきりのよさからか桐原先生の原稿は早い。今回も、私が頼んでからたった1週間で先生の原稿が私の手もとに届いた。私は筆がつまると、先生の言葉を時々思い出し「エイッ!」と書いてしまう。しかしそこは先生と違う文才のなさ、何年かして読み返し後悔してしまうものも少なくない。あ〜あ、また原稿を引き受け、迷いという名のキーボードをたたく秋の夜長ではある。　（つつみ）

佐久考古通信　No.68

発行所　佐久考古学会

〒384-01　長野県佐久市桜井879
臼田武正方
郵便振替　(新)00570-9-2842
☎0267 (62) 8133

発行者　山井茂也

編集者　堤　隆

印刷所　はおずき書籍㈱

佐久考古学会シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL
1997. 4. 1. No 69
JOURNAL

★ 目 次 ★

■ 八風山の南麓と北麓……土屋長久……1
■ 懐かしいスナップより……事務局……3
■ 佐久地方における中世城館跡の特徴について（予察）……河西克造……4
■ 講演会「トイレの考古学」熱聴……事務局……8
■ 軽井沢高原出土の櫛描文土器をめぐって……白田武正……9
■ 土器づくり体験記……桜井秀雄……10
■ 開催報告 第9回佐久地方遺跡発掘調査報告会……事務局……10
■ シンポジウム参加記 「押型文と沈線文」in 望月町……藤森英二……11
■ 望月町布施後藤地採集の磨製石斧……倉見誠……12
■ 黒い瞳と風の島……堤隆……13

八風山の南麓と北麓

―軽井沢町発地小倉遺跡及隣接地12箇所の試掘調査―

土屋長久

1

昭和63年、上信越道関係で調査された、佐久市香坂の下茂内遺跡（註1）からは、尖頭器工房址が発見され、その石材は八風山ガラス質安山岩がほとんどで、黒曜石など数点にすぎない。明らかに尖頭器集中製作所でもある。石材となった岩石は、八風山（はっぷうさん）山麓、軽井沢と佐久市側に分布している。また平成6年4月、佐久市香坂字雨原地の八風遺跡群（註2）からも石槍が発見されている。両遺跡報告書を通じ、1、2気づいたことを述べたい。

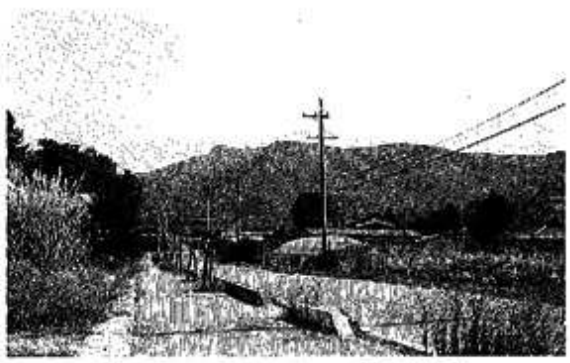
2

軽井沢町は、平成元年「軽井沢町誌」「自然編、民俗編、歴史編（近・現代）」が刊行されたが、「原始・古代・中世編」は計画のままとなった。現在資料を継続集成中である。上代文化の概観をみると（註3）、浅間山（標高2,542m）の中腹、白糸の滝を源泉とし、湯川が南北に流れ、鳥井原、油井地点で、西南に流下し、佐久平の鳴瀬地区で千曲川に合流している。

湯川は、鳥井原以西では、前掛山の噴出物を浸蝕し、凹地形の断崖を形成している。この凹切は、この地を東端とし、浅間山麓西端は、小諸市懐古園の小諸城址にまで及んでいる。

浅間山は、現在活動している活火山である。軽井沢の西北の一角とに聳立する浅間山を背景にもち、いくつかの嶺々に円環のように囲まれている。その円環の内側が、軽井沢高原であり、その中央部は、約1,000m弱の標高で、夏期には爽涼の風が流れる高原の保健休養地である。

軽井沢の生活・文化と密接であり、切りはなすことができないのが、浅間山の火山活動である。いまから1万5千年前と天仁元年（1108）の両噴火等は、現在の軽井沢、つまり、長野県側に、浅間山の爆発により、



第1図 下発地より、八風山を望む

火山泥流が流出し、追分、鳥井原、油井周辺を埋め、湯川を堰止め、自然のダムを形成した。その結果、東方へ向かって、軽井沢高原の全域は、水に埋もれ、巨大な湖水（古南軽井沢湖）を形成し、満々と水を湛えていた。その滝壺が、油井の釜の橋にある噴穴（おうけつ）〈軽井沢町指定文化財、天然記念物、名勝〉として残置したが、湖水の水圧により、ダムは決壊し、湖水は枯渇して、南部に池沼をのこし、ことに鎌倉時代では、油井の台地の西端まで、追分火砕流堆積物で埋めつくされた。その後地質的研究が進み（註4）、新井房夫氏では、浅間山はA天明3年（1783）、B天仁元年（1108）、C4世紀前半、D縄文時代中期と、4回の大爆発をし、とりわけ、Bは、歴史上最大規模のものと解されている。

町内塩沢地籍下、地表下2.0m、④層の泥炭層の堆積がみられ（註5）、諸工事に伴い、町内各所より、泥炭層が検出され、湯川以東から軽井沢駅周辺、軟弱な泥炭層で、新幹線工事の基礎工事に大変であったことが、ＳＢＣで放映された。4回の大噴火により、形態は異なるが、それに伴い、大きな湖が形成されたことが推定される。浅間高原の形成と文化の再検討が必要となる。

3

昭和55年12月、茂沢南石堂遺跡調査（最終）で、この軽井沢高原の湖の形成について、東大考古学教室の上野佳也氏に伝えた。先生は思慮深く、熟考されたのか、しばらくして「湖があったとすれば、今から1万2千年前、必ず湖の周辺に旧石器文化があるはず。」といわれ、「これは、必ずみつかるので調査されてはどうでしょうか」とすすめられたことがあった。

我々は、とかく行政区域単位で考えがちであり、浅間山をとりまく、碓氷山系という大きい文化圏把握から遠のいていたかもしれない。ともあれ、佐久市香坂、下茂内等より、旧石器文化が検出されて、その石材に、八風山の岩石を使用していることである。

天仁元年（1108）の浅間火山の噴火は大型とされているが、1万2～5千年前の前掛山が、吹っ飛び、二重式火山を形成したのであるが、火山泥流が、佐久市中佐都地域、軽井沢町発地地域にも流下し、多くの火山残丘を形成し、前者にあっては、古墳時代となって墳墓として塚原古墳群を構築し、後者では、犬坊塚等、昭和42年8月の調査では、39ヶ所の信仰塚を含む塚状の火山残丘を確認できた。その後、昭和57年5月18日に、白倉盛男先生に、発地地方、油井地方の火山残丘の地質的調査を依頼した。所見の要旨は（註6）、浅間火山の活動以前（洪積世）繁茂していた天然黒斑林の南軽井沢帯には、火山活動期に多量の火山灰、火山砂礫、浮石が堆積し、一部には溶岩流の流出もあって、湯川、泥川の流路を堰止め、付近一帯は、湖沼状態となって、天然林は、立木のまま埋没して立木化石となったと考えられる。露出地点（油井）の約50m下流に溶岩流の崖もあり、古軽井沢湖底層の堆積も認められるとのことであった。

4

平成5年に、八風山の北麓に、某不動産が、（仮）軽井沢発地地区をゴルフ場に開発する計画があり、開発地内、試掘調査を同年12月に、土屋長久を調査担当者として実施した。（註7）（第1図）

地籍は、大字発地字高町1828-1、字高町1830-1・2・3、字高町1830-4、字名郷入1964-1、字向畑2030-3、字木中入2031-2、同2033-1・2、同2034-1、同2035-1・2、同2038、字上坂取2418-7・8・9・10地番地内役2,000m×1,000mを範囲に、長さ80m、幅0.4mのテストピット12ヶ所を入れ、調査を行ったが、地目は、ほとんど山林で、近年の炭焼跡の他、ローム層中からも全く遺構、遺物は発見されなかった。この地籍全域から泥炭層が認められたものの、科学的処理はしなかった。今回の試掘調査は、遺構・遺物が全く検出されず、発見されなかったことに意義がある。つまり、旧石器時代から縄文時代にかけて、一帯は当時、湖の中でもあったと解される。地籍の東方、昭和38～41年にかけて、八風林道造成の折には、室町時代末期の石造五輪塔婆群、中国、青銅銭1点等が発見されている。

発地地方が湖、沼地であった事の一例でもあろうが、この地方が昭和42～47年にかけ、上・下発地農業構造改善事業が竣工し、当時の郷土史家、柳沢弥平、柳沢義定氏等で全域から鏃が散布しており採集され保管されている。柳沢義定氏採集にかかわるものが第2図である。上段左から5番目、チャート製、下段左から3番目が、八風山安山岩製で、他は黒耀石となっている。

この付近、ことに字下原は、昭和9年、八幡一郎氏の『北佐久郡の考古学的調査』の地名表に、鏃のみ報告され、鏃の散布地は、追分字石小屋付近の2ヶ所のみである。また江戸坂下遺跡でも、八風山の安山岩の石材からなる、石匙片、打製石斧片3点が出土している。（註8）

5

浅間火山は天明3年の大噴火が歴史上、地域の居住集落も顕著で、その被害が多く、鎌原村鎌原遺跡はあまりにも著明である。その後、延命寺跡も発掘調査され、（註9）鎌原郷土資料館も増築され、展示資料に驚かされる。報告書によると、地表下、6.5～7.5mで近世の遺構が検出されている。もとより、六里ヶ原を形

成した溶岩は、天明期より天仁期が大きかったとされ、大部分は天仁期のものである。近世の生活史面下に、鎌倉期の火砕流で埋没した諸文化、遺跡を追求することは、無理であろうか？

これは後年の物語文学であるが、中世の浅間山麓を記述したものとして『曽我物語』（註10）がある。源頼朝の浅間巻狩折の事件文学でもある。その成立は、南北朝以前で、意外と古く、内容も地名等かなり史実に近いとされる説があるが、ここに出てくる、不詳の地名についてである。

碓氷峠の熊野神社の矢立明神社に、上矢を行い、軽井沢の沓懸宿（後の中山道沓掛宿）より三原までの間に、文献上、"朝倉山"、"木賊原"（とくさがはら）、"伏屋"などの地名及集落についてである。朝倉山は、碓氷山の熊野神社の裏山を「長倉山」と呼称されていることと何か関係があると編者は記している。

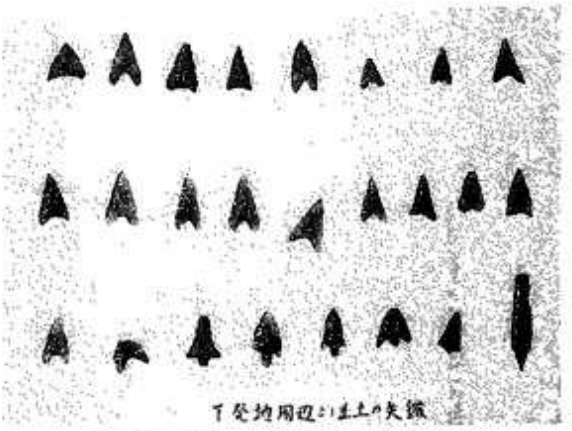
浅間火山の南麓・北麓も溶岩、火砕流、泥流で被われ、川が堰止められ、湖ができたりしたものの、火山活動が静止し、植相林が形成されると、ことに湖の緑豊かな周辺には、狩人達が訪れたのではあるまいかと想像される。

註1　㈱長野県埋蔵文化財センター他『下茂内遺跡』平成4年3月

2　須藤隆司・羽毛田卓也「八風遺跡群」『佐久市埋蔵文化財　年報4』平成6年度・平成8年3月

3　松田智雄「軽井沢　自然・歴史と文化」『四季の詩　軽井沢』114～129P、昭和55年　講談社

4　荒牧重雄「浅間山の火山活動」『軽井沢町誌　自然編』59～80P　昭和62年　軽井沢町



第2図　発地、柳沢義定氏保管の石鏃

5　井出嘉雄「陸水」『北佐久郡誌　第1巻』291P　昭和30年

6　白倉盛男「軽井沢町南軽井沢二地点地質調査報告」昭和57年5月18日

7　土屋長久・原田政信『発地小倉遺跡及び隣接地他12箇所試掘調査報告』平成6年1月　軽井沢町教育委員会

8　土屋長久『江戸坂下遺跡』平成7年9月　軽井沢町教育委員会

9　松島榮治『埋没村落、鎌原村発掘調査概要―よみがえる延命寺―』平成6年3月　嬬恋村教育委員会

10　「曽我物語」『日本古典文学大系』88　昭和41年　岩波書店

能登　健「発掘された中世前夜」『よみがえる中世5』浅間火山灰と中世の東国　平成元年　平凡社

懐かしいスナップより

1977年秋、ちょうど20年前。佐久町北沢の大石棒。どじょうヒゲ、あの武藤金さんである。たんぼのハゼカケッボには、黄金色の稲がかかる。ちぎれ雲がそらをただよう。

巨根をかかえているのは林幸彦さんだ。

あの頃は、みんな若かった。

編集部より

なつかしい写真や、エピソードをお持ちの方は、編集部までお寄せ下さい。

佐久地方における中世城館跡の特徴について

（予察）

河西克造

1　はじめに

「城」という言葉で、姫路城・松本城のような石垣と何層にもわたる天守閣がそびえ建つ近世の城を連想する人が多いと思われる。江戸城に代表されるこれらの幕藩体制下の城は、本丸を中心に二の丸・三の丸と配置された城郭部分と、整然とした街区がつくられた城下町部分で構成されており、日本の城郭の完成された姿である（千田1993）。

このような権威の象徴であり、威圧感を与える「見せる城」に対して、中世の城は「戦う城」と表現できる。しかし、その実態が不明瞭であったことは、土の城がNHKの大河ドラマ数年前の「太平記」でようやく登場したことが、それを裏付けている。

現在、中世城郭の研究は、考古学・城郭史（縄張り研究）・文献史学が中心となり、絵画資料などを含めて進展しているが、大規模な発掘調査が増加した1970年代後半が、大きな画期となっている。それは、考古学的資料が既成の城郭概念に再検討の必要性を迫るなど、従来の縄張り研究に大きな影響を与えたことである。考古学が果たす役割が非常に大きくなっていることを示している。

そのような状況下で、各研究分野の研究者が城郭研究の方法論をめぐって激論を交わしたこともあるが、現在では学問分野の枠を越えた学際的研究により、新しい城郭像を描き出そうとしている。しかし、研究の方法については反省すべき点もあり、今後はさらに思考錯誤を繰り返して、中世城郭の実態を解明するための方法論を確立すべきであろう。

佐久地方の城郭調査では、城郭研究の金字塔として学史に刻まれている『南佐久古城址調査』がある。最近注視されるものとして、佐久市大井城・金井城に代表される大規模な発掘調査があり、地表面では判読できなかった曲輪内の空間構成が、浮かび上がってきている。

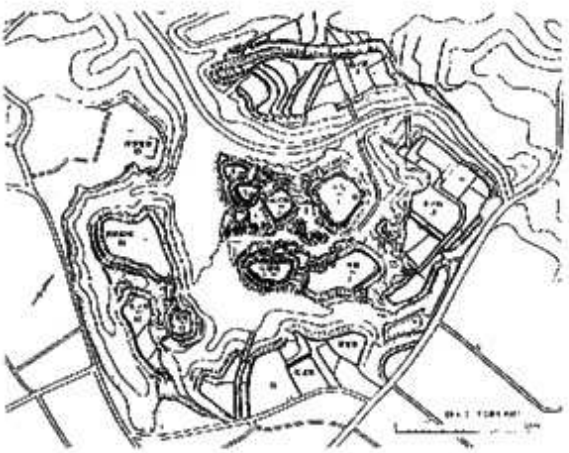
佐久考古学会では、毎年発掘成果を市民の方々に還元するための催し（遺跡発掘調査報告会）が開催されており、筆者は昨年末の報告会の席上、城近の発掘例についてのコメントをする機会に恵まれた。しかし、浅学に起因してまとまりのない内容となってしまったため、この場を借りて佐久地方の中世城館について日頃抱いている愚言を披瀝させて頂きたい。

2　縄張りから見た佐久地方の中世城館

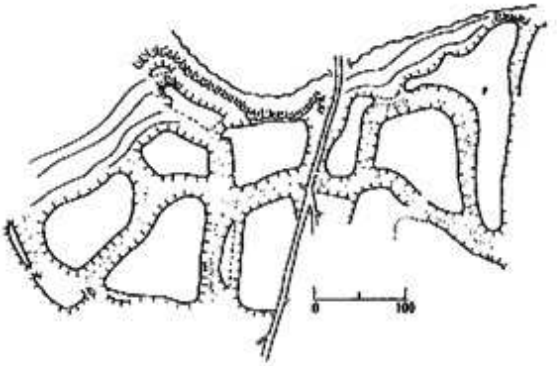
日本列島のほぼ中央に位置する信濃国は、周囲を山々に囲まれており、いくつもの盆地が峠を媒介として交流した地域であった。中世では、村上・小笠原・諏訪氏などの在地の国人層と信濃に侵入した戦国大名武田氏が地形に則して城館を築いたため、立地と規模（構造）に地域性が見られる（河西1992）。

佐久地方は、山城が発達した善光寺平・松本平・諏訪盆地と異なり、この地方に特有な「田切り」地形を利用し、河川に面した崖を自然の要害とした城館が発達した。そして、このような台地上の城館が、地域を支配する拠点的城郭としての役割を担ったと考えられる。なお、大島城・高遠城・松岡城が典型的であるが、天竜川によって形成された河岸段丘を利用して築かれている伊那谷の城館にも類似する要素が見られる。この伊那谷も、台地上の城館が発達した地域である。

さらに、日本列島的な視野で見ると、すでに村田修三氏の指摘（村田1988）があるが、氏が「辺境型」と仮称した浪岡城・根城（青森県）に代表される北東北



第1図　知鷺城跡要図（知覚町教委1992より引用）



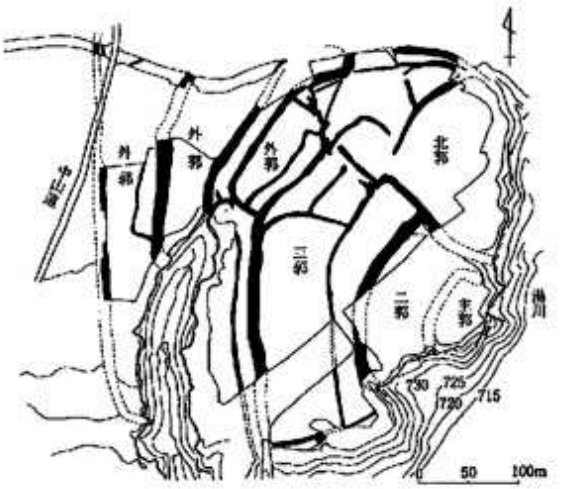
第2図　耳取城跡略図（長野県教委1988より引用）

地方の城館と、知覧城（鹿児島県・図1）に代表されるシラス台地で有名な南九州地方の城館と類似している。縄張りの点から、小諸・佐久地方の城館について考えてみると、「田切り」地形を利用して城域が巨大化した城館が数多く分布することが目につく。耳取城（図2）・平原城（小諸市）、大井城（佐久市）、小田井城（御代田町）がその典型で、堀を画して「○○城」と称される曲輪が独立する縄張りを呈し、一目しただけではどこが「主郭」か判断できない特徴を持っている。この特徴から、佐久地方の城郭は従来「群郭型」と呼称されていた城館の一類型として捉えられる。

当地方の城館の構造と特徴を抽出するにあたって、多くの見方（多視点）があるが、ここでは“求心性”という視点から、大井氏の城館・大井城と周辺の城館を事例として見てみたい。

湯川の段丘を利用して築かれ、玉城・黒岩城・石並城で構成されている大井城は、かなり広い面積を有するが、求心性が弱い縄張りである（図3）。湯川と反対側は、現在の岩村田の街と地形的に連続するが、城内との境界が明確でなく城域が不明瞭である。玉城・黒岩城・石並城の同時性の問題については今後の発掘調査に委ねられるが、前記した知覧城を例にすると、曲輪が序々に付加された最終的な姿を示している可能性がある。ところが、大井城の北方、約2.5kmに位置する金井城は、湯川の断崖に接した主郭を中心に、堀を画して二郭・三郭・外郭・北郭が扇状に配置している（図4）。極めて求心性が強く、整然とした縄張りである。大井城と対照的な姿をしているが、北方に近接する小田井城は、不整形な曲輪が連なった規則性のない配置である。

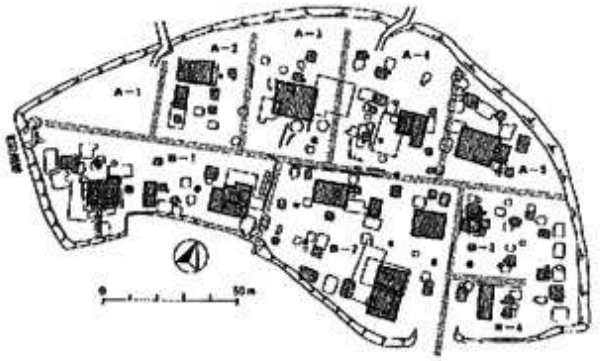
第3図　大井城跡全体図（佐久市志刊行会1993より引用）



第4図　金井城跡全体図（中井1994より引用）

以上のことから、現時点では求心性が弱い「群郭型」の城館が当地方独特の姿と指摘できる。当地方のなかには、今後、詳細な遺構の読み込みにより、求心性についての認識が変わる城館もあると思われる。しかし、現時点ではこれら比較的軍事的色彩が薄い城館は、各曲輪の独立により城館全体が並列的に構成され、城主を中心としたピラミッド型の構成を示しておらず、明確な階層性が形成されていない可能性が強い。したがって、組織的に機能していなかったと考えられ、松岡氏が指摘（松岡1988）するように、主従関係の弱体した築城主体者を想定できる。どうも、佐久地方では在地の国人層により築城された城館が、このような姿をなしていると言えよう。これと比較すると、金井城には特異性があり、大井城とは別系統の築城主体者を想定できる。以前、金井城の縄張りに武田氏的要素が具備されていることを指摘した（河西1991）。しかし、武田氏の拠点的城郭に不可欠な「丸馬出し」が確認されていないことと、武田氏が攻略した平原城の実態が不明確で金井城と比較ができないことが課題として残っている。しかし、縄張りからすると、外部勢力による築城が起因していると思わざるを得ない。

今後、詳細な踏査により、金井城のような城館が発見される可能性があるが、「辺境型」と捉えて特別視することは、地域性を抽出して、城とは何か！　という本質的な問題に迫る本来の研究から離れて行くのではないだろうか。地域のなかで、求心性が異なる城館がどのように分布するかを、集落・寺院との関連から捉えることこそ、マクロな意味での地域性を導き出す手段ではないかと考えている。さらに、求心性が弱い城館は、強い城館に淘汰されて行く見解もあるが、地域ごとにかなりバリエーションがあると考えられよう。



第5図　浪岡城跡（北館）16世紀前半の遺構配置模式図（工藤1988より引用）

3　発掘調査から見た佐久地方の中世城館

最近の発掘調査で、城郭概念の再検討に迫ったものとして浪岡城の調査がある。8つの曲輪（館）で構成されている浪岡城のなかで、北館と内館の調査では、無数の掘立柱建物址・竪穴建物址・井戸と土坑などが検出され、城館の内部であるにもかかわらず、さながら屋敷地を思わせる様相を呈していた。工藤氏の検討で、大型の掘立柱建物を中核として、周囲に小型の掘立柱建物・竪穴建物・井戸がセット（一単位）となり、いくつものブロックが存在することが明らかとなった（図5）。これは、従来の城の認識を変えざるを得なくした画期的な成果であった。

この遺構配置を「群郭型」城館の普遍的な姿と認識できるかについては、調査例の増加に寄与するところが大きいが、佐久地方の調査例と比較してみたい。

まず大井城であるが、黒岩城の南端の調査では、掘立柱建物址・竪穴状遺構・土坑などが検出された（図6）。特徴的なことは、竪穴状遺構が無数に切り合うことと、全体的に、調査区の中央部に掘立柱建物址が存在し、竪穴状遺構は掘立柱建物址を取り巻くように分布することである（小山1987）。さらに、柏木南城（小諸市）でも堀に囲まれた内部から、数多くの竪穴状遺構・土坑が検出されている。

縄張りから特異性を指摘した金井城を見ると、三郭・外郭・北郭（佐久市教委調査）では、かなり多数の竪穴建物址と掘立柱建物址・土坑などが確認されている。しかし、大井城跡と比較すると、顕著な掘立柱建物址がなく、大型の竪穴建物址が存在することが異なる。小山氏は、浪岡城と同様に遺構配置のグルーピングを試み、いくつもの単位を抽出している（図7）。三郭では、竪穴建物址がグルーピングの核を担っていることと、大型の竪穴建物址同士があまり位置を変えずに切り合うことが注視できる。このことから、基本的な単位（集団）は変わっていないと考えられる。なお、検出遺構は二郭・北郭に密集するが、外郭は主たる遺構がない空白域の様相を呈しており、両者には明らかな機能分化が見られる。また、二郭・三郭（一部）の調査（県埋文調査）でも、検出遺構は曲輪内の中央を縦断する道を挟んで両側に対峙する配置を示している。ここでも複数の屋敷区画を想定できたが、三郭と異なり掘立柱建物がグルーピングの核を担い、竪穴建物が付随する様相である。主郭が未調査であるが求心性との関連性からすると、主郭→二郭→三郭→外郭の順に階層性が存在していると推定される（主郭には掘立柱建物もしくは礎石建物が主体となるか）。

ここで立地が類似する伊那谷の城館を見ると、ここでも竪穴状遺構（竪穴建物）の検出頻度が高いことがわかる。これが同時期のものであるかは、遺物による

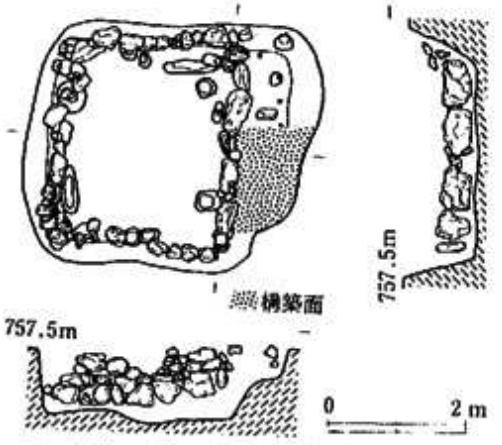
第6図　大井城跡（黒岩城跡・第1調査区）遺構全体図（佐久市教委1988より引用）

第7図　金井城跡 三郭・北郭のグルーピング（小山1991より引用）

検討が必要であるが、竪穴状遺構は掘立柱建物址と同数もしくはそれを上回る状況で検出される遺跡が多く、竪穴の主体性が感じられる。この問題は、信濃の風土と遺跡の性格に関係するが、全国の調査例からすると、信濃の城館は極めて「竪穴」を受容していると考えている。なお、竪穴には規模的に「倉庫」を思わせるものから、金井城のような「住居」を想定できるものまであり、一括して捉えられないが、筆者は基本的に「建物」と認識している。

佐久地方の中世の集落遺跡を見ると、野火付遺跡・栗毛坂遺跡・前田遺跡などで竪穴状遺構が検出されている。遺構は比較的小規模なものが多く、大型で床面にピットと周溝を持つようなものは見られない。集落の存続時期の問題もあるが、全体的な傾向として比較的小規模な竪穴状遺構は、求心性の弱い城館と集落遺跡から、大型で床面に施設を持つ構造の竪穴状遺構(竪穴建物址)は、求心性の強い城館から検出される傾向を指摘できる。なお平尾城の山裾に位置する北山寺遺跡からは、壁に石を貼りつけた竪穴が見つかっている。残存状況が悪く、床面に接する一段しか確認できていないが、佐久地方ではあまり例がない遺構である。最近、沖積地の調査がされた善光寺平を見ると、一般集落からは検出されず、中世山城の直下に位置する小滝遺跡（長野市）・小坂西遺跡（更埴市）で酷似する遺構が確認されている。どうも、このような竪穴は山城との関係がありそうである。

竪穴（図8）は、規模と構造（属性）から「簡易な建物」・「非日常性」との認識することが一般的で、城館から確認される竪穴建物を、『島原の合戦図屏風』に描かれている半地下式の施設（図9）と合致させて解釈する傾向がある。最近では、金井城の竪穴建物を城館りの視点から分析し、これらを民衆が籠った遺構と想定した中井均氏の見解がある（中井1994）。佐久地方のなかで規模的に卓越する金井城の竪穴建物を、民



第8図　金井城跡第588号竪穴建物址(両内1992より引用)

第9図　「島原の乱図」に見える竪穴建物(中央公論社1988より引用)

衆が籠った施設と解釈する氏の見解には多いに学ぶべき点があるが、竪穴建物と民衆との関連性については、一般集落・宗教関係遺跡などを含めた巨視的な視野で分析を行う必要があろう。

さらに遺物については、土壌中に残らない遺物が極めて多いとした荻原氏の指摘（荻原1995）と廃棄の問題からすると、土器の所有量と遺跡の評価は直接結びつかない可能性が強い。しかし、金井城から出土した土器類の微量さは注視でき、日常性の希薄さを連想せざるを得ない。城館の性格にもよるが、複数の集団が同時に居住したことは想像しがたい。遺物についても、周囲の城館・集落との比較が必要である。

城館に掘立柱建物と大型の竪穴建物がブロック的に林立する風景を、普遍的なものと解釈するか、それとも特殊なものと解釈するかは、今後の大きな課題である。

4　佐久地方の特徴

ここでは当地方の特徴として、城館と一般集落との関連性について触れてみることとする。

大井城については、現在の市街地側は城域が不明瞭であることを前述した。この特徴からすると、佐久地方の城館は、集落とある一線を画して明確に区別されておらず、むしろ、その境界があいまいであったことが指摘できる。そして、城館はそれ自体が単独ではなく、周囲に近接する集落（栗毛坂遺跡・前田遺跡・野火付遺跡など）と混在して、各々密接に有機的な関係を持って機能していたと考えられる。この姿は、在地の国人層と民衆の関係を如実に示しており、佐久地方の中世社会は、ピラミッド型の構成ではなかった可能性を示唆できる。

5　おわりに

本稿では、縄張りと考古学的資料を用い、佐久地方に分布する台地上の城館について考えてみたが、地域性を導き出すためには学ばねばならないことが多いと実感した。本稿は、城館の見方を提示したに過ぎないため、考古学的資料の分析と縄張り調査により、さらに検討を行い別稿に期したいと思う。

現在の城郭研究は、近年の中世考古学の進展により、大きな転換期を迎えている。中世考古学の成果は、城館に限らず都市・集落、宗教施設・墓（葬制・墓制）から、陶磁器・銭貨の流通などの民衆の生活事情に至るまで、新しい中世史像を描いたことは誰が見ても明らかである。このことは、以下の松井章氏の一文に象徴される。

「考古学という学問は、当時の人々が文字の記録から、後世の人々になるべく覆い隠そうとしていた事実を、発掘という手続きで、白日のもとにさらけ出すこともある。それが文献史に対する歴史考古学の強みでもあり、・・・」（松井1997）。

中世という時代の歴史観は大きく変わりつつあり、発掘調査の増加とともに、教科書の内容を書き換えることになろう。

本稿で対象とした「中世城館」については、研究が旺盛な現在、時には中世城館を理解し得た錯覚に陥る。しかし、従来の既成概念では語ることができない資料を目の当たりにすることで、まだまだ知らない世界が広がっていることに気づくであろう。城館の研究は、「城館とは何であったのか」、「民衆は城館に何を求めたか」、などを多角的な視野で、沈黙の資料からどのように読み取れるか、未知なる可能性を持つ興味深い分野である。

最後に、筆者は城館にロマンを抱いている。ロマンで歴史を語れるかは、各人の見解に相違がある。しかし、出発点はここにあると確信して、城について想いをめぐらしている毎日である。

（長野県埋蔵文化財センター）

引用・参考（主要）文献

小山岳夫 1987「大井城跡の竪穴状遺構」『長野県考古学会誌』54

長野県教育委員会 1988『長野県の中世城館跡－分布調査報告書－』

佐久市教育委員会ほか 1988『大井城跡』

村田修三 1988「戦国期城郭の新研究」『歴史読本』33-15

中央公論社 1988『島原の乱図・戦国合戦図』

工藤清泰 1988「北日本の城館について」『帝京大学山梨文化財研究所報』5

松岡　進 1988「戦国期城館遺構の史料的利用をめぐって」『中世城郭研究』2

千田嘉博 1990「戦国期城郭・城下町の地域性」『ヒストリア』129

小山岳夫 1991「総括的所見」『金井城跡』

河西克造 1991「縄張りから見た金井城の構成と特徴」『金井城跡』

河西克造 1992「甲信地方における最近の中世城館跡調査」『考古学ジャーナル』353

鹿児島県知覧町教育委員会 1992『知覧城跡』

千田嘉博 1993「集大成としての江戸城」『国立歴史民俗博物館研究報告』50

佐久市志刊行会 1993『佐久市志』歴史編(一)

中井　均 1994「「民衆」と「城館」研究試論」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』5

荻原三雄 1995「財産目録からみた陶磁器の所有」『貿易陶磁研究』15

松井　章 1997「食の考古学」『大航海』14

講演会
「トイレの考古学」熱聴

2月8日、中込ホテル中島において、佐久考古学会主催の講演会「トイレの考古学」が開催された。

講師は、奈良国立文化財研究所で藤原京などのトイレの発掘にかかわったトイレ考古学の権威松井章先生であった。

スライドにでた藤原京のトイレの中は、かなりリアルで、今にも蝿が飛び出しそうだった。クソベラでお尻をふいて、きちんとふきとれるんだろうか、などといらぬ心配もしてみた。

驚いたのは、古墳時代に水洗トイレがあったというお話である。わが佐久市岩村田の実家でさえ汲み取り式だというのに……。

私たちは発掘現場などを担当していて、一般のかたがたからよく質問を受ける。「トイレは当時はどこですか」と。そのたびに「ウーン」と悩むか（シャレではありません、念のため）。「特別なかったんですよ。そこいらで済ませてたんでしょ」などとかわしてしまう。そんなことからも、トイレの考古学は身近で大いに関心のあるテーマだった。

聴衆は、松井先生のウンチクのある話に、ひたすら熱心に聞き入るのだった。

軽井沢高原出土の櫛描文土器をめぐって

臼田武正

ここに紹介する資料は、昭和年代末頃、軽井沢町長倉の油井集落西方約100mで構造改善事業の際に出土し、地元の市村太郎氏（軽井沢史友会員）により発見採集されたものである。その後、当学会員である渡辺重義氏の注目するところとなり、かつて県（あがた）遺跡の調査に関わりのあった筆者に本誌への紹介を依頼された次第である。

出土地点（第2図④）は湯川河岸段丘先端の西の河原川に面した東斜面で、標高は約900mである。遺跡の大方は開出により消滅したが、工事の及ばなかった山寄りには残存しているものとみられる。北東へ1kmほど離れて所在する県遺跡は、昭和51年の国道18号バイパス自転車専用道路建設工事と平成5年の北陸新幹線工事の2回にわたり発掘調査が行われ、古墳時代前期初頭の集落跡（竪穴住居跡3軒）が発見されている。

採集された資料（第1図）は、甕形土器の口縁部から胴部上位に当たる土器片3点で、いずれも同一個体で接合できる。口縁部は短く外反し、口径15.4cmで胴部に最大径を持ち、器高が20cm未満と推定される小型甕である。文様は口縁部と胴部に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文が施されている。

この土器の類例を周辺遺跡に求めると、前述の県遺跡の出土遺物中に認めることができる。昭和51年の調査でも第2号住居跡から櫛描文（波状文・簾状文）の甕形土器片が出土しているが、平成5年に調査された住居跡からは、文様と器形が酷似する小型甕（第3図3）が出土している。この土器だけ個別視すると、千曲川水系に広く分布する弥生後期の箱清水式の甕と区別しがたいが、同じく箱清水式の系譜をひく赤く塗られた壺など、在地の伝統的な土器群と共に北陸系（4・5）・関東系（6）の外来系土器が出土していることから、時期的には古墳時代前期初頭に位置付けられている。

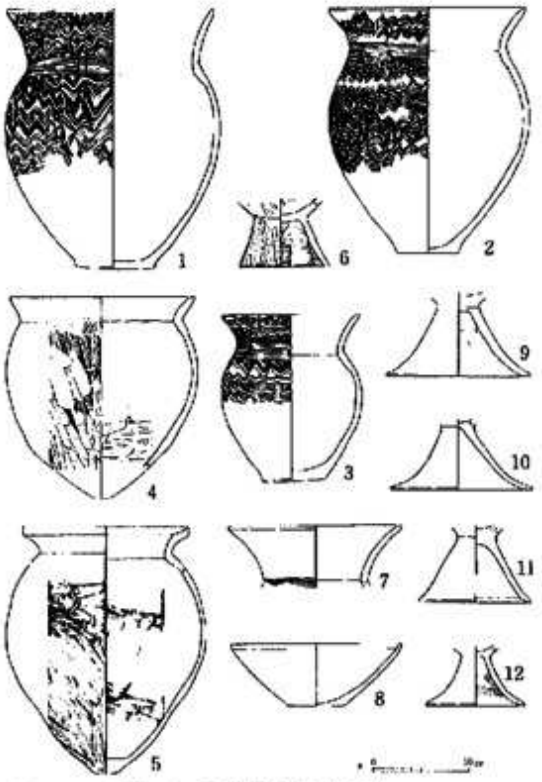
このように県遺跡では過去2回にわたる調査結果から、標高935mの高冷地に遺跡の性格こそ課題ではあるが、一時的に小規模な集落が営まれていたことが明らかとなった。

油井出土例は共伴遺物が不詳なため、本資料のみで時期決定することはできないが、これまでに軽井沢町内では赤名水沢①、南石堂②、杉瓜③、県A⑤・B⑥、弁天C⑦の各遺跡が弥生時代の遺跡として知られ（第2図）、これらの中には油井出土例も含め、県遺跡とほぼ同時期同様の性格を持つ遺跡の存在が予想される。

ちなみに各遺跡は、浅間山東山麓に源を発し、白糸の滝から流下して佐久市鳴瀬落合で千曲川に合流する湯川の流域に点在する。分布状況だけで見ると、佐久平北部から御代田町豊昇を経て群馬県境の入山峠へ至る最短ルート筋に当たり、弥生時代から古墳時代にかけての一交通路を想定することできようか。また、各遺跡とも標高890～940mの間に立地することから、生業活動についても検討の余地が十分ある。もとよりここでは先学の調査や研究の成果を踏まえてはいないため、これ以上の言及は避けるが、これらの遺跡がどういう性格を持っていたのか、興味深いところである。

第1図　油井出土土器（1：4）

第2図　土器採集地点（④）位置図



第3図　県遺跡1号住居址出土土器

（長野県埋蔵文化財センター年報10　1993より）

土器づくり体験記

10月12日の土曜日に、長門町原始古代ロマン体験館において、土器づくり体験会を実施しました。はじめての試みでしたが参加者は16名を数え、みな思い思いの土器づくりに挑みました。このうち会員以外の方も5名参加されました。小諸商業高校で、英語のＡＴをされているアメリカ出身のジョエル氏の参加もありました。ほとんどの参加者ははじめての土器づくりでしたが、みななかなかの力作ぞろいでした。ロマン体験館では信楽焼の粘土を取り寄せているとのことですが、柔らかく工作しやすい粘土だと感じました。また土器だけではなく、土鈴や土版などの土製品も作ることができます。会員の上原祐子さんの娘さんはかわいい動物の置物をたくさん作っていました。土器も文様に凝る方がいたり、吊手土器に挑む方がいたりとしばし時を忘れてみな土器づくりに没頭しました。お昼をはさんで、2時過ぎにはおおむね仕上がり、体験会は終了しました。

土器は1ヶ月ほど乾燥させたあと、焼成することになります。希望すれば野焼きも体験できるそうですが野焼きは土器が割れる率も高くなるそうなので、今回はロマン体験館におまかせして電気窯で焼いてもらいました。焼き上がったとの連絡を受けて、11月10日に私と森泉かよ子さんで製品を取りにいきました。通常ですと焼成段階で割れてしまうものがどうしてもいくつかは出てしまうそうですが、今回はすべてうまく焼き上がりました。土鈴もきれいな音色を奏でていました。

ロマン体験館では石器づくりのコースもあり、土器づくりも含めていつでも体験可能となっていますので（100人位までは可能だそうです。）、一度ご家族でも土器づくりや石器づくりにチャレンジしてみるのも良いのではないでしょうか。最近では修学旅行で体験する例も増えているとのことです。土器づくりは材料費1,000円で焼成まで体験できます。

担当幹事　桜井秀雄

開催報告　第9回 佐久地方遺跡発掘調査報告会

昨年12月７Ｈ午後１時半から佐久市中込「ホテルナカジマ」で開催し、会員及び一般約50名が参加した。例年の報告会は前年度に発掘調査された遺跡を対象にしていたが、開催時期が12月上旬に定着してきたことから、今回からはその年度内に実施した発掘調査を対象とすることにした。このため、調査成果が十分に整理された上での報告とはなりにくい面もあったが、調査概要をスライドや出土品の実物紹介で速やかに広く公開する場となり、また、各報告に寄せられた貴重な意見や助言は今後の整理・分析を方向づけることにもなって、調査結果の検討が不十分といえども速報性の高い報告会の意義が改めて見直されることになった。

さて、今回の報告会では、縄文時代晩期「氷式土器」の標式遺跡で知られる小諸市氷遺跡を星野保彦氏に、古墳関係ではいずれも比較的大型の石室を持つ望月町大塚３号古墳・御代田町めがね塚１号古墳・佐久市蛇塚１号古墳と３号古墳をそれぞれ福島邦男・小山岳夫・三石宗一の３氏に、また、中世城郭関係では山城の全面調査が行われた小諸市愛宕山城跡と、部分的な調査ではあったが特異な石積みが幾重にも廻る富士見城跡を再び星野氏に発表していただいた。

今年度は古墳の調査が集中したり山城の調査が本格的に行われたりしたため、特に古墳と城郭に関してはこれらの調査指導に当たってこられた長野県埋蔵文化財センターの宇賀神誠司氏と河西克造氏の各々からコメントと総括をしていただいた。

宇賀神氏によると、各古墳の調査成果はこれまで停滞していた佐久地方の古墳の編年研究を一躍進展させることとなり、当地における６世紀後半から８世紀にかけての横穴式石室の変遷を間断なく追うことが可能であるという。また、８世紀からは北佐久地方と南佐久地方では石室と墳丘の構造に差異が認められ、その社会的背景については今後の研究課題であるとされた。

河西氏には、最近の中世城郭研究の現状について、縄張り論（城郭研究の立場）・城郭論（文献史学の立場）遺構遺物論（考古学の立場）それぞれの立場からその有効性と限界性を説いていただいた。そしてこれまでの調査例から、佐久地方は比較的大規模で求心性の弱い城館の分布地域であるとされ、愛宕山城跡の調査成果については、いわゆる「小規模城跡」の認識を再検討する貴重な資料であることが指摘された。

最後に、終了予定時刻を30分以上延長したものの、内容が豊富であったため時間の制約を強いた点お詫びすると共に、発表を快諾された関係機関並びに公私多忙の中資料作成等に当たられた発表者各位には改めて感謝申し上げ、開催報告としたい。

事務局

去る1月18日と19日の両日、望月町駒の里ふれあいセンターにて、長野県考古学会主催、望月町・望月町教育委員会共催によるシンポジウム「押型文と沈線文」が開催された。早速その様子を紙面で伝えようとするものであるが、後に述べるように私は議論の対象ともなる時期の土器を毎日観ることの出来る環境にいる者であるにもかかわらず、何分不勉強なためこれらを余すことなく解説するのはとうてい出来そうにない。そこで自分が最も関心を寄せた部分の整理と、併せて会場の様子や個人的な感想を記すことで勘弁願いたい。

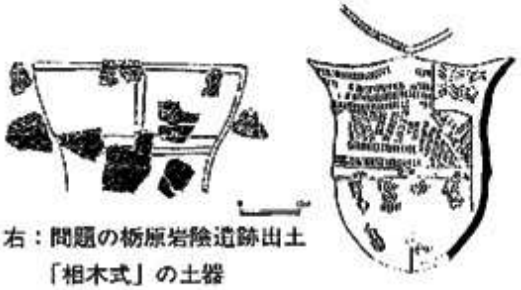
このシンポジュウムは我が佐久考古学会も後援ということであるが、当日午後一時の開催時間には約90名の参加者が集まった。北は北海道から南は九州まで、列島各地から研究者や関心のある方々が集まっており、この時期の土器が大いに関心を持たれていることを示すようであった。また会場には岡谷市神海塚遺跡、御代田町下茂田遺跡、望月町新水B遺跡などの資料も持ち込まれ、後に述べるように今回議論の中心ともなる土器群だけに、参加者は熱心に見入っていた。

会の冒頭、長野県考古学会会長でもある桐原健氏から、土器編年と文化論の研究は車輪の両軸であるが、時間の物差しである土器編年をいち早く整えることが必要であろうという主旨のお話があった。発表は二日間にわたって行われたが、今回の発表の中でも度々取り上げれる地元望月町新水B遺跡の概要の発表の他、今大会の中心テーマである中部・東海地方の沈線文と押型文後半の様相それぞれについてと、関連地域である関東地方、新潟県、近畿地方、中国地方における研究の現状が述べられた。またこれらに時間的に後続し、関東地方の子母口式併行とされる伴ノ木山西遺跡出土土器の位置付けについても発表された。

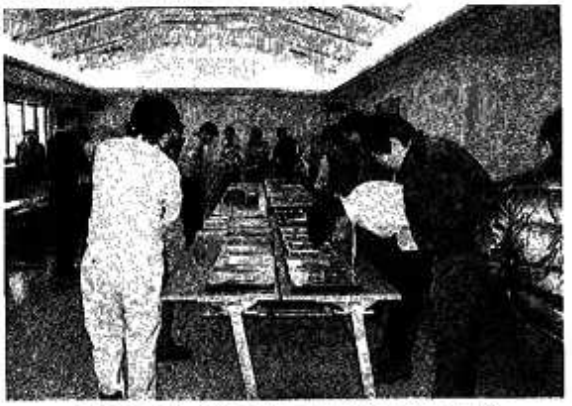
さて、やや個人的なこととともなるが、私は現在北相木村考古博物館に勤務しているが、『佐久考古通信』No.68でもお伝えしたように、押型文系土器群最終末とされる相木式の標識遺跡でもある、村内の栃原岩陰遺跡については、未だ報告書が刊行されておらず、目下このことに力を注がなければならない立場にある。そのような中、特に今回は相木式に関する問題も大きく取り上げられており、この問題をこの場を借りて整理してみたい。

中部地方の押型文土器の編年はご承知の通り古い順から、立野式、樋沢式、細久保式、高山寺式、相木式という共通見解はあるようにも思える。しかし各型式の規定概念や他型式との併行関係において未だ意見の相違がある。と同時に型式学的に不連続な箇所も存在し、まだまだ検討の余地があるようだ。このうち高山寺式から押型文土器の最終末に位置付けられる相木式へも型式学的にギャップがあることから、相木式の成立に関心が注がれるのは当然のことであろう。しかし肝心の栃原岩陰遺跡では、標識である個体に確実に共伴する資料が如何なるものなのか、あるいは前後する土器はどんな様相であるのかが現状では把握出来ていない。それどころか、このような関係を見出せるかどうかも分かっていないと言っていい。少なくとも報告書が刊行されていない状態では、これらを客観的に多くの研究者が評価することすらままならない。

そのような中、近年資料の増加に伴い、押型文後半期に東北信地方では沈線文土器が展開していることが明らかとなってきており、今回これらの土器の編年案も示された（今回持ち込まれた諸遺跡の土器は、この貴重な資料ともなる）が、これらの土器には一部相木式も共伴しており、両者の関係は今後とも充分注意していくべきであろう。また相木式と型式学的に強い関連が認められる穂谷式との関係にも注意が注がれてい



右：問題の栃原岩陰遺跡出土「相木式」の土器
左：新水B遺跡の沈線文土器



展示された土器を熱心に観察する参加者

たのは言うまでもない。

今回のシンポジュウムでは残念ながらこれらの共通見解は得られなかった。まだまだ各型式の共通認識の確立や、他地域との比較検討も十分に行っていく必要があるようである。しかしこのような中から、それぞれの研究すべき課題が見出され、さらに深い論議を生み出していけるのではないかと思う。自分も栃原岩陰遺跡の土器の重要性と、一刻も早い報告書の完成の必要性を改めて痛感した。

最後に付け加えておきたい。18日の晩は春日温泉「望月荘」に宿泊したが、アルコールをおび、夜も深まってもなお、一片の土器片を巡って熱い議論が展開されている座もあり、縄文土器研究の恐ろしさを再認識した想いである。私はと言えば、降り始めた雪が本降りにならないのをただただ願うばかりであった。

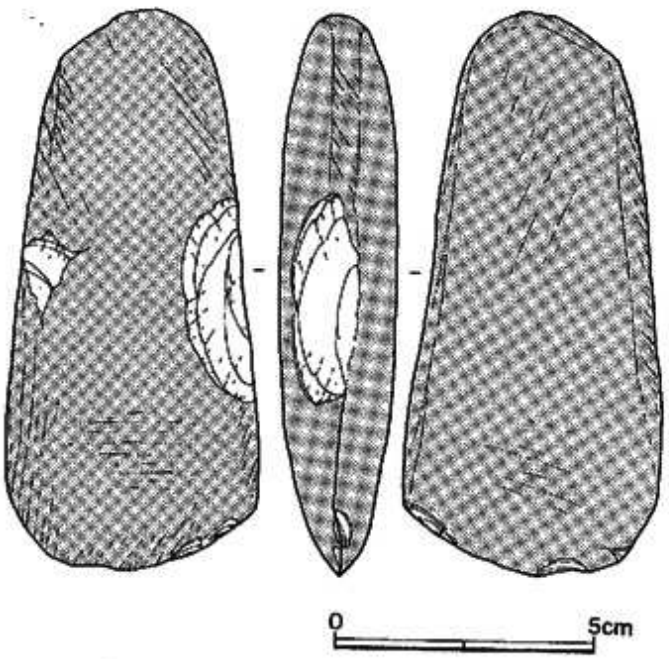
望月町布施後藤地採集の磨製石斧

倉見　渡

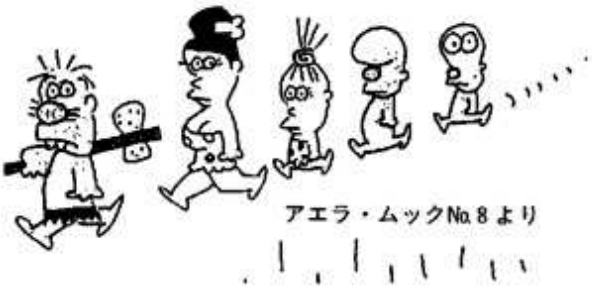
ここに紹介する資料は、筆者が望月町布施後藤地において採集した磨製石斧である（第1図）。

乳白色の地に緑の縞の入る蛇紋岩を素材とし、長さ10.3cm・幅4.9cm・厚さ2.2cm・重さ184gを測る。研磨は全体に及んでいる。刃部には使用によるダメージとみられる細かな剥離痕が表裏両面にみられる。

本石斧は、おそらく縄文時代の所産と見て相違あるまい。ただし、その形態からは、細かい時期まではわからない。



第1図　望月町布施後藤地採集の石斧（2/3）



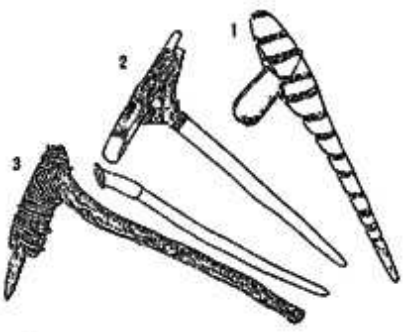
佐原眞によれば、斧には、刃が縦を向けて柄につけられる「縦斧」と、刃が横を向けて柄につけられる「横斧」が基本的にあるのだという（第2図）。また、旧石器時代から縄文時代初めまでの石斧は横斧が優先で、縄文前期において縦斧優先となったと考えられるという（佐原1994）。

本資料は、両刃ともいえる側面形態・使用によるダメージの剥離痕が表裏両面にみられることなどから、縦斧と推定される。そして、打製石斧が土掘りに使われたのに対し、本例のような磨製石斧は木の伐採や加工に使われたに違いあるまい。

斧は「男の道具」といわれ、10年以上にわたって使用された民族例がある。刃部がダメージを受けるたびに、研ぎ直され、大切に使われた「管理的石器」とみられる。

参考文献

佐原　眞　1994　『斧の文化史』　東京大学出版会



1モニ族の柄斧　2ドゴーレの縦横中間斧　3ヘブ族の横斧

第2図　斧の3種類（佐原1994）

1　“風の島”ラパヌイ

“島”には、南極からやってくるという強い潮風が吹き抜ける。真っ黒な溶岩が凝結し海へとすべりこむ岸には、たえず波しぶきが砕け散る。

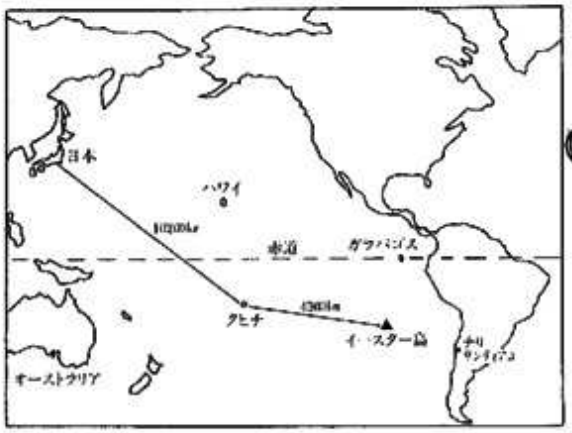
強い潮風や波しぶきに洗われ風化した無数の大きな偶像が、空を見つめ、幾世紀か立ちすくむ。

マタベリ空港、ランチリの航空機のステップを一段一段降りると、そこには、同じ地球という惑星上とは思えない不可思議な光景が広がっていた。

1997年3月14日、私は、幼い日その謎に満ちたモアイ像について夢をかきたてられたイースター島を訪れることができた。イースター島はオランダ人ロッヘ－フェンが1722年復活祭の日に上陸したことにちなんでそう呼ばれるが、本来はポリネシア語で“ラパヌイ”という。「ラパ」とは「島」の意、「ヌイ」とは「大きい」の意、つまり「大島」という意味である。

絶えず吹き抜ける潮風、この島ラパヌイは“風の島”でもある。

イースター島は、南太平洋の島々のなかでは東端にあたり南米チリ領にあたる。交通手段には、同じポリネシアのフランス領タヒチからの空路と、チリの首都サンティアゴからの空路の二種類がある。日本からはタヒチからの空路が便利で値段的にも手頃である。



第1図　イースター島の位置

私は、H付け変更線、そして赤道を越え、空路11時間を経てタヒチに着き、ボラボラ島などでの休日を楽しんだ後、およそ5時間の空路を経てイースター島へとやってきた。島での滞在は3日間。ちなみにタヒチでの滞在を含めた経費はおよそ40万円である。

ラパヌイは周囲180kmの火山島、人口3,000人、年間の観光客は現在2万人という。

2　ホテル・ポイケ

島の風は、ときおり気まぐれな雨雲をつれてくる。さっきまで晴れていた空が一転かき曇ると激しい雨が降り出した。しかしこんなお天気は日常のこと、通りをゆく若い女はカサもささず雨に打たれたまま平然と歩いている。しかも彼女は裸足だ。

マリアはいそいで洗濯物を取り込みだした。ウチワほどもあるポトスの葉はしっとりと濡れている。そんな光景をホテルの窓からぼんやりと眺めた。「ずいぶん遠くまで来てしまったものだ」とふと想ってもみた。しばらくして雨もやみ、ふたたび青空がひろがった。

私の滞在したのは、島の東にあるポイケ山から名をとったホテルポイケ。なんでも「日が昇る方」というような意味があるのだそうだ。オーナーはカルメンさんというチリの女性だ。ほっそりとした彼女は、どことなくレーガン元大統領夫人にも似ている。

メイドのマリアさんは現地ラパヌイの人。ポッチャリとして、笑顔がさわやかな若いおかあさん、といった感じである（ただし、マリアに子供がいるかどうかは聞きそびれてしまった。あくまでおかあさんというのは印象である）。ポイケはこじんまりとして、ホテルというよりペンションの趣があるが、フレンドリーなその雰囲気に私の心はなごみ、旅の疲れも癒えた。

第2図　ラパヌイの鳥瞰図

3　黒い瞳 "Obsidian eyes"

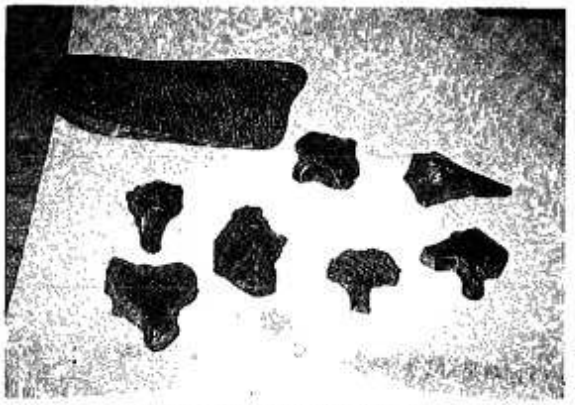
ラパヌイの荒涼とした風景は、島の火山噴火がもたらしたものである。同じ南太平洋のタヒチやボラボラなど豊かな植生の島々と比べると、樹木はほとんどなく、どこまでも草原が続いている。かくも異なる風景は、火砕流や溶岩の大地が、熱帯的植生の復活をしばらく妨げているからであろう。ちなみに島の一端にある火山ラノ・カオは今からおよそ5000年前に噴火を終えたという。

私も、浅間火山の麓に暮らす身、真っ黒な焼け石がごろごろするラパヌイの風景は、どこかなじみのあるものでもあった。島の道路は真っ赤な地肌をみせている。これはラバーフロー、つまり火砕流だ。島の所々にはもっこりとした丘がある。溶岩円頂丘と呼ばれるもので、例えば軽井沢の離れ山のようなものである。

ふたたび通り雨が来た。ぶらぶらとホテルの回りをうろついていた私は、雨宿りにと土産物屋の店先に避難する。単なる雨宿りでは悪いので、10ドルで島の地図を買った。と、店の片隅にある黒曜石の拳大の石塊が目についた。それは職業柄、手に取ってしげしげと見ていると、「それは地図を買ったおまけにあんたにやるよ」と店のバアさんがいう（現地の言葉なので正確な意図はわからない。…たぶん、そういったんだろうとおもう）。そして、わたしが黒曜石をさっさとデイパックにしまうと、私の目を見てバアさんはたどたどしい英語でこういった。「ノー・プロブレム」

雨も上がりふたたび外に出る。雨に洗われた赤い火砕流の地面には、黒い破片がみえた。黒曜石である。よくみると、そこかしこにたくさんの黒曜石がある。べつにめずらしくもなんともないのである。

ラパヌイの火山がもたらしたものは、なにも荒涼とした風景ばかりではない。時に火山は、生活のための重要な手だてとしての黒い石＝黒曜石（Obsidian）をもたらしたのである。黒曜石は島のいたるところに破片として含まれるが、良好な黒曜石の産出地点はオリト山にある。ホテルの石垣にも、なんとも無造作に黒曜石の人頭大の塊が積まれていた。

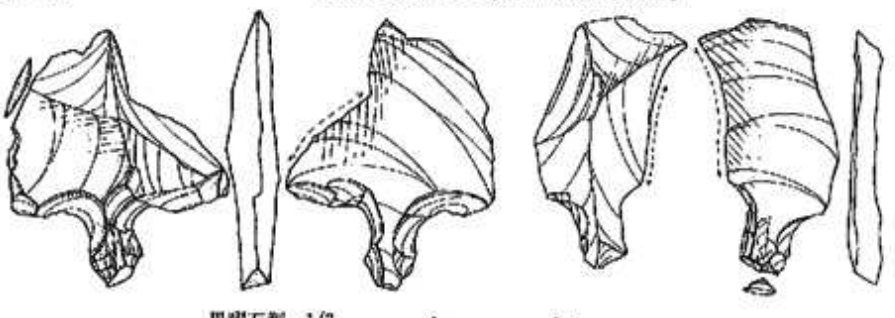


第３図　土産物として売られていた剝片尖頭器"マタア"

風の島の人々はこの黒く鋭い石を使って、たくさんの石器を作った。中でも、第４図の２点のように剝片を素材とし基部に集中的な加工を施して茎を作り出した「剝片尖頭器」は、18世紀頃たくさん作られた石器である。この２点は、ホテルで私が「日本で黒曜石を調べています」といったら、さっそくオーナーのカルメンが捜し出してきてくれたものである。図は、その時フィールドノートにスケッチした石器だ。

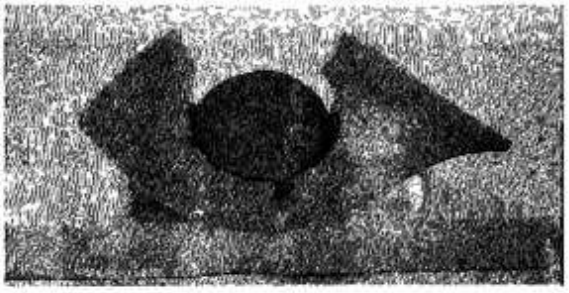
「マタア」(mata'a) と呼ばれる剝片尖頭器は、槍の穂先に使用されたと説明される石器である。カルメンも私に槍を投げる格好をして、この道具の使用法を説明してくれた。ただし石器研究の立場からいえば、この石器のすべてが槍先であったかは疑わしい。無論先鋭なものは槍先の機能を果たしたのであろうが、例えば図の右の石器は槍先というには腑に落ちない。両者とも図を逆さにすると、日本の石匙にそっくりだ。先端部は自然の縁辺を残したままで、意識的に二次加工によって尖頭形が作り出されない点も気がかりである。２点ともその側縁に微小剝離痕が観察された（図の破線部）。たぶんその一部は茎にヒモをつけて携帯したスクレイパー的な石器ではなかったのだろうか。

こうなるともう、この石器を持ち帰り、金属顕微鏡で使用痕観察をしたくなる衝動に駆られる。市場では本物のマタアが100ドルで売っていた。しかし、さすがにそこまではできない私であった。



黒曜石製　1/3　　5cm

第４図　抱えた黒曜石原石と剝片尖頭器「マタア」（写真の女性はお手伝いのマリアさん）



第5図　モアイの眼（赤いスコリアとサンゴ製）

この他、黒曜石の道具としては、トキ（toki）と呼ばれる直刃斧がある。これは、木材加工用の手斧だったのだろう。また、島の考古学博物館には、黒曜石ではなく粘板岩を素材とし、打ち欠きで形を木の葉形に整えたあと、全面に研磨を施して仕上げた石包丁のような道具ホエ（hoe）も展示してあった。

ラパヌイ出身の考古学者セルジオ・ラプは、1978年アナケナ遺跡において、赤いスコリアの虹彩と白いサンゴでできた眼球を発掘した（第5図）。この発見によって、モアイ像のうつろな眼窩に眼が入っていたことが初めてわかったのである。虹彩に用いられていたのは赤いスコリアばかりではない。アフ・タウティアやアフ・トンガリキのモアイ修復の際には黒曜石の虹彩が発見された。天空を見つめるモアイの眼には黒い瞳が嵌め込まれていたのである。"Obsidian eyes"なんと魅力的な瞳ではないか。黒い瞳の嵌入により、冷たい石のモアイは生命を吹き込まれたのであろう。

4　風の島の旅

風の島でのエクスカーションのガイドは、島に住むネイティヴ・ポリネシアンのクリス。浅黒い色の彼は、リーバイスの501をかっこよくはきこなしていた。私たち一行は、イタリア人夫婦・ニュージーランド人夫婦・アラスカのおじいさん・スウェーデン在住の婦人であった。クリスは6か国語ができるといい、バスの中では英語とスペイン語を器用に使い分け、説明しまくっていた。ただし、彼は日本語はわからない。

彼の英語はかなり早かったので、ついていくのが精一杯だったが、そんなとき助け船を出してくれたのがスウェーデン在住のクレア・ブローヒアおばさんであった。彼女はアメリカ人なので、私が時折首をかしげるとクリスの英語を分かり易くかみ砕いて、私に説明してくれた。日本の桜が大好きだというクレアはややおせっかいだが、私の良きEnglish Teacherであり、私は親しみを込めて彼女をこう呼んだ。"ママ・クレア"。

イタリア人のロズィータは、歌好きなおばさんである。ロズィータという名は「小さなバラ」という意味があるという。陽気な彼女は、いつでもカンツォーネを歌っていて、みんなからハッピー・ウーマンと言われた。彼女は私にといって「蝶々夫人」を歌ってくれた。

島の潮風、照りつける太陽、ターコイズブルーの海、そしてロズィータのハイトーンなカンツォーネ、うん、旅の気分も盛り上がってきた。

5　風の島の歴史

ヨーロッパ人がやって来るまでの島の歴史は、考古学者ウイリアム・ムロイなどによって、以下のように古代・中期・後期の3期に区分されているという（カテリーヌ＆ミッシェル・オルリアック1989）。

古代　（400－1000？）

入植と発展の時期。モアイ像の建立は700年頃から始まったとみられるが、この時期のものは小型で素朴な形式のものと考えられている。

中期　（1000－1680？）

モアイ像の建立の絶頂期。アフと呼ばれる祭壇に立つモアイは、定型化し大型化する。ラノ・ララク火山の石切り場で巨大なモアイの製造がおこなわれる。プカオと呼ばれる赤い帽子をのせたモアイが作られたのは1500年以降。1600年の島の人口は9000人と推定されている。現在のおよそ3倍の人口ということになる。

後期　（1680－1722）

この時期にはモアイはまったく作られなくなる。多くのモアイが破壊され、うち捨てられた。先に紹介したマタアという剥片尖頭器が大量に製作されるのは、1700年頃である。オロンゴでは鳥人儀礼が発達する。

第6図　海を見つめる7体のモアイ "アフ・アキビ"

1722年～

ラパヌイ特有の文化も、1722年のオランダ人ロッヘ…フェンの上陸以降変容していく。1769年、アドベンチャー号に乗ったクック船長が島に投錨したことで、島の名は世に知れわたる。しかしそれ以降、島の人々にとって異邦人は必ずしも好意的ではなかった。

19世紀、島に上陸したヨーロッパ人は島民を誘拐して捕虜にしたり、奴隷として強制労働に従事させた。残虐な殺害もなされた。オロンゴの遺跡にあるこの島でもっとも尊敬されていたモアイ像ホア・ハカ・ナナ・イア（波を砕く女たち）（第7図右）が、アメリカの軍艦トパーズ号によって略奪されるという事件も起きた。

1888年、島はチリ政府によって合併されることになる。島に平和が戻ったのはその後のことである。

6　足の萎えた巨人たち

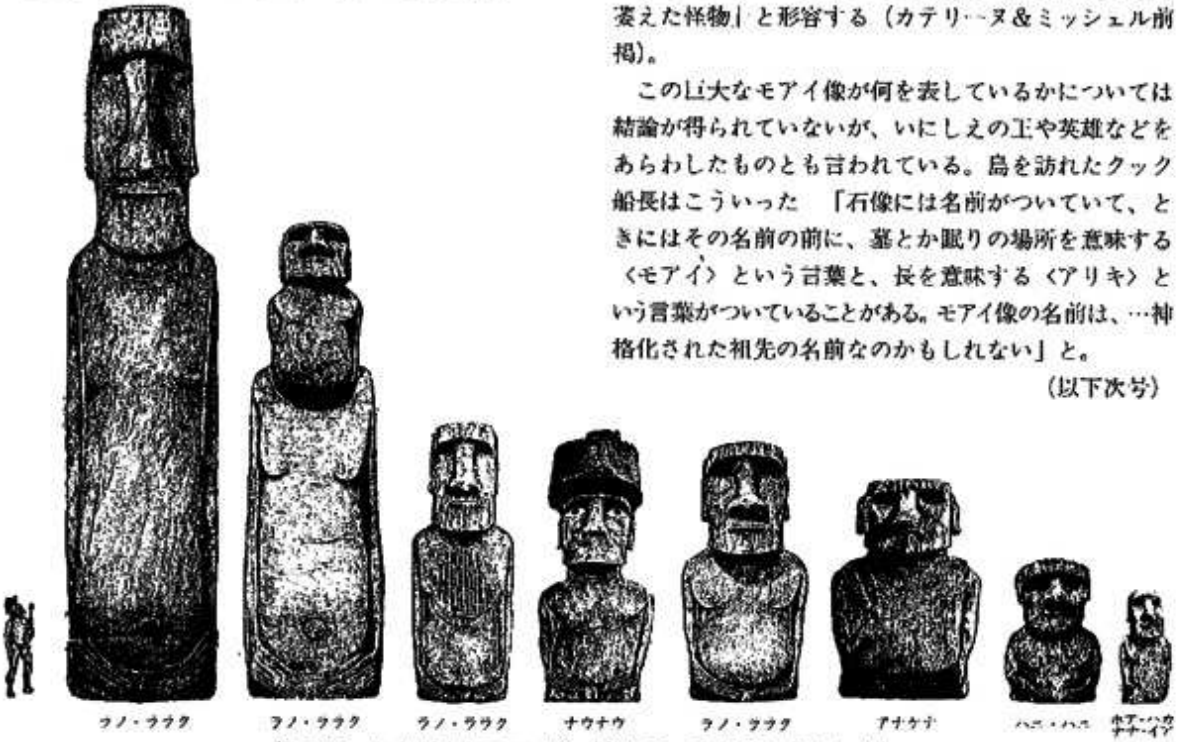
風の島の石の巨人たちの多くは海岸にあり、海に背を向け、あたかも砕け散る波しぶきから人々を守るかのように立っている。

もっとも、例外はある。海岸線から2kmとやや内陸部にあるアフ・アキビの7体のモアイ（第6図）だけは西の海に向いている「海をみつめるモアイ」である。アキビは、島の王ホツマツアの7人の使者（戦士）を祀ったともされ、11世紀の建立ともいわれている。

モアイの大きさは、高さ3.5～5.5mくらいのものが一般的らしいが、最も大きなものはアフ・テ・ピト・テ・クラに立つもので10mに達する。考古学者アルフレッド・メトロ…は、この下肢を欠いた巨人を「足の萎えた怪物」と形容する（カテリ…ヌ＆ミッシェル前掲）。

この巨大なモアイ像が何を表しているかについては結論が得られていないが、いにしえの王や英雄などをあらわしたものとも言われている。島を訪れたクック船長はこういった　「石像には名前がついていて、ときにはその名前の前に、墓とか眠りの場所を意味する〈モアイ〉という言葉と、長を意味する〈アリキ〉という言葉がついていることがある。モアイ像の名前は、…神格化された祖先の名前なのかもしれない」と。

（以下次号）



第7図　さまざまなモアイ像（主に11～17世紀に作られた）

♪　編集後記　♪

4月1日。消費税5％である。5％前に駆け込みの新築ラッシュとなった。5％だろうが3％だろうが、家の資金計画ができるんだから、不況といいながらそれなりにみんな余裕なんだろう。だって女子高生がブランドを身につけケイタイを持っている世の中である。

でも、ケイタイなんてナゼ持ちたがるんだろう。できれば四六時中電話なんか鳴らない静かな世界にいたいと思うのは、オジサンの心境というものか。きっとケイタイにしろタマゴッチにしろ女子高生は女子高生なりのコミュニケーションをとって、その心の孤独を癒しているんだろう。　（つつみ）

佐久考古通信　No.69

発行所　佐久考古学会

〒384-01　長野県佐久市桜井879
臼田武正方
郵便振替　(新)00570-9-2842
☎0267 (62) 8133

発行者　由井茂也
編集者　巽　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL
1997. 9. 1. No. 70
JOURNAL

★ 目 次 ★

■ 25年目に手にした『井戸尻』……唐沢繕孝……1
■ 佐久市香坂山遺跡ー発掘調査遺跡紹介ー……臼田武正……2
■ 1997年度佐久考古学会総会……小山岳夫……3
■ 栃原岩陰遺跡の黒曜石製石器の素材について……藤森英二……4
■ 黒い瞳と風の島ー後編ー……堤　隆……8

25年目に手にした『井戸尻』

唐沢繕孝

今年の5月24・25日、私は子供といっしょに東京に行ってきました。昨年、早稲田大学で行われた日本考古学協会の際、堤さんに神田の古本屋街を案内してもらったことがあり、今年は立正大学で行われる日本考古学協会の図書交換会などにあわせて、普段手にすることのできない様々な考古学関係の図書をさがしてみたくて上京したのでした。

24日、まず明治大学考古学博物館を見学し、販売図書を何冊か購入してから、雨の中、傘をさして神田の古本屋街へ向かいました。まず、去年案内していただいた、何軒かの書店に立ち寄り何冊か購入した後、他の書店にも立ち寄ってみました。

そのうちの1軒の書店で、私の欲しい本を何冊か見つけ購入しようと手に持って、さらに他に何かないかと思い、高い所の棚を見回していた私の目に突然、『井戸尻』という文字が飛び込んできました。

私は、中学2年の時に藤森先生の著書と出合い、それ以来藤森先生の著書を夢中になって読み、長い年月をかけて、だいたいの著書を購入したのですが、藤森先生がお亡くなりになられた後に出版された、『藤森栄一全集』も「解説」に大きな魅力を感じ、内容はダブるもののやはり長い年月をかけ全巻購入しました。

しかし、『全集』にも含まれていないものも、何編かありました。『井戸尻』は、その中の一冊でした。

『井戸尻』は、昭和40年に発行され、定価は8,000円でした。ちなみに、『考古学とともに』・『信濃考古学散歩』・『古道』・『旧石器の狩人』などが480円、『縄文農耕』が1,000円で買えた時代でした。

8,000円という金額なので、当時の私ではとても購入できず、また発行部数も少ないので生涯見ることすらできない大著だと思っていました。

それが、今、目の前にある。かなり高い棚にあるので、手軽に手にとって見れないけれども。

おそるおそる、店の人に値段を聞くと、「68,000円」との返事。

思わず、「ワーオ」と声が出てしまいました。迷ったのですが、結局購入しました。

その日、それまでにもすでに何冊か購入しているので、明らかに予算オーバー。安いビジネスホテルに泊まって、夕食はちょっとリッチにと思っていたのですが、ラーメンとなってしまいました。次の日の総会へは行っても本を購入する予算もなくなってしまったので行かずに、上野動物園など、あまりお金のかからない場所へ行き、子供の相手をして帰ってきました。

東京から帰った次の日、仕事から帰った私に宅配便が届いていました。開包してみると、藤森先生編集の大著『井戸尻』が出てきました。藤森先生の著書を読むようになってから、25年目の出来事でした。

藤森栄一『縄文式土器』より

曽利4号住居の土器

―発掘調査遺跡紹介―

佐久市香坂山遺跡

臼田武正

この度、上信越自動車道4車線化工事に伴う八風山第2トンネルの立坑建設予定地で発掘調査が行われ、旧石器時代の貴重な資料が得られたので紹介します。調査の概要と写真については、調査を実施した長野県埋蔵文化財センターから提供していただきました。

◇

【遺跡所在地】 佐久市大字香坂字香坂山

【調査期間】 平成9年4月9日～7月31日

【調査面積】 4,000㎡

【遺跡立地】 ほぼ群馬県境に位置する八風山（標高1,315m）の南方800mの妙義荒船スーパー林道に沿った地点で、南西方向に延びる尾根上に立地し、標高は1,145m前後である。旧石器時代末から縄文時代初めにかけ、ガラス質安山岩の槍先形尖頭器を大量に製作した「下茂内遺跡」は、本遺跡の西方2kmの地点に所在する。

【調査経過】 平成8年10月、県教委文化財保護課が試掘調査を実施した結果、陥し穴とみられる土坑が発見

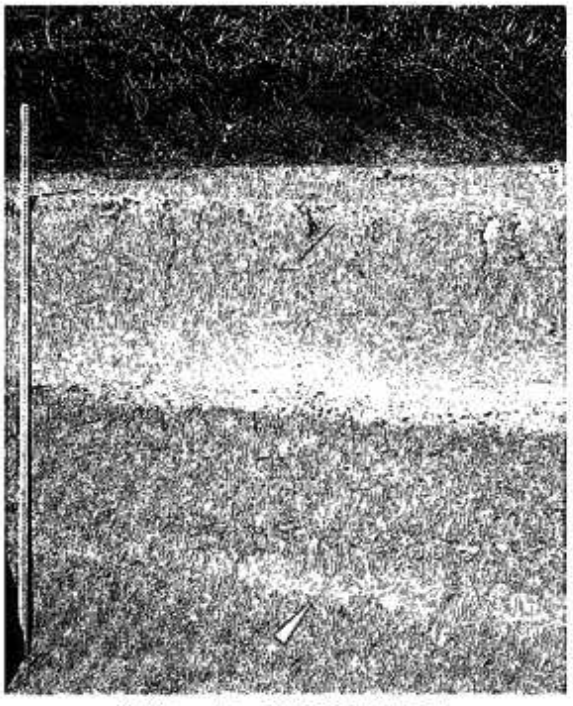


写真1　AT＝姶良丹沢火山灰層

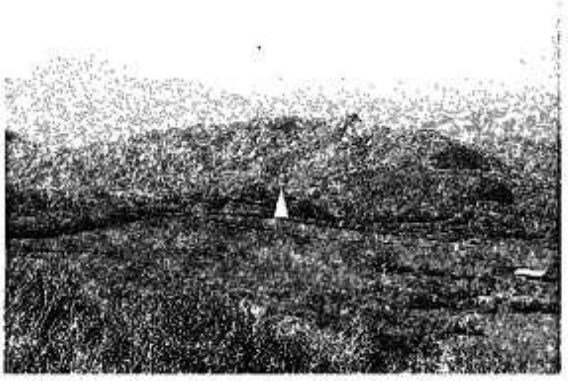


写真2　物見山より香坂山遺跡（矢印）を望む

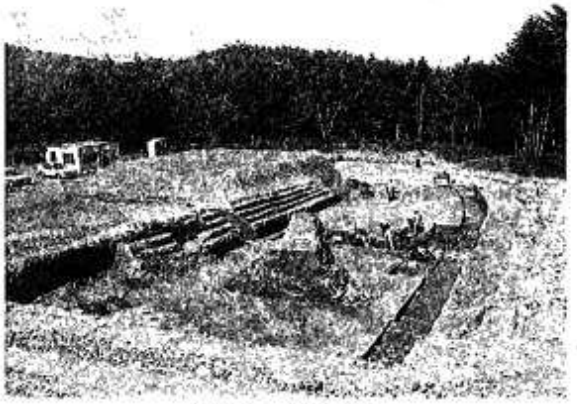


写真3　調査風景

され、初めて遺跡の存在が確認された。

本年4月から本調査を開始し、縄文時代と推定される陥し穴の調査については、6月初めに終了した。

引き続き旧石器時代文化層の確認調査を行ったところ、調査区中央で地表下約5mに極めて安定した堆積状況を示す姶良丹沢火山灰（注1）が層厚10cmほど認められ、その下層から八風山産出のガラス質安山岩を主体とする石器製作の跡が検出された。

このため、遺跡の保護について関係者が協議を行い、姶良丹沢火山灰より下層の旧石器時代文化層については、

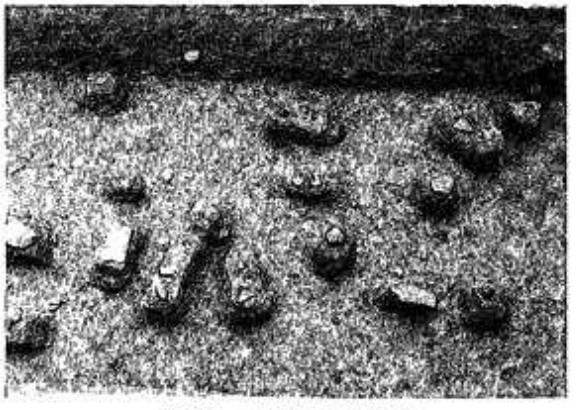


写真4　石器類出土状況

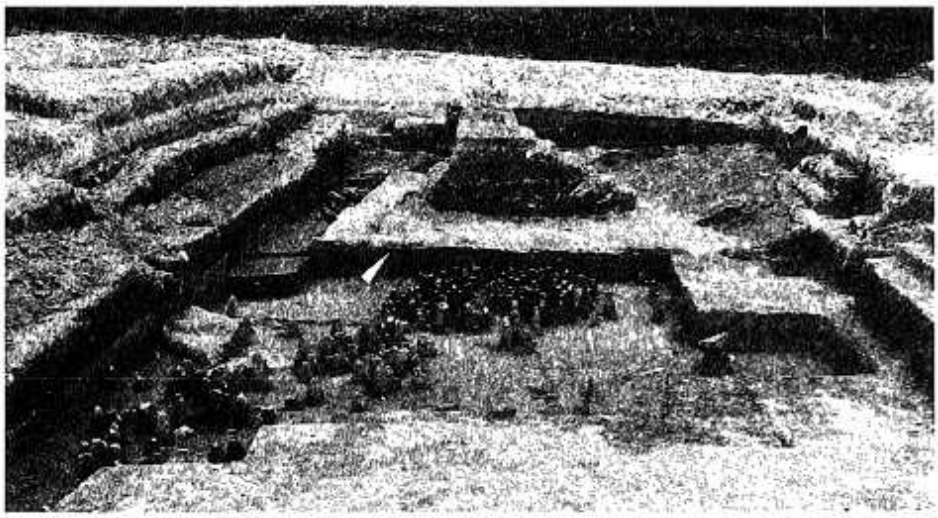


写真５　換気塔建設部分の石器群部分状況（矢印ATの堆積）

構造物（換気塔）が建設される部分（約130㎡）のみ記録保存の対象として発掘調査を行うことになった。また、これ以外の部分は遺跡の広がりを把握するための確認調査を行い、工事掘削が姶良丹沢火山灰より下層に及ばないよう設計変更し、遺跡の現状保存を図ることになった。

【遺構・遺物】【縄文時代】 時期不詳の陥し穴土坑が25基とガラス質安山岩の剥片が少量出土。

【旧石器時代】

①下茂内遺跡の第Ⅰ文化層に相当するローム層（13,000～14,000年前よりやや新しい）からは、出土遺物なし。

②下茂内遺跡の第Ⅱ文化層に相当するローム層（13,000～14,000年前よりやや古い）からは、ガラス質安山岩の剥片が１点のみ出土。

③姶良丹沢火山灰の下位にあるローム層（推定約25,000～30,000年前）からは、７～10ｍの範囲に剥片類が集中する石器製作の跡が６ブロック発見された。出土遺物は石器・石核・剥片など約400点で、石材はガラス質安山岩が９割強を占め、その他は頁岩、チャート、黒曜石・鉄石英などであった。

註１　姶良丹沢火山灰―姶良Tnテフラ（AT）

約22,000～25,000年前に、鹿児島湾北部の姶良カルデラを噴出源として降下した火山灰。日本列島のほぼ全域を覆うほどの広域火山灰であり、噴出年代が明らかなことから、旧石器時代の編年上、指標火山灰として重視されている。

◇

調査概要は以上ですが、石器の種類・石器群の年代・石器製作技術・各ブロックの解釈・当時の環境・八風山遺跡群（平成６年に佐久市教育委員会が調査し、香坂山遺跡とほぼ同じ層位からナイフ形石器を含む石器群が出土）との関係など、詳細については今後の整理結果を待つことにしたいと思います。

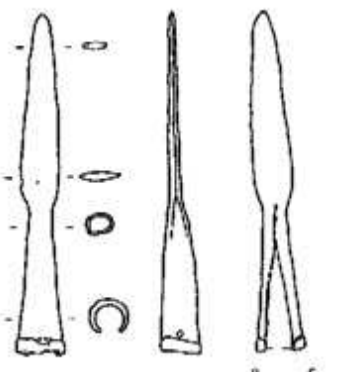
1997年度

佐久考古学会総会

本年度の総会が６月21日午後３時半から浅間会館において開催された。井出正義会長あいさつのあと、議長に羽毛田伸博氏が選出され、前年度の会務・決算会計報告、新年度の活動計画、予算案が審議され、両案とも無事承認された。

総会に先立ち前年度の例会として「金属器が出土した弥生遺跡」をテーマに発表会もたれた。

発表されたのは弥生末の遺構から全国10例目の鉄矛が発見された上田市上田原遺跡と弥生中期後半から後期前半の鉄剣、銅鏃・鉄鏃が発見された佐久市五里田遺跡である。発表は尾見智志氏、森泉かよ子氏にお願いした。金属器が朝鮮半島・中国大陸から導入され始めた頃の日本人（倭人）にとって、鉄矛・剣、銅・鉄鏃いずれも弥生時代の有力者に限って保持が許された貴重品である。こういった希少遺物が佐久・上田はもとより千曲川流域、さらには峠を越えた群馬県域からたくさん出土することは注目される。



上田原遺跡の鉄矛

総会終了後は岩村田三河屋で懇親会がもたれ、遺跡の話に花が咲いた。

栃原岩陰遺跡の黒曜石製石器の素材について

藤森英二

1　はじめに

南佐久郡北相木村の栃原岩陰遺跡については『佐久考古通信』№68で触れ、拇指状掻器についての報告を行ったが（藤森　1996）、今回はこれ以外の石器も含め、その「素材」について考えてみたい。もちろんどんな石器も、突き詰めれば(その大小はともかく)「石ころ」からつくられているわけであるが、考古学の世界では製品（石鏃や石錐、掻器など）に仕上げる一歩手前の状態を「素材」と呼ぶようである。

なお今年３月に明治大学考古学専攻生に本遺跡の整理作業をしていただき、栃原岩陰遺跡の小型剥片石器約3,800点ほぼ全てについて石材の分類等を行ったが、このうち約９割が黒曜石であった。よってここでは黒曜石という単一の石材に限定して話しをすすめていきたい。但しこれは必ずしも同一産地の黒曜石を指してはいない（注1）。また対象とした資料は栃原岩陰遺跡のⅠ区～Ⅳ区出土のものであるが、この理由については前報告を参照していただきたい。さらに今回はこの中でも発掘深度が420cm以下の資料を用いている。この理由は後に触れたい。

2　素材の分類

前報告では取り上げた石器を、類推されるその素材からＡ・Ｂ・Ｃの３類に分類したが、今一度整理すればフリーフレイキングによる一般的な剥片素材のもの（Ａ類）。両極打法によってつくられた剥片素材のもの（Ｂ類）。そして石器の裏面が自然面（もしくは古い剥離面）のもの（Ｃ類）である。ただしこのうちＡ類の中にも両極打法によってつくられたものが少なからず存在する可能性はすでに指摘したとおりであり、これについては今一度検討する余地も残されている。

しかしそれ以上に考えるべきものはＣ類で、拇指状掻器のみではなくこれ以外の石器を観察していくなかで、やや違った観点から見直す必要を感じるようになった。

一般に縄文時代には不定形石器などと呼ばれる石器が非常に多く、栃原岩陰遺跡も例外ではない。今回これらの石器も含め、やはり素材という点から考えてみると、拇指状掻器と同じように一般的な剥片素材のもの（第１図１～３）、両極打法による剥片素材と考えられるもの（第１図４～５）が存在し、さらにこれ以外には小型の原石が素材のものも少なからず存在することが分かってきた。第１図の６～８がそれにあたるが、全面が自然面あるいは風化した古い剥離面でおおわれ、なおかつ他の剥片類とそう変わらない厚みの板状の素材を用いていると考えられる。すなわち前報告のＣ類はこのように小型の原石素材の石器と捉え直したい。前報告第４図14・16は正しくこれに該当するといえるだろう。また同図13・15はやや厚みのある原石がもちいられているようであるが、石器の表裏両面に自然面（あるいは古い剥離面）が残されており、素材が原石である可能性が高いといえよう（注2）。

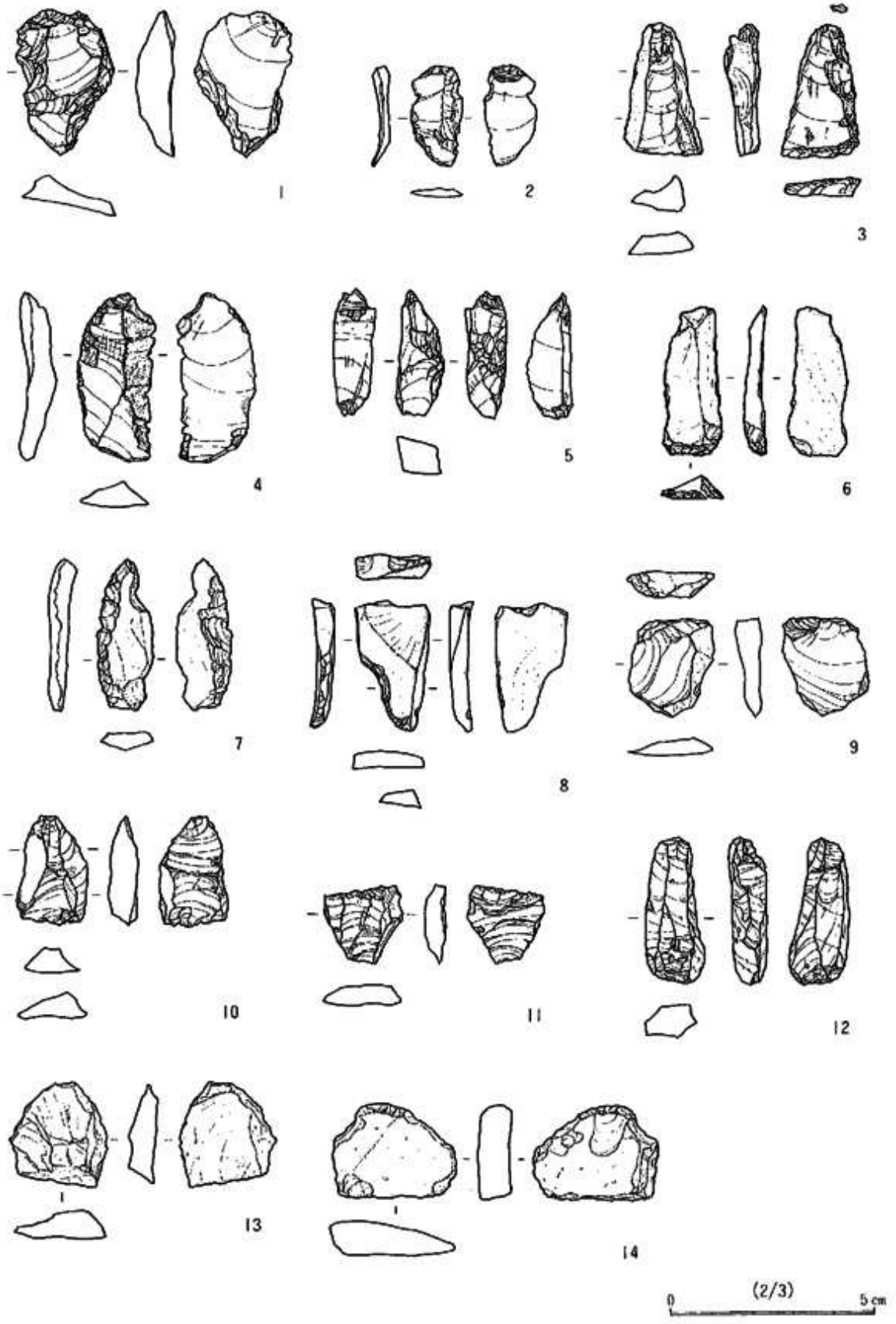
つまり全体を大きく分ければ、入手した石材を加工してつくり出した剥片素材のものと、入手した小型の原石をそのまま素材として用いたものとに大別出来きる。そして前者はフリーフレイキングによる剥片と両極打法による剥片、後者は板状の原石とやや厚みを持つ原石（注3）とにそれぞれ細分することが出来る（第２図参照）。

3　素材と製品の関係

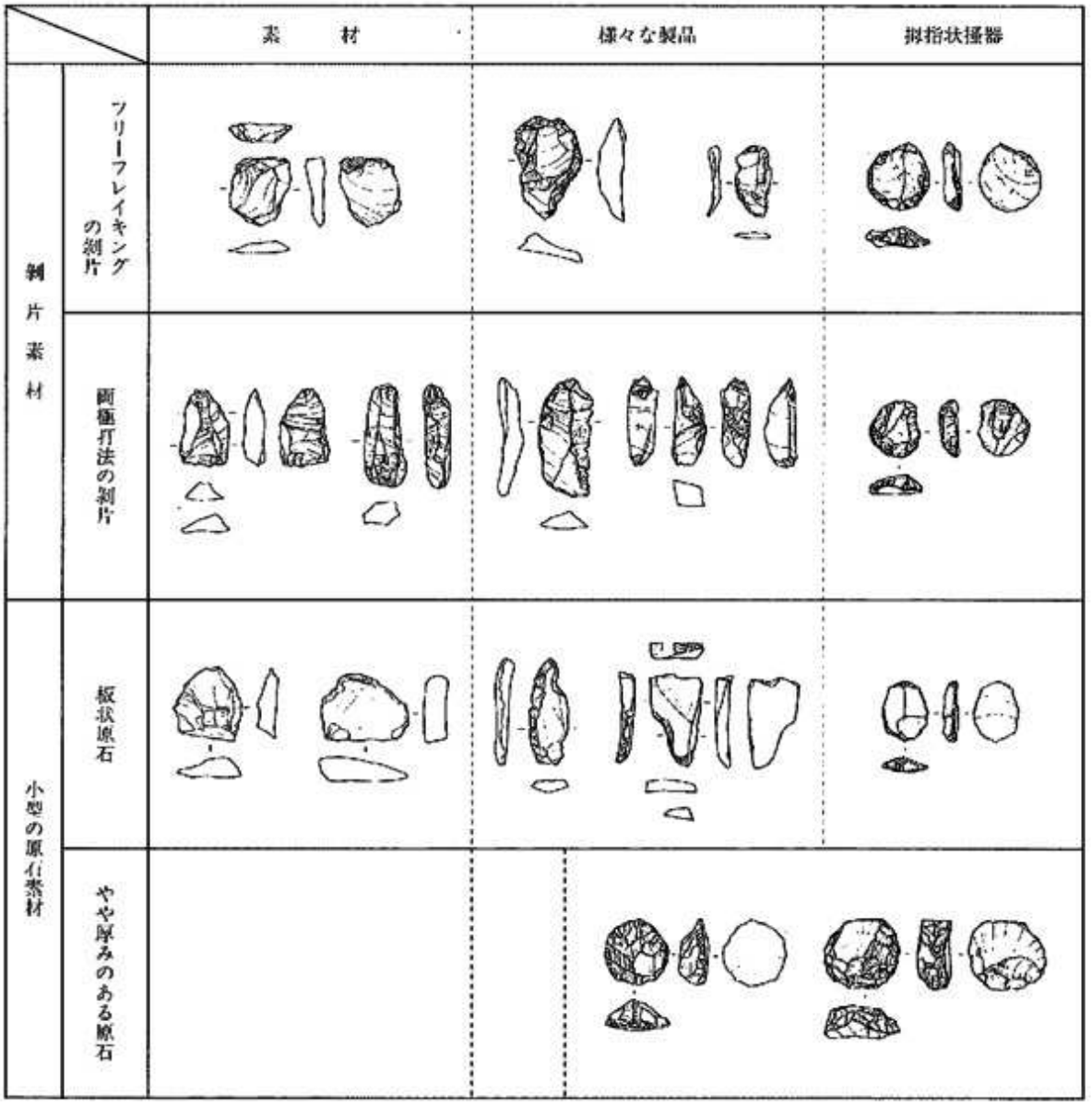
ではこの素材の種類と製品の形態（器種）には何らかの相関関係があるだろうか。それともそれは認められないだろうか。石鏃のようにほぼ全面に二次加工が施されているようなものは、残念ながらその素材を検討するのが難しくここでは対象としていないが、少なくとも拇指状掻器と分類したものにあってはいずれの素材も認められるのは確かであった。しかし残されたものについては、やはり形態による器種分類が難しいものが多く、的確な分類を示すことは困難である。ゆえに現時点で素材の種類と製品の形態（器種）との関係を明確に提示することは出来ないが、図化した各石器の解説を行い、若干の私見を述べておきたい。

第１図１～３は剥片素材のものである。１は栃原岩陰遺跡では大型のもので、主要剥離面にバルブやバルバスカーがみられ右側辺に両面からの二次加工が施されている。２は小型の石器であるが、右側辺上部にも加工を施しつまみ状の形状をなし一見小型の石匙にも見える。しかし左側辺の対応する箇所は折れであり、積極的に石匙とはし難い。３は自然面を残すものであり、片面からの二次加工が施されている例である。

第１図４～５は両極打法による剥片素材のものである。４は表面右側に自然面を残す比較的薄い両極打法の剥片に二次加工をした例である。一方で５のようにごろごろとした紡錘形のものに二次加工を施したもの



第1図　栃原岩陰遺跡の石器



第２図　素材の種類と製品

も少なからず認められる。両者とも片面からの加工であるが、前者は薄い刃部を、後者は分厚い刃部を作り出していると言えよう。

第１図６～８は板状原石素材のものである。６は断面三角形の剥片様であるが、各面とも風化し明茶褐色をしている。刃部と思われる加工面は光沢もあり非常にフレッシュである。通常エンドスクレイパーとされるものに近い。７はやはり風化した剥離面に対し、一縁辺に両面からの加工がある例である。８には片面から加工し、急角度の刃部を成形しているものを抽出した。但し古い剥離面の風化は６・７ほど進んでいない。

やや厚みのある原石については今回新たに図化はしていないが、その形態ゆえかほぼ拇指状掻器（前報告第４図13・15）かそれに類するもの（註４）に限られているようである。

以上わずかな例ではあるが、やや厚みのある原石を除き、一つの素材の種類にも何種類かの器種の存在が予想され、さらに拇指状掻器の例のように異なる種類の素材が同様の器種に加工されているものも存在する。このようなことから、素材の種類から製品を限定すると考えるよりはむしろ、素材の形状からそれに似合った製品を生み出していたとした方が自然ではないだろうか。今回は素材ごとの具体的な量の提示や製品の明確な器種分類を行っていないのでこれを最終的な結論とは出来ないが、岡谷市梨久保遺跡の報告では不定形石器をも分類し、それらの素材を「剥片」「両極剥片」

「原石」「石核」と区分した上で「特定の石器に特定の素材が対応することはない」としている（山田1986）。また東京都東久留米市神明山南遺跡の報告では、石鏃の素材となる剥片に、両極打法のものも含まれる可能性をその未製品から示している（山崎1994）。前者は中期後葉、後者は前期の例であるが参考にしたいところである。

4　黒曜石入手に関しての予察

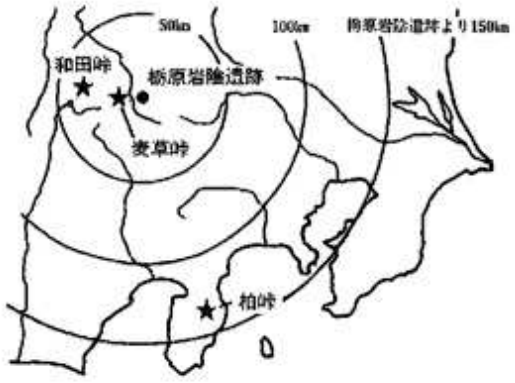
以上素材の種類と製品との間にどのような関係があるかは未だ推論の域を出ないが、当時の人々が石材入手の段階で、そのままで石器に加工できるような小型の原石も積極的に入手していたというのは確かかと思われる。このように小型の原石を素材として利用することは、剥片剥離作業を行わない分、石器製作の行程が簡素化でき、さらに剥片制作時の失敗による石材浪費のリスクを軽減できるという利点があったかもしれない。またこの原石の厚みにはややばらつきもあるが、少なくとも一面が平面で広い面積を有すという点では一致しおり、素材入手の段階での選別をうかがわせる。

そして当然のことながらより大きな原石は素材に加工していたと思われるが、この際フリーフレイキングとともに両極打法が使われていたのではないだろうか（注5）。もしそうであるならば、原石の形状や大きさ、あるいは目的とする素材の形状に似合った技法を使い分けていたことも予想される（山田　1986）。

また興味深いことに、今回対象とした資料の中には、素材そのものと思われる二次加工のない剥片（第1図9）や両極打法の剥片（第1図10～12）、また加工のない小型の原石（第1図13～14）は存在する一方で、フリーフレイキングによる残核やその素材となったであろう大型の原石は極めて少ない。これらの現象からは、当時の石材入手と石器製作の過程が予測できそうである。第3図に栃原岩陰遺跡と、使われた黒曜石の原産地である可能性の高い地点を示したが、これら原産地から本遺跡に黒曜石が持ち込まれる間に、その多くは少なくとも素材にまで加工されていたのではないだろうか。大型の原石や残核が少ないという現象はこのような行動の痕跡と考えても矛盾はしない。但しこれらが全くゼロでない点や、第1図12などは両極打法による剥離の残核とも考えられることなどから、この場で剥片剥離が全く行われていなかったとは言い切れない。いずれにせよ、今後より客観的な分類の基準とそれに基づく数量的な分析結果、あるいは関連遺跡との対比などを踏まえ、あらためて論じてみたい。

5　時期区分その他

さて本資料の時代的位置付けであるが、土器の分析



第3図　栃原岩陰遺跡と黒曜石原産地

が整っていない以上、直ちに細かな時間的位置付けを行うのは避けるべきだが、過去に発表された文献を参考にすると、420cm以下については多縄文系土器群、中でも表裏縄文土器が多く出土するとされており（西沢1982・宮下　1985）、また拇指状掻器の出土などから、この部分が草創期末（注6）の石器の様相を示している可能性が高いという前報告での考えは未だ維持できよう。そして今回発掘深度420cm以下の資料のみを用いたのは、これより上部で石器の組成（残核や製品の割合）が変化しているためであり、時間的な区分がよりはっきりしてきたと言える。なおこの変化については、いずれ詳しく述べてみたい。

また本論ではそれぞれの資料の具体的な点数を提示していない。これはより的確な分類基準の確立を目指し、かつそれを報告書に反映させると考えたとき、現時点での発表が後々に混乱をきたさないようにとの配慮のつもりであるが、学術的な論文としては失格であろう。にもかかわらず発表させていただいたのは、栃原岩陰遺跡の持つ可能性を多くの方に知っていただきたかったためである。忌憚なきご意見をお寄せ下されば幸いである。

謝　辞

本論は明治大学考古学専攻生の方々の協力があってこそ生まれたものである。整理作業に携わってくれた方々に心から感謝の意を表したい。特に土器については守屋豊人氏、石器については野口淳氏の御指導と横山真君の卒業論文に大変刺激を受けた。これからもご協力を賜りたい。またいつもながら掲載に際しお手数をお掛けし、細部にまで適切な助言をして下さる堤隆氏にも改めて深く感謝するしだいである。

第1表　石器一覧表

図版番号	重量(g)	厚さ(mm)	グリッド	レベル	特徴
1	4.4	6.0	IV－0	－520	剥片素材・両面加工
2	0.8	2.2	I－0	458～470	剥片素材・石匙？
3	4.2	8.9	III－0	－470～480	剥片素材・表面からの加工
4	4.7	6.7	III－3	－440～450	両極打法の薄手剥片素材・片面加工
5	3.3	10.5	III－0	465～480	両極打法の紡錘状剥片素材・片面加工
6	2.2	4.6	II－1	－440～450	板状原石素材・エンドスクレイパー様
7	2.4	5.0	III－2	－440～450	板状原石素材・両面加工
8	3.1	4.7	III－2	－470～480	板状原石素材・片面加工
9	2.9	6.4	II－2	455～460	素材剥片・打面有り
10	2.5	6.0	III－1	－490～500	両極打法の薄手素材剥片
11	1.5	5.7	III－2	－470～480	両極打法の薄手素材剥片
12	5.4	9.9	III－2	470	両極打法の紡錘状素材剥片（残核？）
13	4.5	7.0	III－1	－470～480	板状原石
14	6.8	7.6	III－1	－470～480	板状原石

註

註1　肉眼観察では大部分が和田峠付近のものと思われるが、麦草峠産と考えられるものも含まれている。また野口淳氏の観察では、極わずかながら伊豆柏峠産と思われるものも確認された。

註2　ここでは風化した古い剥離面で構成されたものも原石と表現したが、この風化の度合いは各資料により様々である。中にはあまり風化の激しくないような資料も存在するが、ここでは製品に仕上げる際の加工より古い面で構成される素材として一括した。

註3　今回は便宜上厚さ8㎜未満のものを板状原石素材、それ以上のものをやや厚みのある原石素材としたが、このような細分はあえて必要のない可能性も考慮しておきたい。

註4　前報告の段階では抽出した掻指状掻器は43点であったが、その後の整理作業の中で同種の石器が数点確認されている。ただし出土レベルが420㎝以下に集中するという傾向に変化はない。また前回掻指状掻器の定義に「刃部以外の周縁部にも加工を施し、全体を円形もしくは楕円形に仕上げている」ということを含めていたが、刃部のみに限ってほぼ同様の資料も存在し、用途的には同じものの可能性もある。

註5　今回両極打法による剥片とした中にも様々な形態があり、これらが全て素材剥片であるとは言い切れない。楔としての使用や、各構成面の切り合いなどを考慮したより綿密な観察が必要であろう。

註6　栃原岩陰遺跡の表裏縄文土器をどう位置付けるかは未だ検討の余地がある。ゆえに草創期末といった表現は本来不的確かもしれない（宮崎・金子　1995）。

引用・参考文献

岡村道雄　1983「ピエス・エスキーユ　楔石器」『縄文文化の研究』7

西沢寿晃　1982「栃原岩陰遺跡」『長野県史考古資料編(1)　東信地区』

藤森英二　1996「栃原岩陰遺跡出土の掻指状掻器について」『佐久考古通信』No.68

宮崎朝雄・金子直行　1995「井草式土器及び周辺の土器群についてII」『縄文時代』6

宮下健司　1985「長野県栃原岩陰遺跡」『探訪縄文の遺跡　東日本編』

山崎　丈　1994「石鏃製作の諸問題」『神明山南遺跡』東久留米市教育委員会

山田晃弘　1986「石器分析の方法と出土石器の検討」『梨久保遺跡』

黒い瞳と風の島

― 後　編 ―

堤　隆

1　切り出された巨顔

イースター島のラノ・ララク火山は、島で最も想像をかきたてる場所である。ふもとから望むと、ニョキ・ニョキとモアイが顔を出し、その上に連なる凝灰岩の岩脈には、切り出しかけられた巨顔が苦むしたまま残っている。ここがモアイの製造所であり、300体にもおよぶ作りかけのモアイが、放棄されたまま幾星霜をへて横たわっている。まさに壮観な風景である。

おそらく石の槌などによってコツコツと岩肌が削り取られ、モアイの形が仕上げられていったのだろう。付近からはたくさんの石の槌や先の尖った石ノミなどが出土しているという。その大きさにもよろうが、はたして一体のモアイの完成までにどれだけの時間が費やされたのであろうか。しかも完全な手仕事である。やがてモアイのおおかたの顔や上半身を彫り出されると、背と岩脈を最後までつなぎとめていた部分がクサビなどによって打ち切られ、ロープなどを掛けて斜面を引きずり下ろされたものと考えられる。

モアイの素材となるラノ・ララクの凝灰岩は比較的柔らかい石で、見た目よりは加工が容易であったものと考えられる。しかし、その反面風化しやすく、長い歳月、島の強い潮風にさらされて、多くのモアイの素肌がボロボロとはげ落ちるという哀れな目をみているのである。

2　UFOがつれてきた？巨人

モアイはその巨大さゆえ、その運搬にはさまざまな憶測が飛びかっていた。なにせ、その製造場所から10キロ以上も離れた地点に建てられたモアイもあるからである。また、島には満足な木がほとんどないことも、コロなどによる運搬が不可能なものと想定させ、その運搬方法に関する謎を呼び起こしていた。

とくに極端なのは、空飛ぶ円盤が運んできたというものだ。この説を唱えてベストセラーをものにしたフォン・デニケンは、その運搬法を推理するには、地球を超えた視点が必要だという。

「イースター島は地理的にも文明的にも、他のすべての大陸から隔絶している。イースター島の住民にとっては、月と星のほうが他の陸地よりも親しい存在なのだ。口承伝説によれば昔空飛ぶ男たちが島に着陸し、住民たちに火の起こし方を教えたという。石像のなかには翼をもっているものがいくつかあることも、これと無関係ではないだろう」

なるほど、ビンクレディーもまっ青な推理である。

それはさておき、イースター島の伝承によると、神話的な首長であるツウ・コ・イフやあるいはマケマケの神が、モアイ像に向かって

「自ら歩け！そしてアフ（台座）の上に立て！」

と、命令したのだという（カテリーヌ＆ミッシェル・オルリアック1988）。

この足のない巨人がいかに歩いたかはわからないが、モアイ像の運搬方法については、チリの考古学者故ウイリアム・ムロイは、修羅やロープなどを使って、引っ張られたものだと推測する。

しかし、アフの上にようやく立てられたモアイも18世紀の部族間のモアイ倒し戦争によってそのほとんどが倒されてしまったらしい。バイフでは無残にも引き倒され、顔面を地につけた何体かのモアイをみることができる。島の伝承では、モアイを建てた長耳族が短耳族に滅ぼされることによって、モアイの建造がとだ

写真1　ラノ・ララクのモアイ製造所

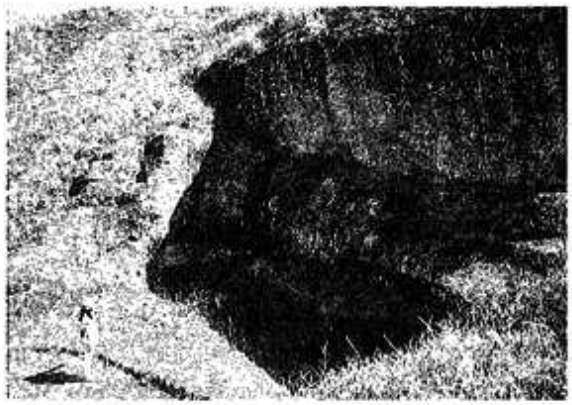


写真2　切り出されかけたモアイ（H彫部分）

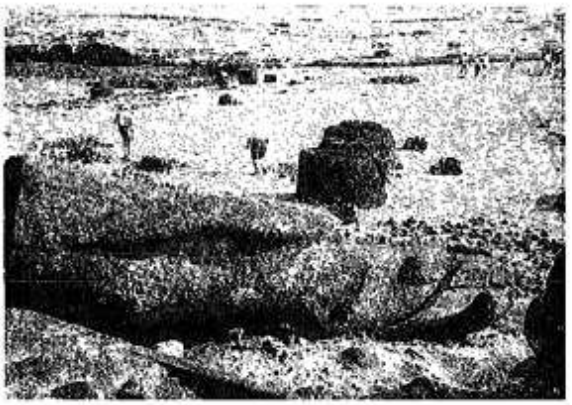


写真3　戦争により倒されたバイフのモアイ

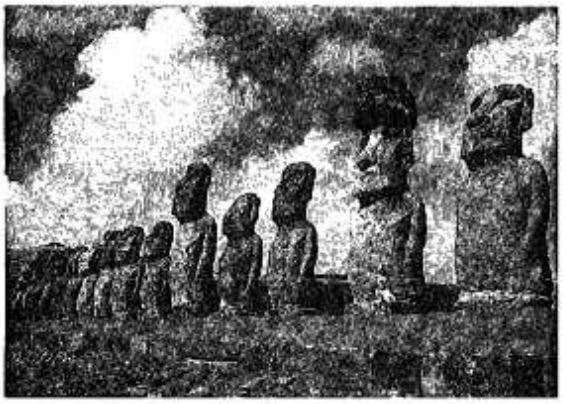


写真4　復元されたトンガリキのモアイ

えたのだという。

ケビン・コスナーは「ラパニュイ」（＝イースター島）という映画を、この島で撮影しているが、これは比較的考証を重視して作られているので、モアイ像の切り出しや運搬方法、それを残したイースター島民の生活風景・風俗などがイメージされておもしろい。長耳族と短耳族の抗争、後に述べる鳥人儀礼などの様子もうまく復元されている。あらすじは基本的にはラブストーリー仕立てであるが、残念ながらケビン・コスナーはあくまで監督で、出演はしていない。

3　起き上がったトンガリキのモアイ

「1960年6月、チリ南部で大地震が起きた。この時の10mにも達する津波はイースター島に達し、モアイ倒しの戦争によって倒された15体のトンガリキのモアイをさらに遠方へと押し流した。この島はまったく地震がないが、津波に襲われるなんて」

イースター島のガイドのクリスはその原因について“Tsunami”とはっきりと言ったのが印象的だった。ロシアでも聞いたが津波＝Tsunamiは外国語になった著名な日本語のひとつである。

その30年後の1991年、日本のタダノ建設が調査費を支援し、チリ政府が主体となってイースター島の調査が計画された。日本からは奈良国立文化財研究所の猪熊兼勝氏など「モアイ像修復委員会」がこれに加わり、トンガリキのモアイ像の復元を推進した。

猪熊さんは、島ではケビン・コスナーと並ぶ有名人だった。私の滞在したホテルのカルメンさんも、私がH本で考古学をしているというと「イノクマは知っているの？」と猪熊さんの名刺をみせてくれた。

トンガリキのモアイの修復の様子は猪熊氏の文章（猪熊1995）にわかりやすく記されている。

かつてトンガリキでは、10世紀過ぎ小型のアフ（祭壇）が横並びに作られ、15世紀にはアフが拡張されて高さ4mほどのやや小柄なモアイが祀られた。さらにその2世紀ほど後、アフは拡張され、モアイ像計15体が建てられた。大きなものでは8m重さ80トンのモアイ像があった。頭に赤い凝灰岩のプカオ（帽子）を載せ、堂々たる体躯を持つモアイが海を背に立っていたのである。しかし残念なことに、これらのモアイは18世紀以降のモアイ倒し戦争によって倒されてしまった。さらに追い討ちをかけるように津波によって押し流されてしまったというわけである。

モアイの復元に先立つアフ・トンガリキ遺跡の発掘調査では、倒れたモアイ像やその帽子の周囲が幕に再利用され100体以上もの人骨などがみつかっているという。また、そのほかにサンゴや黒曜石でできたモアイの眼球なども発掘されている。

押し流されたモアイのうち、9体のモアイは首がとれており、その首を特殊な接着剤で接合する作業がなされた。保存科学者の沢田正昭によって新たに雨水を通し風化を防ぐ薬品が開発され、モアイに塗布されたのだという。また、奈良からは石工も参加し、石像の復元に大きな役割を果たした。

やがてモアイは、日本企業から送られた巨大クレーンによって、その体を宙に浮かせ、かつてあった祭壇アフへと戻ることができた。1995年、ようやくアフ・トンガリキ遺跡の主要部分の復元が完成した。

4　島の暮らし

現在のイースター島の人口はおよそ3,000人であり、ちょうど南牧村ほどの人口ということになる。人々は年間2万人という観光客相手に、民宿（ホテルというより民宿のたたずまいである）を経営したり、土産物屋をしたりして生計を立てている。漁師や農民も少数いて、彼らは仕事の合間に島の黒曜石を使って土産用のモアイ像を作ったりして、細々と暮らしている。島の中心地には銀行や教会・郵便局などがある。この場所だけが舗装道路となっており、あとは赤い火砕流の未舗装の道がどこまでも続いている。島では“サムラ

写真5　胸かざり"レイミロ"と王杖"ウア"(模造)

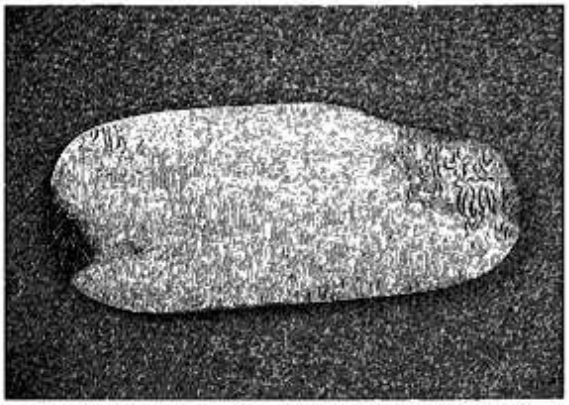


写真6　象形文字の刻まれた"コハウ・ロンゴ・ロンゴ"(模造)

写真7　ボートハウスの礎石

写真8　ア・テナ・パフの火山洞窟内の住居？

イ"といわれるスズキ・ジムニーやエスクードをよく見かけたが、馬も主な交通手段となっていた。通貨はペソ、日本との時差は15時間遅れである。

私は土産物屋で"レイミロ"や"ウア"と呼ばれる木彫りを買った。かつてイースター島の王はマケマケの神から授けられた"マナ"という神通力をもち、三日月型の木彫り"レイミロ"を胸に下げ、王の杖"ウア"を手に持ち権力を振るったという。木彫りの王杖"ウア"は、"いかりや長介"の顔を私に連想させるのだった。「ウイ～ッス！」

かつて島では象形文字が使用されていた。それは木の板に彫り込まれたもので「コハウ・ロンゴ・ロンゴ」と呼ばれている。この象形文字は人間・鳥・動物などを刻んだもので14,021の文字が確認されているというが、いまだ解読はなされていない。おそらく黒曜石の剥片やサメの歯などでそうした彫刻がなされたものであろう。

長楕円形に礎石を配した遺構が島のあちこちに残されていた。これは"ボートハウス"といわれるもので、そこに草などで屋根が葺かれ、船をひっくり返したような住居となっていたものとみられる。また、島にはア・ナテ・パフなど天然の火山洞窟があり、こうした洞窟も住居として利用されたほか、菜園などとして利用された。

島の男たちは往時は体に入れ墨をほどこしていた。入れ墨は幾何学形文様や時には物語を表し、ニュージーランドのマオリ族の入れ墨がよく知られているようにポリネシアの伝統的な風習なのかもしれない。

ハワイ、ニュージーランド、そしてイースター島を結ぶ広大な三角地帯は、ポリネシアの三角といわれ、人種的にはプロト・ポリネシアンといわれる人達に元がたどれ、そこからマオリやタヒチの人々、ハワイの人々、そしてイースター島の人々と系統が分かれたのだといわれている。ポリネシアンは広大なこの三角地帯で船を繰り、それぞれの島にたどりついて、独自な文化を花開かせたものと考えられる。

5　鳥人になった男たち

モアイの建造が終わった18世紀ごろ、島では鳥人儀礼という勇壮な儀礼が発達した。

およそ5,000年前に噴火を終えたといわれるラノ・カオ火山の火口から海に臨む240mの絶壁にはオロンゴと呼ばれる場所がある。この絶壁の岩にはたくさんの鳥人のレリーフがあり、50軒以上の石積みの家が残されている。鳥人儀礼の1か月のあいだ人々がここに住むのである。住居の前には縄文時代のような石囲い炉

写真9　オロンゴの絶壁からみた3島
（手前からモツ・カオカオ、モツ・イチ、モツ・ヌイ）

写真10　考古学者ウィリアム・ムロイの墓

が作られてあった。

この絶壁から見下ろすと、深い青の海の中に尖った錐の先のようなモツ・カオカオ島、モツ・イチ島、モツ・ヌイ島という小島三つが浮かんでいる。この言葉から、なぜか私はモツ煮と焼酎を連想してしまうのだった。なんとも、トホホである。

8月、人々はこのオロンゴの絶壁に集い、各氏族を代表したホプと呼ばれる男たちが草を束ねた浮きをもって荒海に飛び込む。そして、競争でサメのいる荒海を泳いでモツ・ヌイ島へ渡る。そこで保存食料に頼りながら、島へ渡来するアジサシという鳥の産卵を注意深く待つのである。

そして新たな卵を手にした最初のホプは、ふたたび荒海をものともせず泳ぎきって、持ち帰った卵を自分の氏族の首長に渡す。アジサシの卵を最初に手にした首長は、マケマケの神から鳥人としての神聖な力を授かることができるのである。鳥人には、その後の1年間はさまざまな恩恵が授けられた。

オロンゴの絶壁には、潮を含んだ湿った強い風がたえず吹きつけ、足元を過ったなら荒海に投げ出されてしまいそうなそんな壮絶な場所であった。

イースター島を去る際、生涯を島の考古学研究に捧げ、1978年ガンのため60歳でこの世を去った考古学者ウイリアム・ムロイの墓をタハイの地に参った。ムロイの骨は、近くの海に親しかった島民たちの手で散骨されたのだという。やや風化した石の墓標の前に、ムロイを見守るように海を背負って石像たちがたたずんでいた。そして異星の地とも思えるこの不可思議な風景が、永遠に失われることのないよう、私は祈らずにはいられなかった。

島の風は、荒波をつれて相変わらず吹きつけている。

"アディオス"

島の老女が、ふしくれだったその手を振って、別れを告げてくれた。

主要参考文献

カテリーヌ＆ミッシェル・オルリアック　1988　『イースター島の謎』　創元社

猪熊兼勝　「アフ・トンガリキの発掘記」『イースター島の謎』創元社

Peter Bellwood　1978　*Les Polynesiens :Archeologie et Histoire. Les Editions Du Pacifique*

♪　編集後期　♪

"自信・カミさん、家事・オヤジ"というコトバがある。なるほど、女性は自信をもって社会進出する一方だし、男は相応に家事なども分担しなければ、挙げ句の果ては粗大ゴミとして回収にだされてしまう。なんとも世の中キビシイんである。

それはさておき、佐久考古通信も通算70号を数えることになった。1985年の1～30号の合本製本事業以来12年で40号かぁ～。相変わらず編集者の埋め草の多いのはスネに毛？、いや玉にキズなのですが。

みなさん、もうちょっと気軽に原稿を書いてください。お待ちしてまぁ～す。　（つつみ）

佐久考古通信　No.70

発行所　佐久考古学会

〒384-01　長野県佐久市桜井879
臼田武正方
郵便振替　(新)00570-9-2842
☎0267 (62) 8133

発行者　山井茂也

編集者　堀　隆

印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク